支拂額の增進主として此の種支出の增大に因るものとす。

	貿易外支拂勘定總額	國債元利支出額
大正元年	一八四、九五九、四一〇円	七六、九三九、九四四円
同　二年	一八八、九八〇、一三八	七八、六五五、一四六
同　三年	二〇一、四二〇、一七二	九一、六一一、四六五
同　四年	二五七、八二九、四七八	一三〇、三五三、六一四
同　五年	六一五、六六七、八二〇	四八一、二三九、三七三
同　六年	五九八、三〇〇、六三九	三五二、六一〇、九〇五
同　七年上半期	二九八、五八二、〇〇〇	一九八、九〇九、〇〇〇

國債元利支出の開戰後著しく增加したることは上揭の數字に依て明に知ることを得れども、尙其の內容も亦頗る變化したり。戰前にありて該支出を構成せるものは專ら本邦政府公債の利子支拂竝に外債償還の二者なりしが、戰後に於ては却て外國政府內地起債（外國政府債內地募集及賣出）及國債證券輸入（流出內債買戻及本邦政府外債竝に外國政府債流入）に基く支出其の主力を爲せるものの如し。尤も外國政府內地起債及國債證券の輸入は戰前に於ても存せざりしに非ずと雖も、前者は僅に支那政府に對する少額のものありしに止まり、後者に至つては四十三年に於ける內國債の復舊約千四百萬圓を除きては他は言ふに足らざるなり。而して外國政府內地起債に關しては已に前段に於て記したるを以て玆に再錄するの要なかる可く、國債證券の輸入は大正三年二十六萬圓なりしもの翌四年には四百萬圓に激增し、大正五年には六千九百二十八萬圓、大正六年に七千五百七十九萬圓を超ゆるに至れり。尙ほ輸入國債中の主なるものは外國政府債なりとす。

以上の外開戰後著しく增加したるものは特別貿易品支出にして、從來此の項の支出は輸入御料品代及輸入新聞雜誌代にして兩者を合せ僅に每年二十萬圓前後に過ぎざるものなりしが、大正五年に至て俄に增加し六百二十二萬圓に達せり。之れ同年に於ては貿易表揭記外の船舶買入代五百五十五萬圓竝に民間の兵器火藥等買入代四十七萬圓を算したるが故にして、大正六年にありては該支出額は百八十九萬圓に減退したり。こは同年に於て貿易表揭記外の船舶買入なく、唯民間の兵器火藥等の買入百六十六萬圓存したるに過ぎざればなり。

第二款　外國爲替

歐洲戰亂の影響を受け本邦の對外輸出貿易が意外の殷盛を來せるのみならず、他方貿易外受取勘定の激增を見たるが爲め、遂に爲替銀行は爲替の出合を容易に求むること能はざるの窮境に陷り、之が資金の疏通は金融界の大問題たるに至りしこと後段に記述せる所の如し。事情斯くの如くなるを以て政府の方針が極力輸出貿易を援護し、其の發展を圖るに存し、爲替銀行亦之に相響應して其の力を盡くしたるも、爲替市場の狀況は常に强硬を持し爲替相場は漸を追ひて大勢輸出に對し不利に傾き來れるは素より免れ難き所と云ふべく、唯東洋銀本位國宛爲替は大正四年々央以降銀價暴騰の影響に依り、其の相場著しく本邦の輸入貿易を不利ならしむるに至れり。而して戰時爲替市場の看過す可らざる特徵としては、次の二點を擧ぐることを得べし。卽ち一は爲替相場が其の正貨輸送點（通常の）を超ゆるも猶容易に其の趨勢を改めざりしことにして、こは戰亂の繼續に伴ひ交戰國の外國に對する物資の需要日に月に愈甚しきと、平時に於ける爲替決濟手段の戰時に於ては採用すること

を得ざりしとに由るものと見ざる可らず。二は貿易の出超及貿易外受取勘定の増加に依りて對外貸借關係上有利なる地位に立てるに拘らず、正貨の流出を見たることにして大正四年中本邦より米國に正貨の現送せられたるが如きは此の事例なり（大正五年に於て正貨の支那に流出せるは之れ銀價暴騰の影響なり）。而して此の正貨流出の主因は本邦の外國爲替相場が從來對英爲替を基本と爲せる關係上當時英米爲替亂調に陷り英貨の低落甚しき折柄、本邦の對英爲替相場の引上之に伴はず纔に他方對米爲替の引下を行ひて之に對應せしめたる結果、對米爲替の低落甚しく電信爲替相場の如き四年八月には一時四十八弗に下りたることすらあり、爲めに正貨の現送を有利ならしむるに至れる事實竝に輸出貿易奬勵の見地よりして本邦爲替銀行の對米爲替相場は常に外國銀行に比して低位に保たれ、輸出に厚くして輸入に薄き憾ありしが此の兩者の差異愈〻甚しきに及んで輸入爲替は益〻本邦爲替銀行の手中を離れ主として外國銀行の扱ふ所なり、斯くて本邦爲替銀行が輸出爲替を擁して其の決濟に惱むと等しく外國銀行亦輸入爲替の決濟に苦しみたるの事實に存するものと見るべし。

以下項を別ちて時局以來本邦の外國爲替に關する重要事項を記述せんと欲す。

第一項　爲替資金問題

對外貿易上に於ける逆調を矯正し以て國際貸借上常に債務國となれる本邦の地位を轉換せしめんことは我國官民の多年の宿望にして之が實現は實に歐洲戰亂勃發以前に於ける本邦經濟界の重大問題たりしなり。然るに歐洲戰亂は端なくも之が轉變の時機を齎し、戰時に於ける貿易の大出超海運其の他に依る受取勘定の激增は期せずして朝野多年の宿望を容易に遂げしむるに至りしが、事の玆に至れる所以を稽ふるに、我國亦交戰國の一員たりしと雖も遠く戰局の中心を距り直接其の惡影響を蒙るの憂尠かりしと他方交戰國及其他の諸國に對する物資補給者たるの地位に立つことを得たるの賜たるや素より明かにして、又政府當局が此の千載の好機を逸せず本邦商權の擴張に大に其意を用ひたること竝に爲替銀行亦之と相響應して其資力の許す限り貿易の發展殊に輸出の援助に努めたることの與て力ありしは勿論なり。而して爲替銀行の通常利用し得る資力を爲すものは（一）自己の手許資金（二）市場資金の吸收（三）日本銀行の貸付金（正金銀行及臺灣銀行の場分に於て）の三者を原則とし（四）正貨の現送に依て之が調達を圖るを最後の手段と爲すべし。然るに時局以降に於ける本邦對外貿易及貿易外收支勘定の狀況は既に前款に於て記述したるが如く何れも我に有利にして殊に大正五年以後に在りては貿易の出超竝に貿易外受取勘定の增加月を逐ひて底止する所を知らざるの有樣なりしを以て外國爲替は勢ひ常に片爲替の狀態を持すること甚しくして爲替の出合を求むること能はず、爲替買持高は漸增して資金梗塞の狀時を經るに從て愈々甚だしきものありき。而して爲替銀行が市場より受入るるコールマネーの額も漸次增加して後には月々の殘高一億圓內外を保ち甚しき時は二億に垂んとし一般金融狀況の强弱之が需要の如何に依て多く左右せらるに至れるのみならず、日本銀行が正金銀行竝に臺灣銀行に對し外國爲替資金として供給したる額も左表に揭ぐるが如く逐次增加の趨勢を辿り、兌換券增發の主因一に此貸付金の增加に存するを思はしむるものありき。

年月	兌換券發行高	總貸高	外國爲替貸付高		
			總額	橫濱正金銀行	臺灣銀行
大正二年一月末	三九九、五七六、四五六円	一三五、一九七、三九五円	三四、六四五、二八六円	三四、六四五、二八六円	円

大正二年六月末	三七一、〇〇二、七九一	円	一〇〇、一七、六五三	円	
同　十二月末	四二六、三八八、七〇八		一二四、七九一、四四五		
大正三年三月末	三四八、八五九、八七八		八五、一七五、一六五		
同　七月末	三三一、〇三五、三九六		四一、五〇五、二三六		
同　十二月末	三八五、五八九、〇九六		八九、〇一五、一六四		
大正四年三月末	三二五、一八一、一五〇		四三、三八四、四七八		
同　六月末	三三七、四四七、四六一		二三、四四五、二四三		
同　九月末	三三二、五七〇、一六四		一一、八六七、四七一		
同　十二月末	四三〇、一三八、〇一一		六九、〇一八、一二三		
大正五年三月末	三七二、六三六、一四七		五七、九一〇、二四一		
同　六月末	四二九、三三〇、六七四		五一、二二八、八八七		
同　九月末	四四四、〇三一、六〇七		六九、六八九、三七四		
同　十二月末	六〇一、二二四、四一〇		二一一、九八三、二三二		
大正六年三月末	四九三、七八六、六〇二		一四九、六六四、一五一		
同　六月末	六〇五、九一八、〇四七		一七七、一八二、三一三		
同　九月末	六五八、一八三、三二二		一七九、〇五二、三五九		
同　十二月末	八三一、三七一、八五七		二八三、三〇二、八八二		
大正七年三月末	七〇八、一六四、八九六		三〇一、二四五、二一四		
同　六月末	八〇九、四六八、三七三		三二四、四八五、八四二		
同　九月末	八八三、八九九、〇一四		四三七、〇〇六、二四六		
同　十一月末	九三七、九三五、八五二		四四八、二三八、四三四		
同　十二月末	一、一四四、七三九、〇七五				

大正二年六月末	二九、九一三、七八四	円	二九、九一三、七八四	円	
同　十二月末	四一、〇〇四、〇九六		四一、〇〇四、〇九六		
大正三年三月末	二八、一八六、四四七		二八、一八六、四四七		
同　七月末	一一五、四〇六、七三六		一一五、四〇六、七三六		
同　十二月末	四五、一五四、六六七		四三、八一八、六六七		
大正四年三月末	二一、四八七、六八八		一七、七二三、六八八		
同　六月末	九、四八三、七一〇		五、七五七、七一〇		
同　九月末	三、三九〇、〇〇〇		〇		
同　十二月末	三一、二七一、三五八		二〇、七八七、三五八		
大正五年三月末	三三、一七一、六七二		二六、八九〇、六七二		
同　六月末	三二、四二三、五八六		二二、八四八、五八六		
同　九月末	五五、五三四、五二三		四四、〇七二、五二三		
同　十二月末	一四二、二〇八、六八八		一一八、九〇〇、六八八		
大正六年三月末	一一五、六〇四、五九〇		九五、六〇四、五九〇		
同　六月末	一二二、九八五、五七四		一一八、三三六、五七四		
同　九月末	一三一、七五九、一七三		一三一、七五九、一七三		
同　十二月末	二〇八、八七二、二〇七		一九七、七九七、二〇七		
大正七年三月末	二〇五、三〇一、六四一		一八一、二九二、六四一		
同　六月末	二四五、四六六、四三四		二三〇、五三二、四三四		
同　九月末	三七六、一四八、八九七		三七〇、一五七、八九七		
同　十一月末	四〇一、三〇五、三八九		三九五、三一四、三八九		
同　十二月末					

（備考）滿洲向手形買入資金は總貸出高中に含まれども、正金銀行外國爲替貸付金中には之を含まず。

而も自己の手許資金は勿論兌換券の增發竝にコールマネーの利用には自ら限度あるを以て爲替銀行は其資金の缺乏を救ひ且爲替決濟の一手段として五年以降種々なる不便不利を忍びて正貨の輸入を敢てするに至りしが故に同年以降本邦の金銀輸出入狀況は入超を示し、開戰以降七年十月に至る間に於ける其の入超額は實に二億八千五百十九萬五千圓に達したり。卽ち次の如し。

開戰以降に於ける本邦の金銀輸出入超過額

自三年八月至四年十二月	出超	三一、一四〇、〇八七 円
五年	入超	七二、九五〇、四八三
六年	入超	二三八、四八八、六二七
七年十月迄	入超	四、八九六、五四二
差引入超額		二八五、一九五、五六五

斯く正貨の現送に依り以て焦眉の急に應じ來りしと雖も此の最後の方策すら大正六年央頃より對手國の制限、再保險の困難等に依りて著しく困難を加へ來りしに、同年九月以降實施せられたる米國の金輸出禁止が意外に峻嚴を極むるに及んで遂に全く之に據る可からざるに至り爲替銀行の爲替買入は玆に一頓挫を來し、左なきだに前年來盛に論議せられ來りし資金疏通問題の解決は寸時も忽にす可らざるに至れり。事情斯くの如くなるを以て若し之を自然の成行に放置せんか必至の結果として輸出爲替に對する相場引上の免る可らざるは勿論、或は此の買入を拒止するの已むなきに至るやも圖られざる形勢を示せり。然れ共時局以來本邦經濟界の隆昌は職として其の輸出貿易の大發展に由れることを想はば、爲替資金の空乏を告ぐるに至り、急遽其の相場を著しく不利ならしめ輸出貿易を控制せんことを圖るは我財界の忍ぶべからざりし所なりとす。而して之が爲めに政府

の採りたる施設の詳細は次項に述ぶべきも五年以降片爲替の狀日に甚しく資金の梗塞漸次甚しからんとするに方り、之が救濟の策として一般に論ぜられたる所を觀るに大體左の三途を出でざりしが如し。卽ち(第一)は海外放資にして此中には(甲)本邦外債の償還乙既發外國債の買入(丙)外國公債の內地發行(丁)對外クレヂットの供與(戊)海外事業投資の五種を含み何れも充積したる本邦の資力を處分し併せて對外支拂勘定を起し受取勘定決濟の途を開くを以て目的と爲す。然れども此方策の主眼とする所は資力の處分にあり、資金の梗塞急迫せる場合に於ては未だ其窮境を救ふにに十分ならざるの憾ありと認められしが如く且つ右の內(甲)は消極的に過ぎ(丙)は外國が本邦以外に於て有利に資金を求め得る場合、例へば六年四月米國が其參戰以來聯合與國に對し僅に三分五厘の低利を以て巨額の貸付を許容せるが如き場合には到底之を實現し得るの望なく(丁)も亦對手たる債務國が眞に其必要に迫らるるに非ざれば成立困難なるべく(戊)は其實行には豫め十分なる準備を必要と爲す故に危險少なく且其實行も比較的容易なるは僅に(乙)の既發外債の買入あるに過ぎずと論ぜられたり。(第二)は內國債の發行にして、是は內地資金の豐富なる場合にありては、此資金を吸收し以て必要なる用途に之を供給し併せて內地市場の調節を圖るを得べく一時的ながら通貨の收縮をも行ひ得るものなるが故に恒久の策としては充分ならざるも直接に資金を供給する應急の手段としては前策に優れるものとせられたり。(第三)は爲替相場を適宜變更するの策にして之に關しては已に前段に述べたり。

而して大正七年に入りて輸入貿易は頓に恢復の機運に向ひ大に其の數額を增加し來りしが、尙貿易外受取勘定の增進其の勢を弛めず從て爲替調節の事は依然財界の懸案として存せり。

第二項　爲替調節施設

爲替調節の目的の爲めに政府の行ひたる施設としては次の四種を數ふるを得べし。該調節の問題は曩に大正五年中卽ち大隈內閣時代戰前三億五六千萬內外に過ぎざりし本邦所有正貨が漸增して五億を超ゆるに至りし時、已に其端を發したるものなるが唯其當時に於ては蓄積せる正貨を先づ如何に有利に之を處分し兼ねて爲替の調節を計るべきかと云ふにありて、所謂正貨資金化策の考究にありしも、六年に入りて直接爲替資金の窮乏を來すこと甚しく爲替銀行の苦境著しきに及んで、調節の問題は先づ資金の疏通を主題と爲すに至れるが如し。左揭の政府の調節施設中第一、第二は早く大隈內閣の時代に於て創始せられ、爾餘のもの何れも寺內內閣時代の施策に屬せるも此事實を語れるものと云ふ可し。而して大正七年十月寺內內閣の後を襲ひて立ちたる原內閣に至りて、其の大體の方針は適宜爲替相場の引上を行ひ以て自然的に調節の效果を擧げしめんとするにありたり。

第一　政府の正貨買入

大正三年九月政府は時局に鑑み爲替調節の目的を以て、國庫金其他の餘裕金に依り在外正貨を買入るることを決定し、十月先づ正金銀行と協定を遂げ、次で翌四年九月臺灣銀行と協定し更に六年十二月には朝鮮銀行を加へ、日本銀行を經由して正貨の買入を實行せり。其買入高は大正七年十一月に於て十三億五千九百三萬九千百二十二圓を算す。尙日本銀行が三年八月以降七年十一月に至る間に於て爲替銀行其他より買取りたる在外正貨の額は七千三百二萬五百三十六圓に上れり。

海外發展と爲替調節の目的を以て時局以來、政府又は民間に於て對外投資を爲したる額尠からざるが、之に就ては前款を參照すべし。

但し開戰後本邦に於て發行又は賣出されたる外國政府公債の大正七年十一月現在額竝に資金の直接供給者を示すときは次の如し。

英國	一九八、一七一、二三二圓・二五九	
佛國	一三〇、二三〇、六七〇・九〇〇	
露國	二五〇、六二三、三八二・六〇〇	
支那	一二四、六三三、三一七・〇五〇	
合計	七〇三、六五八、六〇二・八〇九	

此合計額を資金供給者に依て區別せば左の如し。

預金部	四四、一一四、〇〇〇圓・〇〇〇	
臨時國庫證券部	二六三、五一四、一九六・九一九	
民間	三九六、〇三〇、四〇五・八九〇	

第三　臨時國庫證券の發行

大正六年七月政府は臨時國庫證券法を制定し此發行に依りて聯合與國の軍需品代金の決濟及爲替資金の調達を圖り併せて內地金融市場調節の一助と爲せり。該證券法に依る臨時國庫證券發行限度は當初二億圓なりしも、翌七年度に於ては更に三億圓を增加し合計五億圓となれり。而して大正七年十二月に於ける發行の狀況を見るに次の如し。

(甲) 露國軍需品代金決濟のため	二六三、六五〇、〇二五圓	
(乙) 支那兵器代金決濟のため	一三〇、〇〇〇、〇〇〇	
(丙) 爲替資金調達のため		
發行濟の額	一四九、九九三、八五〇	
發行餘力	四二六、六四三、八七五	
	七三、三五六、一二五	

但し此餘力中、發行內定の分(甲)一六三、四五二、五〇〇圓(乙)二三、〇〇〇、〇〇〇圓を控除するときは大正七年十二月現在に於て爲替資金に充つることを得べき餘力は三四、〇一〇、八七五圓を算せるに過ぎず。

第四　戰時爲替調査委員會の設置

蓄積せる資力の處分竝に爲替資金の疏通を圖り爲替相場の安定を努めて維持し以て開戰以降隆たる本邦の對外貿易及爲替業務の進展を阻害せざらんが爲めに講ぜられたる施設は略上敍したるが如し。而して爲替金融調節の如何は素より海外貿易の消長に至大の關係を有し、事國家經濟政策の根本義に觸るるものなるが故に、之が大方針を決定し適宜の方策を講究するは嘗に戰時に於ける財界の不安不振を一掃するの所以なるのみならず、又以て戰後經濟界の變動に備ふるの途と云はざるべからず。故に政府は大正七年九月新に戰時爲替調査委員會なるものを設け、大藏當局者、金融業者、貿易業者其他斯道に練達せる士を擧げて戰時に於ける外國爲替の調節に關する事項を調査審議せしむることと爲せり。該調査委員會官制は大正七年九月十六日勅令第三百四十號を以て公布せられたり。卽ち次の如し。

戰時爲替調査委員會官制(大正七年九月十六日勅令第三百四十號)

第一條　戰時爲替調査委員會ハ大藏大臣ノ監督ニ屬シ戰時ニ於ケル外國爲替ノ調節ニ關スル事項ヲ調査審議ス

第二條　戰時爲替調査委員會ハ會長一人及委員若干人ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條　會長ハ大藏大臣ヲ以テ之ニ充ツ

委員及臨時委員ハ大藏大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第四條　會長ハ會務ヲ總理ス

會長事故アルトキハ大藏大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條　戰時爲替調査委員會ニ幹事若干人ヲ置ク大藏大臣ノ奏請ニ依リ大藏省高等官ノ中ヨリ内閣ニ於テ之ヲ命ス

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第六條　戰時爲替調査委員會ニ書記ヲ置ク大藏省判任官中ヨリ大藏大臣之ヲ命ス

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第三項　爲替便益の增進

戰前本邦銀行にして外國爲替業務を營めるものとしては橫濱正金銀行・臺灣銀行及朝鮮銀行の三特殊銀行以外普通銀行に在りては住友・三井・三菱・三十四・第百・愛知・明治の諸銀行を擧げ得るに止まりしも、開戰以降本邦對外貿易の發展に貢獻したること尠からず。

最後に橫濱正金銀行の相場表に據り戰時に於ける本邦外國爲替相場の主なるものに就き其の變動の狀況を記せば左の如し。

第一　對歐爲替

倫敦宛爲替相場

年月	參著拂賣 最高	參著拂賣 最低	四箇月拂買 最高	四箇月拂買 最低
大正三年一月	二・〇志 3/8片	二・〇志 3/8片	二・〇志 3/8片	二・〇志 3/8片
同　二月	二・〇 3/8	二・〇 3/8	二・〇 3/8	二・〇 3/8
同　四月	二・〇 3/8	二・〇 3/8	二・〇 3/8	二・〇 3/8
同　六月	二・〇 3/8	二・〇 3/8	二・〇 3/8	二・〇 3/8
同　七月	二・〇 3/16	二・〇 3/8	二・〇 3/16	二・〇 3/8
同　八月	二・〇 3/16	△二・〇 1/4	二・〇 3/16	△二・〇 1/4
同　九月	△二・〇 1/4	△二・〇 3/4	△二・〇 1/4	△二・〇 3/4
同　十月	△二・〇 3/8	△二・〇 3/8	△二・〇 3/8	△二・〇 3/8
同　十一月	△二・〇 1/8	△二・〇 1/8	△二・〇 1/8	△二・〇 1/8
大正四年一月	二・〇 3/16	二・〇 1/16	二・〇 1/16	二・〇 1/16
同　二月	二・〇 3/16	二・〇 1/16	二・〇 1/16	二・〇 1/16
同　三月	二・〇 3/16	二・〇 1/16	二・〇 1/16	二・〇 1/16
同　四月	二・〇 3/16	二・〇 1/16	二・〇 1/16	二・〇 1/16
同　五月	二・〇 3/16	二・〇 1/16	二・〇 1/16	二・〇 1/16
同　六月	二・〇 1/2	二・〇 1/2	二・〇 1/2	二・〇 1/2
同　七月	二・〇 1/2	二・〇 1/2	二・〇 1/2	二・〇 1/2
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 1/2	二・〇 3/4	二・〇 1/2
同　九月	二・〇 5/8	二・〇 3/4	二・〇 5/8	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 5/8	二・〇 5/8	二・〇 5/8	二・〇 5/8
同　十一月	二・〇 5/8	二・〇 5/8	二・〇 5/8	二・〇 5/8
大正五年一月	二・〇 5/8	二・〇 5/8	二・〇 5/8	二・〇 5/8
同　二月	二・〇 5/8	二・〇 5/8	二・〇 5/8	二・〇 5/8
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 5/8	二・〇 3/4	二・〇 5/8
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正六年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正七年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正八年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正九年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正十年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正十一年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正十二年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正十三年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正十四年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正十五年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正十六年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正十七年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正十八年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正十九年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正二十年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正二十一年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正二十二年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正二十三年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正二十四年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正二十五年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正二十六年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正二十七年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正二十八年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　三月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　四月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　五月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　六月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　七月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　八月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　九月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　十一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
大正二十九年一月	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4	二・〇 3/4
同　二月

	志片	志片	志片	志片	志片	志片
大正四年十二月	二・一 5/8	二・一 5/8	二・一 5/8	二・二 5/16	二・二 5/16	二・二 5/8
大正五年一月	二・一 5/8	二・一 1/4	二・一 3/8	二・二 5/16	二・一 15/16	二・二 5/8
同　二月	二・一 1/4	二・一 3/8	二・一 3/8	二・二 3/16	同	同
同　三月	二・一 3/16	二・一 3/8	二・一 3/8	二・一 15/16	同	同
同　五月	二・一 1/4	二・一 3/8	二・一 15/16	二・二	同	同
同　六月	二・一 5/16	二・一 1/4	二・二 3/16	二・二 0	大正七年五月	二・一 3/8
同　七月	二・一 5/16	二・二 5/16	二・二 3/16	同	六月	二
同　八月	二・一 3/8	二・一 15/16	二・二 1/4	同	七月	二・一 7/8
同　九月	二・一 3/8	二・一 3/8	二・二 5/16	同	八月	二・一 3/4
同　十月	二・一 1/2	二・一 3/8	二・二 5/16	二・二 3/8	九月	二・一 3/4
同　十一月	二・一 9/16	二・一 1/2	二・二 5/16	同	十月	二・一 15/16
同　十二月	二・一 9/16	二・一 5/8	二・二 5/16	同	十一月	二・二 1/16
大正六年一月	二・一 5/8	二・一 5/8	二・二 3/8	同	十二月	二・二 1/16

（備　考）△印はノミナル相場を示す。

戰亂物發と共に倫敦金融の閉塞に因り對歐爲替の取組は一時全然杜絶し、相場はノミナルに過ぎざりしも概して低位に保合ひしが氣配は漸次强含となり來り、對英爲替は翌四年一月賣爲替一ポイントの引上を見たるを手初に爾後英米爲替低落の影響に依り逐次昂騰の勢を續け殊に輸出爲替は輸入の減少に對し輸出好調を呈せる爲め供給嵩じて騰貴の傾向一層鋭く同年六月參著賣二志〇片½四箇月拂買二志一片3/16を唱へしもの翌七月には賣爲替の保合へるに反し買爲替は倫敦金利の暴騰に伴れ一ポイント方引締りて二志一片¼に上り之を前年同期に比すれば實に十三ポイントの昂進を示せり。歐洲交戰國が軍需品を初め其の他の物資の購入に依りて米國に對する債務の激增し來るに從ひ其の對米爲替は何れも甚しき逆勢を呈するを免れざりしが、就中英米爲替は英國の偉大なる財力と、朝野の苦心劃策とを以てして尙ほ其の低落を阻止するの力なく八月上旬迄數旬に亙り て四弗七十六、七仙臺を維持し來れる爲替相場は其の後大河の決するが如き勢を以て崩落し、月末には四弗五十六仙¾を報じ九月初に至つて一時四弗五十四仙¾を唱ふるなど正に通常の正貨輸送點を下ること三十仙を超ゆるに至れり。我が對外爲替相場も亦素より此の大勢の影響を免ること難く、對英爲替は八月中四回の昂騰を演じ參著賣は二志½片より二志一片⅝に上り、翌九月に入りて九日には參著賣は一擧に三ポイント高の二志15/16片、四箇月拂買は五ポイント方引締りて二志一片5/16に暴騰したり。斯くの如く此の當時對英爲替昂騰の狀特に顯著なるものあるは、獨り爲替事情の我に有利なるものありしと云ふ一般的理由にのみ依るものにあらずして、曩に英米間クロッスレートの低落を初むるや、本邦爲替銀行は對英爲替の引上に手心を用ひ他方對米爲替を引下て、之に對抗することに努め來りし結果、開戰以來爲替相場は對英漸昂對米漸落の步調を辿り、遂に爲替相場は米貨に對して甚しく逆勢となり正貨の現送を促すに至れる事實ありき。此の情勢に鑑み爲替銀行は英貨下落の事實明白なる時に當り對英爲替相場上之を認むること吝に過ぎたるの嫌ありし從前の態度を改め、爾後自然の情勢に順應することに努め對英爲替の引上を爲すと同時に賣買爲替の値開きを擴大して警戒を加へ、又對米爲替の回復に伴れて對米爲替の引上を行ふの方針に出でしこと之が主因を爲す。從て爾來對英爲替の引上繁く四年十二月には參著賣二志一片5/16、四箇月拂買二志二片5/16を唱へたり。次で五年二月末には參著賣二志一片3/16、四

箇月拂買二志一片5/16を示し、同年五月六日賣買共に各一ポイントの引上を見るに至りし迄保合へるは越年と共に本邦輸出季の經過せると英米爲替が其の逆勢を恢復し堅實なる歩調を持したるとに因るなり。下半季に入ると共に相場は再び引締り氣味に移りしも前年同季に於けるが如き熱狂的變動を演出することなく、徐々昂勢をとり十一月初旬參著賣二志一片9/16、四箇月拂買二志二片5/16を唱へ翌六年八月に至る迄此點に保合ひたり。六年九月米國の金輸出禁止に依りて、本邦に於ける爲替資金の調達行詰りの觀を呈するに及んで爲替銀行も亦相場の引上を餘儀なくせられ、對英爲替も爾後數次の引上に依り參著賣二志一片3/4、四箇月拂買二志二片5/16を示して越年せり。而して決濟不圓滑に基く片爲替の狀態顯著なるに輸出は七年に入りても依然好況を持續せるを以て外國爲替相場は勢ひ强調を辿ることを免れず、對英爲替五月二十二日賣買共に各二ポイント、六月十日各一ポイント同月二十四日賣一ポイント買二ポイントの引上を見、參著賣は遂に二志二片、四箇月拂買二志三片9/16を示したるが、輸出旺盛期たる下半季に入りては七月及八月下旬賣買各二ポイント、更に十月中旬及十一月の初旬賣一ポイント買二ポイント方の引上に依り參著賣二志二片3/8、四箇月拂買二志三片5/16に達したり。

巴里宛爲替相場

年月	參著拂賣 最高	參著拂賣 最低	四箇月拂買 最高	四箇月拂買 最低
大正三年一月	法二・五六½	法二・五六	法二・六二	法二・六一½
同　二月	二・五六	二・五六	二・六一½	二・六一½
同　四月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　五月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　六月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　七月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　八月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　九月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十一月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十二月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
大正四年一月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　二月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　三月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　四月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　五月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　六月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　七月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　八月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　九月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十一月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十二月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
大正五年一月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　二月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　三月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　四月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　五月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　六月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　七月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　八月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　九月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十一月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十二月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
大正六年一月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　二月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　三月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　四月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　五月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　六月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　七月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　八月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　九月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十一月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十二月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
大正七年一月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　二月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　三月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　四月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　五月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　六月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　七月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　八月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　九月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十一月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十二月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
大正八年一月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　二月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　三月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　四月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　五月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　六月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　七月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　八月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　九月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十一月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十二月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
大正九年一月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　二月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　三月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　四月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　五月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　六月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　七月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　八月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　九月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十一月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十二月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
大正十年一月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　二月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　三月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　四月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　五月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　六月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　七月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　八月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　九月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十一月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　十二月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
大正十一年一月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　二月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½
同　三月	二・五六	二・五六	二・六二½	二・六二½

（備考）△印はノミナル相場を示す。

本邦の對佛爲替は英國を通じて決濟せらるるものなるを以て常に對英爲替及英佛爲替の騰落の影響を受け之に伴ひて變動するを例とす。然れども開戰後に於ける對佛爲替相場が對英爲替に比

して更に逆勢を呈せること大なるの傾あるは、之れ佛國が戰爭の持續と共に軍需品は素より其の他諸種の物資の供給を英米國に仰ぐこと愈々多くして、國際貸借上債務を負へること大なるの事實に依るものと見るべし。開戰後に於ける本邦對佛爲替相場は變動激甚を極めしが今其の概況を見るに、大正三年年初來相場概して平靜を保ち開戰後もノミナルの裡に低落を續け參著賣二法五十二仙、四箇月拂買二法六十三仙の低位を以て越年せるも、倫敦巴里兩金融市場の狀況、佛國の對外貸借關係等より之を考ふるも斯くの如き低位の相場の永續せらるべき筋のものに非ざるは素より當然にして、四年二月先づ賣爲替中一ポイント高を手初めに、三月以降逐月昂騰を續け、殊に六月に入りて狂奔的暴騰を告げ同月中七回(月の下半に於て五回)の引上を見、月末參著賣二法七十一½仙、四箇月拂買二法八十五仙を唱へ、前月末に比し前者は二十四ポイント後者は三十ポイント方の上騰を示せり。翌七月中旬聊か引緩の氣配に移り參著賣二法六十九½仙、四箇月拂買二法八十六仙を唱へしが、其後英佛爲替の再騰を入れて强含となり八月二日賣買共に各四ポイント方を跳上げ、爾後繼續的に昂騰して月央に至り參著賣二法八十二½仙、四箇月拂買三法なる空前の新高値を現出するに至りしも大勢猶依然として改むる所なく一進一退の裡に漸騰し十二月初め參著賣二法九十一½仙四箇月拂買三法十二仙を示し其の儘越年したるが、五年三月以降英佛爲替の逆勢愈甚しきに至り本邦の對佛爲替も亦三月下旬より上げ步調を辿り五月上旬に至る間數次の引上に依りて參著賣二法九十七½仙、四箇月拂三法十九仙に上り緊縮の儘一先落付の姿となれり。然るに同年九月中旬より十一月の初に至る間に於ては却て數次の崩落を來し參著賣二法九十五仙、四箇月拂買三法十仙に低下せり。之れ畢竟英佛間の爲替關係が開戰後永く變調を呈し四年四月中旬の如き二十八法八十二仙と云ふ高値をすら呼ぶに至りしもの、爾來佛國政府及當業者等が苦心劃策して其の調節を圖りし甲斐ありて當時漸く常調に歸ひ來りしこと其の主因たるは明白なれども、又從來の本邦對佛爲替相場が餘りに異常なりし反動とも見ざる可らざるなり。尤も時恰も下半季の輸出期に際せるを以て輸出激增に伴ひ爲替の需要益々輻湊し爲替銀行の手許逼迫し來ると共に相場再び强調に復したるは已むを得ざる所にして十一月二日賣買共に各二ポイント方を引締めたり。翌六年四月米國の參戰は、著しく聯合與國側の氣勢を昂めしと、米國が獨立戰爭に際し財政的援助を與へられたるに酬ゆる佛國に對し特別なる寄捐を爲す可しとの報道等に依り英佛爲替頓に緩和し來れる結果九月賣爲替六ポイント買爲替四ポイントの引戻を見せしも、同年下半季に入りて對英爲替昂騰の影響に因り八月上旬、十月上旬及十一月下旬相場の引上を餘儀なくせられ參著賣二法九十六仙、四箇月拂買三法十三仙に上り其の儘翌七年五月迄保合たり。而して七年五月以降再び輸出期に向ひしと爲替資金調達難等の一般的原因に依り又々强調を辿り七月二十六日參著賣三法一仙、四箇月拂買三法二十仙を示したるが其後英佛爲替の漸落に轉ずるあり、殊に十一月休戰の成立を傳ふるや英佛爲替も亦同月十四日一擧に賣三十ポイント方の暴落を來し參著賣は二法八十六仙、四箇月拂買三法十六仙に低下したり。

第二　對米爲替

紐育宛爲替相場

年月	參著拂賣 最高	參著拂賣 最低	四箇月拂買 最高	四箇月拂買 最低
大正三年一月	四九弗⅜	四九弗⅜	五一弗	五一弗
大正三年四月	四九弗⅜	四九弗⅜	五一弗⅛	五一弗

（一〇〇圖＝四九弗八四）

大正三年五月	四九弗⅛	四九弗⅜	五一弗¼	五一弗⅛
同 六月	四九⅝	四九½	五一⅜	五一¼
同 七月	四九⅝	四九⅝	五一⅜	五一⅜
同 八月	四九⅝	△四九⅛	△五二⅜	五一⅝
同 九月	△四九⅛	四九⅛	五二⅜	△五一¾
同 十月	四九⅛	四九⅛	△五一¾	△五一⅛
同 十一月	四九⅛	四九⅛	△五一⅛	五一⅛
同 十二月	四九⅛	四九⅛	五一⅛	五一⅛
大正四年一月	四九⅛	四九⅛	五一⅛	五一⅛
同 二月	四九⅛	四八⅞	五一	五〇¾
同 三月	四八⅞	四八⅞	五〇¾	五〇¾
同 七月	四八⅞	四八⅞	五〇¾	五〇⅜
同 八月	四八⅞	△四八⅛	五〇⅜	五〇¼
同 九月	四八⅞	四八⅛	五〇½	五〇¼
同 十月	四九⅛	四九⅛	五〇¾	五〇¾
同 十一月	四九⅜	四九⅛	五一	五〇¾
同 十二月	四九⅞	四九⅜	五一⅝	五一
大正五年一月	四九⅞	四九⅞	五一⅝	五一⅝
同 二月	四九⅞	四九⅞	五一⅝	五一½
同 三月	四九⅞	四九⅞	五一½	五一⅜
同 四月	四九⅞	四九⅞	五一⅜	五一⅜
同 五月	五〇	四九⅞	五一⅜	五一⅜
大正五年六月	五〇弗⅛	五〇弗	五一弗½	五一弗⅜
同 七月	五〇¼	五〇⅛	五一⅝	五一½
同 八月	五〇⅜	五〇¼	五一¾	五一⅝
同 九月	五〇⅜	五〇⅜	五一¾	五一¾
同 十月	五〇½	五〇⅜	五一⅞	五一¾
同 十一月	五〇½	五〇½	五一⅞	五一⅞
大正六年五月	五〇⅝	五〇½	五一⅞	五一⅞
同 六月	五〇⅝	五〇⅝	五一⅞	五一⅞
同 八月	五〇¾	五〇⅝	五二	五一⅞
同 九月	五〇¾	五〇¾	五二	五二
同 十月	五〇⅞	五〇¾	五二¼	五二
同 十一月	五一	五〇⅞	五二⅜	五二¼
同 十二月	五一	五一	五二⅜	五二⅜
大正七年三月	五一	五一	五二½	五二⅜
同 四月	五一	五一	五二½	五二½
同 五月	五一⅛	五一	五二¾	五二⅝
同 六月	五一⅜	五一⅛	五三⅛	五二¾
同 七月	五一⅝	五一⅜	五三⅜	五三⅛
同 八月	五一⅞	五一⅝	五三⅝	五三⅜
同 九月	五一⅞	五一⅞	五三⅝	五三⅝
同 十月	五二	五一⅞	五四⅛	五二⅞
同 十一月	五二¼	五二⅛	五四⅝	五四⅜

（備考）△印はノミナル相場を示す。

歐洲開戰に依て本邦の對外貿易一時杜絶の姿にありし當時にありても、猶對米貿易のみは其の數額は著しく減少したるも依然として維持せられ來り、其の後米國財界久しからずして平靜に歸すると共に、却て歐洲交戰國に對する最大の物資供給者たるの地位を獲得するに至り、同國の經濟界は爲めに空前の隆昌を來せるに伴ひ、本邦の對米貿易亦顯著なる進展を示したるは人の知る所にして、戰前輸入超過を常例とせし我國が開戰後其の輸出貿易の未曾有なる發展に由りて、意外にも輸出超過國に轉化するに至りし原因は、軍需品の供給東南洋方面に對する代用品の輸出盛大なりし事實の外に、尙對米貿易の旺盛なりしことをも擧げざる可らざるなり。如斯對米輸出貿易の旺盛を來せるに拘はらず、爲替銀行が尙之を奬勵するの見地より其の爲替相場の引上を敢て行はざりし事情存したると共に、且開戰以來英米爲替の變調に方り英貨の非常なる低落に對し、本邦が其の外國爲替相場の基本たる對英爲替の引上に多少の手心を用ひて、他方對米爲替の引下を行ひ來れる事實等を併せ考ふる時は、開戰後本邦の對米爲替が逐次漸落の步調を辿れること毫も異と爲すに足らざるなり。

此の結果紐育宛參著賣爲替相場の如きは、四年二月以降四十八弗⅞なる現送點以下に保合ひ、爲めに米國に向けて正貨の流出を促すに至りしこと前叙の如し。買爲替に就て見るも、四箇月拂の手形の相場五十一弗⅜なりしもの三年十二月には五十一弗⅛、四年一月五十一弗、二月五十弗¾を示し以後居据りの姿なりしが、七月に至りて、米國新銀行制度が輸出入手形の支拂引受を認むるものなりしに戰時の國際金融の狀態が紐育に於ける手形の引受及割引業務の發達を促進したること尠少ならざるものありて、紐育金融業者玆に新に信用狀付本邦輸出手形の引受を開始したるのみならず、此の種手形が市場に於て割引かるるの便宜開かるるに至りし爲め、七月二十八日以後紐育宛爲替手形の

買入は總て此の種信用狀付に依て建てらるることに改定せられ、又其の相場も從前に比し割安となり五十弗⅜に引下げられたり。八月中英米爲替の崩落相踵ぎ前途の豫測困難なるに至りしを以て十八日より相場はノミナルとなりて、參著賣は二十五日四十八弗⅛に落ち、月初に比して六ポイント方の低下を示せるが、買爲替にありても四箇月拂は月央に一ポイント方緩みて五十弗¼となれり。之は畢竟本邦對英爲替の引上が、猶英米爲替の崩落の程度に伴はざるの反映にして、爲めに正貨の現送を續けたるは素より當然のみ。玆に至つて爲替銀行が其の從來の態度を改め、爲替相場も出來得る限り自然の大勢に順應せしむるの方針を採るに至りしこと、已に對英爲替の項に之を記せり。されば翌九月に入りては相場ノミナルの中に參著賣は六日、三ポイント方の引上を見たるのみならず、其後英米爲替も軟弱ながら一先落付き次で漸次恢復の形勢を示したれども、對英爲替は何等の變動を見ることなく、却て對米爲替に於て賣爲替は十一日ノミナルを撤すると共に一ポイント方引上げられ、更に十八日二ポイント方引締り參著拂四十八弗⅞を唱へ、四箇月拂買も亦二十一日以後五十弗½を示したり。斯くて開戰後漸落歩調を採り來りし對米爲替も爾後貿易の活躍に應じ、又英米爲替の成行强硬を入れて、漸次强調を呈し、十一月下旬二回の引上に依て參著賣四十九弗⅜四箇月拂買五十一弗⅞を唱へ、十二月二日更に賣二ポイント、買三ポイント高を示し、月の下旬賣買共各二ポイントの引上を見、參著賣は四十九弗⅝四箇月拂買五十一弗⅝を以て越年し、買爲替は五年二月下旬及三月上旬の二回に各一ポイントの引戻を見せ、五月に入りては歐洲爲替の昂騰に伴れ賣爲替一ポイント方引締り、次で六月以降輸出旺盛期に入ると共に逐次昂騰の勢を示し、十月末參著賣五十弗½四箇月拂買五十一弗⅞に上り、其の以後に於ては、翌六年五月英米爲替の漸騰に應じ參著賣の五十弗⅝に引上げられしを除きて八月迄保合ひたり。然るに本邦の對外輸出依然として好勢を持し、賣買爲替の出合愈々困難を訴ふる折柄、九月米國が金禁出を布告してよりは專ら爲替決濟の爲めにする正貨の輸出と雖も、容易に米國政府の特許を受くること能はざるに至り、爲替銀行の手許窮迫を告ぐること益甚しきに及びしかば、以後爲替相場は絕えず强硬を保ち、逐次昂騰を續け十二月末には參著賣五十一弗、四箇月拂買五十二弗⅜を示し、翌七年三月迄保合ひたるも、同月十九日米國に於ける金利引締りの權衡上買爲替先づ一ポイント高を唱へ、次で輸出期に向ふと共に五月、六月、七月、八月、十月、十一月等殆ど連月一回乃至二回の引上を見、參著賣五十二弗¾、四箇月拂買五十四弗⅝に上りたり。十一月休戰條約の成立に由りて爲替の大勢は幾分軟調に向はんとするの氣配なきにあらざりしも、猶前述の如き諸事情改まらざる限り、其の前途は依然强調を辿るものと觀測せらるる情勢にありたり。

第三　對露爲替

哈爾賓宛爲替相場

（一〇〇圓＝九六留八八）

年月	參著拂賣 最高	參著拂賣 最低	一覽拂又は三十日拂買 最高	一覽拂又は三十日拂買 最低
大正三年一月	九六・八〇留	九六・六五留	九七・八〇留	九七・六五留
同　二月	九六・六〇	九六・二〇	九七・六〇	九七・二〇
同　三月	九六・四五	九六・二五	九七・二〇	九七・〇〇
同　四月	九六・五〇	九六・四五	九七・二五	九七・一〇
同　五月	九六・八五	九六・五五	九七・三〇	九七・二〇
同　六月	九六・九五	九六・七五	九七・七〇	九七・六〇
大正三年七月	九九・〇〇留	九六・八五留	一〇〇・〇〇留	九七・六五留
同　八月	△一一〇・九〇	△一〇一・〇〇	△一一一・九〇	△一〇一・〇〇
同　九月	△一一〇・九〇	△一〇二・〇〇	△一一一・九〇	△一一一・九〇
同　十月	△一一九・〇〇	△一〇五・〇〇	—	—
同　十一月	△一二〇・五〇	△一一六・五〇	—	—
同　十二月	△一二九・五〇	△一二五・五〇	—	—

	留	留	留	留
大正四年　一月	一二九・五〇	一二七・八〇	—	—
同　二月	一二七・九〇	一〇七・五〇	—	—
同　三月	一二五・〇〇	一二一・〇〇	—	—
同　四月	一二七・三〇	一二五・〇〇	—	—
同　五月	一三〇・〇〇	一二七・〇〇	—	—
同　六月	一三五・〇〇	一二八・五〇	一三八・五〇	一三六・〇〇
同　七月	一四二・五〇	一三五・〇〇	一五〇・〇〇	一三八・五〇
同　八月	一四四・五〇	一三二・〇〇	一五三・〇〇	一三八・五〇
同　九月	一三九・五〇	一三五・〇〇	一四六・〇〇	一四一・五〇
同　十月	一四四・〇〇	一三九・五〇	一四八・五〇	一四六・〇〇
同　十一月	一五四・〇〇	一四三・五〇	一五九・五〇	一四八・〇〇
同　十二月	一六三・〇〇	一五三・〇〇	一六八・五〇	一五八・五〇
大正五年　一月	一七三・五〇	一六九・五〇	一八〇・五〇	一七五・五〇
同　二月	一七二・〇〇	一五六・〇〇	一七八・五〇	一六三・五〇
同　三月	一五九・〇〇	一五七・〇〇	一六六・五〇	一六二・五〇
同　四月	一六六・〇〇	一五九・〇〇	一七三・五〇	一六五・〇〇
同　五月	一六三・〇〇	一六一・〇〇	一六九・五〇	一六七・五〇
同　△六月	一六五・五〇	一六三・〇〇	一七一・五〇	一六八・五〇
同　△七月	一六六・五〇	一六四・五〇	一七三・五〇	一七〇・五〇
同　△八月	一六六・五〇	一六五・〇〇	一七四・〇〇	一七一・〇〇
同　△九月	一六二・〇〇	一五三・〇〇	一七〇・〇〇	一六四・〇〇
同　△十月	一六四・〇〇	一六〇・〇〇	一七〇・〇〇	一六八・〇〇
同　△十一月	一七五・〇〇	一六六・〇〇	一八〇・〇〇	一七一・〇〇
同　△十二月	一八四・〇〇	一七二・〇〇	一九二・〇〇	一八〇・〇〇

	留	留	留	留
大正六年　△一月	一八二・〇〇	一七二・〇〇	一八九・〇〇	一七八・〇〇
同　△二月	一八一・〇〇	一七六・〇〇	一八八・〇〇	一八三・〇〇
同　△三月	一八四・〇〇	一七八・〇〇	一九一・〇〇	一八三・〇〇
同　△四月	一八〇・〇〇	一七六・〇〇	一八五・〇〇	一八〇・〇〇
同　△五月	一八六・〇〇	一八〇・〇〇	一九二・〇〇	一八四・〇〇
同　△六月	二二〇・〇〇	一八四・〇〇	二三二・〇〇	一九一・〇〇
同　△七月	二八六・〇〇	二〇四・〇〇	二九八・〇〇	二三六・〇〇
同　△八月	二九〇・〇〇	二四五・〇〇	三〇二・〇〇	二六二・〇〇
同　△九月	四三五・〇〇	二八六・〇〇	四四七・〇〇	二九八・〇〇
同　△十月	六六〇・〇〇	四三〇・〇〇	七二〇・〇〇	四四〇・〇〇
同　△十一月	八〇〇・〇〇	六五〇・〇〇	八七〇・〇〇	七五〇・〇〇
同　△十二月	八八〇・〇〇	七二〇・〇〇	九四〇・〇〇	八一〇・〇〇
大正七年　△一月	八三〇・〇〇	七二五・〇〇	九〇〇・〇〇	八二〇・〇〇
同　△二月	七二五・〇〇	六三〇・〇〇	八二〇・〇〇	七三〇・〇〇
同　△三月	五八〇・〇〇	三三〇・〇〇	七二〇・〇〇	四三〇・〇〇
同　△四月	三八〇・〇〇	三一〇・〇〇	四七五・〇〇	四〇〇・〇〇
同　△五月	四五五・〇〇	三一〇・〇〇	五八〇・〇〇	三八五・〇〇
同　△六月	五五〇・〇〇	四一五・〇〇	六四五・〇〇	五四〇・〇〇
同　△七月	五五〇・〇〇	四二五・〇〇	六三〇・〇〇	五一五・〇〇
同　△八月	五一五・〇〇	四五五・〇〇	五九〇・〇〇	五二五・〇〇
同　△九月	五七〇・〇〇	五二〇・〇〇	六四五・〇〇	五八五・〇〇
同　△十月	六二五・〇〇	四七五・〇〇	六九五・〇〇	五四五・〇〇
同　△十一月	五二五・〇〇	三六五・〇〇	五九五・〇〇	四三五・〇〇

（備考）△印相場ノミナル、大正五年六月以降全部ノミナルなり。大正三年九月迄は三十日拂買相場。

開戰以降各交戰國は多額の戰費調達・軍需品其他物資の巨大なる輸入等に由りて其の對外爲替相場は何れも多少の程度に於て逆調を呈するに至りしは、蓋し已むを得ざるの所なりと雖も、露貨の如く甚大なる崩落を現出したるものは又他に其の類例を見ざる所なり。而して同國の外國爲替相場が異常なる低落を來せし所以に就ては、其の原因一ならざるも其の主要なるものとしては、(第一)露國は平時より輸入品の代價は勿論、外債元利金・外資利益金・保險料・運賃等年々多額の貿易上竝に貿易外の支拂勘定を有せしが、大戰勃發以後にありては是等支拂勘定の決濟に充つべき外資の輸入杜絶したるのみならず、戰爭に因る産業界人員の缺乏・運送の困難・貿易通路の閉塞等は其の輸出貿易を阻害するに至りしこと少からず、且戰爭の持續に伴ひ軍需品其他の物資の供給を外國に仰ぐこと愈々增大せしこと、(第二)不換銀行券の大膨脹、(第三)貿易業者の爲替上の投機等を擧ぐることを得べく、殊に大正六年以後にありては同國に於ける革命騷擾・單獨媾和の締結・政界の紛亂等亦直接間接に外國爲替に惡影響を及ぼせしこと大なるものありと認めらる。今開戰以降に於ける本邦の對露爲替相場の狀況を見るに、大正三年七月東歐の風雲急を告ぐるや月初哈爾賓宛參著賣九十六留八十五、一覽拂買九十七留六十なりしもの日に上騰して月末前者は九十九留、後者は百留に達し、翌八月以降相場ノミナルの間に奔騰を續け、年末に至りて參著賣百十九½留を示し越年後にありても時に一高一低ありしと雖も、此の大勢は毫も改まる所なく六月末參著賣百二十五留、三十日拂買百二十八½留、十二月末には前者は百六十三留後者は百六十八½留を唱へたり。翌五年二三月の交に於ては日本に於ける露債の成立其他に依りて氣配幾分の引緩みを示したりと雖も、之れ唯其の昂騰の度を多少緩和し得た

るに止まりて、到底舊來の强調を矯正するの力なかりき。同年六月以降爲替相場は再びノミナルとなりしを以て、實際の相場を知ること能はざるも、同月末參著賣は百六十五留、三十日拂買百七十一½留にして、十二月には前者百七十三留、後者百八十一留を示せり。六年四月同國に於ける革命の勃發は更に爲替相場に不利なる影響を與へ、四月末參著賣百八十留、三十日拂買百八十四留を唱へたるもの六月末には前者二百十四留、後者二百二十四留を示し、正貨輸送點を超ゆること玆に至りて十割以上に達し、日露間爲替の取組は益々困難を極め取引殆ど杜絕の姿を呈したり。斯くの如き對外爲替の大逆調に對し、之が防止策として當時の露國假政府は露曆六月十七日(六月三十日)官報第八十二號を以て外國爲替禁止令を布告し翌七月より之を實施したり。該施設は一般的輸入禁止の實行と同樣なる結果を齎すに至りしと雖も、毫も其の目的とせる露貨釣上の效果を生せず、之が爲め却て反動的に崩落に次ぐに崩落を來すの有樣となり、本邦の對露爲替も亦參著賣相場七月末二百八十六留、八月末二百九十留、九月末四百三十留、十二月には一時八百八十留を唱へ、三十日拂買相場も七月末二百九十八留、八月末三百二留、九月末四百四十二留、十二月には九百四十留の突飛なる相場を現出したり。七年以後に於ては同國國內の秩序徐々として恢復し來れる結果として、爲替相場も最早前年下半季に於けるが如き狂騰を演ずることなく却て多少の引緩みを示し、高位ながらも概して落付けるものの如く、三月末には一時參著賣三百五十留三十日拂買四百四十五留、四月末前者三百十留、後者四百留を示したることすらありたり。

第四　對印爲替

孟買宛爲替相場

(一〇〇圓＝一五三留比六)

年月	參著拂賣 最高	參著拂賣 最低	三十日拂買 最高	三十日拂買 最低
大正三年一月	一五一¾ 留比	一五一½ 留比	一五四 留比	一五三½ 留比
同二月	一五二	一五一½	一五四	一五三½
同三月	一五二¼	一五二¼	一五四¼	一五四¼
同四月	一五二¼	一五二	一五四¼	一五四
同五月	一五三¼	一五二	一五五½	一五四¼
同六月	一五三¼	一五三¼	一五五½	一五五½
同七月	一五三¼	一五三¼	一五六	一五五½
同八月	△一五三¼	△一五一¾	△一五七	△一五六
同九月	△一五一¾	△一五一½	一五七	△一五六½
同十月	△一五一½	一五一½	△一五六½	△一五四½
同十一月	△一五一½	一五一½	△一五四½	△一五四½
同十二月	△一五一½	一五一½	一五四½	△一五四½
大正四年一月	一五二	一五一½	一五四½	一五四½
同二月	一五二	一五二	一五四½	一五四½
同三月	一五二¾	一五二½	一五五¼	一五五
同四月	一五三	一五二¾	一五五½	一五五¼
同五月	一五三¾	一五三	一五六¼	一五五½
同六月	一五五	一五四	一五七½	一五六½
同七月	一五五	一五五	一五七½	一五七½
同八月	一五六	一五五	一五八½	一五七½
同九月	一五六½	一五五½	一五九	一五八

年月	參著拂賣 最高	參著拂賣 最低	三十日拂買 最高	三十日拂買 最低
大正四年十月	一五七¼ 留比	一五六½ 留比	一五九¾ 留比	一五九 留比
同十一月	一五七¾	一五七¼	一六一	一五九¾
同十二月	一五八½	一五八½	一六一¾	一六一¾
大正五年一月	一五八½	一五六¾	一六一¾	一六〇
同二月	一五六¾	一五六½	一六〇	一五九¾
同三月	一五六½	一五六½	一五九¾	一五九¾
同五月	一五六¾	一五六½	一五九¾	一五九½
同六月	一五七¼	一五六¾	一五九¾	一五九½
同七月	一五八¼	一五七¼	一五九¾	一五九¾
同八月	一五八¼	一五七¼	一六〇½	一五九¾
同九月	一五八¼	一五八¼	一六〇½	一六〇½
同十月	一五八¾	一五八¼	一六一	一六〇½
同十一月	一五九¼	一五八¾	一六一½	一六一
同十二月	一五九¼	一五八¼	一六一½	一六〇¾
大正六年一月	一五七¾	一五六¾	一六〇¼	一五九¾
同二月	△一五六¾	△一五五¾	一五九¾	一五九
同三月	△一五五¾	△一五五	一五九	一五八½
同四月	△一五五	△一五四	一五八½	一五七½
同五月	△一五三½	△一五一	一五七	一五四½
同六月	△一五一	△一五〇¼	一五三¾	一五二½
同七月	△一五〇¼	△一四八¾	一五二½	一五一

大正六年八月	△一四八¾留比	一四八¾留比	一五一留比	一五一留比	大正七年五月	一四六留比	一四四½留比	一四九留比	一四七½留比
同九月	△一四八¾	△一四五½	一五一	一四八½	同六月	一四四	一四三	一四七	一四六
同十月	△一四五½	△一四四½	一四八½	一四八	同七月	一四三½	一四三	一四六½	一四六
同十一月	△一四六	△一四五	一四九	一四八	同八月	一四五¼	一四三½	一四八¼	一四六½
同十二月	一四七	△一四六	一五〇	一四九	同九月	一五一½	一四六¼	一五四½	一四九¼
大正七年一月	一四七	一四七	一五〇	一五〇	同十月	一五三	一五二½	一五六	一五五½
同四月	一四七	一四六	一五〇	一四九	同十一月	一五四½	一五二½	一五七½	一五五½

（備考）大正三年八月四日より同年十二月十一日迄は全部、大正六年二月七日より同年十二月五日迄參著賣爲替相場はノミナルなり。

開戰の當初倫敦金融市場平調を失し、爲に印度各市場に於ける金融も圓滑を缺くに至りしと、時偶、印棉買付の時期に向はんとする折柄なりしを以て、對印爲替相場は開戰後の數箇月間に於て一時低落の歩調を示したり。其の以後大正五年に至る迄は特に注目すべき變動を現出することなかりしが、此間內地紡績業の活躍に伴ふ印棉買付の激增ありしと雖も他方本邦輸出貿易の殷盛（殊に對印輸出の增加）及貿易外受取勘定の激增等に基く爲替市場の强硬に伴ひて對印爲替相場も亦漸次恢復を見るに至り、大正三年七月末に於ける孟買宛參著賣爲替相場百五十三¼留比、三十日拂買百五十六留比なりしもの十二月末には前者百五十一½留比、後者百五十四½留比、四年六月末に參著賣百五十五留比、三十日拂買百五十七½留比、同年十二月末前者百五十八½留比、後者百六十一¾留比、五年十一月末には參著賣百五十九¼留比、三十日拂買百六十一½留比を示せり。然るに五年十二月に至り突如として印度省證券每週賣出額の制限を見るに至りしを以て、印度を中心とせる新規爲替の取組は勢ひ中絕の姿となりしが、時恰も同國に於ける棉花出廻期に當れるのみならず、從來印度棉は本邦に輸入せらるる外棉の七割內外を占むる關係上內地紡績業者間の恐慌を惹起し、所謂印棉買入資金問題の端緒は玆に開かれたり。以上の賣出制限は唯印棉買入に一大障碍を生ずるに至らしめたるのみならず、本邦よりの對印輸出亦一時其の影響を受けて阻碍せらるるを免れざりき。而して其の爲替相場上に現はれたる影響の如何を見るに、既に當業者は印棉買付の開始と共に爲替に就ても數箇月間の豫約を爲せるを以て其の影響は相場上には直ちに現はるることなかりしも、尙十一月末參著賣百五十九¼留比、三十日拂買百六十一½留比なりしもの十二月には二回の引下によりて前者百五十八¼留比、後者百六十¾留比を唱へたり。翌六年に入りては印度省證券の賣出額再三減額せられしと、其の賣出價格の漸次昂騰を來したる結果、對印爲替相場も逐次低落六月末參著賣百五十¼留比、三十日拂買百五十二½留比、八月末前者百四十八¾留比、後者百五十一留比を示せり。然るに九月に於て米國の金融禁出問題生じたる結果印棉資金の問題は玆に再燃し、爲替相場も亦九月二十二日賣買共一擧に二留比方の引下を見、參著賣百四十六¾留比、三十日拂買百四十九留比となりしが數日ならずして前者百四十五½留比、後者百四十八½留比に下り、翌十月には一時參著賣百四十四½留比、三十日拂買百四十八留比に低落したることありき。而して印棉問題に付ては第四節第四款に細叙しあるを以て玆に之れを省略するも、要するに本邦の對應施設效を奏して幸にも一時憂懼せられたるが如き結果を生ずることなきを得たるが爲替相場は六年秋季以降の逆調を容易に挽回するに至らず、殊に七年二三月以降にありては印度に於ける銀準備の減少に伴ひ同國金融界の逼迫甚だしかりしかば、爲替銀行も勢ひ之れが對應手段として爲替の取組を澁り、又一方に於ては印度省證券の賣出價額一時一志六片を唱ふるに至りし等の諸事情に依り、對印爲替の前途は極めて險惡なる形勢を馴致し、

従て爲替相場も左の如く漸落を示したるが八月以降漸次恢復の趨勢に轉じたり。

	参著賣 留比	三十日拂買 留比
六年十二月末	一四七	一五〇
七年一月末	一四七	一五〇
同四月末	一四六	一四九
同六月末	一四三	一四六
同七月末	一四三½	一四六½
同八月末	一四五½	一四八½
同十一月末	一五四½	一五七½

第五 對支爲替

上海宛爲替相場

（一〇〇圓に付き）

年月	参著拂賣 最高	参著拂賣 最低	十日拂買 最高	十日拂買 最低
大正三年一月	七九兩	七七½兩	八〇¼兩	七八¾兩
同二月	七九	七八	八〇¼	七九¼
同三月	七八¼	七七½	七九½	七八¾
同四月	七七¾	七六½	七九	七七¾
同五月	七九	七六¾	八〇¼	七八
同六月	八〇¼	七八¾	八一½	八〇
同七月	△八七	七九¾	△八八¼	八一
同八月	—	—	—	—

年月	参著拂賣 最高	参著拂賣 最低	十日拂買 最高	十日拂買 最低
大正三年九月	△八六½兩	△八四¼兩	兩 —	兩 —
同十月	△九〇¼	△八五	—	—
同十一月	△九〇½	△八八	—	—
同十二月	八九¼	八六¼	九一¼	八八¼
大正四年一月	八九¾	八八½	九一¼	九〇
同二月	八九½	八八¾	九一	九〇¼
同三月	八八¾	八五½	九〇¼	八七
同四月	八七	八六¼	八八½	八七¾

年月	参著拂賣 最高	参著拂賣 最低	十日拂買 最高	十日拂買 最低
大正四年五月	八七¾	八六½	八九¼	八八
同六月	八九½	八七¾	九一	八九¼
同七月	九一	八九¾	九二½	九一¼
同八月	九一¼	八九¾	九二¾	九一¼
同九月	九〇½	八九¼	九二	九〇¾
同十月	八九	八七¼	九〇½	八八¾
同十一月	八七¾	七九	八九¼	八〇½
同十二月	△八三¾	△七九	△八五¾	△八一
大正五年一月	△八二	七八¾	△八四	△八〇¼
同二月	△八〇	七八¾	△八一½	△八〇¼
同三月	△七九½	△七三¾	△八一	△七五¼
同四月	△七四¼	△六八½	△七五¾	△七〇
同五月	△七〇	△六三¼	△七二	△六五¼
同六月	△七三½	△七〇	△七五¾	△七二
同七月	△七八	△七一	△八〇	△七三
同八月	△七三¼	△七一	△七五¼	△七二½
同九月	△七〇¼	△六七½	△七一¾	△六九
同十月	△六八½	△六七¾	△七〇	六九¼
同十一月	六六¾	六〇¼	六八¼	六二¼
同十二月	六〇½	五九	六二½	六一
大正六年一月	六一½	五九	六三½	六一
同二月	六〇½	五七½	六二½	五九½

年月	参著拂賣 最高	参著拂賣 最低	十日拂買 最高	十日拂買 最低
大正六年三月	六四	六〇	六六	六二
同四月	六一½	五九¾	六三½	六一¾
同五月	六〇¼	五九¼	六二¼	六〇¾
同六月	五九¼	五五¼	六〇¾	五六¾
同七月	五六¾	五四	五八¼	五五¼
同八月	五四½	四六	五六	四七½
同九月	四八	四二¼	四七½	四四¼
同十月	△五六	△四八	△五八	△五〇
同十一月	△五三	△五〇	△五五	△五二
同十二月	五一½	四八½	五三½	五〇½
大正七年一月	五〇¼	四七¾	五二¼	四九¾
同二月	五〇	四八¾	五二	五〇¾
同三月	四九¼	四七¾	五一¼	四九¼
同四月	四九¾	五七¾	五一¼	四九¼
同五月	四八½	四七½	五〇	四九
同六月	四七½	四六¼	四九	四七¾
同七月	四六¼	四五½	四七¾	四七
同八月	四五½	四二½	四七	四四
同九月	四二½	三八½	四四	四〇
同十月	四四½	四一	四六	四二½
同十一月	四五	四三	四六½	四四½

（備考）開戰當初より三年十二月十一日に至る間及大正六年七月十二日以降は相場ノミナルなり。

倫敦銀塊相場表

年	月	最高	最低	年	月	最高	最低	年	月	最高	最低
大正三年	一月	二六片¾	二六片⅝	大正四年	十月	二四片⅜	二三片¾	大正六年	五月	三八片⅛	三七片¾
同	二月	二六⅛	二六½	同	十一月	二六⅛	二四⅛	同	六月	三九⅜	三八
同	三月	二七	二六⅛	大正五年	一月	二七⅛	二五¾	同	七月	四〇⅛	三九½
同	四月	二七¼	二六⅜	同	二月	二七⅛	二六⅛	同	八月	四〇	四
同	五月	二七⅜	二五⅝	同	三月	二七⅛	二六⅝	同	九月	四〇⅛	三九½
同	六月	二六¼	二六	同	四月	二七⅝	二六⅝	同	十月	四一⅛	四
同	七月	二六⅛	二六⅛	同	五月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	四二¾	四
同	八月	二六¾	二六⅛	同	六月	二八⅛	二七⅛	同	十二月	四三⅜	四
同	九月	二七⅜	二六⅝	同	七月	二八⅝	二七⅛	大正七年	一月	四五⅝	四三¾
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	二九	二七⅝	同	二月	四三¾	四
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三〇	二八⅝	同	三月	四二½	四
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三一	二八⅝	同	四月	四五⅛	四三¾
大正四年	一月	二七¼	二六⅝	同	十一月	三二	三〇½	同	五月	四五⅝	四三¾
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇½	同	六月	四五⅝	四三¾
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正六年	一月	三二⅜	三〇	同	七月	四五⅝	四三¾
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇	同	八月	四五⅝	四三¾
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇	同	九月	四五⅝	四三¾
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇	同	十月	四五⅝	四三¾
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇	同	十一月	四五⅝	四三¾
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇	同	十二月	四五⅝	四三¾
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇	大正七年	一月	四五⅝	四三¾
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇	同	二月	四三¾	四
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇	同	三月	四二½	四
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇	同	四月	四五⅛	四三¾
大正五年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇	同	五月	四五⅝	四三¾
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇	同	六月	四五⅝	四三¾
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正七年	一月	三二⅜	三〇	同	七月	四五⅝	四三¾
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇	同	八月	四五⅝	四三¾
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇	同	九月	四五⅝	四三¾
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇	同	十月	四五⅝	四三¾
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇	同	十一月	四五⅝	四三¾
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇	同	十二月	四五⅝	四三¾
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇	大正七年	中	四五⅝	四三¾
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正六年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正七年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正七年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正八年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正八年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正九年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正九年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正十年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正十年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正十一年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正十一年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正十二年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正十二年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正十三年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正十三年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正十四年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正十四年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正十五年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正十五年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正十六年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正十六年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正十七年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正十七年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正十八年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正十八年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正十九年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正十九年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正二十年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正二十年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正二十一年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正二十一年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正二十二年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正二十二年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正二十三年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正二十三年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正二十四年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正二十四年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正二十五年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正二十五年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二⅜	三〇				
同	二月	二七⅝	二六⅝	同	十二月	三二⅜	三〇				
同	三月	二七⅝	二六⅝	大正二十六年	一月	三二⅜	三〇				
同	四月	二七⅝	二六⅝	同	二月	三二⅜	三〇				
同	五月	二七⅝	二六⅝	同	三月	三二⅜	三〇				
同	六月	二七⅝	二六⅝	同	四月	三二⅜	三〇				
同	七月	二七⅝	二六⅝	同	五月	三二⅜	三〇				
同	八月	二七⅝	二六⅝	同	六月	三二⅜	三〇				
同	九月	二七⅝	二六⅝	同	七月	三二⅜	三〇				
同	十月	二七⅝	二六⅝	同	八月	三二⅜	三〇				
同	十一月	二七⅝	二六⅝	同	九月	三二⅜	三〇				
同	十二月	二七⅝	二六⅝	同	十月	三二⅜	三〇				
大正二十六年	一月	二七⅝	二六⅝	同	十一月	三二

參著賣四二¼兩、同十日拂買四十四¼兩に下り、本邦對支爲替開始以來の安値を出現したるものと稱せられたり(大正七年九月には更に一層の安値を呼べり)。如斯對支爲替の低落繁かりし爲め、本邦輸入商の立場は非常なる不利を來すに至りしのみならず、倫敦銀塊相場と支那內地に於ける銀相場との間には常に幾分の開きあるを以て、對支爲替暴落の結果は本邦よりの正貨現送を有利ならしむるに至りし事ありき。而して此の正貨の現送は大正五年三月頃より著しく其の傾向を生じ、殊に同年五月及九月以降特に顯著となり、同年十二月に至て其の頂點に達したるものの如し。六年十二月以後數箇月間は銀塊相場高位ながらも概して保合の氣味なりしを以て、上海宛爲替相場も常に五十兩內外を上下して經過したるが、七年四月に至り米國政府の銀塊買上弗貨處分法の發布を入れて銀に對する前途需要の旺盛を見越し、銀價は再び奔騰し其の後一時引緩みを見せしも、八月には更に昂勢を回復して四十九½片を唱へたり。對支爲替も亦之に連れて上海宛參著買は五月末四十七½兩、六月末四十六¼兩、十日拂買は五月末四十九兩、六月末四十七¾兩に下りしが、其の後更に一層崩落して九月には一時參著賣三十八½兩、十日拂買四十兩を唱へ新記錄を作りたり。是れ單に銀價の昂騰にのみ因るにあらず、上海市場が近年稀有の逼迫狀態を持續せること亦與て力ありしなる可し。

尚參考として香港宛爲替相場表を揭ぐれば次の如し。

香港宛爲替相場

(一〇〇弗に付き)

年月	參著拂賣 最高	參著拂賣 最低	十日拂買 最高	十日拂買 最低
大正三年一月	九五円½	九四円¼	九四円¼	九三円
同 二月	九五¼	九四¼	九四	九三
大正三年三月	九五円¼	九四円½	九四円	九三円¼
同 四月	九六¼	九五	九五	九三¾

年月	參著拂賣 最高	參著拂賣 最低	十日拂買 最高	十日拂買 最低
同 五月	九六	九四¼	九四¾	九三
同 六月	九四½	九二¾	九三¼	九一½
同 七月	九三	△八六½	九一¾	△八五¾
同 八月	—	—	—	—
同 九月	△九一¾	△八九½	—	—
同 十月	△九一	△八五¾	—	—
同 十一月	△八九	△八五½	—	—
同 十二月	△九一½	△八八	八八¾	八六¼
大正四年 一月	八八½	八七¾	八七	八六¼
同 二月	八八¼	八七½	八六¾	八六
同 三月	九一½	八八¼	九〇	八六¾
同 四月	九〇¾	九〇	八九¼	八八½
同 五月	九〇½	八九¼	八九	八七¾
同 六月	八九¼	八八	八七¾	八六½
同 七月	八七¾	八六¼	八六¼	八四¾
同 八月	八八	八六¼	八六½	八四¾
同 九月	八八½	八七	八七	八五½
同 十月	八八¾	八七¾	八七¼	八六¼
同 十一月	九四	八七¾	九二½	八六¼
同 十二月	△九三	△八九¾	△九一	△八七¾
大正五年 一月	△九四½	△九一½	△九三	△八九½
同 二月	△九四	△九二¾	△九二½	△九一¼
同 三月	△九七½	△九三½	△九六	△九二
同 四月	△一〇三¾	△九七	△一〇二¼	△九五½
大正五年 五月	△一一一½	△一〇三¾	△一〇七½	△一〇〇¾
同 六月	△一〇二½	△九八¼	△九九½	△九五¼
同 七月	△一〇〇½	△九四¼	△九八	△九二¼
同 八月	△一〇二	△九九½	△九七	△九九½
同 九月	一〇四¾	△一〇二	△一〇二¼	△九九½
同 十月	一〇四¾	△一〇四	△一〇二½	△一〇一½
同 十一月	一一〇	一〇五¾	一〇七½	一〇三¼
同 十二月	一一四	一〇九½	一一一½	一〇七
大正六年 一月	一一二½	一〇八¼	一一〇	一〇五¾
同 二月	一一三	一〇九¾	一一〇½	一〇七¼
同 三月	一一一¼	一〇八¾	一〇八¾	一〇七
同 四月	一一二¾	一一〇½	一一〇¼	一〇八
同 五月	一一三	一一二	一一一	一〇九½
同 六月	一一八¾	一一三	一一六¾	一一一
同 七月	一二三¾	一一六¾	一二一¾	一二四¾
同 八月	一四三	一二二½	一四一	一二〇½
同 九月	一五四	一四一½	一五一	一三八½
同 十月	△一四一½	△一二二½	△一三八½	△一一九½
同 十一月	△一三九	△一二九	△一三六	△一二六
同 十二月	一四三	一三六	一四〇	一三三
大正七年 一月	一四四	一三七	一四一	一三四
同 二月	一三九	一三七	一三六	一三四
同 三月	一四四¼	一三九	一四二¼	一三六
同 四月	一四五	一四〇½	一四三	一三八½

大正七年五月	一四四円½	一四三円	一四二円½	一四一円
同　六月	一四八½	一四四	一四六	一四二
同　七月	—	—	—	—
同　八月	—	—	—	—
大正七年九月	一七一円	一五五円½	一六九円	一五三円½
同　十月	一六〇	一四五	一五八	一四三
同　十一月	一四八	一四〇½	一四六	一三八½

（備　考）開戰當初より三年十二月十一日に至る間及大正六年七月十二日以降は相場ノミナルなり。

第三款　聯合國に對する金融上の援助

開戰後本邦は聯合國に對して其の公債の引受應募又は買入、在外資金の運用投資、本邦外債其他借入金の償還等直接間接に財政金融上多大の援助を爲したり。以下之を各項に分ちて記述せんとす。

第一項　與國政府の公債引受

第一　英國に對する分

（一）英國圓國庫債券

大正五年十月頃我政府は英國に對する金融援助及本邦內地金融調節の一策として英國圓國庫債券引受の事に就き、日本銀行及正金銀行と協議を開きたり。本邦は當初五千萬圓を融通する意向なりしが、政府部內にて折角融通する上は壹億圓にては如何との說出で銀行團も之に同意せしを以て壹億圓引受と決定し、森財務官をして英國政府と交涉を遂げしめたり。幸に交涉容易に進捗し略〻意見の一致を見たれば、十一月二十六日に至りシンヂケート銀行の代表者十八名を日本銀行に招致し改めて條件其他に付て協議を重ね同日直ちに其の結果を倫敦財務官に打電し同二十九日倫敦に於て英國政府とシンヂケート銀行團代表者との間に引受契約成立したり。茲に於て我政府當局は十二月一日右契約成立せる旨の電報に接するや、同日發行條件竝に應募理由の發表を爲したり。

一、債券名稱　一九一六年英國政府圓國庫債券
一、發行總額　額面一億圓
一、債券種類　利札付無記名一千圓券、五千圓券、一萬圓券
一、債券日附　大正五年十二月十五日
一、債券期日　大正八年十二月十五日
一、利率　年六分
一、利子支拂期日　每年六月十五日及十二月十五日
一、初期利子　大正六年六月十五日拂利子、金百圓に付二圓六十五錢の割合
一、元利金支拂場所　橫濱正金銀行本邦各店
一、特典　英國政府は現在及將來の租稅を元利金より控除することなし
一、發行價格　額面百圓に付百圓の割
一、申込期日　十二月二日より同八日まで
一、申込金額　額面千圓以上
一、證據金　額面百圓に付二圓の割合
一、拂込期日及金額　額面百圓に付
　第一回拂込　大正五年十二月十五日　金三十圓の割合
　第二回拂込　同　六年一月十五日　金七十圓の割合
　證據金は第一回拂込金の一部に振換へ充當するものとす
一、割當方法　申込高發行總額を超過するときは其の割當は適宜之れを定む

一、申込場所　左記銀行本支店但し東京市、大阪市、横濱市、神戸市に限る

一、拂込延滯　第一回拂込期日に拂込をなさざるときは應募の申込を無效とし證據金は之れを返還せず、第二回拂込金を延滯したる者は拂込期日より拂込當日迄百圓に付日歩四錢の割合を以て利子を仕拂ふべく若し拂込期日後三十日以內に拂込を爲さざるときは應募の申込を無效とし第一回拂込金は之れを返還せず

一、引受銀行團

株式會社	第一銀行
同	三井銀行
同	第百銀行
同	日本興業銀行
朝鮮	銀行
株式會社	第三銀行
横濱	正金銀行
株式會社	三十四銀行
同	浪速銀行

右の外申込取扱店左の如し

小池合資會社	
合資會社	福島商會
竹原友三郎	商店
野村德七	商店
高木又次郎	商店
三菱合資會社	銀行部
株式會社	十五銀行
同	住友銀行
合名會社	鴻池銀行
合資會社	加島銀行
株式會社	臺灣銀行
同	安田銀行
同	近江銀行
山口	銀行
合資會社	紅葉屋商會
黒川幸七	商店
株式會社	藤本ビルブローカー銀行
同	增田ビルブローカー銀行
濱崎健吉	商店

尙ほ右債券の應募理由として十二月一日政府當局の公表せる所を見るに曰く『時局の影響を受けて我對外輸出貿易は旺盛となり、之に加ふるに貿易外の收入超過も少なからず正貨は益々增加し資金は益々潤澤となりて止まず、政府は出來得る限り正貨を買入れ之を倫敦又は紐育に於て保有し來れるも、政府の力にも自ら限りあるを以て爲替出合の付かざる殘餘の正貨は勢の自然として米國等より現送せられて流入するもの增加するに至れり。一方に於て英國其の他歐洲諸國が米國より購入する物品巨額に上り、其の結果英米爲替は大に下落せるを以て英國政府は英米爲替調節に大に力を注ぎ種々の方策を實行せるは人の知る所なり。此の時に當り英國は米貨蓄積增加の一手段として日本に於ける資金の餘裕を吸收し、之を米國に送るに於ては米國より日本へ正貨現送の勢を緩和し併せて英國の在米資金を增殖し英米爲替調節に貢獻する所少なからざるべく、又日本に取ては之に應ずるに於ては海外貿易の發展を助長し金融を調節し物價の昂騰を防ぎ正貨の蓄積となり好都合なるべく、共に兩國に取つて便益少なからざるなり。尤も政府は徒に市場緊縮を目的とするにあらず、穩健なる商工業發展に關する資金には不足なからしめ所謂市場遊金を吸收する趣旨にして、要は卷舒其宜しきを制せんとするに在り』と。

（二）英國磅貨大藏省證券

政府は英國の戰時財政援助竝に政府所有正貨利用の一方法として大正五年七月在紐育政府資金を以て英國大藏省證券を引受けたり。其の引受け條件左の如し。

一、引受總額　一千萬磅

一、利　　率　年六分

一、期　限　一箇年
一、第一回拂込は七月二十五日第二回は八月四日第三回は八月十六日
一、爲替關係は拂込及銷却共に英貨一磅に對し米貨四弗七十六仙半の協定相場を以てし支拂は原則として米貨弗を以てせらるべきも亦英貨磅にても之れを請取り得ること
一、日本政府が米國に於て公債利拂等正貨を要する場合は英國政府に於て之を引受け便宜を圖るべきこと

而して右大藏省證券は償還期限大正六年七月二十五日に至り利率を年五分に引下げ更に一箇年期限にて引受けたり。又大正七年八月二十五日更に一箇年間借換繼續せり。

(三)　英國圓貨大藏省證券

英國政府は英米爲替調節に資する目的を以て大正六年末更に一億圓を本邦市場に起債し、之を米國に回金せんとする希望ある旨交渉ありたり。帝國政府は聯合國の財政援助を爲すは喜ぶ所なるのみならず、我國に取りても對外の投資に依りて金融を調節し輸出爲替資金の疏通を得る便益あり且一面に於て我國は印度棉花買入資金の調達に就ては英國政府の援助を求めざるべからざるものあり。之に關して從來諸種の交渉を重ね來りしが此の機會に於て一億圓の或る部分は米貨と留比と交換せんとする我希望を提議したるに、英國は印度に於ける當時の事情に於て留比を交付することは非常の苦痛とする所にして頗る難色ありしも、交渉の末相互援助の精神に基き特に二百萬磅卽ち二千萬圓相當の留比を割愛することを承諾することとなれり。卽ち一億圓の內二千萬圓は我米貨と彼の留比と交換し殘額八千萬圓は大藏省預金部に於て引受け、代金は日本の手にて直に米國へ爲替送金することに協定成立せり。引受條件左の如し。

一、名　稱　英國圓貨大藏省證券
一、金　額　八千萬圓
一、利　率　年五分五厘割引發行
一、償還期限　一箇年卽ち本年一月二十一日發行『大正八年一月二十日滿期』

而して右證券は元來一般市場に於て之れを引受けしむるを以て機宜の處置なりとせしも、時恰も年末に際し而も還延を許さざる事情ありしを以て、一時大藏省預金部に於て之れを引受けしめ、一月三十日より日本銀行に於て之れが一般賣出を開始したり。其の要項左の如し。

一、賣出總額　八千萬圓
一、賣出價額　日步一錢六厘の割引勘定
一、證券日附　大正七年一月二十一日
一、償還場所　日本銀行本店
一、券面種類　千圓、五千圓、一萬圓、五萬圓、十萬圓
一、本證券交附　本證券は三月末に出來の筈なれば其迄賣出の分に對しては代金領收證を交付し本證券出來の際之れと引換ふ
一、申込期限　期限無し

第二　佛國に對する分

(一)　佛國圓貨大藏省證券

佛國政府は本邦に於ける軍需品購入代金の支拂に充當する爲め、日本に於て大藏省證券を發行する計畫を有し豫てより彼我兩國政府間に交渉中なりしが、愈〻大藏省預金部引受にて大正六年三月以降四回に分割發行することとせり。其の條件左の如し。

一、發行總額　二千六百二十四萬二千圓

第一回發行分　（三月）　四四七一、〇〇〇圓
第二回發行分　（五月）　四四二二、〇〇〇圓
第三回發行分　（八月）　八七一四、〇〇〇圓
第四回發行分　（十月）　八六三五、〇〇〇圓

一、期　限　分割發行なれば期限最長一箇年九箇月最短一箇年
一、利　率　年六分にて割引の方法に依る
一、償　還　發行は四回に分割され居るも償還は孰れも大正七年十月末全部取纏め償還さる
一、手數料　證券製造費及印稅其他實費として百分の一

而して大正七年十月三十日、本證券借換の爲め期限一箇年、年六分の割引の方法にて二千八百二十一萬八千圓の發行ありたり。

（二）第一次佛國國庫債券

佛國政府は我國にて購入せる軍需品其の他註文品代價支拂の便宜上圓貨公債發行の希望を以て我政府に交涉ありたるが、我國に於ても幸ひ資力に餘裕ある際なれば聯合與國に對し幾分にても財政上の援助を爲すを得るは大に滿足とする所にして、同時に對佛爲替及正貨蓄積上にも好都合の事なれば該交涉は圓滿に進捗し、大正六年六月十一日東西シンヂケート銀行團は協議の上愈〻之を引受くることと決定し、同月十四日同債券發行に就き左の如く其の條件を發表せり。

尙本公債發行交涉の際、佛國政府は一億圓起債の希望なりしも、當時金融市場の狀況一億圓の公債を消化すること困難なりしを以て、不取敢五千萬圓の起債に應じ殘額五千萬圓は後日適當の時期に於て改めて發行の相談に應ずる內約を爲せり。

一、債券名稱　一九一七年佛國政府圓國庫債券
一、發行總額　五千萬圓
一、債券種類　利札付無記名一千圓券、五千圓券、一萬圓券
一、債券日附　大正六年七月七日
一、償還期日　大正九年七月十五日
一、利　率　年六分
一、利子支拂期日　每年一月十五日及七月十五日
一、初期利子　百圓に付二圓八十四錢の割合にて大正七年一月十五日拂
一、元利金支拂場所　橫濱正金銀行
一、租稅との關係　佛國政府は現在及將來の租稅を元利金より控除せず
一、發行價格　百圓に付百圓の割合
一、申込期間　六月十五日より同月十九日迄
一、申込金額　額面千圓以上、證據金額面百圓に付四十圓第二回拂込八月十日六十圓（證據金は第一回拂込金の一部に振替充當するものとす）
一、拂込期日及金額　第一回拂込七月七日額面百圓に付二圓
拂込金の一部に振替充當するも申込高が發行總額を超過する時は其割當は適宜之を定む
一、割當方法　第一回拂込期日に拂込を爲さざる時は應募の申込を無效とし證據金は之れを返還せず第二回拂込金を延滯したるものは百圓に付日步四錢の割合を以て利子を支拂ふべし若し拂込期日後三十日以內に拂込を爲さざる時は應募の申込を無效とし第一回拂込金は之れを返還せず
一、拂込延滯
一、申込場所　左記引受銀行及取扱店の本支店但し東京市大阪市橫濱市神戶市に限る

第一三井三菱、十五、第百、興業、朝鮮臺灣、安田第三、日佛、正金三十四、浪速住友、鴻池、加島近江、山口（引受銀行團）、山一合資會社、紅葉屋商會、福島商會、竹原友三郎商店、野村德七商店、高木又次郎商店、黒川幸七商店、增田ビルブローカー銀行、濱崎商店

右公債の募集は上半季末に取扱ふも其の拂込は資金移動の繁忙なる半季末を避け、季末資金の大回收期たる七月に行ふことと爲したれば、各銀行資金豐潤なるときにもあり且利廻の上より云ふも佛債は六分以上に當り、當時社債類にして良好のもの少なからざりしも社債類は總額孰れも二三百萬圓乃至數百萬圓に過ぎずして、一般の投資に應ずるに足らず纏りたるものにして六分以上の利廻りのものは矢張佛債を需むるの外なく殊に日本銀行の見返品と認められたれば、銀行又は保險會社等に取り恰好の放資物とせられ此の方面の需要盛にて應募好況なりき。

(三)　第二次佛國圓國庫債券

曩に述べたる如く、大正六年六月第一次佛國圓國庫債券發行の際本邦は適當の時期に於て更に五千萬圓起債に應ずる旨內約を與ふる所ありしが、大正七年十一月此の內約に基き左の條件を以て第二次國庫債券を發行せり。

一、債券名稱　千九百十八年佛國政府圓國庫債券
一、發行總額　額面金五千萬圓
一、債券種類　利札付無記名一千圓券、五千圓券、一萬圓券
一、債券日附　大正七年十一月二十六日
一、償還期日　大正十年十一月二十五日
一、利率　年六分
一、利子支拂期日　每年五月二十五日及十一月二十五日
一、元利金支拂場所　橫濱正金銀行日本各店

佛國政府は現在及將來の租稅を元利金より控除する事なし

一、發行價格　額面金百圓に付金九十八圓の割合
一、申込期間　十一月十二日より同月十八日迄
一、申込金額　額面金一千圓以上
一、證據金　額面金百圓に付金二圓の割合
一、拂込期日及金額　十一月二十六日額面金百圓に付金九十八圓の割合（證據金は拂込金の一部に振替へ充當するものとす）
一、割當方法　申込高が發行總額を超過するときは其割當は適宜之を定む
一、拂込延滯　拂込期日に拂込を爲さざるときは應募の申込を無效とし證據金は之を返還せず
一、申込場所　左記銀行本支店但東京市、大阪市、神戶市に限る
一、引受銀行　第一三井三菱、十五第百、日本興業、朝鮮臺灣、安田第三、日佛、正金三十四、浪速住友、鴻池、加島、近江、山口

第三　露國に對する分

(一)　第一回露國大藏省證券

露國政府は本邦より購入する軍需品代金支拂に充當する爲め本邦に於て公債發行の意あり。我國も聯合國たる交誼上之に贊し我政府は大正四年八九月頃より露國政府に對し交涉する所ありしが、露國側の希望は金額は成る可く多く年限は成るべく永からしめんとし、我國は金額は五千萬圓以下期限も成るべく短期を欲するより彼我の主張する條件に相違あり交涉兎角澁滯せしが、大正五年二月三日愈々左記條件にて發行するに決し、二月八日より一般に賣出されたり。

一、證券名稱　露國政府大藏省證券
一、發行總額　五千萬圓
一、證券種類　五千圓券、一萬圓券
一、證券日附　大正五年二月十五日
一、償還期限　大正六年二月十五日
一、利　　率　年五分
一、發行價格　額面金百圓に付金九十五圓の割
一、申込期日　大正五年二月十二日迄
　但し都合により期日前と雖も締切ることあるべし
一、申込金額　額面金五千圓以上(金五千圓を單位とす)
一、證據金　額面金百圓に付二圓の割
一、拂込期日及金額　本年二月十五日額面金百圓に付金九十五圓の割(證據金は此拂込金に振替充當するものとす)
　但し期日拂込を爲さざるときは證據金は之を返還せず其領收證を無效とす
一、割當方法　申込高が發行總額を超過するときは適宜其割當を定む
一、申込場所　左記組合銀行本支店但東京市大阪市橫濱市に限る
一、元金償還取扱銀行　橫濱正金銀行東京支店
一、組合銀行　第一、三井、三菱、十五第百、日本興業、安田、第三、朝鮮、臺灣、橫濱正金、住友、鴻池、浪速、三十四、山口、近江、加島

募債の結果、左の如くシンヂケート銀行團にて背負込の狀態なりしが、之が原因は募債の時機遲れたると、內債募集、新株拂込增資計畫、社債募集、事業擴張あり、又滿洲、日支兩銀行設立の風說も傳はり一般前途資金需要增加を見越せると債券の單位は五千圓なれば百圓見當の單位に馴れたる一般投資家に不向なりし爲めなるが如し。右應募高の內譯竝に東西銀行の引受高內譯を記せば左の如し。

	銀行引受高	一般應募高	計
東京	二、九四一、二八〇〇圓	一、五八七、二〇〇圓	三一、〇〇〇、〇〇〇圓
大阪	一八、〇二七、二〇〇	九七二、八〇〇	一九、〇〇〇、〇〇〇
計	四七、四四〇、〇〇〇	二、五六〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇、〇〇〇

而して該拂込金は各取扱銀行より一々現金にて正金銀行に拂込まず、各銀行は正金銀行の預託を受けて其の儘預金勘定を持續し置き、一方正金銀行は右拂込金を拂込期日に於て露國に交付し露國は之を正金銀行に預け入ることとし、正金銀行は露國政府より必要に應じ右預金の引出の請求ありたるとき曩のシンジケート銀行に對する預け合勘定を拂込ましむることとせり。

(二)　第二回露國大藏省證券

露國第二次大藏省證券發行に關し露國大使より大正五年八月十二日正式の申込あり。銀行團にては直に其の條件に付協議し回答する所ありたるが、更に一應發行總額に付交涉ありたる結果、愈々八月三十日を以て露國大使と銀行團代表者たる橫濱正金銀行頭取との間に假契約調印成りたるに依り、銀行團にては九月二日、正金銀行東京支店に會合し右假契約案を承認したる上一般募集に關する細則を決定し、同月五日を以て左の通り九月十一日より一般賣出を爲す旨發表せり。

一、證券名稱　露國政府大藏省證券
一、發行總額　額面金七千萬圓
一、證券種類　一千圓券、五千圓券、一萬圓券(持參人拂)

一、證券日附　大正五年九月二十五日
一、償還期日　大正六年九月二十五日
一、利　　率　年六分
一、發行價格　額面金百圓に付九十四圓の割(即ち割引料年六分に當る)
一、申込期日　九月十一日より九月十五日迄
但都合に依り期日前と雖締切ることあるべし
一、申込金額　額面金一千圓以上(金一千圓を單位とす)
一、證據金　額面金一百圓に付金二圓の割
一、拂込期日及金額　本年九月二十五日額面金一百圓に付九十四圓の割(證據金は此拂込金に振替充當するものとす)
但期日拂込を爲さざるときは證據金は之を返還せず其領收書は無效とす
一、割當方法　申込高が發行總額を超過するときは適宜其割當を定む
一、申込場所　左記銀行本支店但東京市、大阪市、横濱市、神戸市に限る
一、元金償還取扱銀行　横濱正金銀行東京支店
一、組合銀行　第一銀行、三井銀行、三菱合資會社銀行部、十五銀行、第百銀行、日本興業銀行、朝鮮銀行、臺灣銀行、安田銀行、第三銀行、横濱正金銀行、三十四銀行、浪速銀行、住友銀行、鴻池銀行、加島銀行、近江銀行、山口銀行

第二次大藏省證券七千萬圓は時恰も金融緩慢なりしを以て豫約申込巨額にして申込期日たる九月十一日には午前十時を以て締切りたり。其の應募總額は引受銀行團及下受現物團の申込を加入せずして一億四千五百九十四萬千圓にて申込金額は一口二百萬圓を最高とし、三萬・五萬・十萬より二十萬圓乃至五十萬圓に至る申込多數を占めたり。其の募集方法は成るべく小口申込を募入する精神を以て左の如く割當つることとせり。

一、大口申込は按分比例にて募入すること
二、按分の結果一口十萬圓以上にして一萬圓以下の端數を生じたるときは端數を切捨つること
三、右端數の金額を以て千圓以上の小口申込に對し順次割當つること

而して拂込金は第一次發行の場合と同樣、正金銀行は露國より命令に應じ支拂ふ迄引受銀行に預金勸定とせり。

(三)　第三回露國大藏省證券(第一次發行分の借換)

露國は大正六年一月頃より第一次發行の大藏省證券借換の希望を以て交涉し來りたるが、我銀行團に於ても結局之に應ずるの止むなき次第なるを以て其の條件に付交涉中なりしが、一月二十七日横濱正金銀行宛に最後の回答あり。之れに基き十九日シンヂケート銀行協議の結果、左の條件にて一月三十一日より一般賣出を爲せり。

一、證券名稱　露國政府大藏省證券
一、發行總額面　金五千萬圓
一、證券の種類　無記名一千圓券、五千圓券、一萬圓券
一、證券日附　大正六年二月十日
一、償還期日　大正七年二月九日
一、利　　率　年六分
一、償還場所　横濱正金銀行東京支店
一、發行價格　額面百圓に付九十四圓の割合(即ち割引料年六分に當る)
一、申込期限　大正六年一月三十一日より二月五日迄

但し都合により期限内何時にても締切ることあるべし

一、申込金額　額面金一千圓以上

一、證據金　額面金百圓に付金二圓の割合但應募申込と同時に舊證券を提供する時は之れを要す

一、拂込期日及金額　大正六年二月十日額面金百圓につき金九十四圓の割合（證據金は此拂込金に振替へ充當するものとす）但期日拂込を爲さざる時は應募申込を無效とし證據金は之れを返還せず

一、舊證券乘換　左記銀行の引受發行せる大正五年二月十五日附露國政府大藏省證券を以て此證券の拂込に使用することを得

前記舊證券拂込の場合は二月十日に於て額面金額百圓を金百圓の割合にて受入るるものとす應募の申込と同時に前記舊證券を提供するときは證據金を要せず

一、割當方法　申込高が發行總額を超過するときは其割合は適宜之れを定む但前項の舊證券を以て拂込む應募申込は優先募入するものとす

一、申込場所　左記銀行本支店（但東京市、大阪市、橫濱市、神戸市に限る）

第一、三井、三菱、十五、第百、興業、朝鮮、臺灣、安田第三、正金、三十四、浪速、住友、鴻池、加島、近江、山口の各銀行

一、舊證券規定　尙舊證券に對し現金償還を受けんとするものは二月十五日其支拂を受くべし

右證券は賣出卽日締切るの好成績を博せしが其の應募申込總額は合計七千六百五十萬圓にして內舊證券を以てしたる乘替應募高四千三百餘萬圓、新規に現金を以て爲したる應募高三千二百餘萬圓なり。乃ち之が募入方法を決するに當り、乘換應募申込は優先募入權ありて全部募入すべきものなるが、現金應募申込高は僅々六百餘萬圓を募入するの止むなきこととなれり。卽ち現金募入高は現金申込高の一割八分九四に當り依て此の割當率を大體の標準として現金申込に對し、左の方法を以て割當募入したり。

一、五十萬圓以上の申込は右の率により募入し萬位以下を切捨てたり

一、十萬圓以上五十萬圓以下の申込は右の率にて募入し千圓以下を切捨てたり

一、千圓以上四千圓の申込に對しては最少額の一千圓を割當たり

一、五千圓以上十萬圓以下の申込に對しては其二割を募入し右の割當率を寬大に取扱ひたり

本證券は償還期日たる大正七年二月九日、政府にて內債を發行し、之に代用拂込を爲さしめたり。

(四)　露國大藏省證券（預金部引受の分）

露國政府に賣渡したる軍艦三隻の代金として露國は大藏省證券を發行し、我政府は預金部に於て之を引受たり。其の內容左の如し。

一、發行總額　千五百五十萬圓

一、發行日　大正五年四月十二日

一、期限　大正五年十月十三日

一、利率　年五分

一、手數料　年二分

(五)　露國大藏省證券（預金部引受の分）

前記大藏省證券千五百五十萬圓の借換の爲め更に左の條件を以て發行せり。

一、發行總額　千五百五十萬圓

一、發　行　日　大正五年十月
一、償還期日　大正六年六月十五日
一、利　率　年　六　分

而して該證券は金融調節の一手段として大正五年十一月二十日より日本銀行の手にて市場に賣出されたり。賣出は割引の方法にて日歩一錢六厘なりしが頗る好況を以て卽日賣切となりたり。

(六)　第四回露國大藏省證券發行

大正五年九月發行の露國大藏省證券七千萬圓の償還及軍需品代金及一般貿易品の決濟を圓滑にする爲め、露國政府は大正六年九月大藏省證券額面一億五百萬圓を發行し我政府は其の全部を引受けたり。其の內容左の如し。

一、發行日及發行額　（大正六年九月十一日　四千六百二十二萬九千圓
　　（同　同　二十日　五千八百七十七萬一千圓
一、償還期限　大正七年九月十九日
一、割引利率　一箇年百分の六
一、發行諸費として我大藏省の受領すべき金額
　　發行額の百分の一半

大藏省より露國政府に引渡すべき金額は九千七百五萬六千六百六圓四十一錢、其の內譯左の如し。

九月十一日發行の分
　四千二百六十九萬三千四百三十一圓四十一錢發行額より大正六年九月十一日以降の割引額及發行諸費を差引きたるもの
九月二十日發行の分
　五千四百三十六萬三千百七十五圓發行額より大正六年九月二十日以降の割引額及發行諸費を差引きたるもの

右引渡すべき金額は同時に募集したる臨時國庫證券の收入金を以てし、內四千二百六十九萬三千圓は臨時國庫證券應募金の代用として拂込を受けたる本年九月二十五日滿期の露國大藏省證券を額面計算にて之に充て、現金四百三十一圓四十一錢は併せて九月十一日發行の分に對し引渡し、九月二十日發行の分に對しては全部現金を以て引渡すこととせり。而して本證券は償還期限に到り相手方たる露國に正式の政府存在せず、交涉の途なき爲め其の儘となり居れり。

(七)　第五回露國大藏省證券

露國は軍艦代金として發行せし大藏省證券の再借換竝に軍需品及一般貿易品未決濟代金の支拂に充當する爲め、大藏省證券六千六百六十六萬七千圓を前回同樣割引の形式にて發行し我政府は之を引受くることに決し、大正六年十月八日彼我政府代表者の間に調印を了せり。而して其の引受條件左の如し。

一、引受總額　六千六百六十六萬七千圓
一、發行期日　大正六年十月八日
一、償還期日　大正七年十月七日
一、割引歩合　百分の六
一、發行諸費　百分の一

右の內千六百六十六萬七千圓は、昨年四月賣渡したる軍艦三隻代金調達の爲め發行せる露國大藏省證券（預金部引受）、大正六年十月十二日滿期となるものの借換に充當し、殘額五千萬圓は十月一日發行

したる臨時國庫證券五千萬圓の收入金を以て引受けたるものにして、軍需品未決濟代金の支拂に充當せらるべきものなり。而して右五千萬圓は割引料及發行諸費を差引き手取額四千六百五十萬圓にして、十月八日彼我の間之れが授受を了し、露國は同日之を正金銀行に預金と爲せり。而して本證券は償還期日に到り露國政府解體し交涉の方途なき爲め其の儘となり居れり。

第二項　本邦市場にて賣出されたる與國政府公債

時局以來本邦市場に於て賣出されたる與國政府公債左の如し。

第一　英國の分

英國國庫債券　大正五年十月セール、フレザー商會は千九百十六年十月發行の英國國庫債券を左の條件にて本邦市場に賣出せり。

一、利　　率　年六分
一、償還期限　大正九年二月十六日
一、利　　札　毎年二月及八月十六日倫敦にて支拂ふ第一回分利札は現金倫敦到著の日より計算し二月十五日迄年六分の割にて支拂ふ
一、賣出價格　額面英貨百磅に付九百四十三圓五十錢の割
一、申込締切期日　十月十三日
一、拂込期日　十月十四日
一、債券は本邦に取寄せ又は倫敦にて保管せしむることを得
一、英國諸稅金　現に英國に居住せざる債券所有者は諸稅を免ぜらる

正金銀行に於ても右と略同樣の條件にて賣出したるが、時恰も市場資金潤澤なる折柄なるに右に示す如く利率は年六分なるも爲替相場暴騰の際なれば假に戰後爲替相場舊態に復するものとせば爲替相場上の差益を得ることともなり、又債券を內地に取寄せず倫敦にて留め置く場合には輕少の料金にて同地一流銀行が保管方を取扱ひ且つ買入は勿論利札の取立も無手數料なるが故好個の放資物とせられ、賣出以來なかなかの好況にて其の賣却總額五百十七萬四千三百九十圓に上れり。

尙ほ此の外セール、フレザー商會日本興業銀行等に於て、大正五年十二月發行五分利付軍事公債を賣出したり。而して大正七年十一月十二日に於て該公債賣出現在高は三百八十四萬三千圓なり。

第二　佛國の分

(一)　第一回五分利付軍事公債

大正四年十月佛國政府は千九百十五年十一月發行の、五分利付國防公債の一部を本邦にて募集することとし、日佛銀行東京支店を取扱銀行とし、同店は橫濱、大阪、神戶、長崎にては正金銀行、京都、名古屋にては第一銀行支店、函館にては北海道拓殖銀行支店を申込取扱店として左の條件にて賣出せり。

一、本公債の性質　永久公債
一、利　　率　年五分
一、發行價格　額面百法に付八十七法二十五仙
一、拂込方法　申込と同時に全額拂込のこと
一、拂込額換算率　本公債拂込金に限り特別に邦貨一圓に付二法九十二仙半の割にて引受
一、利子仕拂期　毎年二月十六日、五月十六日、八月十六日、十一月十六日
一、利子仕拂場所　日佛銀行東京支店及追て指定すべき場所
一、特　　權　佛國政府の全ての租稅を免除せらる

一、償　還　本公債は永久公債なれども一九三一年一月一日以後は佛國政府に於て償還を爲すことを得

一、申込期間　本年十一月二十五日より十二月十五日

右公債は永久公債なりと雖も、相當期に於て政府が之れを償還又は借換すべきは明にして、又變調を呈し居る日佛爲替相場も常調に復すべく、卽ち平素の二法五十七八仙見當に回復するものとすれば頗る好利廻の放資物として一般に歡迎せられ、十五日締切の結果に依れば日佛銀行東京支店及各地取扱店に於て取扱ひたる應募申込總額は二百二十八萬九千法にして、應募地方別は東京百一萬八千法、橫濱八十三萬五千法、神戸二十四萬五千法、京城十一萬五千法、長崎三萬六千法、大阪三萬四千法、京都六千法の順位にして、申込者中內國人は總應募高の約三分の一見當にして他は本邦在留の外國人にして、大口の分は一口二十萬法乃至四十萬法のものありたり。

(二)　第二回五分利付軍事公債

大正五年十月佛國政府は千九百十六年九月發行の第二回五分利付軍事公債に就き日佛銀行東京支店を取扱店として本邦市場にて左の條件を以て賣出したり。

一、本公債の性質　永久公債

一、利　率　年五分

一、發行價格　百法に付八十八法七十五仙

一、拂込方法　申込と同時に全額拂込のこと

一、拂込換算率　本公債の拂込金額を一圓に付二法九十四仙の割に引受く

一、利子仕拂期　毎年二月、五月、八月、十一月

一、利子仕拂場所　日佛銀行東京支店及追て指定すべき場所

一、特　權　佛國政府の總ての租稅を免除せらる

一、償　還　本公債は永久公債なれども一九三一年一月以後佛國政府は償還を行ふことを得

本公債の利率は前回賣出の分と同樣五分にして發行價格は前回分より高けれども、拂込金換算率に於て前回よりも有利なり、且つ八月十六日より十一月十五日迄の利息を拂込と同時に支拂はるるが故に實際の拂込は八十七法五十仙となりて、結局前回賣出分に劣らざる好利廻に當り應募好成績を收むるならんと豫想され居りたるも時恰も年末金融を差控へ且つ內債拂込を終りたる矢先なりしを以て、應募不況にて總額僅に邦貨換算二十二萬四千七百六十九圓に過ぎざりき。

(三)　第三回四分利付軍事公債

日佛銀行は更に大正六年十一月第三回四分利付軍事公債の一部を左の條件にて本邦市場に賣出せり。

一、發行價格　六十八法六十仙

一、利　率　年四分

一、利拂期　三月、六月、九月、十二月

一、拂込の方法　申込と同時に全額拂込

一、拂込換算率　拂込金は特に一圓に付三法卽ち額面百法に付き二十二圓八十六錢强の換算率を適用す

一、募入方法　日本に於ける申込は全額確定募入さる

一、特　權　佛國政府租稅免除

一、償　　還　二十五年間は償還せず

一、申込銀行　日佛銀行東京支店横濱正金銀行本店及大阪・神戸・長崎支店

而して本公債應募總額は九十一萬八千法なり。

第三　露國の分

露國留公債　露國内地にて發行されたる留單位の公債を本邦に回送し下落せる留貨に對する一種の投機の意味にて賣出せるものあり、其の賣却高の幾何なるや正確に之を知る能はざるも、大正七年三月末に於ける賣出現在高左の如し。

露國政府短期軍事公債	第一回	九八六、〇〇〇留
	第二回	四、六九六、七〇〇留
	第三回	六、五九七、六五〇留
露國政府自由公債		二、八〇三、二〇〇留

而して右留貨公債は千九百十六年十月十四日發行五分五厘利付、千九百二十六年十月十四日償還のもの多く其の賣出人の主なるものは露亞銀行、セールフレーザー商會、鈴木辨藏、牧野映次郎等なり。

第三項　在外正貨の輿國公債に運用投資增加

時局以來政府竝に日本銀行が外國に於て保有する正貨を以て聯合輿國の公債及本邦外債を買入れ運用せる額は左の如く著しく增加せり。

大正三年十二月末	日本銀行の所有せるもの	
	英國大藏省證券	三、〇九七、四二〇磅
	英貨鐵道證券	三五〇、一四六磅
	佛國國庫債券	四、五九三、六六〇法
	政府の所有せるもの	
	英貨證券	二七、一二八、二〇九圓
	預金部運用英貨證券	二四、五九六、一二六圓
大正五年末	日本銀行の所有せるもの	
	米貨諸公債	四八三七、一三〇弗
	佛國大藏省證券	四八五八、九二〇法
	政府の所有せるもの	
	英貨證券	一〇二、六一六、〇六三圓
	預金部運用英貨證券	八四、七九七、四四一圓
大正六年末	日本銀行の所有せるもの	
	英國大藏省證券	二、九二八磅
	米貨諸公債	四、〇五〇、〇〇〇弗
	佛國大藏省證券	五、〇五七、九一〇法
	米貨英國大藏省證券	五、〇〇〇、〇〇〇弗
	政府の所有せるもの	

英貨諸證券	九一、二四六、〇七〇圓
預金部運用英貨諸證券	一四四、一六一、二五四圓
大正七年六月末	
日本銀行の所有せるもの	
米貨諸公債	四、〇五〇、〇〇〇弗
米貨英國大藏省證券	九、八六七、九三三弗
佛國大藏省證券	五、一〇八、四〇〇法
政府の所有せるもの	
英貨證券	一〇二、八七七、〇八九圓
預金部運用英貨證券	五九、七二〇、五四五圓。

第四項　政府外債市債社債借入金償還

戰前外國市場に於て發行したる國債市債社債竝に外國市場にて調達したる借入金にして、大正三年八月以降大正七年六月迄に償還したるもの左の如し。

(一)　政府の外債

第一回四分利付英貨公債	五〇、九二四、三八二圓
第二回四分利付英貨公債	四二四、六六、八九二圓
第三回四分利付英貨公債	二四八三圓
五分利付英貨公債	八七八圓
四分利付佛貨公債	三六七六圓
佛貨國庫債券	三六、七八三、九七九圓
英貨鐵道證券	三五、一六一、四八九圓
英貨鐵道債券	三、六六一、一二五圓
合　計	一六九、〇〇四、八〇四圓

(二)　市債償還

東京市事業公債	二、一六八、六七二圓
東京市電氣事業公債	一、九四七、三四八圓
大阪市築港公債	一〇三、九〇〇圓
橫濱市水道公債	二二九、六〇〇圓
橫濱瓦斯事業公債	五〇二、六〇〇圓
橫濱第二瓦斯事業公債	九一、一〇〇圓
橫濱英貨事業公債	三五五、〇一七圓
名古屋市公債	一二二、〇三七圓
合　計	五、五一九、七七四圓

(三)　社債借入金償還

大正三年八月より大正五年十二月まで

內　譯	
北海道拓殖銀行社債	五一四、六九一、〇〇〇圓
鐘淵紡績會社短期外資	七二二、七〇〇圓
川崎造船所外資	二〇〇、〇〇〇磅
浪速銀行外資	一〇〇、〇〇〇磅
	一〇〇、〇〇〇磅

朝鮮銀行外資		三五、〇〇〇磅
紅葉屋銀行外資		一〇〇、〇〇〇磅
三菱合資會社銀行部外資		六〇〇、〇〇〇磅
臺灣銀行外資		三五〇、〇〇〇磅
十五銀行外資		四〇〇、〇〇〇磅
日本興業銀行外資		一〇〇、〇〇〇磅
王子製紙會社外資		二〇〇、〇〇〇磅
富士瓦斯紡績會社外資		一〇〇、〇〇〇磅
東洋汽船會社外資		二〇〇、〇〇〇磅
東京電燈短期外資		五、〇〇〇、〇〇〇磅
東京瓦斯外資		二、七五〇、〇〇〇磅
北港製糖外資		一、二五〇、〇〇〇磅
橫濱船渠外資		一、〇〇〇、〇〇〇磅
北海道拓殖銀行外資		一、七〇五、〇〇〇磅
大正六年	社債償還	二〇〇、〇〇〇磅
	借入金償還	一三、四〇八、三八七磅
大正七年不明		六五、〇七七、四八七磅
合計		二三九、六〇二、〇六五磅
總計		

尙ほ此の他に時局以來內外證券の流入超過二千七百二十四萬三千圓あり。

第四款　對印貿易と印棉問題

我對印貿易は開戰前より既に甚しき逆差を示したるも、輸入の大部分は原料品にして、殊に其の八割以上は我主要工業たる紡績業の原料棉花に屬し、又米作の不足を訴ふる場合蘭貢米の供給を仰ぐもの尠からざりしに對し、輸出の方面に於ては特殊の利益關係を有する英國を初めとして、獨墺等の强敵を控へたるが爲め容易に市場の侵蝕を容さず、從つて此の不均衡を如何ともすること能はざりしなり。然るに歐洲の開戰は我商權の擴張に絶好の機會を與へたるを以て、從來敵國側より輸入せるものは勿論英國其の他の勢力範圍をも漸次侵犯して年一年と實績を擧げ、玆に於ては米、支に亞ぐ重要の華客として其の輸出額も亦總額の約一割五厘を占むるに至れり。斯くて對印貿易の地位は遽に昂り其の不均衡も亦大に匡正せられたるも、當時棉價の著しく騰貴せるが爲に逆差は尙ほ一億圓を下らざるを常とせり。或る一國に對して貿易上の逆調を示すが如きは平時に於て何等の痛痒を感ずるものにあらずと雖も偶々非常の場合に際したるが爲に爲替機能の缺陷に依りて之が決濟に關する問題を生じたり。大正五年十二月以後倫敦に於けるカウンシル、ビルの賣出制限は其の發端にして、是に依る對印爲替の缺陷は一時正貨の現送に依りて補足したるも、更に大正六年九月米國の金輸出禁止に依りて、本邦の倚賴せる唯一の金資源を封鎖せらるるに至り本問題の再燃を見たり。而して之が對策として先づ印度棉花の輸入を減少すべき米棉代用問題論議せられたるも容易に當業者の承認する所とならざりしが、更に南洋及香港方面に於ける印度宛輸出爲替の買付に著目し我對印輸出の奬勵其の他と相俟て圓滿に本問題を解決するに至り、其の後に於ても屢〻カウンシル、ビル

の賣出額を低減せられたるに拘はらず別段の支障を生ずることなくして經過することを得たり。

第一項　對印貿易

(一)　輸入貿易

開戰後の輸入貿易は大正四年に至る迄は却て遞減を示したるも、大正五年以後遞增の趨勢に轉じ大正六年分を開戰前の大正二年分に比すれば五千七十餘萬圓を增加するの結果となり、大正七年十月迄の成績に於ては前年同期に比して更に六千六百八十餘萬圓を增加せり。而して本貿易の大勢を定むる棉花及米に就て輸入の經過を表示すれば左の如し。

品別		大正二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年(十箇月)
棉花	數量	四、〇〇四千擔	四、一四二千擔	四、八九七千擔	五、一三三千擔	四、四九五千擔	二、七四四千擔
	價額	一四三、〇三九千円	一四五、四四八千円	一三九、七〇五千円	一六五、一八八千円	二〇四、三一一千円	一九八、一七四千円
米及粮	數量	三、四九八千擔	一、三四八千擔	一二二千擔	八千擔	一一千擔	三、四二九千擔
	價額	二〇、〇三〇千円	七、四六六千円	六四八千円	三九千円	六五千円	二七、七九二千円

其の他の輸入品中稍〻見るべきものは、銑鐵・黃麻製品・生護謨・パラフヰン・菜子及芥子・苧麻類・セルラック・皮革類等にして何れも開戰後輸入額を增加せるが、其の內年額五百萬圓以上に達したるは銑鐵のみにして、其の他は百萬圓以上二百萬圓內外を算するに過ぎず。

(二)　輸出貿易

輸出貿易は開戰當時多少の蹉跌を示したるも直に恢復し、其の後の發展は年を逐ふて愈〻顯著となれるが爲め、開戰前の大正二年に於ては未だ二千九百八十餘萬圓に過ぎざりしもの、大正六年に至りては一億百三十餘萬圓に增加し、更に大正七年十月迄の成績に見るも既に一億六千餘萬圓に上り、前年同期に比して八千七百十餘萬圓の增加を示せり。是れ從來印度が主として歐洲諸國の製品を輸入せる關係に依り開戰後之が代り品を本邦に求むるに至り、戰亂の彌久に從ひ益〻斯くの如き趨勢を助長せるが爲にして、品別に就て見るも絹製品・石炭等の減少を例外として概ね增加を示さざるはなく、殊に綿絲布類の如きは東阿向き經由のものと共に其の發展の最も顯著なるを認め、彼の綿布關稅引上に依る影響の如きも全く杞憂に終りたり。今輸出重要品に就て開戰前後の輸出額を比較表示すれば左の如し。

品別	大正二年	同六年	同七年(十箇月)	品別	大正二年	同六年	同七年(十箇月)
綿布	一、〇三一千円	一五、一七一千円	三九、九四八千円	木材	九八二千円	四、九四二千円	三、二五二千円
莫大小肌衣	四、七三四	五、六九八	二、八〇五	硝子及同製品	九九五	四、三五七	二、三五九
綿絲	九八七	四、一三二	二七、九一三	羽二重	六、八一二	三、九五五	四、四四二
紡績絹絲	一、五七三	一、九六五	—	紙類	一三七	二、二八七	三、二三八
憐寸	一、九七四	八、六九〇	七、三七八	麥酒	四	二、二二一	二、八〇九
銅	一、四一五	八、〇六二	二、六七八	琺瑯鐵器	二	二、〇二三	—
眞鍮及黃銅類	二六	三、五二八	—	樟腦	八三一	一、九五六	七五四

(三)　貿易差額

開戰前後の貿易差額は次表の如くにして、大正四・五年には輸出增加に依りて開戰前に比し四千萬圓近くの逆差を減少し、大正六年には更に輸出增加せるが爲に益逆差の減少すべきを豫想せられし

も事實は之に反して約千五百萬圓を增加せり。之れ棉價の騰貴に因るものにして、同七年に於ては更に約二千八百萬圓の蘭貢米を輸入せるに拘はらず、輸出の增加顯著なりしが爲に十月迄の逆差は約八千百萬圓にして前年同期に比して約二千萬圓を減少するの結果を示せり。

年次	輸出	輸入	輸入超過
大正二年	二九、八七三（千円）	一七三、一七四（千円）	一四三、三〇一（千円）
同三年	二六、〇四八	一六〇、三二四	一三四、二七六
同四年	四二、二〇二	一四七、五八五	一〇五、三八三
同五年	七一、六一七	一七九、四六五	一〇七、八四八
同六年	一〇一、三六四	二二三、九四一	一二二、五七七
同七年（十箇月）	一六四、五三三	二四六、〇九八	八一、五六五

第二項　印棉問題

第一　カウンシル、ビルの賣出制限と對應策

對印貿易の逆差は從來主として倫敦に於けるインデアン、カウンシル、ビル卽ち印度政府爲替を通じて決濟せられたるが、大正五年十二月二十日以後其の賣出額を制限せられたるが爲に右貿易差額を決濟すべき爲替機能に缺陷を生じ、延て印度棉花の買付に支障を來さんとせり。何が故に印度の輸出貿易を犧牲に供して迄、斯くの如き制限を加へたるか聊か當時の事情を記述すれば左の如し。

開戰後約一箇年は印度の輸出貿易不振を呈せるに依り政府爲替の賣行き澁滯したるも、右輸出市場の復興と共に政府爲替の需要は俄に增加し、倫敦に於ける印度事務省の所要額をも著しく超過し來りし爲め、印度に於ける通常國庫資金を以て之が支拂に應ずること能はざるに至れり。仍て政府爲替の賣却代金を倫敦に在置する印度紙幣準備中に繰入れ、印度に於ける同準備を以て政府爲替の支拂に充てたり。從て印度に於ける留比銀貨準備額は漸次遞減するの形勢となりたるを以て、銀塊を購入し又は金爲替本位中の銀準備と紙幣準備中の金準備との振替を爲して補充を圖り、一時は其の額を增加することを得たりしも、他方政府爲替の需要も亦更に增加し來れるのみならず、此の外に埃及、メソポタミヤ及東阿弗利加方面に於ける軍費支拂用として印度より留比銀貨を輸送するに至り、又英國政府の爲に印度に於ける軍需品代金其の他軍費の立替拂を爲すの關係にありたるを以て留比準備は再遞減するの形勢を示せり。殊に十一月に入りてより政府爲替の需要は急激に增加し一箇月の賣上高六百萬磅以上に達せるを以て、十二月七日現在の留比準備は一億七千七百八十萬留比（紙幣發行高七億八千十萬留比）に迄落込み、開戰後の最高四億百五十萬留比に比して二億二千三百七十萬留比を減少することとなれり。是を以て開戰後一億四千萬留比より三億八千萬留比に增額せる保證準備額を五億留比に擴張して其の急に應ずると同時に政府爲替の賣出を制限したるものにして、當事の事情に於ては之に對する銀塊を購入して留比準備の補充を圖ること困難なりしなり。

右賣出制限は每水曜日の定時賣出額五百萬留比を十二月二十日より八百萬留比に增加すると同時に其の他の仲間賣出を一切停止するの形式に於て實行せられ、十二月二十七日以後右の定時賣出額を千二百萬留比に增額せられたるも、或は各個の需要額を限定し、或は申込者を限定せるが爲に、本邦の利用し得べきものは一箇月三百萬圓に達せざりき。斯くて對印貿易差額の決濟に不足する部分を何等かの方法に依りて補充するにあらざれば、印度棉花の買付を繼續すること能はざるに至り

我當局及横濱正金銀行は頻りに右制限の緩和を交渉したるも、其の制限を加へたる事情前記の如くして印度の輸出貿易を賭して之を斷行せるの關係にありしを以て此の上の增額を望むこと能はずして止みたり。仍て日本銀行と横濱正金銀行とは出來得る限り爲替の手段に依りて貿易差額の決濟に努むるの外、上海に於ける所有銀の一部を現送し、是に依りて不足する部分は日本銀行より正貨を供給して現送することと爲せり。斯くの如くにして本邦より印度に現送せる正貨は大正六年一月より八月迄に約九千四百十萬圓を算したるが、此の當時に於ては我國に順調となれる對外貿易差額決濟の爲め米國より巨額の金を流入したるを以て、印度に對する現送の如きも差して苦痛とならず、又八月一日以後カウンシル、ビルの每週賣出額を九百萬留比に低減せられたるも是に依りて格別の問題を生ずるに至らざりき。

第二　米國の金輸出禁止と對應策

カウンシル、ビルの賣出制限に依りて起れる對印爲替決濟問題は前述の如く米國より流入する金の一部を印度に現送することに依りて全く解決せられたるも、更に大正六年九月米國の金輸出禁止に依りて本問題の再燃を見るに至れり。

米國に於ては是より前既に金の對外流出日に增加せると、之に依りて直接間接に敵國を利益せんことを顧念して金の流出に警戒を加へしが、其の後の形勢に於て具體的に禁令を布くの必要を認め先づ八月二十七日の布告に依り、敵國及歐洲中立國竝是等の殖民地等に對し八月三十日以降、金銀貨幣等の輸出を禁止し、更に九月七日の布告に依りて禁令の範圍を一切の外國に擴張し九月十日より實施したる、結果、我國の如きも特許を受くる場合の外之を輸入すること能はざるに至れり。是を以て本邦の倚賴せる唯一の金資源を封鎖せらるるの結果となり、從て對印爲替尻を金の現送に依りて決濟するには本邦に蓄藏せる正貨を減少せざるべからざるに至りたるも、戰期を豫定し難き當時に於ては之を許し難き事情ありたるを以て、玆に對外爲替決濟問題は非常なる難問題となれり。然るに其の根本に遡り印度よりの輸入大宗品たる棉花の使用を節減することを得ば、是に依りて對印爲替の決濟を容易ならしむるのみならず、其の節減せる部分を米棉に振替ることを得ば米國の金輸出禁止に依りて困難を感じたる對米爲替の決濟をも容易ならしむることとなり、卽ち一擧兩得の策たるなり。由來我紡績業は混棉に於て特殊の技能を有せるが爲に、原棉輸入の不利を補ひ、外國市場に於て產棉國の製品と對抗し、尙ほ且優勝的地步を占むるに至れるものにして、紡錘も亦之に相應する設備を有せること勿論なるも、當業者に於て多少の苦痛と不便とを忍ぶに於ては米棉の混入を或る程度迄增加することは敢て不可能にあらざりしが如し。是を以て日本銀行は政府の慫慂に依り紡績業聯合會代表者竝棉花商代表者を會集して或程度迄米棉を印度棉に代用するの件に就き懇談する所ありたり。然るに當業者の多くは技術上より之が代用を至難とせるのみならず、代用の結果自ら製品の價格を上騰せしむるを以て、當業者に於て是に依る多大の損失を負擔するか、或は又從來開拓せる外國市場を他國の爲に蠶食せらるる等の弊害を生じ、到底之を實行すべからざることを陳情せり。加之之に關する當時の世論は漸く沸騰し來り、或政黨の如きは或程度の金流出は之を忍ばざるべからずとの意見を發表し、遂に本問題は一個の政治問題と化し去るべき形勢をも示すに至れり。斯くの如くにして對印貿易差額の決濟は他の方法に依りて解決するを妥當とするに至り、當時の世論は或は印度に於ける募債或は上海銀塊の輸送等をも提唱したるが、前者は印度自身の募債情況に

願みて之に成功するの望なく、又後者に就きても上海は大正五年末より大正六年春に掛けて既に多額の銀塊を印度に吸收せられ、延て金融市場の逼迫を來せるが爲に此の上の現送を容さざりしを以て已むなく南洋及香港方面に於ける印度宛爲替の買取に著目したり。而して蘭領印度の如きは砂糖の輸出に依りて印度より一箇年七千萬圓以上の受取勘定を有し、又香港に於ても支那移民の本國送金及東洋方面に於ける貿易決濟關係の利用し得るべきものあり、旁〻是等の市場に於て相當の印度宛爲替を買取り得べき見込立ちたるを以て、橫濱正金銀行竝臺灣銀行をして專ら其の衝に當らしむることと爲し、臺灣銀行に對しては特に此の目的の爲めに日本銀行より資金を融通することとせり。又一方には船腹の配給に依りて印度に對する輸出貿易を奬勵し多少ともに貿易上の逆差を緩和せんことを期し、尙ほ是等の方法に依るも不足を生ずる場合は概ね內地の產金額を限度として金の現送を爲すの方針を採りたり。

右の結果、輸出貿易の增進に依りては豫期の效果を收むること能はざりしこと既記の如くなれども、印度宛爲替の買取りに於て順調に進捗せるが爲に、對印爲替決濟は大に圓滑となり、大正六年九月中二千二百六十八萬六千圓、同十月中六百五十萬圓の金を現送したるの外其れ以後に於ては復た斯くの如き要を見ざるに至れり。然るにカウンシル、ビルの賣出額は更に大正六年十一月二十一日より六百萬留比、同十二月十二日より四百萬留比に減額せられたるに恰も大正七年初英國政府米貨を得んが爲に本邦に對し一億圓の融通を要請し來れるに乘じ、我政府は印度棉花買入資金として其の內二千萬圓は之れに相當する留比貨と政府所有の在米正貨とを交換せんことを提議し、結局英國政府の承認を得たり。從て我對印爲替決濟に共れ丈け餘裕を生ずるに至り、更に大正七年の貿易關係に於て大に輸入超過の趨勢を緩和し來れるが爲め、是より以後對印爲替決濟は些の故障を生ぜずして順調に經過するを得たり。因にカウンシル、ビルの賣出額は大正七年一月十六日、六百萬留比に增額したる後更に九月三日より四百萬留比、同月十七日より三百萬留比に減額し、十月二十二日及同二十九日の如きは全然之が賣出を爲さざりき。

第四節　世界大戰後の對外金融

第一款　對外貿易の逆調

我が對外貿易の趨勢は大正九年下半季を一大轉換期として頹勢に向ひ、爾來輸出入共に振はず、殊に輸出の減退著しく、同年十一月以降十一年六月に至る二十箇月間の久しきに亙り每月入超を繼續し、漸く十一年下半季に至り出超を現出して稍〻頹勢を支持したるの觀ありしも、十二年に入り再び逆調に陷り上半季を通じて三億九千萬圓の入超を示せり。此の如く本邦貿易殊に輸出の狀況は九年下半季以降概ね萎縮不振の一途を辿り、隨て國內產業を不況に導きつつありしが、之が原因としては凡そ次の諸事情を擧ぐるを得べし。

（一）世界的財界不況の繼續に因り各國民の購買力が減退せること。

（二）爲替相場が世界的に不安定なりしこと、殊に本邦に對し爲替相場が多く輸入に便にして輸出に不利なりしこと。

（三）銀塊相場下落の爲め支那印度等銀本位國の購買力を減退せしめたること。

(四)　內地物價が海外諸國に比し依然高位を保ちたること。

(五)　戰時中本邦輸出品が粗製濫造の爲め信用を失墜し加之歐米品の出廻增加すると共に漸次販路を縮小せること。

(六)　支那南洋等に於ける本邦貨の排斥。

其の他商品價格の下落に基く貿易價格の減少等の原因を擧げ得べく就中前揭(一)及(四)の事情は貿易不振の最も有力なる素因を爲すものとす。

爰に留意すべきは兩三年來の輸入貿易の傾向にして其の品種が他日輸出の基礎となり、若くは生産の發達に寄與すべき原料及原料用製品に於て減少し、單に內地製品よりも廉價なるの故を以て輸入せらるる奢侈品に於て增加せること之れなり。

以下更に財界動搖後十二年上半季に至る各年間の對外貿易の實績に就き詳述せんに、先づ大正九年下半季は財界動搖の後を承けたる當季の我對外貿易は世界的不況の影響と相俟て振はざること甚しく、輸出入總額十五億二千萬圓は上半季に比し約十二億圓卽ち四割四分の減少を示したるが、殊に輸出の減退大なりしを以て、例年下半季に入り輸出旺盛となるを常態とするも、上半季の大入超に對して僅かに一千餘萬圓を挽回し得たるに過ぎず、結局全年を通じ三億八千萬圓てふ大入超に終れり。

更に之を品種別に上半季と比較するに輸出にありては生絲は七割減、絹織物は五割減(兩者合計三億五千萬圓減)にして輸出總價額減少の最大原因を爲せり。又輸入にありては原料品の減少著しく就中硫安(約九割減)油糟(四割六分減)棉花(約六割減)等從來輸入增嵩の主因たる貨物の激減したるを觀る、是れ國內財界の不況を反映するものと云ふべし。唯機械類のみ稍增加を示せるは好況時代の註文品が此の時に至り漸次著荷せるに依るものとす。

大正十年は內外の經濟事情益々不良なる爲め輸出入共に累月減退を示し、貿易の萎靡沈滯は當年に至り正に其の極に達したり。而して十月以後稍形勢改善の跡を認めたるも結局前年に比し左記の如き不勢の結果を示すに至れり。

種別	前年に比し減額	減少率
輸出	六九五、〇〇〇、〇〇〇圓	三五・七%
輸入	七二二、〇〇〇、〇〇〇	三〇・九
合計	一、四一七、〇〇〇、〇〇〇	三三・一
超過	二六、〇〇〇、〇〇〇	六・八

卽ち輸出減少率は輸入に比し一層甚しく、之を貿易月額に觀るに前年に比し大に減退し、輸出にありては一月より九月迄は三割六分(七月)乃至五割七分(二月)の激減なりしが、十月以後減少率は漸く低下し、輸入にありては一月より七月迄は二割九分乃至五割八分の減少を示したるが、八月以後多少其の傾向を緩和せり。而も全年各月を通じ輸入超過を以て終始したるが如きは從來類例なかりし所なり。如此貿易逆調の色彩は本年に入り益々濃厚の度を加へしが、之を輸出入各別に就きて見るに重要輸出品中前年に比し數量價額共に增加せるは獨り生絲あるのみにして、全輸出額の三分の一を占め輸出の運命を此の一商品に託するが如き觀あり、其の他の商品は總て輸出減退し就中支那向輸出品の大宗たる綿織物の一億三千萬餘圓減を初め、綿織絲・絹織物の減少等其の主なるものとす。又

輸入にありては木材・米・砂糖等に於て増加したるも棉花(二億八千三百萬圓減)・鐵(一億一千二百萬圓減)・羊毛(八千九百萬圓減)・油糟(五千六百萬圓減)等工業用原料及肥料に於て激減を來せり。是れ内國工業の不振と一般農作物價格の下落に職由するものに外ならず。

次ぎに大正十一年は前年中間景氣の際に於ける思惑輸入品は年初以來續々著荷し、且内地物價割高の關係より海外物資の輸入せらるるもの跡を絶たざる爲め輸入超過を繼續して、上半季末三億六千九百萬圓の入超を算したるが、下半季に入るや米國市場の回復に伴ふ生絲の輸出增加と内地商況不振に因る輸入の漸減と相俟て截然出超に轉じ貿易の傾向は戰前の常態に復したるの觀あり、結局年計に於て前年と比較し左記の成績を示したり。

種別	前年に比し増減(△)	同増減(△)率
輸出	△ 三八四、〇〇〇、〇〇〇円	三〇・七%
輸入	二七六、〇〇〇、〇〇〇	一七・一
合計	六六〇、〇〇〇、〇〇〇	二三・〇
入超	△ 一〇八、〇〇〇、〇〇〇	△ 三〇・〇

卽ち輸出の增加特に著しく入超は三割を減退し久しき間の貿易逆勢は漸く緩和の曙光を認めたるに似たり。而して之が原因は主として歐米經濟界の漸次復興すると共に取引高を增加したると生絲の對米輸出の增加せる爲めなりとす。尙ほ輸出入の品目に就て見るに輸入の增加は木材(四千百萬圓增)・米(三千二百萬圓)・羊毛・毛織物等を主とし、輸出の增加は綿絲布絹織物等の外全く米國に對する生絲輸出の激增(二億五千三百萬圓)に因るものにして、實に全年貿易總額增加高の三割八分に當れるなり。尙ほ爰に注目に値するは金額に於ては左程大ならざるも、前年來支那、米國等より日用品の輸入顯著となれる事實にして、從來我國の特産品とせし木炭を初め甚しきは紙製雨傘・木履・爪楊子等の類に至る迄海外より輸入を見るの珍現象を出せり。是れ我物價の高位を保てるに因ること勿論にして又當時物價調節論の喚起せられし所以なり。更に大正十二年に入るや、前年下半季以後漸次順調に向ひつつありし我對外貿易は本年に入り再び入超の出現を見たるも、之を前年同季に對比するときは成績必ずしも不良なりと云ふを得ず、加ふるに佛軍のルール占領を材料として内地商況稍〻反撥し、米國市場亦活氣を呈したれば、之が好影響を受けて輸出は大體に於て增加傾向を示し、輸入も前年同期に比し減少の傾にありたり。然るに米國財界一時の活況は程なく頓挫し且支那各地に於ける日貨排斥の運動漸次猛烈の度を加へ來りたれば、五月以來生絲及綿絲布の輸出著しく不振に陷り一方棉花相場昂騰の爲め前年來手控へられし買付の躍進及春時の一時的好景氣に乘じたる思惑買付の增加等に因り輸入を激增し、終に上半季間の貿易は輸入超過三億九千餘萬圓を算するに至れり。之を前年同期間と比較するに左の如し。

種別	前年同期に比し増減(△)	同増減(△)率
輸出	△ 二二二、〇五六、〇〇〇円	△ 三・〇%
輸入	二二七二、〇〇〇	〇・二
合計	△ 一九、七八四、〇〇〇	△ 一・〇
入超	二四、三二八、〇〇〇	六・五

卽ち輸出は減退し輸入は增加せるのみならず、貿易總額も減少し入超額は前年同期の金額を突破

せり。尙ほ上記入超增加の因て來る所を輸出入の品目に就て見るに前年同期間に比し輸出にありては綿織絲の二千百萬圓減、絹織物の七百萬圓減は輸出減退の主因を爲せるものにして、輸入にありては米・木材・鐵に於て減少せるも棉花（九千三百萬圓）・油糟（二千萬圓）・羊毛（一千九萬圓）等の激增に依り其の總額を增大せしめたり。

第二款　正貨總額の增減

上述の如く金の輸入は大正八年下半季以降同十年上半季に亙り頗る多額に上り其の額は大正八・九・十の三箇年に八億六千萬圓の入超を示せり（但此の中小額紙幣準備金の內地移替は正貨の總額には殆ど關係なし）。而して其の大部分は日本銀行の買入るる所となりたるを以て日本銀行所有內地正貨の增加著しく、次表に示す如く八年六月末內地正貨總額は四億二億二千萬圓に激增せり。之に反し在外正貨は九年春及十年十月以降十一年六月に亙る其の賣却に依り漸減して八年六月末の十二億四千萬圓より十年末には八億五千萬圓に減少したり。而して正貨總額に於ては十年一月末最高に達し二十一億八千三百萬圓を示したるが、爾來逐次減少するに至れり。卽ち次の如し。

正貨總額

年月	所有別 政府	日本銀行	總額	所在別 內地	海外
大正七年十二月末	八五四、五六八（千円）	七三三、一〇二（千円）	一、五八七、六七〇（千円）	四五二、六〇二（千円）	一、一三五、〇六八（千円）
大正八年六月末	九五五、五八九	七三〇、八三七	一、六八六、四二七	四四三、〇八〇	一、二四三、三四七
同　年十二月末	八九八、六九五	九九四、三五四	二、〇四五、一四八	七〇二、〇四八	一、三四三、〇九九
大正九年六月末	八八六、九八八	一、〇一三、七四二	一、九一二、四三八	七四九、六八七	一、一六二、七五〇
同　年十二月末	八五三、五九八	一、二九一、六三六	二、一七八、六二五	一、一一六、二九八	一、〇六二、三二六
大正十年六月末	七九〇、九〇八	一、三〇一、一三〇	二、一五四、七二九	一、二二〇八、一六三	九四六、五六六
同　年十二月末	六二六、四三八	一、二八九、五三六	二、〇八〇、四四四	一、二二五、三一九	八五五、一二五
大正十一年六月末	六六六、九五八	一、二四一、九五九	一、八六八、三九七	一、二二一、二七七	六四七、一二〇
同　年十二月末	六三九、四〇二	一、一六三、二三四	一、八三〇、一九二	一、二一四、七〇九	六一五、四八三
大正十二年六月末		一、一五四、〇四一	一、七九三、四四四	一、二〇四、〇九〇	五八九、三五四

尙ほ此の時代に於ける日本銀行正貨準備の大要に就き一言する所あらんに、同行兌換券發行準備は大正八年十月に決定したる方針に從ひ、在外正貨を漸次解除したれども、內地所在の同行所有正貨は激增したる結果、其の總額に於て漸增し八年六月に七億圓なりしもの九年六月には九億七千萬圓となり、十年末には十二億四千萬圓に激增せり。從て十年一月より同十月末迄は保證發行を見ざりし有樣なりき。而して十一年八月政府は物價調節策の一として在外正貨の準備充當額全部を解除することとなり八月三十日之を實行したり。

次で政府は更に通貨收縮の目的を達成する爲め、政府發行小額紙幣引換準備の在外正貨を內地に移すこととし、十一年九月二十九日在外準備全部を解除し、之が代りとして日本銀行內地保有の金を引出し準備に充當したり。其れが爲めに同日日本銀行の正貨準備は同額の減少を見たり。

此の如く八月末には兌換券の在外準備全部を解除し、今又小額紙幣在外準備の廢止を行ひ日本銀行內地保有正貨の減少を來せしを以て、此の二原因よりして同行正貨準備は十一年八月末以降遽か

に減少し、卽ち七月末の十二億二千萬圓より九月末の十億六千萬圓に下りたり。

兌換券發行高と之に對する正貨準備額次の如し。

年　月	兌換券發行高	正貨準備
大正七年十二月末	一、一四四、七三九、〇〇〇 円	七一二、九二五、〇〇〇 円
大正八年　六月末	一、〇八〇、三一四、〇〇〇	七〇五、三七二、〇〇〇
同　年十二月末	一、五五五、一〇〇、〇〇〇	九五一、九七六、〇〇〇
大正九年　六月末	一、三四九、〇六五、〇〇〇	九七九、三〇三、〇〇〇
同　年十二月末	一、四三九、二四〇、〇〇〇	一、二四六、六八八、〇〇〇
大正十年　六月末	一、二一八、八四三、〇〇〇	一、二一八、八四三、〇〇〇
同　年十二月末	一、五四六、五四五、〇〇〇	一、二四五、五七四、〇〇〇
大正十一年　六月末	一、三四四、五七八、〇〇〇	一、二二三、四二四、〇〇〇
同　年十二月末	一、五五八、四〇二、〇〇〇	一、〇六三、八八六、〇〇〇
大正十二年　六月末	一、三七一、二九三、〇〇〇	一、〇五三、二七九、〇〇〇

第三款　外國爲替の變動及銀の暴落

第一　外國爲替の變動

休戰以來各國は戰時狀態を脫却して平時の狀態に復歸する爲め種々なる管理、制限を撤廢するあり、又政治上經濟上幾多の大問題相踵で發生し經濟上の變遷亦著しきものありしを以て之が爲替市場に及ぼしたる影響尠からず。戰後各國爲替相場の根幹を爲す英米爲替の如き其の變動頗る頻繁にして隨て本邦の對歐爲替殊に對英爲替は多大の變動を見るに至れり。殊に九、十兩年に於ける我對外爲替の變動は頗る大且頻繁なりしを以て其れが我對外貿易上に及ぼしたる影響も亦看過し難きものありたり。

（一）　英米爲替

英米爲替は大正八年三月英國政府が戰時爲替調節政策を撤廢し自由放任政策を採るに及び、其れ迄久しく四弗七十五六仙前後を維持したりしものが、漸次低落を告げ遂に九年二月上旬には三弗二十三仙といふ空前の安値を示したり。依て英政府は對米貿易の復興を計ると共に輸入の制限を爲し又は英佛共同公債五億弗の現金償還聲明を爲して多額の金を米國に現送する等爲替相場の回復に努力したる結果、一時反撥して九年六月には三弗九十六七仙を唱ふるに至れり。然るに同年下半季に入りては如上の金現送も一段落を告げたると米國農產物の輸入期に入りたると又一方波瀾の形勢不穩炭坑夫同盟罷業等の諸問題に累せられ再び低落を重ね十一月上旬又も三弗三十三仙に下れり。後漸く英國財界の回復を好材料として漸次回復步調に轉じ、十年五月に入り一時四弗を突破せしが當時英國炭坑夫罷業、獨逸政界の不安定、愛蘭問題、華府會議等政治上經濟上の諸事件相踵で起り、剩へ獨逸賠償金問題は其の支拂方法に關聯して甚しく爲替市場を攪亂し、爲替投機又盛に行はれたるを以て、爾來相場一弗一張變動常なく延て國際貿易を阻害すること少からざりき。然れども十年以降大體に於ては回復步調を示し十年末四弗二十一仙となり、殊に十一年中は英國財政狀態益々改善せられし結果、爲替相場は逐次昂騰し年末四弗六十三四仙より七十仙の間を往來せり。

英米爲替（於紐育）月末相場

（電信賣）

月別	大正九年	同十年	同十一年	同十二年
一月	三、五一 1/16	弗 三、八五 1/16	弗 四、二七 1/16	弗 四、六四 9/16
二月	三、三九 3/4	三、八八 3/16	四、四三 3/4	四、七〇 5/16
三月	三、八八 3/4	三、九二 3/4	四、三七 3/4	四、六七 3/4
四月	三、八三	三、九七 3/16	四、四二 5/16	四、六三 15/16
五月	三、八七	三、八九 1/16	四、四五 1/16	四、六二 5/16
六月	三、九五 1/16	三、七三	四、四一 3/4	四、五八 1/16
七月	三、七二 1/2	三、五六 5/16	四、四四 5/16	四、五九 1/4
八月	三、五六 3/4	三、七二 3/4	四、四六 1/16	四、三六 3/16
九月	三、四七 1/16	三、七三 3/16	四、三七 1/4	四、六〇 1/16
十月	三、四四 3/4	三、九三 3/16	四、四五 5/16	四、六〇 1/4
十一月	三、四九	四、〇〇 3/16	四、五一 5/16	四、六二 1/16
十二月	三、五三 1/4	四、二一	四、六三 1/16	四、六三

（二）對英爲替

戰時中多額の輸出超過の結果、爲替銀行在外資金は益々堆積するのみなるに、内地の資金は全く枯渇して最早調達の途なきに至り、爲替相場は只昂騰の一途を辿り大正七年末頃二志二片15/16迄上進し世上の注意を喚起したるが、其の後英米爲替慘落の影響を受けて更に昂騰の趨勢を辿り八年末二志五片3/8より九年二月には二志八片3/4の高値をさへ現出したり。斯くて爲替銀行の警戒する所となり隨て爲替取組の圓滑を缺き我對英輸出貿易に尠からざる打撃を與へたり。爾來常に英米爲替の變動に追躡して上下せしが、九年十一月上旬英米爲替崩落に伴ひ二志十片3/8なる新高値に進めり。其の後は漸次に回復歩調を辿りしが、十年四五月以降獨逸賠償金問題を主因として英米爲替の混亂を見るや我對外爲替の變動甚しく爲替市場頗る不安を感じ、貿易業者銀行業者共に爲替取組上多大の警戒を加ふるに至れり。然れども大勢は英米爲替と其の軌を同うし十年を通じて大體低落の趨勢を採り十一年には大體安定模様ながらも逐次低下し十二年上半季中二志乃至二志一片臺を持續したり。

對英（倫敦）爲替月末相場

（電信賣）

月別	大正九年	同十年	同十一年	同十二年
一月	志 二、七 3/4 片	志 二、五 3/4 片	志 二、二 3/4 片	志 二、一 片
二月	二、七 5/8	二、五 1/4	二、一 1/8	二、〇 5/8
三月	二、三 1/2	二、五 1/2	二、一 5/16	二、〇 5/16
四月	二、五 1/2	二、五 1/4	二、一 5/16	二、一 5/16
五月	二、六	二、五 1/16	二、一 9/16	二、一 3/8
六月	二、六	二、六 1/4	二、一 5/16	二、一 5/8
七月	二、七 1/4	二、八 3/16	二、一 5/16	二、一 9/16
八月	二、九	二、七 1/4	二、一 5/16	二、一 7/8
九月	二、一〇 1/16	二、六 5/8	二、二 1/4	二、一 5/8
十月	二、一〇 1/16	二、五 5/8	二、一 5/16	二、二 3/16
十一月	二、一〇 3/16	二、四 3/4	二、一 5/8	二、二 9/16
十二月	二、八 3/8	二、三 3/4	二、一 3/8	二、二 3/8

(三)　對米爲替

米國に對しては戰時中多額の輸出超過となりし結果、爲替銀行は輸出爲替資金の調達に窮し、大正七年末には紐育向電信賣五十二弗八分の一まで上進するに至りたること前節に於て述べたる所の如し。然るに七年十一月休戰以來貿易金融の情勢一變して輸入超過となるや、貿易金融の狀態も一變し、對米爲替は漸次低落を告げ八年三月には五十一弗を割り同年十二月には更に四十九弗臺に下りしが、對米貿易の逆調其の勢を長ずるに從ひ低落を重ね九年三四月頃に至り四十七弗四分の三の新安値を現出したり。然るに其後は漸次回復し八月には五十弗⅝迄上騰を見たり。是れ當時內地財界反動の結果金融の梗塞極度に達し、輸入品の轉賣又は解約行はれ更に砂糖の如きは金融關係上特に輸出を試むるものさへありて、爲めに爲替銀行の手許は輸出手形の買持增加し、其の資金狀態に急激なる變化を生じたるを以て勢ひ爲替相場の引上を餘儀なくせられたる結果なるが如し。此の如く爲替相場の上騰は爲替銀行の一時的手許資金の事情より起りしものに過ぎざるを以て、爾來輸入超過の大勢に押され再び弱含みとなり九年末には四十八弗⅝に低落したり。次で十年中は大體四十八弗を維持したりしが連月沿々たる輸入超過により爲替相場漸次軟弱となり、十一年五月央には四十七弗½に下りたるが十一年下半季には生絲の輸出好況と棉花米穀等の輸入減少の爲め反騰し、十一年末四十八弗½を示し更に十二年四月には棉花輸入の一段落を告げたると、一方生絲の輸出ありて且外債成立及在外正貨の拂下等の事情あり遂に四十九弗となれり。

對米(紐育)爲替月末相場

(電信賣)

月別	大正九年	同十年	同十一年	同十二年
一月	四九⅝弗	四八弗	四八弗	四八½弗
二月	四八¾	四八	四八	四八½
三月	四七¾	四八	四八	四八½
四月	四八⅞	四八	四七½	四九
五月	四九⅝	四八	四七½	四九
六月	五〇	四七⅞	四七½	四九
七月	五〇½	四八	四七¾	四九
八月	五〇⅝	四八¼	四七¾	四九
九月	五〇⅝	四八	四八	四九
十月	五〇⅝	四八	四八¼	四九
十一月	五一¼	四八	四八¼	四九
十二月	四八¼	四八	四八	四八½

(四)　對佛、對獨爲替

對佛對獨爲替は何れも英米爲替變動の影響を受くべきは勿論なれども其の他政治經濟狀態に依り左右さるる所甚だ多く、殊に賠償問題解決困難に關聯せる兩國政情の不安と兩國經濟狀態惡化の影響にて兩國貨幣價値益々低落し、殊に馬克に至りては大正十一年秋季以降其の低落底止する所を知らず、十一年六月末相場百六十馬克より僅か一箇年後の十二年六月末には六萬七千馬克といふ殆ど形容に辭なき奔騰を告げたり。而して同國政治經濟上の不安は其の後尙ほ低落の趨勢全く計るべからざるの形態にありき。

對佛對獨爲替月末相場

（電信賣）

年	月	對佛	對獨
大正九年	一月	五、二九½（參著ノミナル相場）	二、〇五½（參著ノミナル相場）
大正九年	六月	四、七五	二六、五〇
大正十年	一月	六、五〇	三〇、五〇
同	六月	五、八九	八五、〇〇
大正十一年	一月	五、七二	一五〇、〇〇
同	六月	五、六〇	一〇、〇〇〇、〇〇
大正十二年	一月	七、七五	六七、〇〇〇、〇〇
同	六月	七、九〇	

第二　銀相場の暴落

銀相場は大正九年二月十日倫敦に於て八十九片½、紐育に於て一弗三十三仙½に暴騰したるが、其昂騰は銀産額減少の如き自然的原因なしとせざるも、多く戰時影響を蒙りたる一時的需要増加に加ふるに種々なる思惑買の旺盛謂はば人爲的原因に基く所頗る多かりしを以て、其の後遂に其勢を維持すること難く僅かに一箇月後には六十五片¾に激落し、六月には倫敦四十四片紐育八十仙迄崩落したり。然るに此の時に當り米國造幣局がピットマン條例に依る銀買上を行ひし等の事情より一時其の頽勢を支へたるも、八月下旬以來再び低落を重ね九年末には倫敦三十八片⅞紐育六十仙の安値を示せり。其の暴落原因として傳へらるる主なるものは、概ね(一)一般物價の低落に伴ひしこと(二)英國が印度金輸入制限の撤廢を爲せしが故に從來金輸入制限の爲め増加し居たる印度の銀需要が俄に減退するに至りしこと(三)支那等の貯藏銀を一時に賣出せしこと(四)歐洲方面銀貨鑄潰に依る銀

供給増(五)墨國の銀産額増加せしこと(六)思惑熱の冷却等之れなり。而して銀相場低落の趨勢は十年に入りても尚ほ革まらず(一)英米爲替の騰貴(二)歐洲大陸筋の思惑賣(三)支那印度の貿易不振等の悲觀材料に脅かされ引續き軟歩調を辿り三月には一時三十片臺に下れり。然るに十年秋季に至り市場漸く品薄なると印度支那方面に買氣起りたるに因り四十片臺まで回復せしが、爾來比較的安定を保ち十一年中概ね三十四、五片前後を唱へ十一年末頃より稍軟弱を示し十二年上半季中三十一、二片臺にあり。

銀塊月末相場

月別	大正九年 倫敦	大正九年 紐育	同十年 倫敦	同十年 紐育	同十一年 倫敦	同十一年 紐育	同十二年 倫敦	同十二年 紐育
一月	片 仙 ⅜	一、三⅞	片 仙 ⅛	六〇½	片 ½	六〇⅛	片 ⅜	五六¾
二月	四三⅛	一、三〇½	四三	五七½	四三¼	五六⅛	四三¾	五六¾
三月	四三⅝	一、二六½	四三⅛	五六	四三⅛	五六¼	四三⅜	五六⅞
四月	四四⅛	一、一三½	四四¾	五六	四三⅜	五六¼	四三¾	五六⅜
五月	四三⅝	九九⅝	四三¾	五五½	四三½	五五⅜	四三	五六⅜
六月	四三½	九一¼	四三½	五五	四三⅜	五五⅜	四三⅜	五六⅜
七月	四三⅝	九四¾	四三⅝	五二¾	四三⅛	五二¼	四三⅜	五二⅜
八月	四三¾	九四	四三	五二	四三⅛	五二	四三⅜	五二⅜
九月	四三⅝	九三½	四三⅛	五二	四三⅛	五二⅛	四三⅜	五二⅜
十月	四三⅝	九三½	四三⅛	五二	四三⅛	五二⅛	四三⅜	五二⅜
十一月	四三⅝	八一¼	四三⅛	五二	四三⅛	五二⅛	四三⅜	五二⅜
十二月	四三⅝	八三½	四三⅛	五二⅛	四三⅛	五二⅛	四三⅜	五二⅜

(一)　對支爲替

對支爲替は貿易の消長、支那國内の政爭、爲替思惑等に因り多少の變調は免かれざりしも、大體に於て倫敦及紐育の銀塊相場に順應して變動したり。九年一、二月の交には銀の暴騰により我上海向爲替は二十九兩乃至三十一兩に低落せしものが其の後銀の暴落に伴ひ急騰し、九年末六十一兩½を唱へ更に十年三月には八十一兩¾なる新高値を現はしたり。爾來銀相場の稍〻回復せるに連れ七十兩より六十兩臺に下り、十年下半季以降大體落著き十一年以降十二年上半季に至る迄は概ね六十兩臺を上下せり。

以上の如く銀相場の低落殊に大正九、十兩年に於ける崩落は其の變動の頗る激烈頻繁にして爲替市場の不安を來し、銀價購買力の減退と共に我對支輸出貿易に及ぼしたる影響頗る大なるものありき。

對支(上海)爲替月末相場

(參著貨)

年	月	大正九年	同 十年	同 十一年	同 十二年
	一月	二九圓	六九圓	六二圓½	六六圓½
	二月	三一	七四	六七¼	六四¾
	三月	三一	七三½	六四¼	六二¾
	四月	三六¾	七一¾	六一½	六四½
	五月	四二	七二	五八½	六五½
	六月	四七½	七一	五九¾	六八¼
	七月	四五	七〇	六一	六九½
	八月	四四	六九½	六〇¾	六九½
	九月	四七½	五八¾	六一¾	
	十月	五四	五九¼	六四¼	六九
	十一月	五二½	六二	六七¼	六五½
	十二月	六一½	六三¼	六七¾	六二

(二)　對印爲替

大正九年二月下旬より三月上旬に亙り印棉決濟資金梗塞、倫敦銀塊相場昂騰の影響を受け電信賣九十六七留比見當の空前の安値を示せしが、其後印棉輸入減退、銀塊暴落等に因り昂騰し六月には百四十留比の高値を現出したり。然るに下半季には尙ほ引續き昂騰し九年末頃には二百八留比の高値を示すに至れり。蓋し(一)印棉輸入の杜絶(二)對印輸出の增進(三)印度政廳の逆カウンシル、ビル發行中止の結果倫敦宛爲替相場の軟弱と爲りしこと等其の主要原因と認めらる。

十年初には一時稍〻相場回復したりしも印度の輸出不振及銀安に因り再び漸騰歩調となり、六月モンスーン經過不良の爲め急騰し遂に二百十留比を突破したり。其の後輸入減退、輸出增加及び銀高、年中百六十留比臺を持續し十二年上半季中百五十留比臺を保てり。年末百六十留比臺に下れり。爾來相場略ぼ安定し十一

對印(電信賣)爲替月末相場

月別	大正九年	同 十年	同 十一年	同 十二年
一月	一〇九留比	一七一留比	一六九留比¾	一五一留比
二月	九七	一九一	一六六½	一五二

	割引歩合	手形交換高	銀行引受手形	貿易手形	スタンプ手形	輸出金融	輸入金融
三月	日歩 1/2	九七					
四月		一〇五					
五月		一三〇					
六月		一四〇					
七月		一四五					
八月		一五一					
九月		一五五					
十月		一八一					
十一月		一八六					
十二月		一九三					

	割引歩合	手形交換高	銀行引受手形	貿易手形	スタンプ手形	輸出金融	輸入金融
三月	日歩 1/2	一八七					
四月		一八六 1/2					
五月		一八九					
六月		一九八					
七月		二一〇 1/2					
八月		一八九					
九月		七三 1/2					
十月		一七六					
十一月		一七九					
十二月		一六九					

	割引歩合	手形交換高	銀行引受手形	貿易手形	スタンプ手形	輸出金融	輸入金融
三月	日歩 1/2	一六九					
四月		一六九 3/4					
五月		一六三					
六月		一六五					
七月		一六四 3/4					
八月		一六五					
九月		一六八 3/4					
十月		一六四 3/4					
十一月		一六一					
十二月		一五六 1/2					

	割引歩合	手形交換高	銀行引受手形	貿易手形	スタンプ手形	輸出金融	輸入金融
三月	日歩 1/2	一五四					
四月		一五五 3/4					
五月		一五七 1/4					
六月		一五八 1/4					
七月		一五八 1/2					
八月		一六〇 1/2					
九月		—					
十月		一五四					
十一月		一五三					
十二月		一四八 3/4					

第四款　貿易金融の改善

最後に此の時代に於ける對外金融上特に注目すべきは、日本銀行に依りて行はれたる所謂銀行引受手形及銀行賣出スタンプ手形の創始にして、之れに依り當時に於ける貿易金融の逼迫は著しく緩和せらるることを得たるものとす。

第一　銀行引受及銀行賣出手形の創始

日本銀行は大正八年五月以來銀行引受貿易手形及スタンプ爲替手形の利用を勸奬し、廣く各方面に亙りて之れを宣傳し、且つ之れに對し種々の便宜を與へ、極力其の普及發達に努力したり。而して此の方法を必要としたる當面の理由は、當時に於ける市場金利の引締に在りたるものなりと雖も、之れが提唱の根本義とせる所は實に貿易金融の改善、通貨の收縮及割引市場の發達を期するてふ三點に在りたるものとす。卽ち(イ)輸入金融に對しては銀行引受貿易手形の制度を採り、輸出金融に對してはスタンプ手形の制度を以てすることに依り廣く貿易金融の改善を圖り、(ロ)戰時中多額なる輸出超過の結果或は金の流入となり、或は爲替銀行に對する日本銀行の輸出資金の貸出增大となり、爲めに兌換券は非常に膨脹せり。休戰後に於ては貿易入超に變じ從て日本銀行外國爲替貸付金は大正七年末の四億四千萬圓を最高として爾來漸次減少し來りしと雖も、當時多額の金流入あり其の爲め兌換券發行高は減少せざるのみか益々膨脹し世上此の通貨の膨脹と當時の物價騰貴とを結合して論難攻擊非常に盛となれり。玆に於て銀行引受手形及スタンプ手形の制度を創設し以て貿易金融の疏通を計ると同時に膨脹通貨を收縮する一方策たらしめたり。爲替銀行の引受手形及スタンプ手形の市場流通高は一時は二億圓にも達したるが、是れ日本銀行の外國爲替貸付金を民間に肩替りせしめたるものにして卽ち通貨收縮の實を示すべきものとせり。(ハ)當時に於ける本邦割引市場は其の發達尙ほ幼稚にして僅に一部のビルブローカーが手形割引の仲立を爲すの程度に止まり銀行の準備金或は遊資を放出する場合には多くは其の得意先の範圍に限られ、又は爲替銀行に對するコールローンに過ぎざるの有樣なりしを以て日本の銀行の市場に對する關係は倫敦又は紐育の銀行が市場に對する如く直接にして且密接にあらず、隨て銀行と中央銀行の關係又中央銀行と市場との關係は英、米に比すれば稍薄きの感ありたり。玆に割引市場を發達せしむるときは普通銀行と市場と又中央銀行と市場とは直接の關係を生ずることとなるべし。而して此の割引市場の發達上最も攻究を要するものは卽ち此の銀行引受手形制度なり。仍て日本銀行は該制度を普及せしめて市場

に多量の優良手形、換言すれば市場發達の必須要件とも稱すべき標準手形を供給して以て大に割引市場の發達に資せんとせるものなり。

第二　銀行引受貿易手形

戰時中著しく擴大したる外國貿易を維持し、尙ほ進んで之を一層發展せしめんが爲には當業者間に不斷の努力を必要とすべきは勿論なりと雖も、一方金融業者に於ても外國貿易に對する金融の改善を圖り以て貿易の維持發展に資すべきは最も緊要の施設と認めたり。然らば外國貿易金融上如何なる點に就き改善を要するやと云ふに、由來我國に於ける貿易資金の調達及配給に付ては爲替銀行專ら其の衝に當り、一般銀行の之に干與すること尠かりしを以て、戰時中著しく膨脹したる貿易資金の調達に就ては爲替銀行及當業者等の間に於て尠からざる不便を感じ種々苦心を重ね來りし所なり。元來爲替銀行の資金は日本銀行の借入金を以て主たる源泉と爲し、之を補ふ爲めに市中銀行よりコールの吸收を爲すもコールは其の性質上爲替資金の如く相當永き期間の資金に充用する能はざるの事情あり、隨てコールを爲替に放資するは大抵金額に限度ありて巨額に上り得ざるものなり。何此從來貿易金融の疏通上甚だ遺憾の點多く此等の點は最も貿易金融上改善を要すべき點なりと思考されたり。故に今後我貿易の發展維持上其の金融を一層圓滑ならしめんが爲めには

（一）對外貿易上の決濟は出來得る限り自國の資金を利用し、成るべく外國の資力に倚賴せざること。

（二）對外貿易に要する資金は出來得る限り市場の資金を利用し、成るべく政府又は中央銀行の助力を乞はざること。

を以て其の要諦とし、爲替銀行の外一般銀行に於ても外國貿易と密接の關係を保ち、貿易上の金融に相當の力を用ゐること甚だ緊要なり。然れども爲替相場は變動甚だしきを以て一般銀行が爲替銀行同樣直接に外國爲替の業務に從事することは妥當ならざる事柄なれば、其の方法としては銀行引受手形の制を採用し、一般銀行中相當信用ある向が其の平素取引關係ある貿易業者の爲めに、其の貨物の輸出入に基きて作成したる手形の引受を爲すこととせば、十分貿易金融の圓滑を圖ることを得べしと信じたるを以て日本銀行は大正八年五月以來金融業者、貿易業者を初め各方面に亙り極力該制度の利用を勸奬し、其の普及發達に努力したり。

然らば銀行引受貿易手形は實際上如何にして發生するや以下に其の徑路を略述すべし。

（一）輸入の場合　　內地輸入商は其の取引銀行に信用狀の發行を求め、之を外國の輸出商に送附し、外國輸出商は之に基き當該銀行宛に手形を振出し其の手形の引受を爲さしむ。

（二）輸出の場合　　輸出の場合に於ける銀行引受手形の利用は輸出貨物仕向地の金利が內地の金利より高率なるか、又は仕向地に於ける割引市場不備にして其の地の資金を利用すること能はざるかのときに限られ、輸入の場合の如く之を利用し得る機會多からずと雖も、輸出貨物の仕向地へ到達すべき日數と手形郵送に要する日數との差を見込み、其の間に於て能く利用すれば爲替資金疏通上便益少なからざるなり。今日本の現狀よりして最も實行し易き方法として普通行はるる所を述ぶれば左の如し。

輸出商が外國に支店を有する內地の爲替銀行と豫め手形引受に關する約束を結び置き、貨物の輸出と同時に爲替銀行宛に自己を受取人とせる爲替手形を振出し、船積書類と共に之を爲替銀行に持

參し船積書類を引渡したる上引受を求め、而して該手形を直に他の市中銀行又はビルブローカー等に賣却して必要の資金を得、手形期日に際しては輸出商は別に從來の通り爲替手形を振出し其の爲替銀行に就きて之を荷爲替とし、其の代り金を以て前の手形債務の償還に充つるものなり。

轉じて我國に於ける手形引受制度の發達と手形市場流通狀況とを見るに、抑〻本邦に於ける手形引受制度なるものは大戰前までは對外取引に於てすら未だ一般的に行はれず、ましてや國內取引に於ては勿論內地取引に於てすら未だ一般的に行はれず、開戰後對外貿易の殷盛、內地取引の隆昌に伴へる金融市場の發達、手形の增加は引受制度の發達に好個の刺戟となりたるも尙一般に同制度に對する觀念の乏しかりしが爲め、漸次普及の傾向にありし貿易手形の引受も尙ほ正金銀行、臺灣銀行等の爲替銀行が自行の得意先の爲めに之を爲すに止まるの狀態なりき。然るに一度日本銀行に於て貿易手形引受制度の必要を宣傳し且同行が此の種手形に對し優遇方法を講ずるや一般金融業者も大に此の擧に共鳴し、爲替銀行は該制度奬勵上相當の犧牲を拂ひクレヂット、ビルのレートとドキュメンタリー、ビルのレートとの間に少くとも年利一分の開きを保たしめ貿易業者をして年一分位の引受手數料を引受銀行に支拂ふも結局有利の計算とならしめたる如き、又其の他一般銀行も成るべく小額の引受手數料に甘んじたるが如き該制度の發達普及の爲め一致協力せしを以て爾來長足の進歩を遂げたり。只輸出貿易の場合には日本の現狀よりして其の利用範圍狹少にして廣く利用するに至らざりしが輸入手形の引受は逐日顯著なる發展を遂げ該制度の採用せられてより僅々數箇月にして各銀行の輸入手形引受の約諾は著しく增加するの有樣となれり。

第三　スタンプ手形

輸入貿易決濟上銀行引受手形の利用は其後相當の程度まで普及するに至るものと觀測せられるも、輸出貿易に基く銀行引受手形は當時の狀態よりすれば何分利用せらるべき範圍狹隘にして、輸入の場合の如き發達を期し難きものありたり。依て此の儘之を放置せんか爲替銀行は歐米各國に於けるが如く輸出爲替の資金を內地市場より直接且つ自由に調達すること能はざるべきを以て、日本銀行は種々攻究を重ねたる結果先づ橫濱正金銀行と協議の上其の買持に係る倫敦及紐育拂の輸出手形を擔保として預り置き、同行をして其の輸出手形の邦貨換算額の範圍內に於て自己を支拂人とせる適宜金額の爲替手形を振出し、隨時之を市場に賣却して所要資金を調達せしむることとし、日本銀行は右賣出手形の流通に便宜を與ふる爲めに其の手形面に一定のスタンプを押捺し、該手形を買取りたる日本銀行取引先銀行に於て資金必要の場合は同行之が再割引に應ずることとせり。

第四　銀行引受金融手形

戰時中擴大したる我國の產業を維持し、又は之が整理を爲すに必要なる資金の調達を圓滑ならしむることは、貿易金融の改善と相俟ち戰後の金融施設としても亦甚だ緊要なりと認められたり。日本銀行は其の方法として銀行引受手形中相當確實なる基礎を有する事業會社等に於て、資金の融通を受くる目的を以て作成したる所謂金融手形の割引を爲すの便法を設けたり。凡そ金融手形は商業手形と其の性質を異にすれども、事業界と金融界との連絡を圖る一方法として我國情と時局の進展とに鑑み臨機の措置と思考し之を實行したるなり。又此の種引受手形の買入を爲す銀行業者の側より見るも其の結果は自ら直接に貿易業者又は事業家に對して資金の融通を爲す場合に比し、其の放資を確實に且流動的ならしむると同時に、經濟界に於ける多方面の事情に通ずるの機會を多か

らしむる利益あるものと謂ふべし。

第五　兩種手形の金融市場に及ぼしたる影響

銀行引受手形及スタンプ手形は爲替銀行の資金吸收を容易ならしめ、其の金繰りを圓滑にし資金の回轉を迅速ならしめ以て爲替取組を自由にし、隨て一般貿易業者に對しても手形の買入相場を有利ならしむる等貿易金融上效果ありしは勿論なるが、一般金融界より之を觀るも次の如き效果を齎らしめたり。

（一）市場に好放資物を提供したること　　銀行引受手形及スタンプ手形は最優良手形にして、殊に何時にても日本銀行にて其の最低歩合を以て再割引を受け得るを以て資金化するに最も便なれば、市中銀行の資金運用物として又預金準備として好都合なるが故に市場に歡迎せられ、利子も亦一般に商業手形に比し遙に低歩を示したるが、殊に大正九年春財界反動以來は銀行の貸出警戒と共に唯一の好放資物として殆んど奪合ひの狀態を呈したり。

（二）圓手形の流通を促進せんこと　　貿易上に使用せらるる手形を漸次圓建に導きたり。貿易業者は之に依りて爲替相場變動に基く危險を免るるに至り又轉輾し易き優良手形を市場に供給することとなれり。

（三）市場に一種の標準歩合を作り又一般金利を低下傾向に導きしこと　　市場流通高は曩に述べたる如く一時多額に上り市場に標準手形を與へ、隨て標準歩合を形成するに至り割引市場發達の重大なる原因を爲したり。而して斯くの如き優良手形の流通は大體に於て日本の金利を引下げる結果に導けるものと謂ふべし。

以上の如く銀行引受手形及スタンプ手形の流通は金融市場に甚大なる好影響を齎らしたるが、偶〻大正九年三月財界の反動に際會し一般財界の警戒信用取引の收縮となりしに加へ、貿易の不振は爲替資金の需要を減退したる爲め自然其の流通高は激減を見るに至れり。

第四章附表

第一表　累年輸出入貨物類別價額表（百分比例）

年次	輸出 食料品	輸出 原料品	輸出 原料用製品	輸出 全製品	輸出 雜品	輸出 計	輸入 食料品	輸入 原料品	輸入 原料用製品	輸入 全製品	輸入 雜品	輸入 計
明治二六	二〇・四九	一〇・四五	四〇・七七	二四・五二	三・七七	一〇〇・〇〇	二三・一六	二一・五五	一九・六七	三三・一二	二・五一	一〇〇・〇〇
同二七	一六・八六	一〇・〇八	四三・八二	二五・六四	三・六〇	一〇〇・〇〇	二三・五八	一九・九八	一八・七三	三五・五三	二・二〇	一〇〇・〇〇
同二八	一六・一四	八・八四	四三・六四	二八・〇〇	三・三八	一〇〇・〇〇	一七・一〇	二三・四九	一九・九六	三五・五八	三・八七	一〇〇・〇〇
同二九	一七・四三	一一・七〇	三七・五〇	二九・八三	三・五五	一〇〇・〇〇	一五・八九	二四・一四	二〇・六〇	三七・八〇	一・五七	一〇〇・〇〇
同三〇	一二・八九	一〇・三五	五〇・八四	二三・〇三	二・八九	一〇〇・〇〇	二四・三八	二四・四三	一六・六一	三三・四四	一・一五	一〇〇・〇〇
同三一	一二・六四	一二・三七	四五・九一	二五・八八	三・二〇	一〇〇・〇〇	三四・九七	二〇・六八	一五・一七	二八・〇五	一・一三	一〇〇・〇〇
同三二	一二・六五	一〇・三四	五一・四八	二三・三〇	二・二三	一〇〇・〇〇	一九・九七	三七・〇二	一六・三八	二五・一四	一・五〇	一〇〇・〇〇
同三三	一一・一一	一三・六二	四三・八一	二七・八二	三・六四	一〇〇・〇〇	一八・一三	二八・〇四	二〇・二一	三二・一三	一・五〇	一〇〇・〇〇
同三四	一一・八四	九・九二	四八・三三	二七・三〇	二・六一	一〇〇・〇〇	二三・四一	三二・五四	一五・三九	二七・二五	一・四一	一〇〇・〇〇
同三五	一二・〇四	一〇・二〇	四六・五七	二九・〇三	二・一七	一〇〇・〇〇	一八・一〇	三八・六一	一四・四九	二七・三六	一・四四	一〇〇・〇〇
同三六	一一・九四	一〇・五三	四七・二四	二七・九二	二・三七	一〇〇・〇〇	三二・六五	三〇・八七	一三・五八	二一・四八	一・四二	一〇〇・〇〇
同三七	一一・七〇	八・〇三	四六・八〇	三一・一四	二・三三	一〇〇・〇〇	三〇・二三	三一・〇七	一三・六三	二三・六九	一・三九	一〇〇・〇〇
同三八	一三・四三	八・五五	四二・二五	三二・〇四	三・七三	一〇〇・〇〇	一九・八七	三二・七三	一八・九四	二六・八二	一・六四	一〇〇・〇〇
同三九	一二・〇一	八・〇五	四四・二五	三一・七七	三・九二	一〇〇・〇〇	一八・九四	三二・三三	一八・四一	二八・四五	一・八七	一〇〇・〇〇
同四〇	一〇・三四	一〇・一〇	四六・〇〇	三二・九〇	〇・六六	一〇〇・〇〇	一五・九一	三七・九六	一八・八一	二六・八九	〇・四三	一〇〇・〇〇
同四一	一〇・八三	一〇・九二	四五・〇五	三二・〇八	一・一三	一〇〇・〇〇	一五・六五	三五・一七	一九・二六	二九・二四	〇・七八	一〇〇・〇〇

第二表　累年內地・朝鮮及臺灣貨物輸出入價額表

年次	輸出 食料品	輸出 原料品	輸出 原料用製品	輸出 全製品	輸出 雜品	輸出 計	輸入 食料品	輸入 原料品	輸入 原料用製品	輸入 全製品	輸入 雜品	輸入 計
明治四二	一一・七四	八・九三	四八・六三	二九・六七	一・〇三	一〇〇・〇〇	一三・〇四	四二・九二	一八・二〇	二五・二三	〇・六一	一〇〇・〇〇
同四三	一一・二三	八・七七	四九・〇九	二九・九六	〇・九五	一〇〇・〇〇	九・六九	四九・八三	一七・八五	二二・〇八	〇・五五	一〇〇・〇〇
同四四	一一・六四	八・九五	四七・六〇	三〇・六八	一・一三	一〇〇・〇〇	一〇・〇五	四五・一〇	一九・五四	二四・五九	〇・七二	一〇〇・〇〇
大正元	一〇・四四	八・四四	五〇・二九	二九・五五	一・二八	一〇〇・〇〇	一一・六四	四八・三六	一九・八四	一九・五八	〇・五八	一〇〇・〇〇
同二	九・八三	八・一三	五一・八七	二九・二三	〇・九六	一〇〇・〇〇	一六・五三	四八・四七	一七・四〇	一七・〇〇	〇・六〇	一〇〇・〇〇
同三	一〇・七五	七・六九	五一・八三	二八・四〇	一・三三	一〇〇・〇〇	一三・二三	五五・一八	一六・一五	一四・六五	〇・八〇	一〇〇・〇〇
同四	一一・三一	六・四一	四五・六六	三四・二九	二・三三	一〇〇・〇〇	七・一六	六三・八三	一八・四八	九・六六	〇・八七	一〇〇・〇〇
同五	九・二七	五・二三	四七・九八	三三・七七	三・七五	一〇〇・〇〇	四・一六	五七・一〇	二六・六五	一一・二四	〇・八六	一〇〇・〇〇
同六	一〇・七四	五・〇八	四五・二六	三六・六九	二・二三	一〇〇・〇〇	三・五六	五四・五一	三一・一四	一〇・〇一	〇・七八	一〇〇・〇〇
同七	一〇・七四	五・一九	三八・三八	四三・五〇	一・九九	一〇〇・〇〇	一〇・五三	五一・二六	二七・四三	一〇・一五	〇・六三	一〇〇・〇〇
同八	七・一四	五・二五	四三・一三	四二・九五	一・五三	一〇〇・〇〇	一六・一六	五〇・三三	二〇・七七	一三・〇三	〇・七三	一〇〇・〇〇
同九	七・三〇	七・一九	三四・八三	四九・四三	一・二六	一〇〇・〇〇	九・五三	五三・九四	二一・七九	一四・〇六	〇・六八	一〇〇・〇〇
同一〇	六・三六	六・三四	四三・九六	四一・八四	一・五〇	一〇〇・〇〇	一三・九〇	四六・八九	二〇・〇七	一九・二九	〇・八二	一〇〇・〇〇
同一一	六・三九	五・一七	五一・四五	三五・五四	一・四五	一〇〇・〇〇	一五・三五	四三・八〇	二〇・六六	一九・三三	〇・八五	一〇〇・〇〇
同一二	六・二九	五・六〇	四八・四〇	三八・五三	一・一八	一〇〇・〇〇	一三・六九	五〇・三三	一八・一〇	一八・〇七	〇・八三	一〇〇・〇〇
同一三	六・二六	五・八〇	四七・七一	三九・〇四	一・一八	一〇〇・〇〇	一四・一九	四七・五五	一八・四三	一九・二三	〇・六〇	一〇〇・〇〇
同一四	六・三九	七・〇七	四七・二七	三八・一〇	一・一七	一〇〇・〇〇	一五・二四	五八・〇二	一三・七七	一三・五六	〇・四二	一〇〇・〇〇
昭和元	七・二〇	六・八六	四三・一三	四一・六七	一・一三	一〇〇・〇〇	一四・七三	五六・四四	一五・〇三	一三・二五	〇・五五	一〇〇・〇〇

年次	內地 輸出	內地 輸入	內地 輸出入合計	內地 差引出超入超(△)	朝鮮 輸出	朝鮮 輸入	朝鮮 輸出入合計	朝鮮 差引出超入超(△)	臺灣 輸出	臺灣 輸入	臺灣 輸出入合計	臺灣 差引出超入超(△)
明治元	一五、五五三、四七三円	一〇、六九三、〇七二円	二六、二四六、五四五円	四、八六〇、四〇一円	—円	—円	—円	—円	—円	—円	—円	—円

	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円
明治二	一三、九〇八、九七八	二〇、七六三、六三三	三四、六七二、六一一	△六、八五四、六五五	—	—	—	—	—	—	—	—
同　三	一四、五四三、〇一三	三三、七四一、六三七	四八、二八四、六五〇	△一九、一九八、六二四	—	—	—	—	—	—	—	—
同　四	一七、九六八、六〇九	二一、九一六、七二八	三九、八八五、三三七	△三、九四八、一一九	—	—	—	—	—	—	—	—
同　五	一七、〇二六、六四七	二六、一七四、八一五	四三、二〇一、四六二	△九、一四八、一六八	—	—	—	—	—	—	—	—
同　六	二一、六三五、四四一	二八、一〇七、三九〇	四九、七四二、八三一	△六、四七一、九四九	—	—	—	—	—	—	—	—
同　七	一九、三一七、三〇六	二三、四六一、八一四	四二、七七九、一二〇	△四、一四四、五〇八	—	—	—	—	—	—	—	—
同　八	一八、六一一、一一一	二九、九七五、六二八	四八、五八六、七三九	△一一、三六四、五一七	—	—	—	—	—	—	—	—
同　九	二七、七一一、五二八	二三、九六四、六七九	五一、六七六、二〇七	三、七四六、八四九	—	—	—	—	—	—	—	—
同　一〇	二三、三四八、五三三	二七、四二〇、九〇三	五〇、七六九、四三五	△四、〇七二、三八一	—	—	—	—	—	—	—	—
同　一一	二五、九八八、一四〇	三二、八七四、八三四	五八、八六二、九七四	△六、八八六、六九四	—	—	—	—	—	—	—	—
同　一二	二八、一七五、七七〇	三二、九五三、〇〇三	六一、一二八、七七三	△四、七七七、二三三	—	—	—	—	—	—	—	—
同　一三	二八、三九五、三八七	三六、六二六、六〇一	六五、〇二一、九八八	△八、二三一、二一四	—	—	—	—	—	—	—	—
同　一四	三一、〇五八、八八八	三一、一九一、二四六	六二、二五〇、一三四	△一三二、三五八	—	—	—	—	—	—	—	—
同　一五	三七、七二一、七五一	二九、四四六、五九四	六七、一六八、三四五	八、二七五、一五七	—	—	—	—	—	—	—	—
同　一六	三六、二六八、〇二〇	二八、四四四、八四二	六四、七一二、八六二	七、八二三、一七八	—	—	—	—	—	—	—	—
同　一七	三三、八七一、四六六	二九、六七二、六四七	六三、五四四、一一三	四、一九八、八一九	—	—	—	—	—	—	—	—
同　一八	三七、一四六、六九一	二九、三五六、九六八	六六、五〇三、六五九	七、七八九、七二三	—	—	—	—	—	—	—	—
同　一九	四八、八七六、三一三	三二、一六八、四三二	八一、〇四四、七四五	一六、七〇七、八八一	—	—	—	—	—	—	—	—
同　二〇	五二、四〇七、六八一	四四、三〇四、二五二	九六、七一一、九三三	八、一〇三、四二九	—	—	—	—	—	—	—	—
同　二一	六五、七〇五、五一〇	六五、四五五、二三四	一三一、一六〇、七四四	二五〇、二七六	—	—	—	—	—	—	—	—
同　二二	七〇、〇六〇、七〇六	六六、一〇三、七六七	一三六、一六四、四七三	三、九五六、九三九	—	—	—	—	—	—	—	—
同　二三	五六、六〇三、五〇六	八一、七二八、五八一	一三八、三三二、〇八七	△二五、一二五、〇七五	—	—	—	—	—	—	—	—
同　二四	七九、五二七、二七二	六二、九二七、二六八	一四二、四五四、五四〇	一六、六〇〇、〇〇四	—	—	—	—	—	—	—	—
同　二五	九一、一〇二、七五四	七一、三二六、〇八〇	一六二、四二八、八三四	一九、七七六、六七四	—	—	—	—	—	—	—	—

明治二六	八九、七一二、八六五	八八、二五七、一七二	一七七、九七〇、〇三七	一、四五五、六九三	—	—	—	—	—	—	—	—
同　二七	一一三、二四六、〇八六	一一七、四八一、九五五	二三〇、七二八、〇四一	△四、二三五、八六九	—	—	—	—	—	—	—	—
同　二八	一三六、一一二、一七八	一二九、二六〇、五七八	二六五、三七二、七五六	六、八五一、六〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—
同　二九	一一七、八四二、七六一	一七一、六七四、四七四	二八九、五一七、二三五	△五三、八三一、七一三	—	—	—	—	一一、四〇二、三三六	八、六三一、〇〇二	二〇、〇三三、三三八	二、七七一、三三四
同　三〇	一六三、一三五、〇七七	二一九、三〇〇、七七二	三八二、四三五、八四九	△五六、一六五、六九五	—	—	—	—	一三、七五九、二九四	一三、六五九、二九八	二五、四一八、五九二	九九、九九六
同　三一	一六五、七五三、七五三	二七七、五〇二、一五七	四四三、二五五、九一〇	△一一一、七四八、四〇四	—	—	—	—	一二、八二七、一九〇	一六、八七五、四〇五	二九、七〇二、五九五	△四、〇四八、二一五
同　三二	二一四、九二九、八九四	二二〇、四〇一、九二六	四三五、三三一、八二〇	△五、四七二、〇三二	—	—	—	—	一一、一一四、九二一	一四、二七三、〇九二	二五、三八八、〇一三	△三、一五八、一七一
同　三三	二〇四、四二九、九九四	二八七、二六一、八四六	四九一、六九一、八四〇	△八二、八三一、八五二	—	—	—	—	一〇、五七一、二八五	一三、五七〇、六六四	二四、一四一、九四九	△二、九九九、三七九
同　三四	二五二、三四九、五四三	二五五、八一六、六四五	五〇八、一六六、一八八	△三、四六七、一〇二	—	—	—	—	八、二九八、八〇〇	一二、八〇九、七九五	二一、一〇八、五九五	△四、五一〇、九九五
同　三五	二五八、三〇三、〇六五	二七一、七三一、二五九	五三〇、〇三四、三二四	△一三、四二八、一九四	—	—	—	—	一三、八一六、八六八	一〇、一〇〇、五三二	二三、九一七、四〇〇	三、七一六、三三六
同　三六	二八九、五〇二、四四二	三一七、一三五、五一八	六〇六、六三七、九六〇	△二七、六三三、〇七六	—	—	—	—	一一、〇七八、三二一	一一、〇〇九、四六四	二二、〇八七、七八五	六八、八五七
同　三七	三一九、二六〇、八九六	三七一、三六〇、七三八	六九〇、六二一、六三四	△五二、〇九九、八四二	—	—	—	—	一二、三九一、一二四	一二、五九〇、〇一〇	二四、九八一、一三四	△一九八、八八六
同　三八	三二一、五三三、六一〇	四八八、五三八、〇一七	八一〇、〇七一、六二七	△一六七、〇〇四、四〇七	—	—	—	—	一〇、六二九、六〇七	一〇、九六三、八七七	二一、五九三、四八四	△三三四、二七〇
同　三九	四二三、七五四、八九二	四一八、七八四、一〇八	八四二、五三九、〇〇〇	四、九七〇、七八四	—	—	—	—	九、七七九、〇八四	一二、七三七、四六〇	二二、五一六、五四四	△二、九五八、三七六
同　四〇	四三二、四一二、八七三	四九四、四六七、三四六	九二六、八八〇、二一九	△六二、〇五四、四七三	—	—	—	—	九、七四一、四二九	一一、二二〇、六八五	二〇、九六二、一一四	△一、四七九、二五六
同　四一	三七八、二四五、六七三	四三六、二五七、四六二	八一四、五〇三、一三五	△五八、〇一一、七八九	—	—	—	—	九、二九七、八九八	一七、〇七四、七六六	二六、三七二、六六四	△七、七七六、八六八
同　四二	四一三、一一三、五一一	三九四、一九八、八四三	八〇七、三一二、三五四	一八、九一四、六六八	—	—	—	—	一一、六八七、五七六	一三、五九一、四七〇	二五、二七九、〇四六	△一、九〇三、八九四
同　四三	四五八、四二八、九九六	四六四、二三三、八〇八	九二二、六六二、八〇四	△五、八〇四、八一二	一、五五七、七四二	三、五三八、九九二	五、〇九六、七三四	△一、九八一、二五〇	一一、九八六、〇九六	一九、八五二、三六二	三一、八三八、四五八	△七、八六六、二六六
同　四四	四四七、四三三、八八八	五一三、八〇五、七〇五	九六一、二三九、五九三	△六六、三七一、八一七	五、五一六、四〇四	二〇、〇二九、二四八	二五、五四五、六五二	△一四、五一二、八四四	一三、一七五、三九〇	一九、五五五、〇四七	三二、七三〇、四三七	△六、三七九、六五七
大正元	五二六、九八一、八四二	六一八、九九二、二七七	一、一四五、九七四、一一九	△九二、〇一〇、四三五	五、六一七、六〇八	二六、三五九、四三四	三一、九七七、〇四二	△二〇、七四一、八二六	一四、九六〇、三二八	一九、三〇七、一二六	三四、二六七、四五四	△四、三四六、七九八
同　二	六三二、四六〇、二一三	七二九、四三一、六四四	一、三六一、八九一、八五七	△九六、九七一、四三一	五、九二二、七二七	三一、六一八、四九一	三七、五四一、二一八	△二五、六九五、七六四	一二、九四二、四四二	一八、〇二三、七二四	三〇、九六六、一六六	△五、〇八一、二八二
同　三	五九一、一〇一、四六一	五九五、七三五、七二五	一、一八六、八三七、一八六	△四、六三四、二六四	六、四四八、四五三	二四、六四七、八四〇	三一、〇九六、二九三	△一八、一九九、三八七	一二、九八二、三一四	一三、〇一三、九三七	二五、九九六、二五一	△三一、六二三
同　四	七〇八、三〇六、九九七	五三二、四四九、九三八	一、二四〇、七五六、九三五	一七五、八五七、〇五九	九、三一九、五四〇	一八、一五九、四八二	二七、四七九、〇二二	△八、八三九、九四二	一五、四三〇、二七八	一二、七八一、七七八	二八、二一二、〇五六	二、六四八、五〇〇
同　五	一、一二七、四六八、一二八	七五六、四二七、九一〇	一、八八三、八九六、〇三八	三七一、〇四〇、二一八	一四、八五四、五一一	二二、六七四、八一一	三七、五二九、三二二	△七、八二〇、三〇〇	三一、六五二、四七四	一五、四三〇、〇三七	四七、〇八二、五一一	一六、二二二、四三七

大正六	一、六〇三、〇〇五、〇四八円	一、〇三三、八一一、一〇七円	二、六三六、八一六、一五五円	五六九、一九三、九四一円	二〇、二三三、二〇三円	三一、三九六、二八〇円	五一、六二九、四八三円	△一一、一六三、〇七七円	四〇、二三五、七九一円	二一、〇九九、三七六円	六一、三三五、一六七円	一九、一三六、四一五円
同　七	一、九六二、一〇〇、六六八	一、六六八、一四三、八三三	三、六三〇、二四四、五〇一	二九三、九五六、八三五	一八、六九八、〇七五	四三、一五一、五三三	六一、八四九、六〇八	△二四、四五三、四五八	三三、三九四、〇〇八	三三、五五四、五一三	六六、九四八、五二一	△一六〇、五〇五
同　八	二、〇九八、八七二、六一七	二、一七三、四三九、八八〇	四、二七二、三一二、四九七	△七四、五六七、二六三	二二、〇九八、六四四	九八、一五九、〇七三	一二〇、二五七、七一七	△七六、〇六〇、四二九	三五、六二二、二八七	六四、一三二、七六二	九九、七五五、〇四九	△二八、五一〇、四七五
同　九	一、九四八、三九四、六一一	二、三三六、一七四、七八一	四、二八四、五六九、三九二	△三八七、七八〇、一七〇	二七、六三九、二〇七	一〇六、一七四、八二七	一三三、八一四、〇三四	△七八、五三五、六二〇	三五、一七二、九四五	六〇、三六六、七三一	九五、五三九、六七六	△二五、一九三、七八六
同一〇	一、二五二、八三七、七一五	一、六一四、一五四、八三二	二、八六六、九九二、五四七	△三六一、三一七、一一七	二〇、八八四、五七七	七五、八九九、〇一一	九六、七八三、五八八	△五五、〇一四、四三四	二三、五四一、六二一	四〇、四三三、二九〇	六三、九七四、九一一	△一六、八九一、六六九
同一一	一、六三七、四五一、八一八	一、八九〇、三〇八、二三二	三、五二七、七六〇、〇五〇	△二五二、八五六、四一四	一七、四八九、六四一	九五、七九七、七七二	一一三、二八七、四一三	△七八、三〇八、一三〇	三〇、五六三、四八九	三六、九二一、八七四	六七、四八五、三六三	△六、三五八、三八五
同一二	一、四四七、七五〇、七二〇	一、九八二、二三〇、五七〇	三、四二九、九八一、二九〇	△五三四、四七九、八五〇	二〇、四〇三、三〇五	九八、三三八、三七七	一一八、七四一、六八二	△七七、九三五、〇七二	二九、一五二、四三七	三九、一一一、三六七	六八、二六三、八〇四	△九、九五八、九三〇
同一三	一、八〇七、〇三四、八三七	二、四五三、四〇二、二五六	四、二六〇、四三七、〇九三	△六四六、三六七、四一九	二二、三七九、〇八一	九七、七七六、三一〇	一二〇、一五五、三九一	△七五、三九七、二二九	四二、五七五、九五三	四六、四二四、〇三六	八八、九九九、九八九	△三、八四八、〇八三
同一四	二、三〇五、五八九、八〇七	二、五七二、六五七、八六三	四、八七八、二四七、六七〇	△二六七、〇六八、〇五六	二四、三四一、八一七	一〇五、三八八、一六七	一二九、七二九、九八四	△八一、〇四六、三五〇	四七、九六五、八四四	五六、四八九、〇六〇	一〇四、四五四、九〇四	△八、五二三、二一六
昭和元	二、〇四四、七二七、八九一	二、三七七、四八四、四九三	四、四二二、二一二、三八四	△三三二、七五六、六〇二	二四、七七九、〇五五	一二三、九三三、九三三	一四八、七一二、九八八	△九九、一五四、八七八	四九、三一三、四八七	六二、〇〇七、六六六	一一一、三二一、一五三	△一二、六九四、一七九

第三表　累年金貨及金地金輸出入價額全國通計表

年次	內地 輸出	內地 輸入	內地 差引輸出入(△)超	朝鮮 輸出	朝鮮 輸入	朝鮮 差引輸出入(△)超	臺灣 輸出	臺灣 輸入	臺灣 差引輸出入(△)超	計 輸出	計 輸入	計 差引輸出入(△)超
明治五	二、六八四、七八七円	〇円	二、六八四、七八七円	―円	―円	―円	―円	―円	―円	二、六八四、七八七円	〇円	二、六八四、七八七円
同　六	二、六一四、〇五五	二、〇一三、九〇七	六〇〇、一四八	―	―	―	―	―	―	二、六一四、〇五五	二、〇一三、九〇七	六〇〇、一四八
同　七	八、一三六、二九〇	二、七〇〇	八、一三三、五九〇	―	―	―	―	―	―	八、一三六、二九〇	二、七〇〇	八、一三三、五九〇
同　八	一〇、六〇三、三四五	二六、五一五	一〇、五七六、八三〇	―	―	―	―	―	―	一〇、六〇三、三四五	二六、五一五	一〇、五七六、八三〇
同　九	五、八七二、三五六	七二一、四六五	五、一五〇、八九一	―	―	―	―	―	―	五、八七二、三五六	七二一、四六五	五、一五〇、八九一
同一〇	六、二二一、七七七	一六二、二八一	六、〇五九、四九六	―	―	―	―	―	―	六、二二一、七七七	一六二、二八一	六、〇五九、四九六
同一一	四、六〇一、〇八三	二四三	四、六〇〇、八四〇	―	―	―	―	―	―	四、六〇一、〇八三	二四三	四、六〇〇、八四〇
同一二	四、七四九、六三五	七三一、六六六	四、〇一七、九六九	―	―	―	―	―	―	四、七四九、六三五	七三一、六六六	四、〇一七、九六九
明治一三	五、八八八、一七四	二〇、六一八	五、八六七、五五六	―	―	―	―	―	―	五、八八八、一七四	二〇、六一八	五、八六七、五五六
同一四	二、二四六、八八九	一五〇	二、二四六、七三九	―	―	―	―	―	―	二、二四六、八八九	一五〇	二、二四六、七三九
同一五	一、二五一、〇三六	五〇〇	一、二五〇、五三六	―	―	―	―	―	―	一、二五一、〇三六	五〇〇	一、二五〇、五三六
同一六	一、〇〇九、五七〇	五五九	一、〇〇九、〇一一	―	―	―	―	―	―	一、〇〇九、五七〇	五五九	一、〇〇九、〇一一
同一七	一、四二三、六五四	二九九、二〇二	一、一二四、四五二	―	―	―	―	―	―	一、四二三、六五四	二九九、二〇二	一、一二四、四五二
同一八	四九二、六三六	六〇八、八一三	△一一六、一七七	―	―	―	―	―	―	四九二、六三六	六〇八、八一三	△一一六、一七七
同一九	三〇二、五四二	一、一五九、四六九	△八五六、九二七	―	―	―	―	―	―	三〇二、五四二	一、一五九、四六九	△八五六、九二七
同二〇	八六、二三六	一、二五九、五二七	△一、一七三、二九一	―	―	―	―	―	―	八六、二三六	一、二五九、五二七	△一、一七三、二九一
同二一	四五〇、二八四	一、二〇三、二五三	△七五二、九六九	―	―	―	―	―	―	四五〇、二八四	一、二〇三、二五三	△七五二、九六九
同二二	二六八、〇一〇	七四九、九二四	△四八一、九一四	―	―	―	―	―	―	二六八、〇一〇	七四九、九二四	△四八一、九一四
同二三	一、六八七、六〇五	三六〇、二四二	一、三二七、三六三	―	―	―	―	―	―	一、六八七、六〇五	三六〇、二四二	一、三二七、三六三
同二四	二三〇、四四六	二八三、一四四	△五二、六九八	―	―	―	―	―	―	二三〇、四四六	二八三、一四四	△五二、六九八
同二五	八、五四四、五二三	三九五、四九三	八、一四九、〇三〇	―	―	―	―	―	―	八、五四四、五二三	三九五、四九三	八、一四九、〇三〇
同二六	二、三〇二、六七八	四九六、七三〇	一、八〇五、九四八	―	―	―	―	―	―	二、三〇二、六七八	四九六、七三〇	一、八〇五、九四八
同二七	三、五四七、一三八	五五五、九六六	二、九九一、一七二	―	―	―	―	―	―	三、五四七、一三八	五五五、九六六	二、九九一、一七二
同二八	二、七九一、九五三	一、〇二九、九一三	一、七六二、〇四〇	―	―	―	―	―	―	二、七九一、九五三	一、〇二九、九一三	一、七六二、〇四〇
同二九	一、九九六、五七六	一〇、二二七、四五八	△八、二三〇、八八二	―	―	―	五、六一八	七、五〇七	△一、八八九	二、〇〇二、一九四	一〇、二三四、九六五	△八、二三二、七七一
同三〇	八、八六三、七九八	六四、三一三、四九三	△五五、四四九、六九五	―	―	―	〇	四、三一六	△四、三一六	八、八六三、七九八	六四、三一七、八〇九	△五五、四五四、〇一一
同三一	四六、二八一、三四三	三七、〇二七、七五三	九、二五三、五九〇	―	―	―	〇	二、六一九	△二、六一九	四六、二八一、三四三	三七、〇三〇、三七二	九、二五〇、九七一
同三二	八、七六八、三六五	二〇、〇八〇、六九六	△一一、三一二、三三一	―	―	―	〇	四、九三四	△四、九三四	八、七六八、三六五	二〇、〇八五、六三〇	△一一、三一七、二六五
同三三	五一、七六一、六二〇	八、九六七、一九八	四二、七九四、四二二	―	―	―	二四、八〇〇	八、一八一	一六、六一九	五一、七八六、四二〇	八、九七五、三七九	四二、八一一、〇四一
同三四	一一、四七七、八五二	一〇、六五一、二一〇	八二六、六四二	―	―	―	六〇〇	五、七六四	△五、一六四	一一、四七八、四五二	一〇、六五六、九七四	八二一、四七八
同三五	四五三、三一三	三〇、一八三、六七〇	△二九、七三〇、三五七	―	―	―	〇	二、一五三	△二、一五三	四五三、三一三	三〇、一八五、八二三	△二九、七三二、五一〇
同三六	一六、六九八、二三〇	二五、三五五、三六九	△八、六五七、一三九	―	―	―	〇	五九二	△五九二	一六、六九八、二三〇	二五、三五五、九六一	△八、六五七、七三一

明治三七	一〇六、〇〇六、五六二円	五、四三六、三三三円	一〇〇、五七〇、二二九円	—円	—円	—円	二、〇〇〇円	一五〇、一七〇円	△一四八、一七〇円	一〇六、〇〇八、五六二円	五、五八六、五〇三円	一〇〇、四二二、〇五九円
同　三八	一四、七〇八、四一三	二〇、一九二、九九五	△五、四八四、五八二	—	—	—	七四、九四〇	七、七六〇	六七、一八〇	一四、七八三、三五三	二〇、二〇〇、七五五	△五、四一七、四〇二
同　三九	二二、九八三、六三二	三七、〇二一、八二七	△一四、〇三八、一九五	—	—	—	六〇、四〇〇	〇	六〇、四〇〇	二三、〇四四、〇三二	三七、〇二一、八二七	△一三、九七七、七九五
同　四〇	一八、六九五、五五八	六、九六九、六六一	一一、七二五、八九七	—	—	—	二四、六六〇	二、二一〇	二二、四五〇	一八、七二〇、二一八	六、九七一、八七一	一一、七四八、三四七
同　四一	三、六五三、四五七	一六、九〇〇、〇四九	△一三、二四六、五九二	—	—	—	一二、〇〇〇	三、六三〇	八、三七〇	三、六六五、四五七	一六、九〇三、六七九	△一三、二三八、二二二
同　四二	六、四四七、〇〇八	七八、七五〇、九九八	△七二、三〇三、九九〇	—	—	—	〇	一、七〇九	△一、七〇九	六、四四七、〇〇八	七八、七五二、七〇七	△七二、三〇五、六九九
同　四三	二二、五七七、一二四	一七、四九四、〇九八	五、〇八三、〇二六	二〇	〇	二〇	〇	九〇〇	△九〇〇	二二、五七七、一四四	一七、四九四、九九八	五、〇八二、一四六
同　四四	二一、八〇一、五六四	四、九三八、六七二	一六、八六二、八九二	〇	二、二二四	△二、二二四	〇	四〇〇	△四〇〇	二一、八〇一、五六四	四、九四一、二九六	一六、八六〇、二六八
大正元	二一、二〇一、八四九	一〇、三八〇、五九六	一〇、八二一、二五三	〇	八三五	△八三五	〇	二、九二二	△二、九二二	二一、二〇一、八四九	一〇、三八四、三五三	一〇、八一七、四九六
同　二	二〇、七〇四、一七五	九五四、四〇九	一九、七四九、七六六	〇	〇	〇	〇	二五、〇〇〇	△二五、〇〇〇	二〇、七〇四、一七五	九七九、四〇九	一九、七二四、七六六
同　三	二六、〇三九、〇三〇	七、一〇三、八四七	一八、九三五、一八三	〇	七、九六一	△七、九六一	〇	二一、五七〇	△二一、五七〇	二六、〇三九、〇三〇	七、一三三、三七八	一八、九〇五、六五二
同　四	四〇、六七五、二〇九	二四、一五九、三七〇	一六、五一五、八三九	〇	一二七、二二八	△一二七、二二八	〇	一、三九五	△一、三九五	四〇、六七五、二〇九	二四、二八七、九九三	一六、三八七、二一六
同　五	二二、三六二、三八五	九九、九〇二、三二三	△七七、五三九、九三八	一〇七	一、一六一、四一三	△一、一六一、三〇六	八四、一一〇	一、三三六	八二、七七四	二二、四四六、六〇二	一〇一、〇六五、〇七二	△七八、六一八、四七〇
同　六	一五〇、六三九、〇六四	三八六、九九〇、五八五	△二三六、三五一、五二一	一四、四二七	三八、二八〇	△二三、八五三	五八、四二七	四、〇九七	五四、三三〇	一五〇、七一一、九一八	三八七、〇三二、九六二	△二三六、三二一、〇四四
同　七	九二三、〇六一	八二九、〇六九	九三、九九二	一五〇	二一、三八三	△二一、二三三	〇	一七、三三一	△一七、三三一	九二三、二一一	八六七、七八三	五五、四二八
同　八	一、四八五、五五四	三二五、七七一、三三三	△三二四、二八五、七七九	〇	一二、八〇三	△一二、八〇三	〇	〇	〇	一、四八五、五五四	三二五、七八四、一三六	△三二四、二九八、五八二
同　九	一〇、〇〇〇	三九二、三〇三、一七八	△三九二、二九三、一七八	〇	一四、五一九、九八八	△一四、五一九、九八八	〇	七〇八、一〇四	△七〇八、一〇四	一〇、〇〇〇	四〇七、五三一、二七〇	△四〇七、五二一、二七〇
同　一〇	〇	一三〇、〇五八、八五四	△一三〇、〇五八、八五四	〇	二、一〇八、六〇三	△二、一〇八、六〇三	〇	三六三、六三六	△三六三、六三六	〇	一三二、五三一、〇九三	△一三二、五三一、〇九三
同　一一	〇	九二五、九二五	△九二五、九二五	〇	一六六、五三三	△一六六、五三三	〇	八	△八	〇	一、〇九二、四六六	△一、〇九二、四六六
同　一二	二六四、五三五	五一、七五三	二一二、七八二	〇	八六、六三一	△八六、六三一	〇	〇	〇	二六四、五三五	一三八、三八四	一二六、一五一
同　一三	六、〇七〇	一八、五二〇	△一二、四五〇	〇	八、三九五	△八、三九五	〇	〇	〇	六、〇七〇	二六、九一五	△二〇、八四五
同　一四	二三、〇六九、五〇〇	一、二五四	二三、〇六八、二四六	〇	八〇、三九六	△八〇、三九六	〇	〇	〇	二三、〇六九、五〇〇	八一、六五〇	二二、九八七、八五〇
昭和元	三三、一〇一、二五〇	一四〇、九三一	三二、九六〇、三一九	〇	一三二、八二七	△一三二、八二七	〇	二〇、一三九	二〇、一三九	三三、一〇一、二五〇	二九三、八八七	三二、八〇七、三六三

第四表　累年銀貨及銀地金輸出入價額全國通計表

年次	内地 輸出	内地 輸入	内地 差引出超入(△)超	朝鮮 輸出	朝鮮 輸入	朝鮮 差引出超入(△)超	臺灣 輸出	臺灣 輸入	臺灣 差引出超入(△)超	計 輸出	計 輸入	計 差引出超入(△)超
明治五	一、七九六、一〇九円	三、六九一、五一〇円	△一、八九五、四〇一円	—円	—円	—円	—円	—円	—円	一、七九六、一〇九円	三、六九一、五一〇円	△一、八九五、四〇一円
同　六	二、五〇八、八七二	一、〇六六、六三五	一、四四二、二三七	—	—	—	—	—	—	二、五〇八、八七二	一、〇六六、六三五	一、四四二、二三七
同　七	五、八六八、九一三	一、〇六九、〇三二	四、七九九、八八一	—	—	—	—	—	—	五、八六八、九一三	一、〇六九、〇三二	四、七九九、八八一
同　八	四、〇六〇、六二六	二七一、八〇七	三、七八八、八一九	—	—	—	—	—	—	四、〇六〇、六二六	二七一、八〇七	三、七八八、八一九
同　九	四、八〇三、三四五	七、五四五、七七六	△二、七四二、四三一	—	—	—	—	—	—	四、八〇三、三四五	七、五四五、七七六	△二、七四二、四三一
同　一〇	三、二二九、四九四	二、〇二一、二二八	一、二〇八、二七六	—	—	—	—	—	—	三、二二九、四九四	二、〇二一、二二八	一、二〇八、二七六
同　一一	三、七二七、五七〇	二、一八八、八五八	一、五三八、七一二	—	—	—	—	—	—	三、七二七、五七〇	二、一八八、八五八	一、五三八、七一二
同　一二	八、〇二九、二二九	二、四〇三、一三八	五、六二六、〇九一	—	—	—	—	—	—	八、〇二九、二二九	二、四〇三、一三八	五、六二六、〇九一
同　一三	七、三三四、八一九	三、六一七、六一二	三、七一七、二〇七	—	—	—	—	—	—	七、三三四、八一九	三、六一七、六一二	三、七一七、二〇七
同　一四	五、二四三、六五八	一、八五五、九九七	三、三八七、六六一	—	—	—	—	—	—	五、二四三、六五八	一、八五五、九九七	三、三八七、六六一
同　一五	三、一七九、一六二	六、一六〇、二二四	△二、九八一、〇六二	—	—	—	—	—	—	三、一七九、一六二	六、一六〇、二二四	△二、九八一、〇六二
同　一六	二、一四六、九九五	五、四五〇、九四二	△三、三〇三、九四七	—	—	—	—	—	—	二、一四六、九九五	五、四五〇、九四二	△三、三〇三、九四七
同　一七	三、五八一、四一八	五、三一三、五五七	△一、七三二、一三九	—	—	—	—	—	—	三、五八一、四一八	五、三一三、五五七	△一、七三二、一三九
同　一八	三、七六三、八二〇	六、九三八、〇二八	△三、一七四、二〇八	—	—	—	—	—	—	三、七六三、八二〇	六、九三八、〇二八	△三、一七四、二〇八
同　一九	九、三三三、九〇六	八、〇二三、四〇五	一、三一〇、五〇一	—	—	—	—	—	—	九、三三三、九〇六	八、〇二三、四〇五	一、三一〇、五〇一
同　二〇	一〇、九四九、二五二	七、六一一、七三九	三、三三七、五一三	—	—	—	—	—	—	一〇、九四九、二五二	七、六一一、七三九	三、三三七、五一三
同　二一	七、三八三、一六〇	七、五二九、二三九	△一四六、〇七九	—	—	—	—	—	—	七、三八三、一六〇	七、五二九、二三九	△一四六、〇七九
同　二二	四、九二〇、五一九	一三、四二三、三二三	△八、五〇二、八〇三	—	—	—	—	—	—	四、九二〇、五一九	一三、四二三、三二三	△八、五〇二、八〇三
同　二三	一三、〇九〇、九二六	八四〇、三六五	一二、二五〇、五六一	—	—	—	—	—	—	一三、〇九〇、九二六	八四〇、三六五	一二、二五〇、五六一

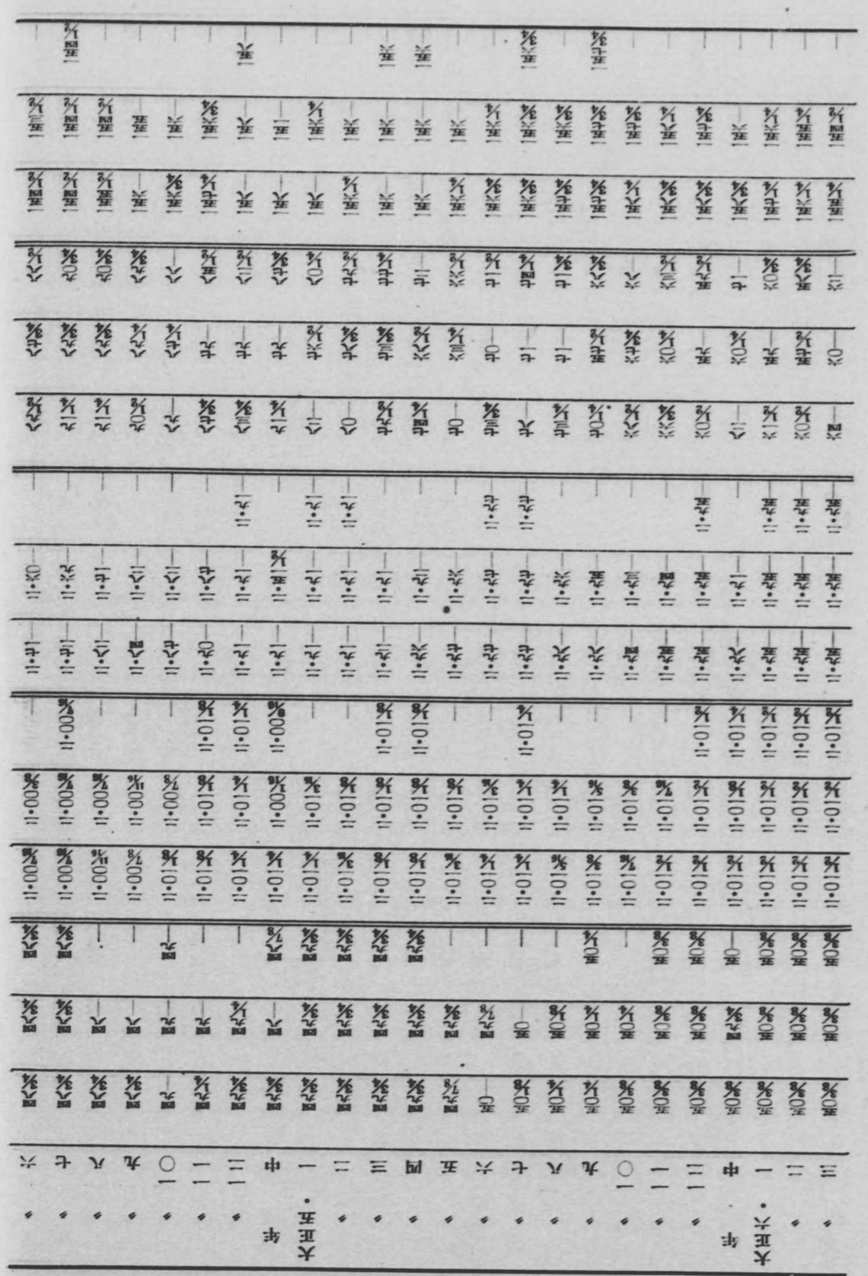
	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円
明治二四	一、二三三、五一八	一三、六〇五、三八二	△一二、三七一、八六四	—	—	—	—	—	—	一、二三三、五一八	一三、六〇五、三八二	△一二、三七一、八六四
同二五	一、一八五、二三〇	三、四八八、二六四	△二、三〇三、〇三四	—	—	—	—	—	—	一、一八五、二三〇	三、四八八、二六四	△二、三〇三、〇三四
同二六	九、九八六、五一〇	一〇、六八九、七五七	△七〇三、二四七	—	—	—	—	—	—	九、九八六、五一〇	一〇、六八九、七五七	△七〇三、二四七
同二七	三〇、八三一、九七三	二六、二二七、六八七	四、六〇四、二八六	—	—	—	—	—	—	三〇、八三一、九七三	二六、二二七、六八七	四、六〇四、二八六
同二八	二四、三〇九、七四七	四、八四四、二五二	一九、四六五、四九五	—	—	—	—	—	—	二四、三〇九、七四七	四、八四四、二五二	一九、四六五、四九五
同二九	九、六〇二、三〇八	二八、九二四、七五〇	△一九、三二二、四四二	—	—	—	二〇五、六五九	五、三九三、九〇〇	△五、一八八、二四一	九、八〇七、九六七	三四、三一八、六五〇	△二四、五一〇、六八三
同三〇	一〇、三五五、三六六	一七、一五三、二三〇	△六、七九七、八六四	—	—	—	六三一、八三三	五、九二六、七六三	△五、二九四、九一〇	一〇、九八七、二一九	二三、〇七九、九八三	△一二、〇九二、七六四
同三一	四〇、七〇六、一三八	五、五三六、〇二八	三五、一七〇、一一〇	—	—	—	二、一一〇、九六七	五、七六七、六四一	△三、六五六、六七四	四二、八一七、一〇五	一一、三〇三、六六九	三一、五一三、四三六
同三二	二、四〇九、八八二	八二、八〇五	二、三二七、〇七七	—	—	—	二、四八七、七八一	三、五三二、四三二	△一、〇四四、六五〇	四、八九七、六六三	三、六一五、二三六	一、二八二、四二七
同三三	四、九四五、四四三	二、五五〇、六三七	二、三九四、八〇六	—	—	—	二、七七一、七六八	一、四五八、六九二	一、三一三、〇七七	七、七一七、二一一	四、〇〇九、三三八	三、七〇七、八七三
同三四	二、五七一、二四七	三〇九、五四〇	二、二六一、七〇七	—	—	—	一、五〇四、六九〇	九二七、八〇三	五七六、八八七	四、〇七五、九三七	一、二三七、三四三	二、八三八、五九四
同三五	一、五七五、六六九	一、九七七、六八八	△四〇二、〇一九	—	—	—	九五〇、八七四	四、四二八、七〇三	△三、四七七、八二八	二、五三六、五四三	六、四〇六、三九〇	△三、八六九、八四七
同三六	二、三〇二、九六九	二、四五二、一〇〇	△一四九、一三一	—	—	—	九四〇、二三〇	一、四五三、七三二	△五一三、五〇二	三、二四三、一九九	三、九〇五、八三二	△六六二、六三二
同三七	一、七六九、二九七	二八、四九〇、三三五	△二六、七二一、〇二六	—	—	—	一、一九三、九七三	三三九、六三一	八五四、三四二	二、九六三、二七〇	二八、八二九、九三四	△二五、八六六、六八四
同三八	一、六四六、三四四	一一、三一三、九七八	△九、六六七、六三四	—	—	—	一、一五四、一一七	四四七、三〇〇	七〇六、八一七	二、八〇〇、四六一	一一、七六一、二七八	△八、九六〇、八一七
同三九	二、八〇〇、八〇五	一〇、一八九、三七〇	△七、三八八、五六五	—	—	—	二、一二七、九一三	二四、三三八	二、一〇三、五八四	四、九二八、七一七	一〇、二二三、六九八	△五、二九四、九八一
同四〇	六三、七二七	一、二八六、八四二	△一、二二三、一一五	—	—	—	二三四、二一〇	三三七、二八五	△一〇三、〇七五	二九七、九三七	一、六二四、一二七	△一、三二六、一九〇
同四一	一一九、〇四五	六四四、四三七	△五二五、三九二	—	—	—	五六、一〇一	二、七四七、七五一	△二、六九一、六五〇	一七五、一四六	三、三九二、一八八	△三、二一七、〇四二
同四二	一三七、三一九	八三六、五〇四	△六九九、一八五	—	—	—	一五七、五二五	五、四四九	一五二、〇七六	二九四、八四四	八四一、九五三	△五四七、一〇九
同四三	二、五九七、九六七	一七七、六九九	二、四二〇、二六八	—	(四十三年九月以降)二、八五〇	△二、八五〇	三七、一三六	二三三	三六、九〇三	二、六三五、一〇三	一八〇、七八一	二、四五四、三二二
同四四	二、五九六、七二三	一、二三九、三九六	一、三六七、一二六	三三、三四三	三二、七七八	五六五	一三、九五一	六、九九三	五、九五八	二、六四三、〇一六	一、二六九、三六七	一、三七三、六四九
大正元	七、一二三、三〇四	一、一六三、七五五	五、九五九、五四九	二八、一〇九	一三五、三九六	△一〇七、二八七	一三、四四八	四、〇二〇	九、四二八	七、一六四、八六一	一、三〇三、一七一	五、八六一、六九〇
同二	六、三八九、一七一	六六、九四二	六、三二二、二二九	一一、四九九	七九、五〇八	△六八、〇〇九	六七三	〇	六七三	六、四〇一、三四三	一四六、四五〇	六、二五四、八九二
同三	三、六一〇、九〇五	二、〇〇三、二三四	一、六〇七、六七二	一〇、五七七	一七六、一〇三	△一六五、五二六	七、七五〇	五八、四七二	△五〇、七二二	三、六二九、二三二	二、二三七、八〇九	一、三九一、四二三
大正四	三、八九〇、八一五	一三七、一四八	三、七五三、六六七	三、二二二	一五四、六二五	△一五一、四〇四	二三八、六八六	七七、八三四	一六〇、八五二	四、一三二、七二三	三六九、六〇七	三、七六三、一一五
同五	五、七一七、〇三三	一、一二七、五七八	四、五八九、四五五	一六、〇三三	一五二、一七三	△一三六、一五一	一、〇三九、七一六	一〇、二五五	一、〇二九、四六一	六、七七二、七八二	一、二九〇、〇〇六	五、四八二、七七六
同六	三、〇九七、二七六	五、二三四、三八二	△二、一三七、一〇六	一四、九四二	五七、九五〇	△四三、〇〇八	七五、七四五	一、四一六	七四、三二九	三、一八七、九六三	五、二九三、七四八	△二、一〇五、七八五
同七	一五、五〇八	四、一八六、九四八	△四、一七一、四四〇	〇	二五、三四八	△二五、三四八	〇	二〇五	△二〇五	一五、五〇八	四、二一二、五〇一	△四、一九六、九九三
同八	三、五六八、四一四	一、七〇五、六五八	一、八六二、七五六	三三〇	七、五七六	△七、二四六	〇	三三	△三三	三、五六八、七四四	一、七一三、二六七	一、八五五、四七七
同九	三、八八七、四四〇	三、四二三、七四六	△八、五三六、三〇六	〇	七、三一七	△七、三一七	〇	一〇、九〇六	△一〇、九〇六	三、八八七、四四〇	三、四四一、九六九	△八、五五四、五二九
同一〇	〇	八、五六二、七二二	△八、五六二、七二二	〇	一八九、〇六四	△一八九、〇六四	〇	二七、一一三	△二七、一一三	〇	八、七七八、八九九	△八、七七八、八九九
同一一	二、一八〇、五〇〇	七四六、三八六	一、四三四、一一四	〇	五八、八四五	△五八、八四五	〇	一、四八一	△一、四八一	二、一八〇、五〇〇	八〇六、七一二	一、三七三、七八八
同一二	五、二〇一、二三三	一四四、七四二	五、〇五六、四八一	〇	三七、六三一	△三七、六三一	〇	〇	〇	五、二〇一、二三三	一八二、三七三	五、〇一八、八六〇
同一三	〇	四、〇九一、四六三	△四、〇九一、四六三	〇	九、八六九	△九、八六九	〇	〇	〇	〇	四、一〇一、三三二	△四、一〇一、三三二
同一四	二三五、八九〇	一七二、六〇二	六三、二八八	〇	一八〇、一八八	△一八〇、一八八	〇	〇	〇	二三五、八九〇	三五二、七九〇	△一一六、九〇〇
昭和元	三、七九六、七四四	一、四八七、二八八	二、三〇九、四五六	〇	九七、六二三	△九七、六二三	〇	九、九八五	△九、九八五	三、七九六、七四四	一、五九四、八九六	二、二〇一、八四八

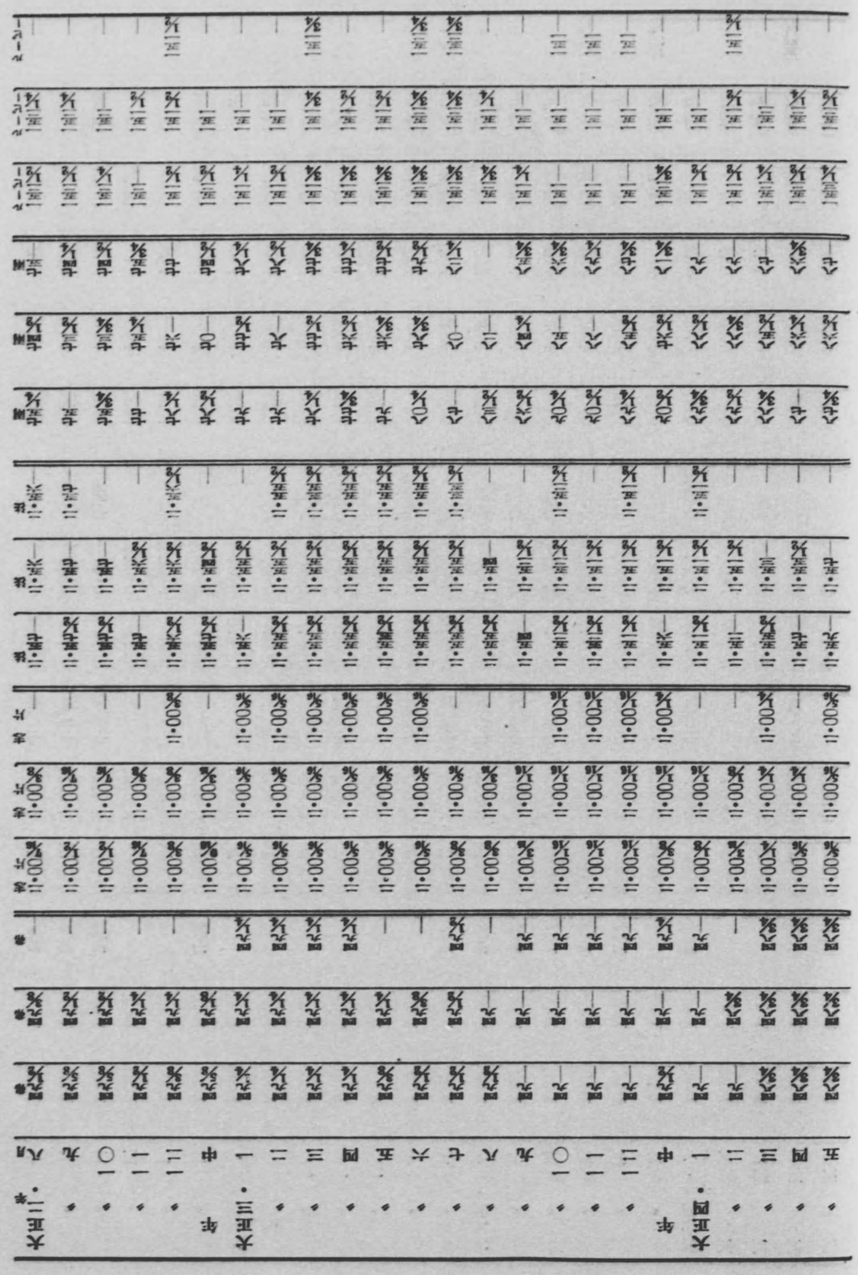
第五表　累年外國爲替相場表（橫濱正金銀行建電信賣）

年月	紐育宛（一〇〇圓に付）（明治三十年十月以降平價 一〇〇圓＝四九弗八四五）（明治二十九年八月迄參著賣相場） 最高	最低	平均	倫敦宛（一圓に付）（明治三十年十月以降平價 一圓＝二志〇片五八二）（明治二十九年八月迄參著賣相場） 最高	最低	平均	巴里宛（一圓に付）（明治三十年十月以降平價 一圓＝二法五八三）（明治二十九年八月迄參著賣相場） 最高	最低	平均	上海宛（一〇〇圓に付）（大正十二年八月迄參著賣相場） 最高	最低	平均	孟買宛（一〇〇圓に付）（明治三十年十月以降平價 一〇〇圓＝一五三・六ルーピー）（明治二十九年八月迄參著賣相場） 最高	最低	平均
明治一三年	弗 九五 1/4	弗 八九 1/4	弗 —	志片 三・一〇 1/2	志片 三・〇八 —	志片 —	法 四・九六 —	法 四・六五 —	法 —	兩 —	兩 —	兩 —	ルーピー —	ルーピー —	ルーピー —
同一四	九一 1/4	八八 1/2	—	三・〇九 5/8	三・〇七 5/8	—	四・七六 —	四・六一 —	—	—	—	—	—	—	—
同一五	九三 —	八八 —	—	三・〇九 7/8	三・〇七 1/8	—	四・八一 —	四・五五 —	—	—	—	—	—	—	—
同一六	九一 1/2	八七 3/4	—	三・〇九 5/8	三・〇七 1/8	—	四・七六 —	四・五五 —	—	—	—	—	—	—	—
同一七	九〇 3/4	八六 1/2	—	三・〇八 7/8	三・〇六 3/8	—	四・七二 —	四・四八 —	—	—	—	—	—	—	—

年	弗	弗	弗	志片	志片	志片	法	法	法	兩	兩	兩	ルーピー	ルーピー	ルーピー
明治一八年	八七	八一¾	—	三・〇六⅞	三・〇四	—	四・五〇	四・二三	—	—	—	—	—	—	—
同一九	八二¾	七二¾	—	三・〇四½	二・一一¾	—	四・二五	三・七六	—	—	—	—	—	—	—
同二〇	八〇¼	七三	—	三・〇四⅛	三・〇〇½	—	四・二三	三・八七	—	—	—	—	—	—	—
同二一	七六¼	七二½	—	三・〇一⅞	二・一一¾	—	三・九七	三・七六	—	—	—	—	—	—	—
同二二	七八¾	七三½	—	三・〇三⅞	三・〇〇¼	—	四・〇九	三・八三	—	—	—	—	—	—	—
同二三	九三	七四¾	—	三・一〇	三・〇〇¾	—	四・八三	三・八八	—	—	—	—	—	—	—
同二四	八四¾	七五	—	三・〇五⅞	三・〇一⅛	—	四・三九	三・九一	—	—	—	—	—	—	—
同二五	七五	六五⅛	—	三・〇一⅛	二・〇八¼	—	三・九一	三・三九	—	—	—	—	—	—	—
同二六	六七	五四⅛	—	二・〇九	二・〇三¼	—	三・四五	二・八六	—	七二½	七一½	七二	—	—	—
同二七	五五	五七¼	—	二・〇三⅝	一・〇一⅝	—	二・八七	二・四五	—	七三¼	七一¼	七二½	—	—	—
同二八	五四⅛	四六¾	—	二・〇二⅞	一・一一⅛	—	二・八三	二・四三	—	七二	七一	七二½	一九六	一八一	—
	(明治二十九年九月より電信賣相場)			(明治二十九年九月より電信賣相場)			(明治二十九年九月より電信賣相場)						(明治二十九年九月より電信賣相場)		
同二九	五三	四九⅝	—	二・〇二 11/16	二・〇〇 13/16	—	二・六九½	二・六〇½	—	七二⅞	七一½	七二¼	一九一	一六〇	—
同三〇	五一⅛	四八⅛	—	二・〇一⅛	一・一一¾	—	二・六八	二・四八½	—	八七½	七二⅞	七五½	一六七	一四八½	—
同三一	四九⅝	四八½	—	二・〇〇 9/16	二・〇〇 1/16	—	二・五八½	二・五四	—	八一	七三½	七七¾	一三三	一四九½	—
同三二	五〇	四九¼	—	二・〇〇¾	二・〇〇 5/16	—	二・五九½	二・五六	—	七七½	七三¼	七五½	一五四	一五一	—
同三三	四九⅛	四九	—	二・〇〇 5/16	二・〇〇⅛	—	二・五六½	二・五三	—	七五	六八¾	七二¼	一五一½	一五一	—
同三四	四九⅝	四九⅛	—	二・〇〇 7/16	二・〇〇⅛	—	二・五六	二・五三½	—	八二	六九¼	七三¼	一五一½	一五〇½	—
同三五	五〇	四九⅝	—	二・〇〇 11/16	二・〇〇¼	—	二・五八½	二・五四½	—	九五¼	七八	八六½	一五三½	一五〇½	—
同三六	五〇	四九	—	二・〇〇 11/16	二・〇〇¼	—	二・五八½	二・五五	—	九四½	七七¾	八六½	一五三½	一五一	—
同三七	四九¼	四八⅝	—	二・〇〇 5/16	二・〇〇 1/16	—	二・五五	二・五二	—	八五½	七二¼	七八	一五一½	一四八¾	—
同三八	四九⅞	四九⅛	—	二・〇〇⅝	二・〇〇¼	—	二・五七½	二・五四	—	七九¾	六八½	七四¾	一五二½	一五〇½	—
同三九	四九⅛	四九¼	—	二・〇〇 7/16	二・〇〇 5/16	—	二・五六½	二・五五½	—	七二	六三¾	六八¾	一五二¼	一五〇¼	—
同四〇	四九⅝	四九¼	—	二・〇〇 7/16	二・〇〇⅜	—	二・五七	二・五五½	—	八三½	六五¾	六九½	一五二¾	一五〇¾	—

年	弗	弗	弗	志片	志片	志片	法	法	法	兩	兩	兩	ルーピー	ルーピー	ルーピー
同四一	四九⅛	四九¼	—	二・〇〇 7/16	二・〇〇⅜	—	二・五六	二・五五	—	九二½	七七½	八四¼	一五三½	一五二	—
同四二	四九⅝	四九⅜	—	二・〇〇 9/16	二・〇〇⅜	—	二・五七½	二・五五½	—	八八¾	八二½	八六¾	一五三¾	一五一	—
同四三	四九⅝	四九¼	—	二・〇〇⅜	二・〇〇 5/16	—	二・五七	二・五五½	—	八八	七八⅜	八三¾	一五二¼	一五一	—
同四四	四九⅜	四九¼	—	二・〇〇 7/16	二・〇〇⅜	—	二・五六½	二・五六	—	八六	八〇⅞	八三¾	一五一	一五一¼	—
明治四五年・一月	四九⅜	四九⅜	四九⅜	二・〇〇 7/16	二・〇〇 7/16	二・〇〇 7/16	二・五六½	二・五六½	二・五六½	八一½	七七	七九¾	一五二	一五一¾	—
〃二	四九½	四九⅜	—	二・〇〇 7/16	二・〇〇½	—	二・五七½	二・五六½	—	七七½	七四½	七六	一五一¾	一五一¾	一五一¾
〃三	四九⅜	四九⅜	四九⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・五七	二・五六½	—	七六¾	七五¾	七六¼	一五二	一五一¾	—
〃四	四九⅜	四九⅜	四九⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・五六½	二・五六½	二・五六½	七七	七三¾	七五¾	一五一¾	一五一¾	一五一¾
〃五	四九⅜	四九⅜	四九⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・五六½	二・五六	二・五六	七五	七二¾	七三¾	一五二¼	一五一¾	—
〃六	四九⅜	四九⅜	四九⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・五六	二・五六	二・五六	七四½	七七½	七三½	一五二	一五一¾	—
大正元・七	四九⅜	四九⅜	四九⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・五六	二・五六	二・五六	七五½	七三¾	七四½	一五一	一五一¾	—
〃八	四九⅜	四九⅜	四九⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・五六½	二・五六	—	七六	七三½	七四¾	一五一¾	一五一¾	一五一¾
〃九	四九⅜	四九¼	—	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・五六½	二・五六½	二・五六½	七四	七一¼	七三	一五一¾	一五一¾	一五一¾
〃一〇	四九⅝	四九¼	—	二・〇〇½	二・〇〇⅜	—	二・五七½	二・五六½	—	七一¾	七〇	七〇½	一五二	一五一¾	—
〃一一	四九⅝	四九½	—	二・〇〇½	二・〇〇½	二・〇〇½	二・五七½	二・五七	—	七一¾	七〇¾	七一¼	一五二	一五二	一五二
〃一二	四九⅝	四九⅛	—	二・〇〇 9/16	二・〇〇½	—	二・五七½	二・五七	—	七一¼	七〇	七〇½	一五二½	一五一	—
年中	四九⅝	四九¼	—	二・〇〇 9/16	二・〇〇⅜	—	二・五七½	二・五六	—	八一½	七〇	七四¼	一五二½	一五一¾	—
大正二・一	四九⅝	四九⅜	—	二・〇〇 9/16	二・〇〇⅜	—	二・五七½	二・五六	—	七三½	七〇	七〇¾	一五二½	一五一¾	—
〃二	四九⅜	四九⅜	四九⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇 5/16	—	二・五六	二・五五½	—	七四½	七一	七二	一五一¾	一五一¼	—
〃三	四九¼	四九⅛	—	二・〇〇¼	二・〇〇 3/16	—	二・五五	二・五四½	—	七八½	七四	七六½	一五一¼	一五一	—
〃四	四九⅜	四九⅛	—	二・〇〇 5/16	二・〇〇 3/16	—	二・五五	二・五四½	—	七六¾	七三	七五	一五一½	一五一	—
〃五	四九⅜	四九⅜	四九⅜	二・〇〇 5/16	二・〇〇 5/16	二・〇〇 5/16	二・五五	二・五五	二・五五	七四½	七二¼	七三½	一五一½	一五一½	一五一½
〃六	四九⅜	四九⅜	四九⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・五六	二・五六	—	七六¼	七四¼	七五¼	一五二½	一五一¾	—
〃七	四九⅜	四九⅜	四九⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・〇〇⅜	二・五六	二・五六	二・五六	七六½	七五¼	七五¾	一五二½	一五二½	一五二½





年月	弗	弗	弗	志片	志片	志片	法	法	法	両	両	両	ルーピー	ルーピー	ルーピー
大正二・八	四九1/2	四九3/8	—	二・〇〇7/16	二・〇〇3/8	—	二・五七	二・五六	二・五六	七五1/4	七四1/2	七五	一五二1/2	一五二1/4	—
〃 九	四九5/8	四九1/2	—	二・〇〇1/2	二・〇〇7/16	—	二・五七1/2	二・五七	二・五七	七五	七三1/2	七四1/4	一五二1/2	一五二1/4	—
〃 一〇	四九5/8	四九1/2	—	二・〇〇1/2	二・〇〇7/16	—	二・五七1/2	二・五七	—	七五3/4	七三3/4	七四1/2	一五二1/4	一五二	—
〃 一一	四九1/2	四九1/4	—	二・〇〇7/16	二・〇〇3/8	—	二・五七	二・五六1/2	—	七七	七五1/4	七五3/4	一五二	一五一1/2	—
〃 一二	四九3/8	四九1/4	—	二・〇〇3/8	二・〇〇3/8	二・〇〇3/8	二・五六1/2	二・五六1/2	二・五六1/2	七八1/4	七六	七七	一五一1/2	一五一1/2	一五一1/2
年中	四九5/8	四九1/8	—	二・〇〇9/16	二・〇〇3/16	—	二・五七1/2	二・五四1/2	—	七八1/2	七〇	七四1/2	一五二1/2	一五一	—
大正三・一	四九1/4	四九1/4	四九1/4	二・〇〇5/16	二・〇〇5/16	二・〇〇5/16	二・五六	二・五五1/2	—	七九	七七1/2	七八1/4	一五一1/4	一五一	—
〃 二	四九1/4	四九1/4	四九1/4	二・〇〇5/16	二・〇〇5/16	二・〇〇5/16	二・五五1/2	二・五五1/2	二・五五1/2	七九	七八	七八1/2	一五一1/2	一五一	—
〃 三	四九1/4	四九1/4	四九1/4	二・〇〇5/16	二・〇〇5/16	二・〇〇5/16	二・五五1/2	二・五五1/2	二・五五1/2	七八1/4	七七1/2	七七3/4	一五一3/4	一五一	一五一3/4
〃 四	四九1/4	四九1/4	四九1/4	二・〇〇5/16	二・〇〇5/16	二・〇〇5/16	二・五五1/2	二・五五1/2	二・五五1/2	七七3/4	七六1/2	七七1/4	一五一3/4	一五一1/2	—
〃 五	四九3/8	四九1/4	—	二・〇〇5/16	二・〇〇5/16	二・〇〇5/16	二・五五1/2	二・五五1/2	二・五五1/2	七九	七六3/4	七七1/2	一五二3/4	一五一1/2	—
〃 六	四九1/2	四九3/8	—	二・〇〇5/16	二・〇〇5/16	二・〇〇5/16	二・五五1/2	二・五五1/2	二・五五1/2	八〇1/4	七八3/4	七九1/2	一五二3/4	一五二3/4	一五二3/4
〃 七	四九1/2	四九1/2	四九1/2	二・〇〇3/8	二・〇〇5/16	—	二・五五1/2	二・五五1/2	二・五三1/2	八七	八〇	八二1/4	一五二3/4	一五二3/4	一五二3/4
〃 八	四九1/2	四九	—	二・〇〇3/8	二・〇〇3/16	—	二・五五1/2	二・五四	—	八三1/2	八二	—	一五二3/4	一五一1/4	—
〃 九	四九	四九	四九	二・〇〇3/16	二・〇〇1/16	—	二・五四	二・五三1/2	—	八六1/2	八四1/4	八五3/4	一五一1/4	一五一	—
〃 一〇	四九	四九	四九	二・〇〇1/16	二・〇〇1/16	二・〇〇1/16	二・五三1/2	二・五三1/2	二・五三1/2	九〇1/4	八五	八六3/4	一五一	一五一	一五一
〃 一一	四九	四九	四九	二・〇〇1/16	二・〇〇1/16	二・〇〇1/16	二・五三1/2	二・五一1/2	—	九〇1/2	八八	八九1/4	一五一	一五一	一五一
〃 一二	四九	四九	四九	二・〇〇1/16	二・〇〇1/16	二・〇〇1/16	二・五一1/2	二・五一1/2	二・五一1/2	八九1/4	八五1/2	八七3/4	一五一	一五一	一五一
年中	四九1/2	四九	四九1/4	二・〇〇3/8	二・〇〇1/16	二・〇〇1/4	二・五六	二・五一1/2	—	九〇1/2	七六1/2	八一3/4	一五二3/4	一五一	—
大正四・一	四九	四九	四九	二・〇〇1/8	二・〇〇1/16	—	二・五一1/2	二・五一1/2	二・五一1/2	八九3/4	八八1/2	八九	一五一1/2	一五一	—
〃 二	四九	四八3/4	—	二・〇〇3/16	二・〇〇1/8	—	二・五二	二・五一1/2	—	八九1/2	八八3/4	八九	一五一1/2	一五一1/2	一五一1/2
〃 三	四八3/4	四八3/4	四八3/4	二・〇〇1/4	二・〇〇1/4	二・〇〇1/4	二・五五1/2	二・五三	—	八八3/4	八五1/2	八七	一五二1/4	一五二	—
〃 四	四八3/4	四八3/4	四八3/4	二・〇〇5/16	二・〇〇1/4	—	二・五七	二・五五1/2	—	八七	八六1/4	八六3/4	一五二1/2	一五二1/4	—
〃 五	四八3/4	四八3/4	四八3/4	二・〇〇5/16	二・〇〇5/16	二・〇〇5/16	二・五九	二・五七	—	八七3/4	八六1/2	八七	一五三1/4	一五三1/2	—

年月	弗	弗	弗	志片	志片	志片	法	法	法	両	両	両	ルーピー	ルーピー	ルーピー
〃 六	四八3/4	四八3/4	四八3/4	二・〇〇7/16	二・〇〇3/8	—	二・七一	二・六〇	—	八九1/2	八七3/4	八八1/2	一五四1/2	一五三1/2	—
〃 七	四八3/4	四八3/4	四八3/4	二・〇〇7/16	二・〇〇7/16	二・〇〇7/16	二・七二	二・六九	—	九一1/4	八九3/4	九〇3/4	一五四1/2	一五四1/2	一五四1/2
〃 八	四八3/4	四八	—	二・〇〇11/16	二・〇〇7/16	—	二・八二	二・七一	—	九一1/4	八九3/4	九〇3/4	一五四1/2	一五四1/2	—
〃 九	四八3/4	四八	—	二・〇〇7/8	二・〇〇11/16	—	二・八四	二・八二	—	九〇1/2	八九1/4	八九3/4	一五六	一五五	—
〃 一〇	四九	四九	四九	二・〇一1/8	二・〇〇7/8	—	二・八七	二・八二	—	八九	八七1/4	八八	一五六3/4	一五六	—
〃 一一	四九1/4	四九	—	二・〇一1/8	二・〇一1/8	二・〇一1/8	二・九〇	二・八七	—	八七3/4	七九	八五1/2	一五七1/4	一五六3/4	—
〃 一二	四九3/4	四九1/4	—	二・〇一1/4	二・〇一1/4	二・〇一1/4	二・九一	二・九一	二・九一	八三3/4	七九	八二1/2	一五八	一五八	一五八
年中	四九3/4	四八	四八7/8	二・〇一1/4	二・〇〇1/16	二・〇〇9/16	二・九一	二・五一1/2	—	九一1/4	七九	八七3/4	一五八	一五一	—
大正五・一	四九3/4	四九3/4	四九3/4	二・〇一1/4	二・〇一3/16	—	二・九一	二・九一	二・九一	八二	七六1/2	八〇1/4	一五八	一五六1/4	—
〃 二	四九3/4	四九3/4	四九3/4	二・〇一3/16	二・〇一1/8	—	二・九一	二・九一	二・九一	八〇	七八3/4	七九1/2	一五六1/4	一五六	—
〃 三	四九3/4	四九3/4	四九3/4	二・〇一1/8	二・〇一1/8	二・〇一1/8	二・九二	二・九一	—	七九1/2	七三3/4	七七1/4	一五六	一五六	一五六
〃 四	四九3/4	四九3/4	四九3/4	二・〇一1/8	二・〇一1/8	二・〇一1/8	二・九六	二・九二	—	七四1/4	六八1/2	七二	一五六	一五六	一五六
〃 五	四九7/8	四九3/4	—	二・〇一3/16	二・〇一1/8	—	二・九七	二・九六	—	七〇	六三1/4	六六1/2	一五六1/4	一五六	—
〃 六	五〇	四九7/8	—	二・〇一1/4	二・〇一3/16	—	二・九七	二・九七	二・九七	七三3/4	七〇	七一1/8	一五六3/4	一五六1/4	—
〃 七	五〇1/8	五〇	—	二・〇一1/4	二・〇一1/4	二・〇一1/4	二・九七	二・九七	二・九七	七八	七一	七四1/4	一五六3/4	一五六3/4	一五六3/4
〃 八	五〇1/4	五〇1/8	—	二・〇一5/16	二・〇一1/4	—	二・九八	二・九六	—	七三1/4	七一	七一3/4	一五七3/4	一五六3/4	—
〃 九	五〇1/4	五〇1/4	五〇1/4	二・〇一3/8	二・〇一5/16	—	二・九八	二・九五	—	七〇1/4	五七1/2	六八3/4	一五七3/4	一五七3/4	一五七3/4
〃 一〇	五〇3/8	五〇1/4	—	二・〇一7/16	二・〇一3/8	—	二・九四	二・九三	—	六八1/2	六七3/4	六八	一五八1/4	一五七3/4	—
〃 一一	五〇3/8	五〇3/8	五〇3/8	二・〇一1/2	二・〇一7/16	—	二・九五	二・九四	—	六六3/4	六〇1/4	六三1/2	一五八3/4	一五八1/4	—
〃 一二	五〇3/8	五〇3/8	五〇3/8	二・〇一1/2	二・〇一1/2	二・〇一1/2	二・九五	二・九五	二・九五	六〇1/2	五九	五九1/2	一五八3/4	一五七3/4	—
年中	五〇3/8	四九3/4	五〇	二・〇一1/2	二・〇一1/8	二・〇一1/4	二・九八	二・九一	—	八二	六〇1/4	七一	一五八3/4	一五六	—
大正六・一	五〇3/8	五〇3/8	五〇3/8	二・〇一1/2	二・〇一1/2	二・〇一1/2	二・九五	二・九五	二・九五	六一1/2	五九	六〇3/4	一五七1/4	一五六1/4	—
〃 二	五〇3/8	五〇3/8	五〇3/8	二・〇一1/2	二・〇一1/2	二・〇一1/2	二・九五	二・九五	二・九五	六〇1/2	五七1/2	五八3/4	一五六1/4	一五五1/4	—
〃 三	五〇3/8	五〇3/8	五〇3/8	二・〇一1/2	二・〇一1/2	二・〇一1/2	二・九五	二・九五	二・九五	六四	六〇	六二	一五五1/4	一五四1/2	—

年月	弗 1	弗 2	弗 3	志片 1	志片 2	志片 3	法 1	法 2	法 3	兩 1	兩 2	兩 3	ルーピー 1	ルーピー 2	ルーピー 3
大正六年・四月	五〇 3/8	五〇 3/8	五〇 3/8	二・〇二 1/2	二・〇二 1/2	二・〇二 1/2	二・九五	二・九二	—	六一 1/2	五九 3/4	六〇 1/4	一五四 1/2	一五三 1/2	—
〃五	五〇 1/2	五〇 3/8	—	二・〇二 1/2	二・〇二 1/2	二・〇二 1/2	二・九二	二・九二	二・九二	六〇 1/4	五九 1/4	五九 1/2	一五三	一五〇 1/2	—
〃六	五〇 1/2	五〇 1/2	五〇 1/2	二・〇二 1/2	二・〇二 1/2	二・〇二 1/2	二・九二	二・九二	二・九二	五九 1/4	五五 1/4	五七 1/4	一五〇 1/2	一四九 3/4	—
〃七	五〇 1/2	五〇 1/2	五〇 1/2	二・〇二 1/2	二・〇二 1/2	二・〇二 1/2	二・九二	二・九二	二・九二	五六 3/4	五三 3/4	五五	一四九 3/4	一四八 1/4	—
〃八	五〇 5/8	五〇 1/2	—	二・〇二 9/16	二・〇二 1/2	—	二・九三	二・九二	—	五四 1/2	四七 1/2	五〇 3/4	一四八 1/4	一四八 1/4	一四八 1/4
〃九	五〇 5/8	五〇 5/8	五〇 5/8	二・〇二 9/16	二・〇二 9/16	二・〇二 9/16	二・九三	二・九三	二・九三	四九	四二 1/4	四三 3/4	一四八 1/4	一四五 1/2	—
〃一〇	五〇 3/4	五〇 5/8	—	二・〇二 5/8	二・〇二 9/16	—	二・九四	二・九三	—	三六	四八	五三 3/4	一四五 1/2	一四四 1/2	—
〃一一	五〇 7/8	五〇 3/4	—	二・〇二 11/16	二・〇二 5/8	—	二・九五	二・九四	—	五三	三〇	五一 1/2	一四三 1/2	一四四 1/2	—
〃一二	五〇 7/8	五〇 7/8	五〇 7/8	二・〇二 11/16	二・〇二 11/16	二・〇二 11/16	二・九五	二・九五	二・九三	五一 1/2	四八 1/2	四九 3/4	一四六 1/2	一四五 1/2	—
年中	五〇 7/8	五〇 3/8	五〇 1/2	二・〇二 11/16	二・〇二 1/2	二・〇二 9/16	二・九五	二・九二	二・九三	六四	四二 1/4	五五 1/4	一五七 1/4	一四四 1/2	—
大正七・一	五〇 7/8	五〇 7/8	五〇 7/8	二・〇二 11/16	二・〇二 11/16	二・〇二 11/16	二・九五	二・九五	二・九五	五〇 1/4	四七 3/4	四八 3/4	一四六 1/2	一四六 1/2	一四六 1/2
〃二	五〇 7/8	五〇 7/8	五〇 7/8	二・〇二 11/16	二・〇二 11/16	二・〇二 11/16	二・九五	二・九三	二・九五	五〇	四八 3/4	四九 1/4	一四六 1/2	一四六 1/2	一四六 1/2
〃三	五〇 7/8	五〇 7/8	五〇 7/8	二・〇二 11/16	二・〇二 11/16	二・〇二 11/16	二・九五	二・九五	二・九三	四九 3/4	四七 3/4	四八 1/2	一四六 1/2	一四六 1/2	一四六 1/2
〃四	五〇 7/8	五〇 7/8	五〇 7/8	二・〇二 11/16	二・〇二 11/16	二・〇二 11/16	二・九五	二・九五	二・九三	四九 3/4	四七 3/4	四八 3/4	一四六 1/2	一四五 1/2	—
〃五	五一	五〇 7/8	—	二・〇二 13/16	二・〇二 11/16	—	二・九六	二・九五	—	四八 1/4	四七 1/2	四八	一四五 1/2	一四三 1/2	—
〃六	五一 1/4	五一	—	二・〇二 15/16	二・〇二 13/16	—	二・九八	二・九六	—	四七 1/2	四六 1/4	四七	一四三 1/2	一四二 1/2	—
〃七	五一 1/2	五一 1/4	—	二・〇三 1/16	二・〇二 15/16	—	三・〇〇	二・九八	—	四六 1/4	四五 1/2	四六	一四三	一四二 1/2	—
〃八	五一 3/4	五一 1/2	—	二・〇三 3/16	二・〇三 1/16	—	三・〇〇	三・〇〇	三・〇〇	四五 1/2	四二 1/2	四四 1/4	一四四 3/4	一四三	—
〃九	五一 3/4	五一 3/4	五一 3/4	二・〇三 3/16	二・〇三 3/16	二・〇三 3/16	三・〇〇	三・〇〇	三・〇〇	四二 1/2	三八 1/2	四〇	一五一	一四五 3/4	—
〃一〇	五一 7/8	五一 3/4	—	二・〇三 1/4	二・〇三 3/16	—	三・〇〇	三・〇〇	三・〇〇	四四 1/2	四一	四二 3/4	一五三 1/2	一五一	—
〃一一	五二 1/8	五二	—	二・〇三 5/16	二・〇三 5/16	二・〇三 5/16	三・〇〇	二・八五	—	四五	四三	四四	一五四	一五二	—
〃一二	五二 1/8	五二 1/8	五二 1/8	二・〇三 5/16	二・〇三 5/16	二・〇三 5/16	二・八五	二・八五	二・八五	四三	四一	四一 3/4	一五二	一四八	—
年中	五二 1/8	五〇 7/8	五一 3/8	二・〇三 5/16	二・〇二 11/16	二・〇二 15/16	三・〇〇	二・八三	二・九五	五〇 1/4	三八 1/2	四五 3/4	一五四	一四三 1/2	—
大正八・一	五一 7/8	五一 3/4	—	二・〇三 3/16	二・〇三 1/8	—	二・八三	二・八二	—	四一 1/2	四〇 1/2	四一	一四六 1/2	一四五	—

年月	弗 1	弗 2	弗 3	志片 1	志片 2	志片 3	法 1	法 2	法 3	兩 1	兩 2	兩 3	ルーピー 1	ルーピー 2	ルーピー 3
〃二	五一 1/2	五一 1/4	—	二・〇二	二・〇一 13/16	—	二・八一	二・七九	—	四五 1/4	四一 1/2	四三 1/2	一四四 1/2	一四四 1/2	一四四 1/2
〃三	五一	五〇 3/4	—	二・〇一 7/8	二・〇一 9/16	—	二・八一	二・七六	—	四六 3/4	四五	四五 3/4	一四三 1/2	一四二 1/2	—
〃四	五〇 3/4	五〇 3/4	五〇 3/4	二・〇二 3/16	二・〇一 7/8	—	三・〇〇	二・八一	三・〇〇	四五 1/2	四三 3/4	四四 1/2	一四四	一四二 1/2	—
〃五	五〇 3/4	五〇 3/4	五〇 3/4	二・〇二 5/16	二・〇二	—	三・二三	三・〇〇	—	四二 3/4	四〇	四一 1/4	一四四	一三二	—
〃六	五〇 3/4	五〇 5/8	—	二・〇二 5/16	二・〇二 5/16	二・〇二 5/16	三・二三	三・二三	三・二三	四一	三九	四〇	一三三	一二五	—
〃七	五〇 5/8	五〇 3/8	—	二・〇二 15/16	二・〇二 5/16	—	三・二八	三・二三	—	四〇 1/2	三九	三九 3/4	一三〇	一三五	—
〃八	五〇 3/8	五〇 3/8	五〇 3/8	二・〇三 1/8	二・〇二 15/16	—	三・五〇	三・二八	—	三九	三六 3/4	三七 3/4	一三〇	一三三	—
〃九	五〇 3/8	五〇 3/8	五〇 3/8	二・〇三 3/8	二・〇三 1/8	—	三・七五	三・五〇	—	三七 1/2	三五	三六 1/2	一三三	一二五	—
〃一〇	五〇 3/8	五〇 3/8	五〇 3/8	二・〇四 1/8	二・〇三 5/8	—	三・八七	三・五七	—	三五 1/2	三四	三五	一二六 1/2	一二五	—
〃一一	五〇 3/8	五〇 1/4	—	二・〇五 5/16	二・〇四 1/4	—	四・四〇	三・八七	—	三五 1/4	二六 1/2	三二 3/4	一一八	一一〇	—
〃一二	五〇 1/8	四九 7/8	—	二・〇六 1/2	二・〇五 3/8	—	四・八三	四・四二	—	三〇	二八	二九 1/4	一一〇	一〇六	—
年中	五一 7/8	四九 7/8	五〇 5/8	二・〇六 1/2	二・〇二 9/16	二・〇三	四・八三	二・七六	三・三八	四六 3/4	二六 1/2	三八 3/4	一四六 1/2	一〇六	—
大正九・一	四九 7/8	四九 5/8	—	二・〇七 3/4	二・〇六 1/2	—	五・二九	四・八三	—	三一 1/2	二九	三〇	一〇九	一〇六	—
〃二	四九 5/8	四八 3/4	—	二・〇八 1/4	二・〇七 5/8	—	五・六四	五・二九	—	三一 1/2	二八	二九 3/4	一一三	九七	—
〃三	四八 3/4	四七 3/4	—	二・〇七 5/8	二・〇三 1/2	—	五・五三	四・九五	—	三三	二九 1/2	三一	九七 1/2	九六	—
〃四	四八 7/8	四七 3/4	—	二・〇五 1/2	二・〇三 1/2	—	七・〇〇	五・五〇	—	三七 3/4	三一	三四 1/4	一〇五	九七 1/2	—
〃五	四九 5/8	四八 7/8	—	二・〇六	二・〇五 1/2	—	七・〇六	五・五〇	—	四二 1/2	三六 3/4	四〇 3/4	一三〇	一〇三 1/2	—
〃六	五〇	四九 5/8	—	二・〇六	二・〇六	二・〇六	五・五〇	四・七五	—	五三 1/2	四二	四七 1/2	一三八	一三五	—
〃七	五〇 1/2	五〇	—	二・〇七 1/4	二・〇六	—	六・四〇	四・七五	—	四九	四五	四八	一四五	一三八	—
〃八	五〇 5/8	五〇 1/2	—	二・〇九	二・〇七 7/8	—	六・九七	六・三七	—	四七	四二	四四 1/2	一五一	一四五	—
〃九	五〇 5/8	五〇 5/8	五〇 5/8	二・一〇 1/8	二・〇九	—	七・五七	六・九七	—	四七 1/2	四五 1/2	四六 3/4	一五七	一五一	—
〃一〇	五〇 5/8	五〇 5/8	五〇 5/8	二・一〇 1/8	二・一〇 1/8	二・一〇 1/8	七・五五	七・三七	—	五四 1/2	四七	五二	一八三	一五八	—
〃一一	五〇 1/2	五〇 1/4	—	二・一〇 3/8	二・一〇 1/8	—	七・八七	七・五五	—	六二 1/2	五一 1/2	五五 1/4	一八六	一七〇	—
〃一二	五〇 1/4	四八 1/4	—	二・一〇 3/8	二・一〇 3/8	二・一〇 3/8	八・〇七	七・八七	—	六九 1/2	六一 1/2	六五	二〇八	一八六	—

年月	弗	弗	弗	志片	志片	志片	法	法	法	両	両	両	ルーピー	ルーピー	ルーピー
年中	五〇5/8	四七3/4	四九5/8	二・一〇3/8	二・〇三1/2	二・〇七1/2	八・〇七	四・七五	六・三二	六九1/2	二八	四三3/4	二〇八	九六	—
大正一〇年・一月	四八1/4	四八	—	二・〇八3/8	二・〇五3/4	—	八・〇七	六・五〇	—	七三3/4	六二1/2	六四1/4	一八七	一七〇	—
〃 二	四八	四八	四八	二・〇五3/4	二・〇五1/2	—	六・七〇	六・四〇	—	七四1/2	六八	七二1/4	一八五	一七五	—
〃 三	四八	四八	四八	二・〇五1/2	二・〇五1/4	—	六・七〇	六・四〇	—	八一3/4	七三1/2	七六3/4	一九三	一八五	—
〃 四	四八	四八	四八	二・〇五1/2	二・〇五1/4	—	六・七〇	六・三〇	—	七六1/2	七〇1/4	七三	一八七	一八五1/2	—
〃 五	四八1/8	四八	—	二・〇五1/8	二・〇四3/4	—	六・三〇	五・四〇	—	七三3/4	六八1/2	七一3/4	一八九	一八三1/2	—
〃 六	四八	四七7/8	—	二・〇六1/4	二・〇五1/8	—	五・九八	五・六〇	—	七三1/4	七〇3/4	七二	一九八1/2	一八九	—
〃 七	四八	四七7/8	—	二・〇八3/8	二・〇六1/4	—	六・三三	五・八〇	—	七一3/4	六八1/2	七〇1/4	二一〇	一九八1/2	—
〃 八	四八1/4	四八	—	二・〇八3/8	二・〇七1/4	—	六・三三	六・〇〇	—	七二	六九1/2	七〇	二一〇	一八四	—
〃 九	四八1/4	四八	—	二・〇七1/4	二・〇六5/8	—	六・八二	六・〇七	—	六九3/4	五七1/2	六五1/4	一八六1/2	一七一1/2	—
〃 一〇	四八	四八	四八	二・〇六5/8	二・〇四7/8	—	六・六三	六・三三	—	六二1/4	五八	六〇	一七八1/2	一六六1/2	—
〃 一一	四八	四八	四八	二・〇五1/4	二・〇四5/8	—	六・八五	六・四二	—	六四	六〇1/2	六二1/4	一八〇	一七五	—
〃 一二	四八	四八	四八	二・〇四5/8	二・〇三	—	六・七三	五・八〇	—	六四	六一1/2	六二1/2	一七九	一六九3/4	—
年中	四八1/4	四七7/8	四八	二・〇八3/8	二・〇三	二・〇五7/8	八・〇七	五・四〇	六・三六	八一3/4	五七1/2	六八1/4	二一〇	一六六1/2	—
大正一一・一	四八	四八	四八・	二・〇三5/16	二・〇二3/4	二・〇三3/4	五・九二	五・七〇	—	六四1/2	六二1/2	六三1/4	一七〇3/4	一六九	—
〃 二	四八	四八	四八	二・〇二3/4	二・〇一1/2	二・〇二1/8	五・九二	五・〇五	—	六七1/4	六二1/2	六四3/4	一六九1/4	一六五	—
〃 三	四八	四八	四八	二・〇二3/8	二・〇一7/16	二・〇一15/16	五・三三	五・〇八	—	六九	六四1/4	六六1/4	一七一1/2	一六六1/2	—
〃 四	四八	四八	四八	二・〇一15/16	二・〇一9/16	二・〇一11/16	五・二〇	五・〇一	—	六四	六一	六二3/4	一七〇	一六八1/2	—
〃 五	四七3/4	四七1/2	四七5/8	二・〇一11/16	二・〇一1/2	二・〇一9/16	五・一七	五・〇六	—	六一1/2	五六	五九	一六九	一六二1/2	—
〃 六	四七1/2	四七1/2	四七1/2	二・〇二1/8	二・〇一3/8	二・〇一11/16	五・六〇	五・一三	—	六〇1/4	五八3/4	五九1/2	一六七1/4	一六二1/2	—
〃 七	四七3/4	四七3/4	四七3/4	二・〇一7/8	二・〇一5/8	二・〇一3/4	五・九五	五・五八	—	六一	五九1/2	六〇1/4	一六四3/4	一六三1/2	—
〃 八	四七3/4	四七3/4	四七3/4	二・〇一11/16	二・〇一1/2	二・〇一5/8	六・二五	五・六八	—	六二	六〇3/4	六一1/4	一六五	一六三	—
〃 九	四八	四七3/4	四八	二・〇二1/4	二・〇一5/8	二・〇一15/16	六・三五	六・一〇	—	六二	六〇1/4	六一1/2	一六八1/4	一六四	—
〃 一〇	四八	四八	四八	二・〇二5/16	二・〇一3/4	二・〇一15/16	六・八五	六・三〇	—	六四1/2	六二1/4	六三1/4	一六八	一六四1/2	—

年月	弗	弗	弗	志片	志片	志片	法	法	法	両	両	両	ルーピー	ルーピー	ルーピー
〃 一一	四八1/4	四八	四八1/8	二・〇一15/16	二・〇一5/8	二・〇一13/16	七・四五	六・七〇	—	六七3/4	六四1/2	六六1/4	一六五1/4	一六一	—
〃 一二	四八1/2	四八1/2	四八1/2	二・〇一5/8	二・〇〇7/8	二・〇一3/16	六・九〇	六・四〇	—	六八1/4	六六1/2	六七1/2	一六一	一五六1/4	—
年中	四八1/2	四七1/2	四七7/8	二・〇三5/16	二・〇〇7/8	二・〇一3/4	七・四五	五・〇二	五・八一	六九	五六	六三	一七一1/2	一五六1/4	一六五1/2
大正一二・一	四八1/2	四八1/2	四八1/2	二・〇一1/16	二・〇〇7/8	二・〇一	七・七五	六・五〇	—	六七1/2	六五3/4	六六3/4	一五六	一四五	—
〃 二	四八1/2	四八1/2	四八1/2	二・〇〇15/16	二・〇〇9/16	二・〇〇11/16	七・九五	七・五〇	—	六七1/4	六四3/4	六六1/2	一五二1/4	一四九3/4	—
〃 三	四八1/2	四八1/2	四八1/2	二・〇〇15/16	二・〇〇5/8	二・〇〇11/16	八・〇〇	七・三〇	—	六四	六二1/4	六三1/4	一五四	一五一1/4	—
〃 四	四九	四八1/2	四八5/8	二・〇一5/16	二・〇〇15/16	二・〇一	七・四五	七・一五	—	六五1/4	六二1/2	六四1/2	一五六1/4	一五四	—
〃 五	四九	四九	四九	二・〇一1/2	二・〇一5/16	二・〇一3/8	七・三五	七・二〇	—	六五3/4	六三3/4	六五	一五八1/4	一五五1/2	—
〃 六	四九	四九	四九	二・〇一5/8	二・〇一3/8	二・〇一7/16	七・九〇	七・四〇	—	六八1/4	六六1/4	六七	一五八1/4	一五七	—
〃 七	四九	四九	四九	二・〇一11/16	二・〇一3/8	二・〇一1/2	八・三五	七・九五	—	六九1/2	六七3/4	六八3/4	一五九	一五七	—
〃 八	四九	四九	四九	二・〇一7/8	二・〇一5/8	二・〇一11/16	八・八〇	八・三〇	—	六九1/2	六九	六九1/4	一六一1/2	一五九	—
〃 九（本月以降電信賣相場）	四九	四九	四九	二・〇一7/8	二・〇一1/2	二・〇一5/8	八・六五	七・六〇	—	六九1/2	六六3/4	〇	一六〇1/2	一五六1/4	—
〃 一〇	四九	四九	四九	二・〇二3/16	二・〇一5/8	二・〇一15/16	八・四〇	七・八〇	—	六九1/2	六八	六九	一五八	一五四	—
〃 一一	四九	四九	四九	二・〇三	二・〇二3/16	二・〇一13/16	九・一〇	八・二〇	—	六九1/2	六五	六七1/2	一五七	一五三	—
〃 一二	四九	四八1/2	四八5/8	二・〇二11/16	二・〇二1/4	二・〇一3/16	九・一〇	八・七五	—	六五3/4	六二	六三1/4	一五三1/4	一四八1/4	—
年中	四九	四八1/2	四八7/8	二・〇三	二・〇〇9/16	二・〇一9/16	九・一〇	六・五〇	七・九四	六九1/2	六二	六六1/2	一六一1/2	一四五	一五五1/8
大正一三・一	四八1/4	四七1/2	四七3/4	二・〇三1/16	二・〇二7/16	二・〇二11/16	九・九〇	九・〇〇	九・二四	六四	六〇	六二	一五五1/4	一四三1/2	一四七3/4
〃 二	四七1/2	四七1/2	四七1/8	二・〇二9/16	二・〇二1/16	二・〇二7/16	一〇・九五	九・四〇	一〇・〇四	六二1/4	六一1/4	六一1/2	一五二	一四六	一四九
〃 三	四七1/2	四四	四六1/2	二・〇二11/16	二・〇〇1/2	二・〇一15/16	一三・一〇	七・三〇	九・二三	六二	五八	五九3/4	一五〇1/2	一四〇	一四四
〃 四	四二	四〇	四二1/8	一・一一7/16	一・〇九15/16	一・一〇5/8	七・三五	五・六五	六・四三	五九1/2	五四	五七1/4	一四〇	一二四	一三三3/4
〃 五	四〇1/4	四〇	四〇1/8	一・一〇3/8	一・〇九1/16	一・一〇1/16	七・四〇	五・九〇	六・六二	五六1/4	五三3/4	五五	一三二	一三〇	一三一
〃 六	四二1/2	四〇1/4	四〇3/4	一・一一	一・一〇3/8	一・一〇5/8	七・八五	六・九〇	七・四九	五八	五四3/4	五六1/2	一三五3/4	一三二	一三三3/4
〃 七	四二1/2	四一	四二1/4	一・一一	一・一〇1/4	一・一〇11/16	八・〇五	七・六〇	七・七八	五八	五五1/2	五六3/4	一三六	一二八1/4	一三二

年次	大正一三年	一四	一五	昭和元・一二	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五
日銀	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三
普通銀行	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三
貯蓄銀行	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三
信託	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三
合計	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三

第六表　果年全國貨物輸出入價額表

（備考）一、明治十三年より同三十年九月迄の統計數字は日里及び孟買相場とあるは本邦貿易總額を基礎とする相場なり。二、明治十三年より同三十年九月迄の統計數字は日里及び孟買相場とあるは本邦貿易總額を基礎とする相場なり。

年次	輸出	輸入	差引超過(△)入超	輸出入合計
明治十三年	三、三〇〇、〇〇〇圓	三、三〇〇、〇〇〇圓	同上	六、六〇〇、〇〇〇圓
十四	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
十五	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
十六	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
十七	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
十八	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
十九	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
二十	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
二一	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
二二	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
二三	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
二四	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
二五	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
二六	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
二七	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
二八	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
二九	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
三〇	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
三一	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
三二	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
三三	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
三四	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
三五	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
三六	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
三七	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
三八	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
三九	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
四〇	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
四一	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
四二	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
四三	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
四四	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇
四五	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	同上	六、六〇〇、〇〇〇

年次	輸出	輸入	輸出入合計	差引超過(△)入超
大正一三年	一、一一一、一一一圓	一、一一一、一一一圓	二、二二二、二二二圓	同上
一四	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
一五	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
昭和元・一二	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
二	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
三	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
四	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
五	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
六	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
七	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
八	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
九	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
一〇	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
一一	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
一二	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
一三	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
一四	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
一五	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
一六	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
一七	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
一八	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
一九	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
二〇	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
二一	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
二二	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
二三	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
二四	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
二五	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
二六	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
二七	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
二八	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
二九	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
三〇	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
三一	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
三二	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
三三	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
三四	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
三五	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
三六	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
三七	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
三八	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
三九	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
四〇	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
四一	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
四二	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
四三	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
四四	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上
四五	一、一一一、一一一	一、一一一、一一一	二、二二二、二二二	同上

年次	輸出	輸入	輸出入合計	差引超過(△)入超
同四五	二、九八六、〇〇〇圓	二、九八六、〇〇〇圓	五、九七二、〇〇〇圓	同上
同四六	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同四七	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同四八	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同四九	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五〇	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五一	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五二	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五三	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五四	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五五	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五六	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五七	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五八	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五九	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六〇	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六一	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六二	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六三	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六四	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六五	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六六	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六七	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六八	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六九	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七〇	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七一	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七二	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七三	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七四	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七五	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七六	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七七	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七八	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七九	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同八〇	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同八一	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同八二	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同八三	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同八四	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同八五	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上

年次	輸出	輸入	輸出入合計	差引超過(△)入超
同四五	二、九八六、〇〇〇圓	二、九八六、〇〇〇圓	五、九七二、〇〇〇圓	同上
同四六	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同四七	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同四八	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同四九	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五〇	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五一	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五二	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五三	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五四	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五五	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五六	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五七	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五八	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同五九	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六〇	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六一	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六二	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六三	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六四	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六五	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六六	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六七	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六八	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同六九	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七〇	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七一	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七二	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七三	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七四	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七五	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七六	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七七	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七八	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同七九	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同八〇	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同八一	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同八二	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同八三	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同八四	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上
同八五	二、九八六、〇〇〇	二、九八六、〇〇〇	五、九七二、〇〇〇	同上

明治六	二一、六三五、四四一円	二八、一〇七、三九〇円	四九、七四二、八三二円	△六、四七一、九四九円	—円	—円	—円	—円	二一、六三五、四四一円	二八、一〇七、三九〇円	四九、七四二、八三二円	△六、四七一、九四九円
同七	一九、三一七、三〇六	二三、四六一、八一四	四二、七七九、一二〇	△四、一四四、五〇八	—	—	—	—	一九、三一七、三〇六	二三、四六一、八一四	四二、七七九、一二〇	△四、一四四、五〇八
同八	一八、六二一、一一二	二九、九七五、六二八	四八、五八六、七三九	△一一、三六四、五一七	—	—	—	—	一八、六二一、一一二	二九、九七五、六二八	四八、五八六、七三九	△一一、三六四、五一七
同九	二七、七二一、五三八	二三、九六四、六七九	五一、六七六、二〇七	三、七四六、八四九	—	—	—	—	二七、七二一、五三八	二三、九六四、六七九	五一、六七六、二〇七	三、七四六、八四九
同一〇	二三、三四八、五三三	二七、四二〇、九〇三	五〇、七六九、四二五	△四、〇七三、三八一	—	—	—	—	二三、三四八、五三三	二七、四二〇、九〇三	五〇、七六九、四二五	△四、〇七三、三八一
同一一	二五、九八八、一四〇	三三、八七四、八三四	五八、八六二、九七四	△六、八八六、六九四	—	—	—	—	二五、九八八、一四〇	三三、八七四、八三四	五八、八六二、九七四	△六、八八六、六九四
同一二	二八、一七五、七七〇	三二、九五三、〇〇二	六一、一二八、七七二	△四、七七七、二三三	—	—	—	—	二八、一七五、七七〇	三二、九五三、〇〇二	六一、一二八、七七二	△四、七七七、二三三
同一三	二八、三九五、三八七	三六、六二六、六〇一	六五、〇三一、九八八	△八、二三一、二一四	—	—	—	—	二八、三九五、三八七	三六、六二六、六〇一	六五、〇三一、九八八	△八、二三一、二一四
同一四	三一、〇五八、八八八	三一、一九一、二四六	六二、一五〇、一三四	△一三二、三五八	—	—	—	—	三一、〇五八、八八八	三一、一九一、二四六	六二、一五〇、一三四	△一三二、三五八
同一五	三七、七二一、七五一	二九、四四六、五九四	六七、一六八、三四五	八、二七五、一五七	—	—	—	—	三七、七二一、七五一	二九、四四六、五九四	六七、一六八、三四五	八、二七五、一五七
同一六	三六、二六八、〇三〇	二八、四四四、八四二	六四、七一三、八六二	七、八二三、一七八	—	—	—	—	三六、二六八、〇三〇	二八、四四四、八四二	六四、七一三、八六二	七、八二三、一七八
同一七	三三、八七一、四六六	二九、六七二、六四七	六三、五四四、一一三	四、一九八、八一九	—	—	—	—	三三、八七一、四六六	二九、六七二、六四七	六三、五四四、一一三	四、一九八、八一九
同一八	三七、一四六、六九一	二九、三五六、九六八	六六、五〇三、六五九	七、七八九、七二三	—	—	—	—	三七、一四六、六九一	二九、三五六、九六八	六六、五〇三、六五九	七、七八九、七二三
同一九	四八、八七六、三一三	三二、一六八、四三二	八一、〇四四、七四五	一六、七〇七、八八一	—	—	—	—	四八、八七六、三一三	三二、一六八、四三二	八一、〇四四、七四五	一六、七〇七、八八一
同二〇	五二、四〇七、六八一	四四、三〇四、二五二	九六、七一一、九三三	八、一〇三、四二九	—	—	—	—	五二、四〇七、六八一	四四、三〇四、二五二	九六、七一一、九三三	八、一〇三、四二九
同二一	六五、七〇五、五一〇	六五、四五五、二三四	一三一、一六〇、七四四	二五〇、二七六	—	—	—	—	六五、七〇五、五一〇	六五、四五五、二三四	一三一、一六〇、七四四	二五〇、二七六
同二二	七〇、〇六〇、七〇六	六六、一〇三、七六七	一三六、一六四、四七三	三、九五六、九三九	—	—	—	—	七〇、〇六〇、七〇六	六六、一〇三、七六七	一三六、一六四、四七三	三、九五六、九三九
同二三	五六、六〇三、五〇六	八一、七二八、五八一	一三八、三三二、〇八七	△二五、一二五、〇七五	—	—	—	—	五六、六〇三、五〇六	八一、七二八、五八一	一三八、三三二、〇八七	△二五、一二五、〇七五
同二四	七九、五二七、二七二	六二、九二七、二六八	一四二、四五四、五四〇	一六、六〇〇、〇〇四	—	—	—	—	七九、五二七、二七二	六二、九二七、二六八	一四二、四五四、五四〇	一六、六〇〇、〇〇四
同二五	九一、一〇二、七五四	七一、三二六、〇八〇	一六二、四二八、八三四	一九、七七六、六七四	九六、七一二	四、六五六、二二〇	四、七五二、九三二	△四、五五九、五〇八	九一、一九九、四六六	七五、九八二、三〇〇	一六七、一八一、七六六	一五、二一七、一六六
同二六	八九、七一二、八六五	八八、二五七、一七二	一七七、九七〇、〇三七	一、四五五、六九三	七二一、三六二	一、一七三、六四九	一、八九五、〇一一	△四五二、二八七	九〇、四三四、二二七	八九、四三〇、八二二	一七九、八六五、〇四八	一、〇〇三、四〇六
同二七	一一三、二四六、〇八六	一一七、四八一、九五五	二三〇、七二八、〇四一	△四、二三五、八六九	四六二、五〇一	三、七六三、六三九	四、二二六、一四〇	△三、三〇一、一三八	一一三、七〇八、五八七	一二一、二四五、五九四	二三四、九五四、一八一	△七、五三七、〇〇七
同二八	一三六、一一二、一七八	一二九、二六〇、五七八	二六五、三七二、七五六	六、八五一、六〇〇	一、三八二、四三八	九、四八四、七一七	一〇、八六七、一五五	△八、一〇二、二七九	一三七、四九四、六一六	一三八、七四五、二九五	二七六、二三九、九一一	△一、二五〇、六七九
同二九	一三九、二四四、九八七	一八〇、三〇五、四七六	三〇九、五五〇、四六三	△四一、〇六〇、四八九	一、六八一、六六四	八、四一三、四九九	一〇、〇九五、一六三	△六、五三一、八三五	一三一、一二六、六五一	一八八、七一八、九七五	三一九、八四五、六二六	△五七、五九二、三二四

同三〇	一七五、八九四、三七一	二三一、九六〇、〇七〇	四〇七、八五四、四四一	△五六、〇六五、六九九	一、九八一、一二六	四三、二二〇、四三三	四五、二〇一、五五九	△四一、二三九、三〇七	一七七、八七五、四九七	二七五、一八〇、五〇三	四五三、〇五六、〇〇〇	△九七、三〇五、〇〇六
同三一	一七八、五八〇、九四三	二九四、三七七、五六二	四七二、九五八、五〇五	△一一五、七九六、六一九	二、四八六、七八〇	四七、二五八、〇六二	四九、七四四、八四二	△四四、七七一、二八二	一八一、〇六七、七二三	三四一、六三五、六二四	五二二、七〇三、三四七	△一六〇、五六七、九〇一
同三二	二二六、〇四四、八一五	二三四、六七五、〇一八	四六〇、七一九、八三三	△八、六三〇、二〇三	三、四五二、〇七六	八、六五六、八四一	一二、一〇八、九一七	△五、二〇四、七六五	二二九、四九六、八九一	二四三、三三一、八五九	四七二、八二八、七五〇	△一三、八三四、九六八
同三三	二一五、〇〇一、二七九	三〇〇、八三三、五一〇	五一五、八三三、七八九	△八五、八三一、二三一	五、一三二、九一三	三六、〇九六、三七九	四一、二二九、二九二	△三〇、九六三、四六六	二二〇、一三四、一九一	三三六、九二八、八八九	五五七、〇六三、〇八〇	△一一六、七九四、六九八
同三四	二六〇、六四八、三四三	二六八、六二六、四四〇	五二九、二七四、七八三	△七、九七八、〇九七	一四、一五八、二五四	三六、四一八、一〇三	五〇、五七六、三五七	△二二、二五九、八四八	二七四、八〇六、五九七	三〇五、〇四四、五四三	五七九、八五一、一四〇	△三〇、二三七、九四五
同三五	二七二、一一九、九三三	二八一、八三一、七九一	五五三、九五一、七二四	△九、七一一、八五八	一三、九七三、六四〇	一九、一〇六、三二九	三三、〇七九、九六九	△六、一三二、六八九	二八六、〇九三、五七三	三〇〇、九三八、一二〇	五八七、〇三一、六九三	△一四、八四四、五四七
同三六	三〇〇、五八〇、七六三	三三八、一四四、九八二	六三八、七二五、七四五	△三七、五六四、二一九	一四、六五七、三三四	四、二三八、五六三	一八、八九五、八九七	一〇、四一八、七七一	三一五、二三八、〇九七	三四二、三八三、五四五	六五七、六二一、六四二	△二七、一四五、四四八
同三七	三三一、六五二、〇三〇	三八三、九五〇、七四八	七一五、六〇二、七七八	△五二、二九八、七一八	一〇、四二六、四二二	四四〇、二四四	一〇、八六六、六六六	九、九八六、一七八	三四二、〇七八、四五二	三八四、三九〇、九九二	七二六、四六九、四四四	△四二、三一二、五四〇
同三八	三三二、一六三、二二七	四九九、五〇一、八九四	八三一、六六五、一二一	△一六七、三三八、六六七	一三、五七四、四五六	五二七、二八七	一四、一〇一、七四三	一三、〇四七、一六九	三四五、七三七、六七三	五〇〇、〇二九、一八一	八四五、七六六、八五四	△一五四、二九一、五〇八
同三九	四三三、五三三、九七六	四三一、五二一、五六八	八六五、〇五五、五四四	二、〇一二、四〇八	二〇、五六九、五一六	三三、五八五、一五八	五四、一五四、六七四	△一三、〇一五、六四二	四五四、一〇三、四九二	四六五、一〇六、七二六	九一九、二一〇、二一八	△一一、〇〇三、二三四
同四〇	四四二、一五四、三〇二	五〇五、六八八、〇三二	九四七、八四二、三三四	△六三、五三三、七三〇	二二、二〇八、三二七	九、五九七、五〇七	三一、八〇五、八三四	一二、六一〇、八二〇	四六四、三六二、六二九	五一五、二八五、五三九	九七九、六四八、一六八	△五〇、九二二、九一〇
同四一	三八七、五四三、五七一	四五三、三三二、二二八	八四〇、八七五、七九九	△六五、七八八、六五七	二〇、七五八、八八七	一〇、九四六、六六三	三一、七〇五、五五〇	九、八一二、二二四	四〇八、三〇二、四五八	四六四、二七八、八九一	八七二、五八一、三四九	△五五、九七六、四三三
同四二	四二四、八〇〇、〇八七	四〇六、七九〇、三一三	八三一、五九〇、四〇〇	一八、〇〇九、七七四	一八、八七一、五九〇	九、四六六、五七六	二八、三三八、一六六	九、四〇五、〇一四	四四三、六七一、六七七	四一六、二五六、八八九	八五九、九二八、五六六	二七、四一四、七八八
同四三	四七一、九七二、八三四	四八七、六二五、三六二	九五九、五九八、一九六	△一五、六五二、五二八	二〇、〇七八、六七八	九、八五六、六四一	二九、九三五、三一九	一〇、二二二、〇三七	四九二、〇五一、五一二	四九七、四八二、〇〇三	九八九、五三三、五一五	△五、四三〇、四九一
同四四	四六六、二二五、八八二	五五三、三九〇、〇〇〇	一、〇一九、六一五、八八二	△八七、一六四、一一八	一九、三三二、一六七	一八、六三〇、八五六	三七、九六三、〇二三	七〇一、三一一	四八五、五五八、〇四九	五七二、〇二〇、八五六	一、〇五七、五七八、九〇五	△八六、四六二、八〇七
大正元	五四七、五五九、六七八	六六四、六五八、八三七	一、二一二、二一八、五一五	△一一七、〇九九、一五九	二一、三八三、三九〇	二五、〇〇〇、四〇一	四六、三八三、七九一	△三、六一七、〇一一	五六八、九四三、〇六八	六八九、六五九、二三八	一、二五八、六〇二、三〇六	△一二〇、七一六、一七〇
同二	六五一、三二四、三八二	七七九、〇七三、八五九	一、四三〇、三九八、二四一	△一二七、七四九、四七七	二三、七一三、三五三	三九、七五二、一〇八	六三、四六五、四六一	△一六、〇三八、七五五	六七五、〇三七、七三五	八一八、八二五、九六七	一、四九三、八六三、七〇二	△一四三、七八八、二三二
同三	六〇一、五三二、二三六	六二三、三九七、五〇二	一、二二四、九二九、七三〇	△二一、八六五、二七四	三〇、〇二六、四八三	六、六八六、七一四	三六、七一三、一九七	二三、三三九、七六九	六三一、五五八、七一九	六三〇、〇八四、二一六	一、二六一、六四二、九三五	一、四七四、五〇三
同四	七三三、〇五六、八一五	五六三、三九一、一九八	一、二九六、四四八、〇一三	一六九、六六五、六一七	二一、一三一、九二三	一二、八二六、五〇九	三三、九五八、四三二	八、三〇五、四一四	七五四、一八八、七三八	五七六、二一七、七〇七	一、三三〇、四〇六、四四五	一七七、九七一、〇三一
同五	一、一七三、九七五、一〇三	七九四、五三二、七五八	一、九六八、五〇七、八六一	三七九、四四二、三四五	二五、七一九、四四二	一四、一〇九、二二九	三九、八二八、六七一	一一、六一〇、二一三	一、一九九、六九四、五四五	八〇八、六四一、九八七	二、〇〇八、三三六、五三二	三九一、〇五二、五五八
同六	一、六六三、四五四、〇四二	一、〇八八、三〇六、七六三	二、七五一、七六〇、八〇五	五七五、一四七、二七九	三七、七〇四、二四〇	一七、七一一、〇二八	五五、四一五、二六八	一九、九九三、二一二	一、七〇一、一五八、二八二	一、一〇六、〇一七、七九一	二、八〇七、一七六、〇七三	五九五、一四〇、四九一
同七	二、〇一四、一九二、七五一	一、七四四、八四九、八七九	三、七五九、〇四二、六三〇	二六九、三四二、八七二	五九、八三八、三一九	三三、二四〇、二〇九	九三、〇七八、五二八	二六、五九八、一一〇	二、〇七四、〇三一、〇七〇	一、七七八、〇九〇、〇八八	三、八五二、一二一、一五八	二九五、九四〇、九八二
同八	二、一五六、五九三、五四八	二、三三五、七五一、七一五	四、四九二、三四五、二六三	△一七九、一五八、一六七	八一、五七四、四一八	五二、〇〇五、三〇四	一三三、五七九、七二二	二九、五六九、一一四	二、二三八、一六七、九六六	二、三八七、七五七、〇一九	四、六二五、九二四、九八五	△一四九、五八九、〇五三
同九	二、〇一一、二〇六、七六三	二、五〇二、七一六、三三九	四、五一三、九二三、一〇二	△四九一、五〇九、五七六	九一、七六五、四二八	四二、八一三、〇三八	一三四、五七八、四六六	四八、九五二、三九〇	二、一〇二、九七二、一九一	二、五四五、五二九、三七七	四、六四八、五〇一、五六八	△四四二、五五七、一八六

	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円
大正一〇	一,二九七,二六三,九一三	一,七三〇,四八七,一三三	三,〇二七,七五一,〇四六	△四三三,二二三,二二〇	五五,七五九,二四七	六三,〇五一,五三三	一一八,八一〇,七八〇	△七,二九二,二六六	一,三五三,〇二三,一六〇	一,七九三,五三八,六六六	三,一四六,五六一,八二六	△四四〇,五一五,五〇六
同一一	一,六八六,五〇四,九四八	二,〇二三,〇二七,八七七	三,七〇八,五三二,八二五	△三三七,五二二,九二九	五〇,五三四,六九一	四三,二二七,八一八	九三,七五二,五〇九	七,三一六,八七三	一,七三六,〇三九,六三九	二,〇六六,二四五,六九五	三,八〇二,二八五,三三四	△三三〇,二〇六,〇五六
同一二	一,四九七,三〇六,四六二	二,一一九,六八〇,三一四	三,六一六,九八六,七七六	△六二二,三七三,八五二	四四,七九九,九七五	三五,三七二,一一三	八〇,一七二,〇八八	九,四二七,八六二	一,五四二,一〇六,四三七	二,一五五,〇五二,四二七	三,六九七,一五八,八六四	△六一三,九四五,九九〇
同一三	一,八七一,九八九,八七一	二,五九七,六〇二,六〇二	四,四六九,五九二,四七三	△七二五,六一二,七三一	五一,一一二,六五九	五五,五七六,二〇二	一〇六,六八八,八六一	△四,四六三,五四三	一,九二三,一〇二,五三〇	二,六五三,一七八,八〇四	四,五七六,二八一,三三四	△七三〇,〇七六,二七四
同一四	二,三七七,八九七,四六八	二,七三四,五三五,〇九〇	五,一一二,四三二,五五八	△三五六,六三七,六二二	四八,五七八,九九〇	五五,二七八,一七五	一〇三,八五七,一六五	△六,六九九,一八五	二,四二六,四七六,四五八	二,七八九,八一三,二六五	五,二一六,二八九,七二三	△三六三,三三六,八〇七
昭和元	二,二一八,八二二,四三三	二,五六三,四二六,〇九二	四,六八二,二四八,五二五	△四四四,六〇三,六五九	五三,三九九,九六三	四七,八九八,八九八	一〇一,二九八,八六一	五,五〇一,〇六五	二,一七二,三三三,三九六	二,六一一,三三四,九九〇	四,七八三,五四七,三八六	△四三九,一〇三,五九四

附錄　明治大正各年金融概況

明治大正年間に於ける本邦金融事情の變遷狀況に就きては、本文中に之れを述べたり。而も其の記述せる所、結構上重要事項に分ち、之れを横斷的に概觀したるのみならず、一面努めて銀行編又は通貨編の内容に重複することを避けたるを以て、記述の精粗其の軌を一にせざるの憾みあり。仍ち玆に附錄として「明治大正各年金融概況」を掲げ、一は以て本邦金融市場累年の狀況を知るの參考に供し、他は以て本文記述の缺を補ふの責に爲さんと欲す。

以下「明治大正各年金融概況」として收載する所のものは、總て大藏省銀行課又は同銀行局の年報中、其の重要記事を拔萃せる所に係り、而して該年報は或は「銀行課報告」（明治六年七月乃至同十三年六月）と云ひ、或は「銀行營業報告」（明治二十三年乃至同三十七年）「銀行及擔保附社債信託事業報告」（明治三十八年乃至大正三年）と爲し、或は又「銀行局年報」（大正四年以降）と稱する等、其の名稱前後必ずしも相同じからずと雖も、之れ畢竟大藏省官制の改革又は事務上の便宜に依る所にして、一定年度に於ける銀行其の他の金融機關の營業狀況及金融市場の一般狀況に就き調査報告せる點に於ては固より終始異る所なし。

本年報は明治十三年「銀行課第一次報告」として明治六年七月乃至同十二年六月の事績を報告したるものを以て最初と爲し、次いで翌明治十四年同第二次報告として其の後一年間の事績を報告し、爾後毎年順次之れを報告したるものにして、明治二十二年度以降は報告期間を總て暦年次に隨

ふこととせり。但し報告内容に至りては時代の變遷乃至は金融市場の發達に伴ひ、概觀して首尾一貫せざるものありと雖も、之れ蓋し已むを得ざる所なりと謂ふべし。

本年報は右の如く其の端を遠く明治十三年に發し、各年度の金融狀況を詳細に報告せるものなるを以て、本邦金融史料として寔に逸すべからざる貴重文獻に數へらるるものなりと雖も、其の初期の年報に至りては世上に流布せるもの極めて稀にして、之れが閲讀の便を有せざるもの尠からざるなり。仍ち玆に之れを拔萃して收載することは此の意味に於ても亦徒事ならざるべきを信ずる。但し第一次及第二次年報は、其の後の各年報に比し記述の體裁を異にし、遽に之れを拔萃し得ざるを以て玆には之れを割愛し、第三次以後の分を順次收載することとせり。

自明治十三年七月至同十四年六月

今本年度間金融の景況を按ずるに、十三年下半季に於ては全國一般に非常の梗塞を告げ、一時は流融の道殆んど阻絶せらるるに至れり。此の梗塞は既に前季に於て其兆を現はし、本年度に入りて益其勢を長ぜしものなり。其根理は銀貨の騰貴に外ならず。試に前季以來銀貨の價格を察するに十三年一二月の交は三割より四割の間に昇降せしが、四月に至り暴進して五割四分の高點に騰せり。是を以て大藏卿は一時其賣買を停止せられたる後は稍騰躍の勢焰を挫くが如しと雖も、本年度に入り其氣勢再燃し、九月に至り俄に進で七割八分の極點に達し、遂に捩止する所なく、以て此半季を終れり。夫れ銀貨の相場上騰すれば隨て紙幣の價格を低落す、是を以て物貨悉く其價を騰せり。而て地方の農家は比年の豐穰に拘らず、米價の頻りに騰貴するを以て俄に其購買力を進め、商估は奇を居して利を謀り、頻りに物品の運入を促し、爲めに物價を攪亂す。是實に融通を梗塞するの近因にして、金利の荐りに騰貴するも亦之に由らざるはなし。又橫濱神戸諸港の如きは貿易の盛衰常に銀貨の價格に影響し、其一昇一低の間或は銀貨餘裕ありて紙幣缺乏を告げ、或は紙幣稍裕にして銀貨忽ち竭くることありて頃刻緩急を變ず。之に關する商估は其機に乘じ、或は銀貨の必要なきに之を買收し、或は紙幣の乏に苦しむも之を賣却せず。實勢より虛勢を生じ、遂に非常の利息割合を激成す。東京大阪の如き商業密邇の地は常に其刺戟を受く。故に促迫の甚しきときは、民間の金利は百圓に付日歩十錢より十五錢を要すと雖も、敢て厭はざるの情あるに至れり。其他の地方は低きも年二割に降らず、高きは三割以上に及ぶ。是を以て預け金は隨て預くれば隨て引出し、常に其殘高を留めて銀行の假資本となして之を運轉するの餘裕を與へず。故に當半季末日の差引殘高を見るに、諸預金共に前年度兩半季末日に比照すれば大に其高を減殺せる亦以て證す可きなり。貸付金は其既に貸付たるものは概ね延期に屬し、新に貸付を請ふもの日に殺到し、有限の資本を以て無窮の需めて應じ難き勢あり。是に於て銀行は頻りに戒愼を加へて金融を調理し、永期に涉る貸付及貸越は之を謝絶し、務めて短期の貸付を爲して其回轉を急にせり。是れ當座定期の預金に於て盈滿地を易へ、貸付金に於て增額を示す所以なり。十四年上半季は全く反對の景況を現はし、金融太た緩弛なり。是蓋し太劇の反動は必ず太閑を來すは自然の商勢にして、農家の購買力漸く衰へ、物價騰貴の氣勢自から減殺せられて銀貨米價も亦大に低落するを以てなり。故に都會の商情平穩にして、物貨の輻輳平時より減少するあるを知れり。釀て各地方の景況を見れば米價の意外に低落するを以て商估は務めて之を維持して糶出を爲さず、農家は賣吝みの情を懲き、他借を以て納租を辨ずるもの多く、之が爲め或は金融逼迫の狀あり、其他地方の物產賣買の景況に由り、多少閑劇を異にすと雖も、全國を通觀すれば金融緩弛と謂はざるを得ず。然れども一般金利の割合は前季に比すれば尙ほ幾分の高點を占むるが如し。是蓋し前季促迫の餘勢を承くるものにして、各商估共に不景氣に馴るるの致す所なきに非るを得んや。

夫れ如此金融否塞して金利騰貴すれば、公債證書所有主は之を保持するに力なく、自から賣出しを促して其價格を低落せしむるに至る。賣人は益增加し、買人は益減少するときは市價は益低向して止まず。十二月中七分利付金祿公債の市價は六十圓以內の低點に降れり。夫れ公債證書は銀行の由て以て資本とする所のものにして、其關係極めて大なり。若し夫れ低落して止まざれば、自から資本を減殺せらるるが如し。是を以て銀行の風雨に先て綢繆の策を立つるものは、往々公債價格準備として積立金を爲すものあり別段積立金に於て增額を示すは之に由

るなり。又公債の市價低向中と雖も自から小昂低あるを以て其間に資買の機を窺て其利を謀るもの少なからず。是乃ち公債證書資買に於て巨額を示す所以なり。

要するに本年度間銀行の營業は金融促迫の爲めに刺衝せられ、一日も餘資を閑却せしむるの暇なし。然れども全體より觀察を下せば其業務駸々として開進の狀あり。乃ち爲換荷爲換割引の三種を合て前年度は九千五百七十三萬餘圓なるも本年度は四千六十餘萬圓を增加し、本年度末日の金銀有高を以て前年度末日に比照すれば殆んど百五十萬圓の增加を見る。亦以て證す可きなり。而て其收益如何を察するに總益金より諸經費及び損失を差引たる純益は資本金に對して一割五分にして割賦金は一割三分に當れり。此の一割三分は各國立銀行を通じたる利益割合の平均點と爲せば其收益決して寡少なりと爲さず。是卽ち銀行者の能く其商勢に應じて運用の方略を盡したる成果と謂ふ可し。

自明治十四年七月至同十五年六月

貨幣は百貨の標準なり。貨幣にして其價格浮沈常なし何を以て物價の動搖を見んや。夫れ物價の動搖は商業の信縮に根し商業の信縮は金融閑劇の因を爲すは商業世界の常勢と爲す。今我數年間の商勢を察するに則然らず。紙幣の價格浮沈極りなく常に低點に傾きしより物價の動搖は商業の信縮に由らずして紙幣の浮沈に制せらるるの狀あり。之が爲めに商勢其序を紊り金融の煩閑急激の變動を起し逼迫の聲市場に嘖々たり。本年度に入り金融逼迫の聲は一轉して商業不景氣の言に變じ市場寂然として閑境に沈み各商估をして皆資本を沈滯せしむるに至れり。夫れ如此金融の閑劇掌を反すが如きもの他なし銀貨の昂低卽ち紙幣價格の浮沈に根由するものなり。夫れ紙幣流通の增減たる職として政治上の原因に歸するが故に一國の富と興に增殖を竝發する正路の進行に非ざるなり。是を以て明治十年以降數年間其流通高暴に膨脹するや忽ち物貨の權衡を失ふより紙幣は漸く下降し物價は之に反して激昂して止まざれば遂に資本の缺乏を告げ商估は皆金融の梗塞に苦む所以なり。然るに前季以來其缺乏の極遂に賤極て反て貴く紙幣は漸く其價格を恢復し物價は益低降の狀あり。本年度に入りて商況益不景氣に陷り遂に反動の困阨に罹りたるは之が爲めなり。故に本年度の金融は橫濱生絲の葛藤を除くの外は、納租の期頗る痲痺を與へたるも亦一時の掛衝に過ず忽ち又緩局に歸せり。要するに本年度の金融は分て三大段と爲すべし。七月より九月に至るの間は漸く緩弛に趨くの期となし、十月より稍繁忙を起し、翌年三月中旬に至るまで常に繁忙の中に在りて間逼迫の聲を聞く。三月中旬以降本年度を終るの間は、一二の地方を除くの外は緩更に緩を加へ各銀行共に遊資を委積するの情形を現はせり。

明治十五年

本年は商況不振に陷ゐりたれば、金融も亦た極めて沈靜曾て活動の象なきは自然の數なり。今其概況を陳ぶれば、一二月より三月中旬に涉りて地租の納期と地方決算の期に會したれば、金融頗る繁閙一時逼迫を告ぐるに至る。是を以て金利も亦上騰せり。三月中旬以降緩急緩に趨き以て七月に至る。閑散の境に沈みたるも八月に至り朝鮮の變報一度達するや市情恟々として電後の雷を待つが如く忽ち諸相場に變動を生じ殊に銀貨の如きは七月中一圓五十六錢一二厘を往來せしが俄に昇りて一圓六十一錢八厘に至れり。他諸相場の變動も亦以て推知すべし。爾後益强氣を見はし場面頗る活潑の景氣を現はし漸次上向き八月十四日には一圓七十三錢迄に上騰せり。又八月初旬限月米は七圓三十錢より五十錢なりしも其中旬は八圓五十九錢に騰せしが故に金融上頗る波瀾を起したり。是れ固より虛聲より實勢を形はすものにして其下旬和議の報達せしより諸相場俄に弱氣を現はし金融稍緩局に入り、九月下旬より十月中旬迄小締の姿なりしも歲尾に迫まり却て緩緩に流れたり。此の原因は物價低落商業不振の時に際し公債證書の抽籤及び秩祿公債元金の償還ありし等に由り益財路を融解せしものならん。然れども今更に全國の總況を通觀するに都會に在ては豪商富估は物貨の不捌にして資本運轉の機關頓に止み之が爲めに閑散に苦しむの狀ありと雖も地方の小賣商人は大概商品の代價を都會に借るを以て商品の仕入を減却すれば其の負債を償はざるを得ず。之が爲め商業の不振は地方金融澁滯の因たり。之を要するに本年中の金融は或は突然山に登り忽ち谷に陷り又去て坦途に就くが如く其變轉時ありて掌を反すが如き狀あり。究竟平穩の年と謂ふ可からず。是を以て商業者は猶ほ遠洋に航するが如く或は西或は東其方針未だ定まらざるの情形あり。故に金利は前年に比すれば反て幾分の高點に居ると雖も十月以還は商勢略ぼ定まりて次第に下向の傾むきあり。

抑も金融の煩閑は其原因一にして足らずと雖も、大要商業の浮沈に歸せざるはなし。然れども商業の浮沈は又他に原因のあるあり、乃ち紙幣の增減と銀貨の高低は實に物價を左右する所以にして、物價の高低は商業浮沈の因たり。而して公債價格は金利高低を標するものにして、即ち金融煩閑の現象なり。故に左に紙幣流通高及び銀貨と公債の價格を表出して之を證明せん。利息は公債證書抵當金額五千圓以上を示す。

月次	紙幣流通高 十四年	紙幣流通高 十五年	銀貨(橫濱) 十四年	銀貨(橫濱) 十五年	金祿七分利(東京) 十四年	金祿七分利(東京) 十五年	利息(東京) 十四年	利息(東京) 十五年
一月	円 一四三、七四二、八二九	円 一四〇、二五二、三五一	円 一・七二九	円 一・六九九	円 六五・二六〇	円 七四・三三〇	割 一・二〇	割 一・五〇
二月	一四三、六七九、五七四	一四〇、一四八、三七六	一・七四七	一・六五〇	六八・四三〇	七二・二三〇	一・二〇	一・五〇
三月	一四三、六三二、九〇二	一四〇、〇六二、九四二	一・七七五	一・五四九	六九・六七〇	七三・八六〇	一・一三	一・五〇
四月	一四三、五四七、九一八	一四〇、〇七八、三九七	一・七九五	一・五四二	六九・五二〇	七六・四四〇	一・一二	一・四〇
五月	一四一、七〇七、六一三	一四〇、〇〇四、〇一六	一・六二五	一・五五〇	六八・二一〇	七二・一八〇	一・二六	一・三五
六月	一四〇、三六一、六九九	一三九、九九四、五七一	一・六二六	一・五六〇	六六・六一〇	七一・九八〇	一・二五	一・二五
七月	一四〇、三四三、一一六	一四〇、〇〇四、二四三	一・六二八	一・五六一	六六・五四〇	七二・〇六〇	一・二三	一・二九
八月	一四〇、三三四、七三〇	一四〇、〇〇〇、九四六	一・六二九	一・六三〇	六九・〇〇〇	七二・七五〇	一・一八	一・三五
九月	一四〇、三三八、一三三	一三九、九九五、七六二	一・六八五	一・六一五	七一・一二〇	七二・六七〇	一・二五	一・四四
十月	一四〇、二八七、四六九	一三九、九五六、七六六	一・七三四	一・五八二	七二・二四〇	七五・二五〇	一・二五	一・三五
十一月	一四〇、二八五、六二〇	一三九、九四九、五八四	一・六九三	一・四七五	七三・〇三〇	七二・九〇〇	一・二〇	一・三五
十二月	一四〇、二八一、九二二	一三九、七〇四、二九七	一・六九五	一・三九六	七四・一〇〇	七二・九〇〇	一・二九	一・三五

紙幣は內國商品の媒介物にして、銀貨は外國商品の媒介物なり。其多寡聚散は金融に影響を與ふる最も切なりとす。今數年間紙幣の增減を察するに、十二年の流通高は一億四千七百九十四萬三千二百八十五圓、十三年は一億四千二百八十一萬四百四十圓なり。十五年を以て十二年に比すれば八百二十三萬八千九百八十八圓、十三年に比

すれば三百十萬六千百四十三圓を減却せり。此の減額は紙幣の價格を恢復するの實因たり。銀貨相庭は十三年以來頗る急進の勢ありて、十四年四月に至り、一圓七十九錢五厘の極點に達せしが、其五月已后徐々下向し、十二月は六十九錢五厘に降る。十五年は一、二、八、九の四箇月暫時六十錢を超ゆるの外、通じて氣配甚だ弱く、十二月に至り遂に一圓三十九錢六厘に陷落す。是れ幾分か紙幣減少の致す所ありと雖も、輸出入の多寡之が主因たるに似たり。蓋し紙幣は專ら內國に流通し、銀貨は特に貿易の用に供するものなり。故に輸入多ければ銀貨忽ち散じて彼に去り、輸出多ければ忽ち聚て我に歸す。一聚一散は其價格を制するに足れり。而て外國爲換相庭の高低も亦必ず之に附和するが如し。左に本年中外國爲換相庭高低表を揭げて參照に資せん。

月次	桒港	紐育	倫敦	巴里	上海	香港
一月	弗 九〇、〇〇〇	弗 九〇、〇〇〇	志 三、〇八六	法 四、七〇〇	兩 七三、三七五	弗 一〇〇、一二五
二月	九〇、三七五	九〇、三七五	三、〇八六	四、七〇〇	七三、三七五	一〇〇、三七五
三月	九〇、六二五	九〇、六二五	三、〇八八	四、七二〇	七三、二五〇	一〇〇、五〇〇
四月	九一、二五〇	九一、二五〇	三、〇九一	四、七五〇	七二、八七五	一〇〇、六二五
五月	九二、八七五	九二、八七五	三、〇九六	四、八〇〇	七三、五〇〇	一〇〇、八七五
六月	九二、六二五	九二、六二五	三、〇九五	四、七八〇	七三、一二五	一〇〇、五〇〇
七月	九一、八七五	九一、八七五	三、〇九一	四、七五〇	七三、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
八月	九一、六二五	九一、六二五	三、〇九二	四、七六〇	七三、〇〇〇	一〇〇、一二五
九月	九一、六二五	九一、六二五	三、〇九〇	四、七五〇	七三、〇〇〇	一〇〇、二五〇
十月	九一、二五〇	九一、二五〇	三、〇八七	四、七二〇	七二、八七五	一〇〇、一二五
十一月	八九、七五〇	八九、七五〇	三、〇八二	四、六七〇	七三、〇〇〇	一〇〇、二五〇
十二月	八八、二五〇	八八、二五〇	三、〇七五	四、五九〇	七二、五〇〇	一〇〇、三七五

(備考) 本表相場は在橫濱香港上海銀行より海外各地へ參著拂爲替にして、巴里・倫敦は我銀貨壹圓、桒港・紐育・上海・香港は百圓に對する相場なり。

夫れ紙幣の減少は物價を鎭壓するの效少なからず。輸出の增加は以て銀貨を吸收するの力强く遂に商業の機關一變して金融蕭索の現象を揑出せり。抑も亦公債價格は或は大手筋の賣買に由り或は商業上の機關に由て意外の動搖を生ぜしことあれども概するに金利の高低と相追隨すべき自性の作用に因らざるはなし。故に十四年以來金利の低下に隨ひ公債價格は之と逆行して亢進を示せり。然れども十五年中金利の少しく進むに比すれば公債は猶ほ高價に賣買せらるるが如し。蓋し公債價格の騰貴は固より金利に伴ふものと雖も亦他に原因なきに非ず。第一償還減却第二需要の增加第三轉入出の多寡なり。第一因は十三年七月一日の公債未償高は二億二千三百三十五萬千三百九十一圓なりしも十五年の同月同日は二億二千百十九萬四千百九十二圓にして卽ち二百十五萬七千百九十九圓を減却せり。第二因の需要增加は左表に就て見る可し。

國庫在高	二一、一九四、一九二圓
官內省所有	一、一六〇、〇〇〇圓
各府縣備荒儲蓄	一、九六〇、九九五圓
銀行紙幣竝洋銀券抵當	五二、七〇二、一二五圓
大藏省爲換方抵當	一、四三三、〇八〇圓
銀行所有高	一二、八七八、九九五圓
合計	九一、三二、九三八七圓

右の外私立銀行會社に於て大藏省爲換方其他諸官廳の抵當に充るもの蓋し百萬圓に降らざる可し。此の集合高を十五年七月一日の未償高より差引くときは民間散在高は一億二千八百萬圓に過ぎず。是れ幾分か公債價格を回復するの因たり。抑も第三因なる轉入出は以て公債賣買の景況を知るに足るものあり。蓋し轉入多きときは其價格低向し轉出多きときは多少上進するは給需の常則なり。今二箇年間每月轉入出の景況を左に示さん。

金祿公債轉入出及東京有高表　（〇符は轉出の超過）

月次	十四年 轉入	轉出	轉入出超過	東京有高	十五年 轉入	轉出	轉入出超過	東京有高
	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓
一月	五五四、三二五	四〇三、八二〇	一五一、五〇五	八、七五七、〇〇五	四七七、一二五	八五、一八〇	三九一、九三五	八七、九五〇、六六五
二月	一九二、九四〇	一六七、一三〇	二五、八一〇	八七、六八三、八一五	二五三、八〇〇	三、五九五	二四九、二〇五	七七、九五四、二五〇
三月	一、一〇七、一〇〇	一、〇八六、〇六五	二五九、九三五	八七、二三一、八五〇	一九二、三二〇	六四七、六七五	八七、三五六、五八五	
四月	五五五、四一〇	—	五五、四一〇	八七、二八八、二七〇	二七、五四五	一三、〇五五	一四、四九〇	八七、四一九、六四〇
五月	一六〇、九五五	一一七、八九〇	四三、〇六五	八七、三三一、三三五	三〇、一八五	七、二六五	二三、九二〇	八七、二七三、六六〇
六月	三〇八、〇五五	六五二、六四五	八四、四二五	八八、〇七七、七四〇	一七四、四六五	六七、八五〇	八四、四二五	八七、〇一八、一五五
七月	一三一、七六〇	一〇一、三七〇	三〇、四一〇	八七、〇八八、一五五	七三、三六〇	三〇、四一〇	四三〇、七〇〇	八七、〇三九、三九〇
八月	五六五、七三五	五四四、五三五	二一、二〇〇	八七、一六〇、三五五	一四四、五二五	五六、九五五	五五九、五四五	八七、一六一、二七五
九月	五二〇、八三五	四九三、六四〇	二七、一九五	八七、一八八、五〇五	一三五、一五五	四三、八四〇	一三、八四〇	八七、一五五、一二五
十月	三〇九、八六〇	一五五、八二五	二九四、〇三五	八七、二七一、七六〇	一五六、八二五	八、六二〇	七四、一〇五	八七、二七一、七六〇
十一月	五五、五六〇	四四、四三〇	一一、一三〇	八七、二七二、八九〇	二六七、八二五	七四、一〇五	二六〇、七二〇	八七、二七二、八九〇
十二月	五、七二二、七二五	一、六五、三二五	五、五四七、四〇〇	八七、五〇五、五〇〇	二六七、八二五	二四一、〇九〇	二六、七三九、一二〇	八四、七三九、一二〇

右の表に據れば、十四年は轉入常に轉出に超過し、轉出の超過は僅に二回に過ぎず。十五年三月已后は之に反して轉出常に轉入に超過せり。蓋し數年前物價騰貴金融益劇を加へたれば隨て金利を激騰し、地方の士族は益困弊に陷ゐり頻りに公債の賣出しを促がせしより、其價格は漸次降點に傾向し、十三年十二月の平均相場は六十圓七十錢に降れり。是を以て廉價に買收したるものは七分利付にして年一割一二分の金利に當るものあれば苟くも餘資あるものは競て之を買收し、地方の公債は東京に吸收せらるるに至り、漸く其價格を回復するや商況一變して金融頓に緩弛なるより資本運轉の路閉塞したれば、商家の資本は又更に公債に變ぜんとす。是れ轉入の超過は勢免かれざる所なり。十五年に至りては公債既に市場に充溢して買手四方に起り、再び地方に返流す。故に一月の東

京有高は八千七百九十五萬圓餘なりしも、十二月は八千四百七十三萬九千圓餘に減却す。乃ち三百二十一萬圓餘は各地に散出せるものなり。是れ轉出の超過は地方競買の果にして、從其價格を激亢する所以ならずや。

以上陳ぶる所を以て考察し來たれば、本年の金融は緩中時ありて忙意を含み、未だ太緩に至らざるものと謂ふ可し。左に當半季間銀行者中取引の金利を揭ぐ、前表と對照すれば金融の景況從瞭然ならん。

百圓に付日歩

月	次	最高	最低
七月		二錢〇	一錢〇
八月		五、〇	一、〇
九月		二、二	一、〇
十月		二錢五	一錢一
十一月		三、三	一、二
十二月		六、〇	一、八

明治十六年

本年の金融は前年の緩狀を承け依然として回復の勢なし。一二三月間は、前年の走路を變ぜず、未だ太緩に至らざりしが四月以後、層一層より閑境に進み、十一月最も甚しく、十二月に至り稍運動の兆あり。貨物の宛轉賣買あり しにも拘はらず、資本の需要甚だ少く、敢て逼迫の狀を見ず、竟に閑境を脫する能はざりしなり。勿論茶生絲上市の時に際し、若しくは田租納期の前後に於て資本の需要少しく繁忙に趣むきたる地方なきに非らずと雖も猶ほ微風海面を驀過するが如く、僅に微瀾を起すを覩て又忽ち靜定せり。要するに本年の金融は從緩慢に流がれて從寂寞の淵に沈みたるものなり。

夫れ金融の繁閑は通貨の多寡を謂ふに非らずして、貸付資本の增減を謂ふなり。故に通貨は如何に增加すと雖も貸付資本の供給缺乏を告ぐるときは之を金融逼迫と謂ひ、通貨は如何に減少すと雖も貸付資本の供給餘裕あるときは之を金融緩弛と謂ふなり。然れども之を古來の事實に徵するに、凡そ通貨の供給增加するときは物價從て騰貴し、物價騰貴するときは百般の製造相競ふて興り、資本に向て新たに需要を起すが故に、金融劇を告げ、之に反して通貨の減縮するときは物價從て下落し、物價下落するときは百般の製造寂然として中止し、資本の需要忽焉として消滅するが故に金融閑に就くは經濟の定則たり。本年の金融は紙幣增發の反動に出で、物價の下落せしより遂に商業を麻痺し爲めに資本の需要を減ぜしものにして、卽ち通貨減縮の結果なり。蓋し政府は銳意紙幣兌換の政略を畫され、客年來不換紙幣を消却せられたるは頗る巨額にして、我通貨は著しく減縮せり。乃ち左表に據れば、十四年十二月の政府紙幣流通高は一億千八百九十萬百七十七圓とす。恰かも二千九十萬五千九百十七圓を減却せしものなり。卽ち不換紙幣の流通上より退隱せし割合は總額百分の十七强とす。而して此二箇年間に減少せし銀行紙幣は十一萬六百九十六圓なり。

年月	政府紙幣流通高	銀行紙幣流通高	流通總額	前年より減少額
	円	円	円	円
十四年十二月	一一八、九〇五、一九四	三四、三九六、八一八	一五三、三〇二、〇一二	
十五年十二月	一〇九、三六九、〇一四	三四、三九三、〇九九	一四三、七六二、一一二	九、五三九、八九九
十六年十二月	九七、九九九、二七七	三四、二八六、一二二	一三二、二八五、三九九	一一、四七六、七一四

若斯不換紙幣の減少甚だ鋭くして而して外國貿易の景況は輸出常に輸入に超過して、客年來回收したる金銀貨は實に四百三萬五千五百八十四圓に上れり。是を以て紙幣の價格を回復するに從て物價を下落せしめ、遂に貸付資本の需要を減じて金融太緩に流がれたるは得て免かる可からざるの數なり。

夫れ本年の金融は果して通貨の供給を減縮したるの果と爲さば、其減縮は如何なる割合を以て全國に配分せしかを察するは最も必要なりとす。蓋し全國に要する所の通貨は、其一部は常に倉庫の內に封鎖せられて媒貨の效力を流通上に暢ぶる能はざるものあり、他の一部は人民日用必需の物貨を媒介するの用に供し、又他の一部は貸付資本となり、他の生產上に向て運動するものあり、其配分如何によりて金融の通塞に關する鮮なからず。乃ち本年十二月末日に於て通貨の總額は左の如し。

金　貨

附錄　明治大正各年金融概況

一二、六三九、〇九四圓

銀貨
政府紙幣
銀行紙幣
合計

二七、三六六、一六四圓
九七、九九九、二七七圓
三四、二八六、一二二圓
一七二、二九〇、六五七圓

明治四年七月造幣局創業以來金貨の鑄造發行高は五千四百八十七萬九千七百七圓銀貨發行高は四千六百二十八萬四千百二圓十錢なりと雖も今輸出入差引全く內國流通高を計上せるものなり。

右の總額は左の如く全國に分配せり。

種類	國庫貯藏高	銀行貯藏高	民間流布高
金貨	五、五〇八、八九一圓	五一二、二六一圓	六、六一七、九四二圓
銀貨	一三、七二四、七二〇	六、一〇五、〇四一	七、五三六、四〇三
政府紙幣	三、四三八、六〇八	一一、〇九〇、八七六	八三、四六九、七九三
銀行紙幣	八九〇、〇三一	二、一八八、三六六	三一、二〇七、七二五
合計	二三、五六二、二五〇	一九、八九六、五四四	一二八、八三一、八六三

右に表出する總額に就て其百分比例を觀るに國庫貯藏高は十三·六七銀行貯藏高は十一·五四にして民間流布高は七十四を占むるものなり。然れども民間流布高の內猶ほ私立銀行會社等の手に存する貸付資本を包含するもの必ず一割以上に居るべし。

本年は通貨の著しく減縮したるに拘はらず銀行の貸付資本は益餘裕を生じ遂に他の生產的と遊離して全く活動力を失ひたり。是を以て更に一方の活路を開きて運動を試みんとすれば之を商業に卸さんか物價は日に下落して止まず貸付を爲さんか地所家屋其他抵當物件は皆其價格を騰さざるなく需要者ありと雖も容易に之に應ずる能はず。是時に當り信憑を市上に持し其價格の動搖甚しからざるものを擇ぶに獨り公債證書に如くものなし。遂に資本は公債の一點に集合し其賣買頻繁なるに從ひ給需の度漸く其衡を失ひ加ふるに金利は益低下するの勢あるを以て遂に公債價格を飛騰せしめたり。乃ち本年の公債價格は左の如き高低を示せり。（但金祿公債七分利付額面百圓の價格）

月次	最高	最低	月次	最高	最低
一月	七四、九〇円	七三、三〇円	七月	八七、一〇円	八三、六五円
二月	七六、三〇	七四、二〇	八月	九一、六〇	八七、三五
三月	七七、三〇	七三、八〇	九月	九二、一五	八八、八〇
四月	八三、三〇	七九、六〇	十月	九二、二〇	八九、三〇
五月	八〇、九五	七八、七五	十一月	九〇、三〇	八八、三〇
六月	八五、六〇	八一、〇五	十二月	九〇、六〇	八九、〇〇

公債の價格は金融の繁閑に從ひ金利の高低に伴ふは自然の性なりと雖も又更に特別の商情ありて之れを誘動するものあり。乃ち本年の價格は凡そ四回の浮沈を示せり。第一回は一月より三月まで常に七十圓臺にありて徐々亢進の姿勢を持せり。第二回は四月以降俄然超躍して八十圓臺に登り以て七月に及べり。是銀行條例の改正ありて日本銀行に於て紙幣消却の爲め元資公債證書を買收するの作用あるより（勿論其公債は政府より拂下げたるものにして毫も民間の供需に變動を起したるに非らずと雖も）幾分か其氣勢を鼓動したるものなり。第三回は乃ち八月以降金融益弛み遂に一躍して九十圓臺に登りたり。第四回に至りては中山道鐵道公債條例の發布ありて少しく其氣焰を殺ぎたりと雖も到底金融は回復に至らずして公債の需要敢て少きを加へざれば甚だしき低下を示さざりしなり。之を要するに公債價格の斯の如く騰貴を致す所以は金融の繁閑に從ふは勿論なりと雖も亦其需要の度日に月に增進するに原因せずんばあらず。今本年十二月末日の公債證書所有高を計査すれば左の如し。

但備荒儲蓄高は其調査を缺くを以て假りに本年六月末日の現高を揭ぐ。

備荒儲蓄現高　四、五九一、三九〇圓
日本銀行所有高（紙幣消却元資を合算す）　一三、九四一、六九五圓
正金銀行所有高　二、一七九、五八五圓
國立銀行所有高　六六、四二〇、三六〇圓
合　計　八七、一三三、〇三〇圓

今單に備荒儲蓄及各銀行現有高を合算するも猶ほ且此の巨額に達せり。此集合高を公債未償額二億八百九十萬九千四十一圓より差引く時は民間散在高は一億二千百七十七萬六千十一圓とす。是其需要に比すれば供給の及ばざる所以なり。加之本年中政府は數回に各種公債證書を償却せられたる高七百二十七萬八千八百六十五圓の巨額に達せり。是を以て金融緩弛の際所有主は意外の利を得て一層の遊資を市上に溢出したるより公債競買の氣勢を助けたるもの亦其一因たるが如し。

夫れ國立銀行の資本は公債證書に由て以て成立するものなり。故に其價格の騰貴は恰かも資本を增加したるの實ありと雖も他の一方を顧みれば金利の著しく低下したるが爲め資本の損耗を蒙むる鮮なからず。其營業は漸く困難の域に沈まんとす。今本年中金利の高低を察するに蓋し中央銀行は商業の中心に立ち金融の機關たるものなり。故に其利息割合は一般金利の標點と爲すべし。而て本年の高低線は左の如し。但銀貨は三千圓以上、紙幣は千圓以上より之を預り期限三箇月以內は利息を付せざるものとす。

明治十六年中日本銀行預金利子高低表

月次	銀貨 三箇月以上	銀貨 六箇月以上	銀貨 一箇年以上	銀貨 十八箇月以上	紙幣 三箇月以上	紙幣 六箇月以上	紙幣 一箇年以上	紙幣 十八箇月以上
一月	分厘	分厘	分厘	分厘	分厘	分厘	分厘	分厘
二								

明治十六年中日本銀行貸付金利子高低表　但金額十萬圓以上

月次	公債證書抵當	金銀貨抵當
一月	高 分厘 一九〇	高 分厘 九〇
二	低 一九〇	低 八〇
三	高 一九〇	高 九〇
四	低 一九〇	低 八〇
五	高 一九〇	高 九〇
六	低 一八〇	低 八〇
七	高 一九〇	高 九〇
八	低 一八〇	低 八〇
九	高 一九〇	高 九〇
十	低 一八〇	低 八〇
十一月	高 一九〇	高 九〇
十二	低 一八〇	低 八〇

本年中は銀紙の價格殆んど平價に近邇すと雖も猶ほ多少の價差ありて未だ平定に至らず。是を以て預金に對する利子は銀紙の間常に一二分の距離を保つ。然れども其高低は自から同一の線路を走れり。乃ち高點は一、二月の間に在り、三月下旬に至りて忽ち一分許を減じ、十月を終る迄更に變動なく、十一月以後再び一分を廢して最低

點に降れり。高低の間恰かも一分五厘乃至三分の差を示せり。又貸付金に對する利子を見るに、金銀貨は紙幣に對して下降の勢ありて、而て公債證書は日に昂騰の狀あるを以て利子の割合常に一分の差を示せり。然れども十一月に至て終に平均に歸せり。又其高低は稍預金利息と同一の線路を走ると雖も、十一月中俄に最高一割に騰し、最低五分に沈み頗る亂高低を示せしも、十二月に入り竟に八分に降る。一年間高低の差一分乃至二分を示せり。之を要するに、本年の金利は三月以降徐々下向し、十一月に至りて一層低點に落ちたるものなり。

割引相場は最も商業に密接し、其高低は金融の閑劇を觀るに於て之より切なるはなし。今日本銀行及び大阪交換所の割引相場を對照して一覽表を製すること左の如し。

月次	日本銀行 當所割引	日本銀行 他所割引	大阪交換所 最高	大阪交換所 最低
一月	二錢八厘		四錢二厘	一錢八厘
二月	二六		五〇	二四
三月	二四	二七	一五	一一
四月	二四	二七	一七	一二
五月	二四	二七	二〇	一二
六月	二四	二七	一七	一二
七月	二四	二七	一六	一〇
八月	二四	二七	一五	一〇
九月	二四	二七	一三	一〇
十月	二四	二七	一六	一〇
十一月	二一	二三	一二	一〇
十二月	二〇	二二	一六	一〇

（高低）

日本銀行の割引相場は前表と稍同一の線路を趁ふて高低を示せり。交換所の割引相場も亦稍其情を同ふすと雖も唯だ日本銀行に比すれば高低の距離甚しき懸隔を視る。卽ち最高は二月に於て五錢に昂り最低は七月以降常に一錢に落つ。其間四錢の差を見る。金融の閑忙掌を反すが如く殆んど五分の一の低落とす。蓋し大阪は關西の一大首府に居ると雖も、其取引の地方に於て貨物銷售の途の衰微するを以て、同地の商況萎痺したること東京に比すれば更に甚しきものあるなり。

更に國立銀行の利息割合を調査して本年の景況を察するに、當坐預金の利子は最高山形に於て一割五分、最低は大阪に於て一分五厘、平均七分以上一割の間に居るもの多し。定期預金の利子は最高東京に於て二割、最低は栃木に於て三分、平均一割以上に居るもの多し。彼の貯藏預金の如き零細の勘定にして猶ほ且高は一割二分低も六分の利子を付せり。而て貸付金の利子は最高二割、最低は滋賀に於て八厘を示すの外神奈川に於て二分を示すものありと雖も各地を平均すれば一割以下に降らざるべし。一般の金融に比すれば猶ほ高點を占むるが如し。夫れ金融の緩弛なるに比すれば金利の低降せざるは甚だ怪しむ可きに似たりと雖も仔細に之を稽査すれば自ら其理由なきに非ず。蓋し物價下落の時に際しては百般の事業を萎縮せしむるが故に生產者就中勞力社會は皆其歲入を減じて生計に苦み、資本家は概ね遊資を擁すと雖も遽に金利を低下するものに非ず。其之を低下するは物價下落に數歩を後るるを通例とす。且國立銀行の資本は未だ必ずしも盡く商業上に向て生產を助くる活資本たるに非らず。其多分は地方士族に向て其生產を補救するの資となれり。故に需要者は利息の高低を問ふに暇あらざるの事情に迫まられ而て銀行は可及的從前の利息割合を持續せんとす。是其物價と下落を與にせざる所以か。今本年六月末日の調査に據れば國立銀行貸付金の借主は三萬九千三十五人にして、其內士族は最も多く一萬三千八百三十八人、商之に次で一萬三千四百四十七人に居る。是則ち貸付資本の多分は士族の生產上に向て補救するの確證ならずや。又當坐預金貸越は借主甚だ僅少にして三千四十三人とす。而て商最も多く二千三百四十六人士族は僅百七十三人に居る。然れども該勘定は前年來著しく減退するを見る。是れ商業萎縮の結果にして、金融の緩弛を致す所以なり。

外國爲替相場は彼我貸借の關係により、大に高低浮沈の結果を示すものなり。今本年中外國各地への爲替相場を調査して、其高低を前年に對照すること左の如し。

月次	桑港及紐育 十六年	桑港及紐育 十五年	倫敦 十六年	倫敦 十五年	巴里 十六年	巴里 十五年	上海 十六年	上海 十五年	香港 十六年	香港 十五年
一月	八七、八五弗	九〇、〇〇〇弗	三、〇五志	三、〇八六志	四、七〇法	四、七五法	七二、五〇兩	七二、七五兩	一〇〇、〇〇〇弗	一〇〇、二五弗

附錄　明治大正各年金融概況

二月	八八、二五〇弗	九〇、三七五弗	三、〇七六志	三、〇八六志	四、五八〇法	四、七〇〇法	七二、五〇〇兩	七三、三七五兩	一〇〇、三七五弗	一〇〇、三七五弗
三月	八八、五〇〇	九〇、六二五	三、〇七七	三、〇八八	四、六〇〇	四、七二〇	七二、七五〇	七三、二五〇	一〇〇、五〇〇	一〇〇、五〇〇
四月	八八、二五〇	九一、二五〇	三、〇七六	三、〇九一	四、五九〇	四、七五〇	七二、八七五	七二、八七五	一〇〇、二五〇	一〇〇、六二五
五月	八八、一二五	九二、八七五	三、〇七五	三、〇九六	四、五七〇	四、八〇〇	七二、七五〇	七三、五〇〇	一〇〇、二五〇	一〇〇、八七五
六月	八八、六二五	九二、六二五	三、〇七七	三、〇九五	四、六〇〇	四、七八〇	七二、七五〇	七三、一二五	一〇〇、三七五	一〇〇、五〇〇
七月	八八、六二五	九一、八七五	三、〇七七	三、〇九一	四、六〇〇	四、七五〇	七三、一二五	七三、〇〇〇	一〇〇、五〇〇	一〇〇、〇〇〇
八月	八八、六二五	九一、六二五	三、〇七七	三、〇九二	四、六〇〇	四、七六〇	七二、八七五	七三、〇〇〇	一〇〇、二五〇	一〇〇、一二五
九月	八八、八七五	九一、六二五	三、〇八〇	三、〇九〇	四、六三〇	四、七五〇	七二、七五〇	七三、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、二五〇
十月	八九、八七五	九一、二五〇	三、〇八五	三、〇八七	四、六九〇	四、七二〇	七二、八七五	七二、八七五	一〇〇、二五〇	一〇〇、一二五
十一月	九〇、二五〇	八七、七五〇	三、〇八六	三、〇八二	四、七〇〇	四、六七〇	七三、〇〇〇	七三、〇〇〇	一〇〇、六二五	一〇〇、二五〇
十二月	九一、五〇〇	八八、二五〇	三、〇八七	三、〇七五	四、七一〇	四、五九〇	七二、二五〇	七二、五〇〇	一〇〇、五〇〇	一〇〇、三七五
平均	八八、九四七	九一、三一三	三、〇七九	三、〇八八	四、六二〇	四、七二四	七二、七三九	七三、〇七二	一〇〇、三二三	一〇〇、三四四

右の表に據れば、各地爲替の高低は共に同位にありて、略ぼ一線を劃するが如し。二、三の兩月は稍低落し、四、五月間に在て又稍騰貴し、六月以後は再び低落して更に上向の氣配なく、十一月に入り其低落殊に甚し。此相場の高低は主として輸出入の多寡に因るものにして、即ち二、三月間の低落は客臘來持越したる生絲一萬餘箇の荷數漸次賣込となりて、恰かも新茶輸出の盛時に接するに係り、四、五月の騰貴は茶の不氣配を致したるが爲めにして、六月以後の低落は生絲輸出の季に際したるに因れり。而て本年は內國商估の購買力を殺ぎたるが爲め、大に輸入品價を減じたるより、遂に輸出超過を致して爲替相場は我に利ありて大に銀貨の供給を增進したるより、次第に其價格を落したり。然れども平均相場を以て前年に對すれば、各地の爲替孰れも幾分の騰貴を現はせるは豈に本年の輸出入は大に客年に遜するに因れるか、以て本年は內外商況を通じて一層淪胥不振の狀に陷ゐりたるを知るべし。

明治十七年

金融の閑劇は商業の信縮に由れり。而て我商業の信縮は主として通貨の增減に原因する。故に今本年の金融を陳ぶるに先だち、通貨の增減に關する事實を擧げざる可らず。乃ち四箇年間紙幣の流通高を計査するに左表の如き減額を示せり。

年月	政府紙幣	銀行紙幣	合計	前年より減額
明治十四年十二月	一一八、九〇五、一九四円	三四、三七五、九五〇円	一五三、二八一、一四四円	九、五二六、七〇六円
明治十五年十二月	一〇九、三六九、〇一四	三四、三八五、四二四	一四三、七五四、四三八	一一、四七九、四二六
明治十六年十二月	九七、九九九、二七七	三四、二七五、七三五	一三二、二七五、〇一二	七、八七八、八三七
明治十七年十二月	九三、三八〇、二三三	三一、〇一五、九四二	一二四、三九六、一七五	

若斯、紙幣の流通高は大なる速力を以て減却せり。即ち四箇年間の銷却高は二千八百八十八萬四千九百六十九圓とす。然れども實際の減額は此に止まらざるべし。何となれば、公債證書の發行は大に民間の通貨を吸收するの效驗あればなり。乃ち本年中募集したる中山道鐵道公債一千五百萬圓は、現に紙幣を流通上より驅逐して國庫に吸入したる事實あるが故に、本年中流通紙幣の減少實額は二千二百八十七萬八千八百三十七圓とす。之を前三箇年間の銷却高に合算すれば四千三百八十八萬餘圓に上る。豈に驚く可き巨額の減少ならずや。啻に減少の大なるのみならず、減少の度頗る急なれば、紙幣は一躍して上位に翔せんとし、銀貨は之に反して漸く降て下位に就き銀紙互に平均を求めんとすれば、之を以て購買すべき物價は又降て其下に立たざるを得ず。夫れ物價頻りに降るの際は商業の利益少なきが故に、資本運轉の競爭を減ずべし。於是、資本は商業を去るも他に投入すべき有利の途なきが故に、利息は物價と共に低下して曾て活動の機を與へず。是れ目下金融の冷淡を致す所以なり。今本年中毎月紙幣に對する金銀貨の平均價格を調査するに左の如き高低を示せり。

月次	上半期 東京 金貨（百圓）	上半期 東京 銀貨（一圓）	上半期 横濱 金貨（百圓）	上半期 横濱 銀貨（一圓）
一月	円 一二九・二九五	円 一・一〇〇	円 一二七・九五七	円 一・一〇五
二月	一二六・七〇九	一・一五三	一二五・八三三	一・一五六
三月	一二四・六九六	一・一三〇	一二四・九〇〇	一・一三三
四月	一三〇・六一七	一・〇九〇	一三〇・四四〇	一・〇九二
五月	一二九・四〇〇	一・〇九一	一二九・七八一	一・〇九四
六月	一二六・四八三	一・〇六三	一二六・四八〇	一・〇六五

月次	下半期 東京 金貨（百圓）	下半期 東京 銀貨（一圓）	下半期 横濱 金貨（百圓）	下半期 横濱 銀貨（一圓）
七月	円 一二四・五七七	円 一・〇四五	円 一二四・五四四	円 一・〇四七
八月	一二四・八一六	一・〇四八	一二四・九三三	一・〇五〇
九月	一二五・一七九	一・〇四五	一二四・五二〇	一・〇四七
十月	一二六・六五三	一・〇六一	一二六・三二七	一・〇六二
十一月	一二七・四八三	一・〇六三	一二七・三九六	一・〇六五
十二月	一二七・七七七	一・一四五	一三〇・六五四	一・一七〇

右の如く本年の銀貨相場は二月に於て十五錢の溢價を現はせしも爾來月を逐て下向し八、九月に至りては四、五錢に降れり。然るに十月以降俄に高點に進み十二月に於て再び二月の高點に復して以て本年を終れり。夫れ紙幣減少の點は前表の如く著しき成績を奏したれば銀紙宜しく平價に復すべきに實際は則ち然らず。銀紙の間猶ほ積日の餘勢を持して敢て遽に平均に至らず。徹底四、五錢の差を保てる而已ならず時として十錢以上の飛騰を見るに至るものは何ぞや。蓋し所謂氣配なるものは其事實なくして其形狀を揑出するものなれば之を外にして臺灣の封鎖朝鮮の事變之を內にしては秋季の暴風等皆商業を刺擊して物價俄に氣配を回復するの兆を現はせしかば人氣之に先だちて忽ち通貨の變動を起せしものなり。是我紙幣は既に回復の運に向ふと雖も兌換の制未だ確立せざれば其性質猶ほ脆弱なるを以て僅に商況の變動に會すれば所謂氣配の爲めに動かされて變轉上下し易きなり。然れども經濟の眞理は人力の能く左右し得べきものに非ざれば事變經過後は忽ち其實形に復すべしと雖も此等の誤因に由て商業の秩序を紊亂せらるるもの蓋し幾許ぞや。

又外國爲替相場は輸出入の差に依て高低浮沈を現はすものにして其結果は必ず銀貨相場に影響せざるはなし。故に銀貨と爲替相場とは常に相追隨するが如し。乃ち本年の相場を以て客年と對比すれば左の一覽表の如し。

月次	桑港及紐育 十七年	桑港及紐育 十六年	倫敦 十七年	倫敦 十六年	巴里 十七年	巴里 十六年	上海 十七年	上海 十六年	香港 十七年	香港 十六年
一月	弗 八九、四〇六	弗 八七、八七五	志 三、〇八二	志 三、〇七五	法 四、六五五	法 四、五七〇	兩 七二、〇〇〇	兩 七二、三七五	弗 一〇〇、〇〇〇	弗 一〇〇、〇〇〇
二月	八八、六八八	八八、二五〇	三、〇七八	三、〇七六	四、六〇八	四、五八〇	七二、二二九	七二、五〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、三七五
三月	八八、二五〇	八八、五〇〇	三、〇七六	三、〇七七	四、五八八	四、六〇〇	七二、四三八	七二、七五〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、五〇〇
四月	八八、三一三	八八、二五〇	三、〇七七	三、〇七六	四、五九〇	四、五九〇	七二、五〇〇	七二、八七五	一〇〇、〇六三	一〇〇、二五〇
五月	八九、七五〇	八八、一二五	三、〇八四	三、〇七五	四、六〇四	四、五七〇	七二、八〇〇	七二、七五〇	九九、九三五	一〇〇、二五〇
六月	八九、六二五	八八、六二五	三、〇八五	三、〇七七	四、六八〇	四、六〇〇	七二、七五〇	七二、七五〇	一〇〇、〇二一	一〇〇、三七九
七月	八九、五九四	八八、六二五	三、〇八六	三、〇七七	四、六八五	四、六〇〇	七二、六二五	七三、一二五	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、五〇〇
八月	八九、七〇〇	八八、六二五	三、〇八七	三、〇七七	四、六八二	四、六〇〇	七二、五〇〇	七二、八七五	九九、九七五	一〇〇、二五〇
九月	九〇、三一三	八八、八七五	三、〇八四	三、〇八〇	四、七〇四	四、六三〇	七二、九三八	七二、七五〇	一〇〇、一五六	一〇〇、〇〇〇
十月	八九、二八一	八九、八七五	三、〇八三	三、〇八五	四、六三八	四、六九〇	七三、二五〇	七二、八七五	九九、八七五	一〇〇、二五〇
十一月	八八、一〇〇	九〇、二五〇	三、〇七四	三、〇八六	四、五六八	四、七〇〇	七三、五〇〇	七三、〇〇〇	九九、九七五	一〇〇、六二五
十二月	八七、一二五	九一、五〇〇	三、〇六五	三、〇八七	四、四九三	四、七一〇	七三、五六三	七二、二五〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、五〇〇
平均	八九、〇一三	八八、九四七	三、〇八〇	三、〇七九	四、六二九	四、六二〇	七二、七五六	七二、七三九	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、三一三

要するに本年の紙幣價格は猶ほ未だ全く眞位に復せずと雖も前四箇年に比すれば三割乃至六割の回復とす。而て物價は反對の比例を以て下落したるが故に高低の距離亦極めて大なる可し。其結果や勞力の競爭を減じて資本は需要上頗る餘剩を生ず其勢金利低下せざるを得ず。故に資本は漸く商業を去て他に投入すべき途なく終に公債證書の一點に歸宿して其安全を謀らんとす。是れ本年金融の事情なり。

夫れ苟くも利の在る所は資本之に歸し利のなき所は資本之を去る。蓋し小利を避けて大利に就くは人情の常なり。故に貸金にして利小なれば必ず其資本を商業に元入すべし。商業にして利薄ければ必ず之を製造に元入

すべし。是を以て職業の利多きものには許多の資本之に聚まり商業の利薄ければ許多の資本之を去る。其勢恰も水の下に就くが如し。決して阻碍すべからざるなり。今や物價の下落に際して商業は勿論百般の事業皆損耗を蒙むらざるなし。其稍有利にして且安全なるものを擇んで資本を投入せんとすれば公債證書に如くものなし。是を以て公債證書の市況は頗る活潑の狀を呈せり。今本年中、毎月平均相場の高低を視るに左表の如し。（金祿七分利付公債額面百圓の相場）

月次	十七年 最高	十七年 最低	十六年 最高	十六年 最低	月次	十七年 最高	十七年 最低	十六年 最高	十六年 最低
一月	九〇・二〇円	八九・五〇円	七〇・八〇円	六三・三〇円	七月	九三・八五円	九二・三五円	八七・一〇円	八三・六五円
二月	九二・三〇	九〇・〇〇	七六・三〇	六九・二〇	八月	九四・〇〇	九三・〇〇	八七・三五	八七・〇〇
三月	九六・五〇	九二・八〇	七七・三〇	七二・八〇	九月	九七・八〇	九六・四五	九一・一五	八八・八〇
四月	九七・〇〇	九二・二〇	八三・三〇	七九・六〇	十月	九六・六〇	九二・二〇	九二・二〇	八九・三〇
五月	九三・六〇	九二・〇〇	八〇・九五	七八・五五	十一月	九三・七〇	九二・八〇	九三・一五	八八・三〇
六月	九二・三〇	九一・三〇	八五・二〇	八一・〇五	十二月	九二・七〇	八七・〇〇	九〇・六〇	八九・〇〇

此表に據れば、公債證書の價格は客年來非常の速力を以て騰行せり。客年は市況三變して遂に七十圓より九十圓に超えたり。本年に入り益其勢を張り、一月より四月迄は毎月平均二圓三十錢の進力を以て高價に昂り、遂に九十七圓に達す。五月以來、中山道鐵道公債募集の擧に會し少しく氣配を挫きしも八月に至り俄然九十八圓の昂價を現はしたり。爾後、政治上に商業上に種々偶發の因ありて、物價少しく回復の兆ありて、漸々下向となり、十二月は八十七圓の低價を見るに至る。是銀貨一時に虛價を飛騰して金融頗る必迫の狀ありしに由れり。然れども本年中八十圓臺に降りたるは僅に一月、十二月の二回ある而已。之を客年の最低價に比すれば猶ほ十三、四圓の昂價なりとす。若斯公債價格の飛騰するものは、世上の金融甚だ閑なるが故に資本運轉の競爭は公債の一點に集合したるものなり。以て該賣買の頗る活潑なるを知るべし。夫れ然り、中山道鐵道公債證書の募集あるや額面百圓に付價格九十圓を以て賣却せられたりしに第一回は二月二十日迄に日本銀行へ價格九十圓一錢より九十一圓十五錢迄にて、申込高二十一萬三百圓價格を以て申込たる高八百十六萬六千百圓にして、其總計八百三十七萬六千四百圓に登る。募集額五百萬圓に對して三百三十七萬六千四百圓即ち六割七分五厘の超過とす。第二回募集の金額は最初額面五百萬圓の豫定なりしに、申込高非常に增進せしを以て、六月二十八日の告示を以て更に五百萬圓を增加し、總額一千萬圓の發行とす。而て價格九十圓以上の申込高五百六十七萬二千七百圓價格を以て申込みたる高九百六十一萬二千圓にして、其總計一千五百二十八萬四千七百圓に登る。募集額一千萬圓に對して五百二十八萬四千七百圓、即ち五割二分八厘强の超過とす。若斯好結果を得たるは亦以て民間遊資の多きを證すべし。今此募集額を地方に配分すれば左の如し。

東京應募額	一二、七六二、九〇〇圓
大阪應募額	三、四一八、七〇〇圓
各地應募額	七、四七九、五〇〇圓

故に東京は最も多く、百分率に於て五十を占め、大阪は二十、他の各地は合せて三十に居る。又應募人口數を大別すれば、銀行會社は三百六十口、官廳十口、一個人千九百九十四口、合計二千三百六十四口とす。此の口數を以て應募金額二千三百六十六萬千百圓を除すれば、一口の應募額平均一萬餘圓に當る。夫れ平均應募額の頗る過大なるは銀行會社の應募多額なるに由れり。亦以て貸付資本の餘剩あるを徵すべし。若斯巨額の公債は一時に市場に突出するにも拘はらず、金融の沈滯底止する所を知らず。金利は益低落す。是を以て公債は益出でて而て益需要を增すの勢あり。故に該公債は頗る高價を以て市場に賣買せられたり。乃ち七月以降東京株式取引所の直取引相場は左の如し（額面百圓に付毎月平均價格）。

七月	九二円九五八	九月	九四円六〇四
八月	九四、五八〇	十月	九六円〇九六
九月	九四、三九六	十一月	九四、五八〇
十月	九六円〇九六	十二月	八九、〇四五

凡百の物品價格の上進するに際しては資本運轉の競爭を增して其取引繁閙を來たす。故に本年中東京市場に於て公債賣買高の盛況は、比年來未だ曾て見ざる所なり。乃ち東京府管內賣買高は千六百一萬百五十圓にして、轉出入高は千四十五萬八千餘圓とす。故に公債の運動は二千六百四十六萬八千餘圓の巨額なるを見る。今轉出入增減を見るに抽籤及利落の前後、卽ち四、五月及十、十一月の二期稍小額を示すの外管內賣買は每月百萬乃至二百萬圓以上の取引あり。轉出入は多きも六、七十萬圓に止まり、一二箇月を除くの外著しき變動なかりしも十一月に於て頓に一百萬圓を超過す、當時市場の金融小締りの狀ありしに由れり。

公債の市價上向きて其取引繁盛なれば銀行の貸付資本の多分は該取引に向て利用の途を開きたり。故に本年中各銀行の公債賣買高は二千七百八十八萬二千百八十一圓にして其三分の一强は銀行の手に歸せり。千四百七十二圓を增進す。隨て其所有高も亦大に增進せり。卽ち七月一日の公債未償額は二億二千百七十萬九千八十一圓にして其三分の一强は銀行の所有公債證書は實に三百八十七萬七千三百四十五圓を增加せり。

而して本年中各銀行の所有公債證書は實に三百八十七萬七千三百四十五圓を增加せり。

凡そ資本は商業となく製造となく、全國平均の利息相場ありて偏高偏低の理なきものなり。故に七分利付公債にして九十八九圓の高價に賣買せらるるを見れば、他の商業製造の利亦七、八分の間に在るを概知すべし。公債の市價七、八十圓に低落したる時は、則ち一般の金利亦一割に近きを想見すべし。豈に大利を見て其資本を卸さず、小利を知て其資本を卸すの人あらんや。或る地方に於ては經濟上の變動により、一時其平均を破ることありと雖も特に局部に止まるものなり、久しからずして亦必ず平均に歸すべし。公債の市況は旣に前段に縷陳したれば此より進んで本年の利息相場に論及すべし。

中央銀行本年の利息は凡そ七變す。最低は十月に於て五分五厘に降り、最高は十二月に於て一割一分に達す。是亦瞬時間に過す。一月より四月迄は八分乃至九分の間に在りて變動なし。五月以後は常に八分に超過せず。七月少く昇て九分を示し、八、九月の間又進んで九分五厘に騰す。十月再び降て五分五厘の低點を現せしも、十一月は逆進して八分五厘より九分五厘に至り、十二月に入り極點を現はして一割を超過せり。以て一般金融の情を概

知すべし。

明治十八年

本年中、我經濟上に間接若くは直接の影響を與へし內外の事情を察するに、淸佛戰爭は固より支那の勝利と稱すべからざれども、佛人が開戰の初めに豫想せしよりは多く支那の利益となりて平和の局を結べり。而て我國に尤も直接の影響を與へしは、此交戰中佛國政府は策を定めて淡水及雞籠に衞兵を置きて盛に臺灣の封鎖を固くせしより、大に我貿易を障碍せり。朝鮮に於ては、客年十二月初旬暴徒起り、同國駐在我公使は國王の請に應じて日本兵百五十人を送り、王宮を守護せしが、暴徒等支那兵と連合して之を擊ち、遂に王竝に王族を奪へり。同公使は亂を避けて仁川に退き、公使館は暴徒等の爲めに燬燒せられたり。是に於て日本支那及朝鮮三國交涉事件となり、一時は混亂を極めたるが、遂に朝鮮より罪を日本に謝して事平和に歸するを得たり。尋で全權大使を淸國に派遣せらるるや、物情恂々たりしも、遂に談判好結果を得て、兩國の交誼を毀損せざるを得たり。於是三國交涉事件全く其局を結びたるは實に四月に在り。其他阿富汗境堺事件に關する魯英の葛藤は間接に我貿易上に影響を及ぼせり。我商情は此等外交上の刺戟を受け數年來沈淪したる不景氣は一時振起の色を現はせしも事件經過後は物價の虛聲全く地を拂ひ市況急ち一變して不景氣の雲は再び市場に襲來し慘憺として商海を覆ふ金融局を變じ掌を反すが如し。

又貿易埠頭の景況を察するに、一月以來輸出品の氣配甚だ惡しく、二、三月の交少しく恢復の兆ありしも英魯事件の影響を受けしより、日一日より退縮の狀況を呈し、新絲上市の季に際し尙ほ滯貨多數にして其相場も一二月に比すれば大に低落す。新茶は萌芽の際霜雪の損害を蒙りしに拘はらず、輸出の氣配大に活潑なるが爲め豫想外の賣込ありて常に品不足を感ずる程にて相場も曾て下落せず。新茶上市以來輸出高相應の巨額に上り、近來稀なる好結果を呈したり。然るに輸入品に至ては、其取引一層不活潑を極め、唐絲、金巾、砂糖、石油の如き皆其額を減じたるが故に、輸出常に輸入に超過し、銀貨は益市上に充溢せり。是近來通貨減縮の爲め、米價を首として諸物價を下落せしめたるにより、商工業者殊に農家は皆生氣を失ひしに、本年は春來氣候不順なるより、或は以て凶歉の兆と爲すもの

さへありて、大に市情を畏蹙せしめたりしなり。然るに秋獲の豐穰は豫想外に出で、稍人氣を振起せしめたり。故に七月以後、輸入品の各種氣配常に上進し、唐絲・金巾・砂糖は勿論雜貨の如きも、大に其輸入額を增加したり。又地方の蠶業は前陳の如く、春來雨暘其序を失ひ、氣象極めて不順、或る地方の如きは、雹災霜害の爲め發生の蠶兒を空しく水中に流棄するに至るものあり、其幸に霜雹の災害を免かれたる地方も亦、發育十分ならず、辛ふじて上蔟したるも收獲寡く、繭質粗惡にして製絲甚だ不良なり。加ふるに、新絲上市以來、取引常に不活潑を極め、十月の交、横濱の在荷殆んど二萬箇の多數に達し、大に內商の氣勢を挫折するの景況なりし。十一月に入り、俄然變じて好氣配を現はし實に近年未曾有の活潑を見ることを得たり。

乃ち本年中貿易の景況は、輸出品價合計三千六百十萬八千、八百八十圓、輸入品價合計二千八百三十二萬八千五百六十九圓にして、輸出超過高七百七十八萬三百十一圓なり。又輸入金銀價は七百五十四萬六千八百三十四圓、輸出金銀價は四百二十六萬五千六百八十五圓にして、輸入超過高三百二十八萬千百四十九圓とす。

本年中、輸出入の景況は僅に四箇月を除くの外は輸出常に輸入に超過せり。而て金銀價は頻に輸入を促がし、九月に於て僅に二萬餘圓の輸出超過を示す耳。如此、外は正貨を吸收して大に其供給を增進すると同時に、內は紙幣の減少極めて大なれば銀紙の價差殆んど平均に歸せんとし、殊に紙幣交換の令出るに會し、紙幣は全く信用を恢復せしも、玆に避く可からざるは、物價の下落に伴て商況益不振に歸するの一事なり。之が爲め資本は活動力を失ひて、金融は唯だ公債の一方に向て活路を開きたり。卽ち本年中、東京に於ける銀貨及公債の市況を左に陳べん。

一月中は銀貨相庭少しく低落し、初旬は一圓三十錢なりしも、下旬は十錢の低落を示し、公債は除々昂進し、八十七圓五十錢より九十圓迄に推上げたり。蓋し客年臘尾に飛騰したる公債の稍緩みて、再び其價格を騰ぜしは朝鮮の和議成りたるに因らん。二月に至り、公債は九十二圓四十錢迄に騰貴し、銀貨は大使遣淸を氣に搆へ氣配大に進み頗る亂高下の情を呈し、再び一圓三十錢迄に騰ぜり。三月に至り、公債は九十五圓に進み猶買人氣なり。銀貨は尙ほ一圓二十三四錢の高値を持せしは、日淸の談判を氣に搆へたる故なるべし。四月に至り、公債は駸々相進み九十七圓臺迄に推し上げ、銀貨は遣淸大使和約成りたるの報に接し、尋で兌換銀行券發行の期に迫まりたるとに因りて頓に低落し、僅々五六錢の差を見るに至れり。五月は公債益上景氣にて、利落九十四圓より六圓に進み、銀貨は殆んど差異なきに至れり。六月は公債の市況中山道鐵道公債殘額募集の擧ありしも、敢て相庭に影響を與へざるのみならず、益上向て九十八圓八十錢の高値を現はしたり。銀貨は紙幣交換の發令に會し、殆んど平價に復したり。七月中金融は益緩弛に流れ、日步の如きは概ね一錢四五厘より二錢の間に過ぎず。されば公債は初旬少しく不味なりしが、中旬に至り漸次騰貴の氣配にて九十八圓五十錢より九十九圓以上に昂るべき勢あり。銀貨は向に日本銀行に於て其交換打步を五厘に引下げたる以來、益低落して市中は幾んど無打となれり。八月中の商況は各地方水害を氣に搆へ、米穀の取引のみ稍活潑の觀を添へしが如しと雖も、其他の諸物價は宛も眠るが如し。故に金融は益緩弛にして、利息は一割一二分より上らず。公債の市情は非常の高値を現はし、七分利付金祿の呼價百圓に達し、猶ほ騰貴の氣配なり。下旬は少しく不味にして、九十九圓前後を上下せり。銀貨は常に四厘より五、六厘の間を往來し、前月に比すれば氣配好しと云ふ可し。九月初旬は前月と大同小異、中旬より下旬に至り、本年の厄日も無難に經過し諸商品薄取引あり、且地方より仕入方に出京するものありて、稍市場に景氣を添へたるが如し。隨て日步は二錢四五厘に上り、銀貨も一二厘方騰貴し、多少金融の道を開きたり。十月初旬は一時引立たんとせし商況氣崩れの姿に變じ、金融は又緩慢に流れ、獨り公債證書は之に反して好氣配を保てり。海外貿易に至ては前月來甚だ薄取引にして、外國爲替手數料は常に大なる高低なし。中旬は猶ほ一層沈靜の商況にして、日步一錢臺に下り、銀貨は別に高低を見ずと雖も、動もすれば低落の有樣にして、市中の取引は實際二三厘に過ず。十一月は商況格別の變動なく日步も一錢五六厘なりき。唯だ意外に氣配を顯はしたるものは生絲相庭なり。是れ横濱外國商館に於て俄かに生絲を競買し、之を本國に輸送するに出づるが如し。爲めに銀貨は一厘臺に下落し、更に又無打に至れり。公債は益好氣配にして、九十九圓九十錢、金融は依然として引立たず、十二月初旬公債は更に上進して額面上二圓の溢價を顯はし、生絲相庭は中旬に掛けて歐洲より買注文の電報に接し、再び好氣配を顯はし、銀貨は益低落せんとせしが、朝鮮變事の訛傳に接し、忽ち一圓八厘餘に激昂せしも、又忽ち下落して銀紙全く平價に復せり。金融は依然として繁忙ならず。日步二錢前後を往來し、公債は愈進向の有樣なり。歲尾如此景況は蓋し稀なりと云ふ。

抑も米價は諸物價の標準にして公債の市價は金利の高低を標示するものなり。而て紙幣交換の期に先だちては、金銀貨の高低は直接に商業上に影響を及ぼし、其結果は遂に金融閑劇の現象を顯はさざるなし。本年の銀貨相庭は既に紙幣交換の發令ありて全く平價に復したるが如しと雖も未だ實施の期に至らざるを以て實際取引上に於ては銀紙の間常に些少の高低を示せり。其一高一低は亦以て商業の浮沈を知るに足るものあり。

即ち金貨は月を逐て上進し、銀貨は之に反して月を逐て下落し、金銀は全く反對の進路を取れり。是れ比年來貿易上の景況我に利ありて、銀貨を吸收するの力甚だ強きと紙幣減少の效果とに因る可しと雖も、畢竟世界の銀貨漸く下落に傾きたるに因れるは、金貨の益昂騰せるを觀て知る可し。此事實は外國爲替相庭を觀て證す可し。因て今本年の外國爲替相庭を客年に比するに、金貨國に對して非常の騰貴を示し、銀貨國に對すれば却て下落に趣けり。

次に本年の金利は二三四の三箇月に於て最も高點を示し、五月以降は徐々下向して十二月に入り少しく氣配を復せしは臘尾の常態にして例年に比すれば猶ほ低位に居るが如し。故に本年中金利の高低線は客年に比すれば全く反對の走路を取れり。若し夫各地方市中取引の金利は高低甚しき懸隔あり。是れ特に局部の商情によるものにして、一般の金融に例視す可からざるものあり。即ち最高は盛岡、平戸、熊本に於て二割四分を示し、最低は大阪及高知、富山、松本に於て六分を示す。要するに、地方の金利は調査不充分なるを以て或は實際と合はざるものなきを保す可からず、唯だ之を以て大勢を了する可なり。

明治十九年

本年中、金融は頗る緩慢の景況を示せり。是れ數年來通貨減少の爲め生じたる商業の不景氣は、當年に至りて其極度に達したるに由るなり。然れども當年は紙幣交換を實施せられて通貨の性質は既に安定し、商況回復の機は漸く市場に萌芽せしは鐵道其他實業を企圖するもの民間に勃興するを見て證す可きなり。然りと雖も當時の勢恰かも前潮去て後潮將に來らんとし、滿干交替を相成すの際にして、氣運未だ熟せず。加之、六、七月の交より悪疫猖獗の勢を逞ふし、爲めに將に回復せんとするの商況は再び阻撓せられ、金融竟に活潑の象を見る能はず。資本の多分は公債株券等に向て僅に運動を爲せしのみ。金融既に此の如くなれば、金利も亦日を逐て低廉に趨むけり。今

全國金利の標準たる中央銀行定期貸利息の每月平均高低を視るに、一月以來三月迄は年七分を持せしも四月は年六分六厘に降り、次で五月は年五分九厘、六月は年五分二厘と次第に下落を示し、此際海軍公債證書發行額千七百萬圓の中、五百萬圓の募集ありて驛遞局預金局共に其預り金利子割合を引下げ、當年九月一日より千圓未滿は年四分二厘、千圓以上は年三分に改正する旨の廣告ありて、日本銀行の利子も七月に入り一層の下落を示し、九月迄は年五分一厘に据れり。是れ畢竟當時東京、大阪、横濱、神戸等の商業地は一般に悪疫の襲撃を受け、大に商情を阻喪せしに職由す。十月に入り悪疫の消滅を見るに隨ひ、一般の商況稍起色を示し、各銀行多少の金融を要するに至りしに由り、日本銀行の金利も年五分六厘に騰り、尋續て十一月には年五分九厘までに回復し、以て年を終れり。當所割引步合も亦同一の進路を取りて高低を示せり。更に三年間の每月金利の平均高低を對照すれば當年は前二箇年に對して二分乃至四分の下落を示せり。然らば即ち當年金融の緩慢は殆んど其極に達したりと謂ふ可し。

東京、大阪兩銀行集會所割引日步を調査するに東京の平均割引步合は一月より四月までは一錢九厘を保持して更に變動なかりしと雖も、五月は一厘の下落を示して一錢八厘となり、六月は更に一錢四厘に降りしも此際夏物呉服類の需要稍顯はるるに從ひ、諸商業共自然活動の兆候を呈し、忽ち金融に影響し、資本は少しく運轉の途を開き、金利も七月は一錢五厘、八月は二錢迄に騰りしが悪疫の蔓延に際し商況忽ち索然、金融の機關殆んど中止の姿に至り九月中は手形取引所の休業を告げたり。十月に入り一般の商情稍回復に赴きたるを以て各銀行相應に金融の繁忙を告げ、割引日步は一錢八厘の取引なりき。十一月初旬は前月の餘響を承け、金融一般に逼迫を告げ、各銀行稍繁忙なりしと雖も中旬より再び徐々緩慢に流れたり。然れども時漸く歳尾に迫まり地方の仕入稍頻繁の狀を示せり。然れども諸物貨の取引例年の如く活潑なるを得ず、金融も亦甚だ繁劇に至らず、日步は二錢にて年を終れり。

大阪銀行集會所の平均割引步合は一月中の平均一錢四厘なりと雖も、二月に至り降て一錢となり、五月迄變動なく六月に入り決算の期に迫れり。聊昂進して一錢二厘に昇りしと雖も暫時にして復低落し、七月は一錢に戻れり。八月は商品の需要稍顯はれ、金融少しく活動の兆候ありて、日步一錢二厘に復せしも悪疫蔓延の爲め、下旬より金融稍緩み、九月に入りては九厘迄に下落せり。十月は悪疫消滅後商況稍活潑の萌を含み諸物品の需用漸次增加し、金

融少しく活動の兆ありて一錢三厘迄に引戻せしと雖も、十一月は復た少しく低落し、十二月に至り一錢五厘に昇る。是れ當年中割引利息の最昂點なり。

今更に國立銀行所在地方一般取引の利息を調査するに、上半期は報告差出方の整理に至らざるを以て之を知るに由なしと雖も、下半期間の利息相庭は乃ち貸金利息は岩手縣の二割五分を內地々方の最高點とし之に亞ぐものを新潟縣の二割二分とす。沖繩縣に於ては二割四厘を示せしと雖も僅に二箇月に過ぎず。其他は昂點二割に超ゆるものなし。最低點は大阪府及福井縣の三分にして其他は概して四分乃至六分の間に居るもの最も多し。又割引利息は鳥取廣島二縣に於ける日歩八錢を最昂點とす。山形縣は之に亞で七錢五厘に居れり。此三縣は全國無比の高利を示す。其他は最高四錢乃至五錢の間に居るもの最も多く、最低は二錢乃至三錢の間を最も多しとす。之を要するに各地互に一隅の市情ありて凸凹參差齊しからずと雖も之を通觀すれば半期間甚しき變動あるを見ず、各地の金融頗る靜穩の景況を示せしと云ふべし。

當年中市中取引の利息相庭は如斯にして金融は始終著しき變動なく市情索然たるを知るべし。今又其事實を證せんが爲めに公債株券の市價を調査して資本運動の實況を詳悉せん。乃ち東京株式取引所の七分利付金祿公債證書直取引平均價格を視るに、一月中は百五圓六錢なりしと雖も資本家は他に其資金運用の途を求むるに苦み公債を購求するもの甚だ多く、其價昇進の一方に偏向し、諸株式も二三種を除くの外都て昇騰の勢を示し、四月に至り俄然凡そ一圓六十錢を飛騰し、株券も之に伴ひ益强氣を含めり。五月は公債の價格暫時安値を持せしも株券は賣買特に頻繁を告げ、非常の高値を現はし、猶ほ益上進の勢を示せり。六月十二日に至り勅令第四十七號を以て海軍公債證書條例の發布ありて、五朱利付の新公債五百萬圓を募集されし影響にて、金祿公債は俄然低落に傾きたり。此際資本の運動は他の株券に轉向して其勢を增し、此月中各銀行の株券價格は最昂點に進み、一月の價格に比すれば八十餘圓乃至百餘圓を飛騰し、驚く可き高低の差を呈せり。七八月の頃は一般の商業稍生色を顯はし隨て金融少しく繁劇に向ひたる爲め諸商賈中所有の公債を放賣するもの少なからず。其供給需要に勝つの景況を示し遂に百八圓九錢より六圓五十四錢までに下落せり。株券も公債に伴ひ漸次低落し、日本銀行株券の如きは六月中二百四十五圓四十四錢迄に飛騰せしと雖も、遂に二百四十圓內に陷落し、正金銀行株も一時三百四圓に上りしと雖も遂に二百七十四圓迄に下落せり。九月は惡疫流行の爲め商況再び沈靜に歸し、公債價格又從て挽回の氣配なりしと雖も、十月上旬は政府にて低利公債を募集して從前發行の高利公債を償還せらるるの說民間に流傳せし爲め、公債の價格に影響し、忽ちにして凡そ一圓の低落を示し、同月十六日勅令第六十六號を以て整理公債條例の發布ありて、公債賣買の氣勢更に振起せざりき。尋で一千萬圓の募集ありて市場爲めに其方針に迷ひ、公債の價格頗る沈靜し、活潑の取引なく、平穩に年を送れり。株券も其影響を蒙り活氣を失ひ、十一月中、日本銀行株は二百三十八圓二十錢、正金銀行株は二百八十三圓七十七錢なり。十二月に入り、日本銀行は六圓二十錢、正金銀行は十三圓を上進す。抑も歲尾に至り、金融上如斯の景況を示すを以て之を見れば、其繁閙ならざりしを知るに足れり。要するに當年中公債株券の市況は最も繁閙を極めたるなり。殊に正金銀行株券は他の銀行に比すれば、最も高價に賣買せられたるを見る。蓋し同銀行株券は客年一月頃にありては實價凡そ百八十圓なりしと雖も、爾來外國爲替取組の業務漸次擴張するに隨ひ、收益亦少からず、且同行は將來望を囑するに足るの感ありて其株券を買望むもの多く、遂に斯の如きの高價に昂進したるものなり。果して然らば同行の隆盛推して知るべきなり。

明治二十年

明治二十年中東京金融の景況は之を分て二段とす。卽ち一月より七月までは商況依然として沈滯の狀を現し金融は概して緩慢を示せり。其間生絲取引に關する銀行に於ては一時繁忙を告ぐる事ありしも是れ小波瀾にして一般金利に影響を及ぼすに至らず。五月以降は諸銀行增株金及び諸會社株金の拂込ありしと、半期決算の期に迫まりたるとに由り、金融稍繁忙を加へたるも、七月に入り再び緩慢に流れ、八月以後當年を終るの間は概して繁忙の域にあり、乃ち八月中は福島群馬長野の地方に於て生絲輸出の盛況に伴ひ、該地方の金融頗る逼迫を告げ、資本の供給を京濱に仰ぐの事情ありしを以て其地方に取引ある銀行は之が影響を受け頗る繁忙を極め、金利も聊か上進の傾きあり。九月は橫濱生絲市場の不活潑なりしを以て、各地方より荷爲換付にて輸送したる生絲は大抵倉庫に堆積して數萬の資金一時に停滯し、京濱間の銀行は前月に比すれば聊か繁忙を加へたり。十月に於て各銀行共非

常に活潑の景況に赴きたるは、冬季に接し呉服其他雜貨の取引好景氣を現はし、亦其價格徐々上進の傾向あるが故に、從前仕入を見合せ居りし商估も俄かに資本を要するの商情に變じ、同月下旬に至り諸株券の下落を示したるも畢竟此金融の繁忙に因るものなり。十一月も亦前月の繁忙を承け、一時は少しく逼迫の狀を示せしと雖も、漸次公債證書利子の下付ありて、巨額の資金一時市場に流出したると、横濱に淹滯したる生絲の賣捌あるとに因り、幾分か融解せしと雖も、敢て緩弛と謂ふに至らず。十二月は例年金融繁劇を加ふるを常觀とす。殊に本年は横濱に二萬餘個の生絲淹滯して當年中賣捌の見込なく、加之、諸商決算の期に切迫し、又日本銀行增株第二回拂込金二百五十萬圓は月末までに拂込まざるべからず。是等に關係あるものは其準備に忙はしき等の事情より、一時に繁忙に赴き金利も當年中の最高點に達し、一割五分を示せり。今、左に當年中日本銀行利息及び東京諸銀行利息の高低を示して其景況を詳悉す。

日本銀行利息高低表（但平均割合）

月次	貸付利息	割引歩合	月次	貸付利息	割引歩合	月次	貸付利息	割引歩合
一月	〇・六二五割	〇・六〇二割	五月	〇・五三〇割	〇・五二九割	九月	〇・五六七割	〇・五六五割
二月	〇・五八七	〇・五六六	六月	〇・五三〇	〇・五二九	十月	〇・五八五	〇・五六五
三月	〇・五八七	〇・五六六	七月	〇・五四七	〇・五四七	十一月	〇・五八五	〇・五八三
四月	〇・五三八	〇・五二九	八月	〇・五六七	〇・五六五	十二月	〇・五八五	〇・五八三

東京諸銀行抵當貸利息高低表

月次	百圓以上千圓迄 最高	百圓以上千圓迄 最低	百圓以上千圓迄 平均	千圓以上一萬圓迄 最高	千圓以上一萬圓迄 最低	千圓以上一萬圓迄 平均	一萬圓以上 最高	一萬圓以上 最低	一萬圓以上 平均
一月	一・一三〇割	〇・九三八割	一・〇三四割	〇・八六〇割	〇・七一三割	〇・七八七割	〇・八三八割	〇・六三一割	〇・七三五割
二月	一・一〇〇	〇・九〇三	一・〇〇二	〇・九〇三	〇・七三一	〇・八一七	〇・七七六	〇・六四一	〇・七〇九
三月	一・一六〇	〇・九〇〇	一・〇三〇	〇・九二五	〇・七六五	〇・八四五	〇・八三八	〇・六六五	〇・七六二
四月	一・一四〇	〇・九〇〇	一・〇二〇	一・〇三〇	〇・八二〇	〇・九二五	〇・九三三	〇・七三〇	〇・八三二
五月	一・二〇〇	〇・九〇〇	一・〇五〇	一・〇〇〇	〇・七二〇	〇・八六〇	〇・九〇〇	〇・六〇〇	〇・七五〇
六月	一・二〇五	〇・九三〇	一・〇五四	〇・九三四	〇・七四八	〇・八四三	〇・八一〇	〇・六六三	〇・七三七
七月	一・一二〇	〇・八〇〇	〇・九六〇	〇・九三〇	〇・七二〇	〇・八三〇	〇・八〇〇	〇・七〇〇	〇・七五〇
八月	一・二〇〇	〇・八〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	〇・七二〇	〇・八六〇	〇・九〇〇	〇・七〇〇	〇・八〇〇
九月	一・二〇〇	〇・九〇〇	一・〇五〇	一・〇〇〇	〇・七五〇	〇・八八〇	一・〇〇〇	〇・七〇〇	〇・八五〇
十月	一・二〇〇	〇・九〇〇	一・〇五〇	一・〇一〇	〇・七八〇	〇・九〇〇	〇・九七〇	〇・七〇〇	〇・八三五
十一月	一・二〇〇	〇・九〇〇	一・〇五〇	一・一〇〇	〇・八三〇	〇・九七〇	〇・九七〇	〇・七〇〇	〇・八四〇
十二月	一・五〇〇	〇・九〇〇	一・二〇〇	一・一〇〇	〇・八六〇	〇・九八〇	一・〇〇〇	〇・九三〇	〇・九六五

前表に據て之を觀るに、日本銀行の金利は一月中六分二厘五毛なりしも、二月以降徐々下向し、六月に至り五分三厘に落つ。七月以後再び上進して五分八厘五毛迄に復せり。諸銀行抵當貸利息は小額の貸金に於て七月を除くの外は毎月平均一割以上に居れり。蓋し金利の標準たる日本銀行の利息は商海の小波瀾の爲めに容易に動搖せられずと雖も、諸銀行の利息は則ち然らず。些少の刺擊に感じて變轉上下す。故に同月中最低八分に跌落するや又忽ちにして最高一割二分に翔踊する事ありて其變化飜掌の間にあり。今、更に大阪同盟銀行集會所の割引日歩を調査するに其變更左の如し。

月次	二十年	十九年	月次	二十年	十九年	月次	二十年	十九年
一月	一五錢厘	一四錢厘	五月	一三錢厘	一〇錢厘	九月	一五錢厘	九錢厘
二月	一二	一〇	六月	一三	一二	十月	一六	一三
三月	一二	一〇	七月	一四	一〇	十一月	一五	一一
四月	一〇	一〇	八月	一五	一二	十二月	二三	一五

本表に據れば、大阪銀行集會所の日步は一月に於て一錢五厘を示せしも、二月以後三厘を落し、四月に至り更に一錢に降る。是れ金禮公債の抽籤ありて一時巨額の現金市場に疏融せしに由る。爾後、月を逐て次第に昂進し、十月に至り一錢六厘に達す。十一月は公債利息の下付ありて聊か金融を疏解せしに由り、日步一厘を減ぜり。十二月は臘尾の常觀として金融俄然繁劇を加へ、日步は二錢三厘の高點に飛騰せり。要するに當年の日步は前年に比すれば幾分の高點に居る。蓋し是れ當年は諸會社株券の賣買盛況なると紡績會社織物會社若くは硝子燐寸等製造會社の新設改良を企るもの多く、商況も稍景氣を回復するの兆ありしに由るなり。

夫れ日本銀行は全國金利の標準を示し、京阪二府は東西商業の中心にして、其利息相庭は亦以て全國金融の大勢を推知するに足れり。然れども各地方亦自から一隅の市情ありて金融の繁閑其情を異にし、從て金利の高低等しからず。今當年中各地方金利の高低を調査するに、貸金利息は兵庫・新潟・千葉・茨城・岩手・青森・鳥取の七縣は最高當に年二割に達し、大分縣は二割一分六厘、宮崎縣は二割四分を示す。之を全國の最高點とす。而して最低は各地を通じて七八分に居れり。今更に各地方を通算して平均高低を視れば、其景況左の如し。

月次	平均最高	平均最低	月次	平均最高	平均最低
一月	一・六二錢	○・六九錢	三月	一・五七錢	○・六八錢
二月	一・五八	○・七○	四月	一・五五	○・六七
五月	一・五七錢	○・六六錢	六月	一・六○	○・六七

一月の平均最高は一割六分二厘、平均最低は六分九厘なりしが、爾後月を逐て下降し、五月に至り最高一割五分七厘となり、六月に入り忽ち三厘を進め、七月以後は再び二厘を落し、九月迄は著しき變動を示さず。十月以後次第に上進し、十二月は遂に最高一割六分四厘、最低七分二厘に達す。今之を七月に比すれば六厘、一月に比すれば二厘の騰貴とす。要するに全國を通觀すれば當年の金利は秩序を逐て高低を示せるものなり。唯だ地方の金利の往々非常の高點を示すものは、蓋し地方は商業の範圍狹隘なるが故に、通貨の一聚一散は忽ち金融に影響を及ぼすや切なり。今便覽の爲め、一年の景況を標出せん。

月次	平均最高	平均最低	月次	平均最高	平均最低
一月	一・五八	○・六六	九月	一・六三	○・七○
二月	一・六○	○・七○	十月	一・六四	○・七二
三月	一・五七	○・六八	十一月	一・五八	○・六七
四月	一・五五	○・六七	十二月	一・五八	○・六五
五月	一・五七	○・六六	一月	一・五八	○・六五
六月	一・六○	○・六七	二月	一・五八	○・六五
七月	一・五八	○・六六	三月	一・五八	○・六五
八月	一・五八	○・六五	四月	一・五八	○・六五

割引日步は各地の高低甚しき懸隔あり。今、全國各地方日步の高低を調査するに、鳥取・廣島・大分の三縣に於ける八錢（百圓に付）を全國の最高點となす。今之を年利に改算すれば年二割九分二厘に當る。實に非常の高步と謂ふ可し。其他、最高五錢以上を示すものは東京及び三重・滋賀・宮城・福島・岩手・岡山・愛媛・福岡の八縣とす。日步五錢は年一割八分二厘に當れり。然れども全國を通算して平均高低を見るに、最高は十二月に於ける四錢六厘六毛、即ち年一割六分七厘九毛、最低は八月に於ける二錢○四毛、即ち年七分四厘四毛強に當る。今之を貸付利息に比すれば其割合稍強しと雖も、其高低は同一の線路を趁ふものなり。乃ち當年中割引日步の平均高低は左の如し。

月次	平均最高	平均最低	月次	平均最高	平均最低
一月	四四二錢厘毛	二一三錢厘毛	五月	四三五錢厘毛	二○六錢厘毛
二月	四三六	二一二	六月	四四二	二一○
三月	四三一	二一○	七月	四四○	二一六
四月	四三一	二○九	八月	四六六	二二五
七月	四三七	二○八	九月	四六六	二二五
八月	四三四	二○四	十月	四六六	二二五
十一月	四三四	二○四	十二月	四六六	二二五
十二月	四三四	二○四			

明治二十一年

明治二十一年中の金融を按ずるに、歲首に在りては各地方の商情概して米價低落の爲めに振起せず。金融も隨て活動せざりし。然れども地方に因りては取引稍活氣を帶び、金融も之に應じて運轉其宜を得たりしが、是亦一時にして、二三月の交より大抵緩局に歸せり。尤も鐵道工事沿道の地方に在りては市況熱閙にして頗る滋潤あるが如く、蠶絲地方は一般の商情都て起色あり、銀行の營業も爲めに多少の繁忙を告げたるが如し。要するに、地方の金融は前年に對して稍劣る所ありと雖も、都會の景況は之に反して優る所あるも劣る所あらざるに似たり。是畢竟

株券の盛況に伴ひ資本の運動を起せしに由るものにして一般商業の振起せしに原因するものに非らず。故に資本は新設企業會社の爲めに吸收せられて固定資本に變ぜんとするが故に漸く流動資本の缺乏を感じて金融繁忙の象を現はせしものなり。

今全國金利の標準たる日本銀行東京本店の利息を按ずるに、一月より三月まで貸金歩合は常に六分に居り割引歩合は五分八厘四毛にして變動なかりしが四月に入り貸金歩合は二厘を減じて五分八厘となり割引歩合は三厘六毛を減じて五分四厘八毛に降れり。蓋し此間は金融次第に引弛み各銀行共資本の運轉苦む程にあらざるも概して閑局に在りしなり。故に當時海軍公債二百萬圓を募集せられたるに其應募額三百八十餘萬圓に達せり。亦以て金融の緩弛なるを知るべし。五月に入り再び舊に復して二厘乃至三厘を上進したるものは東北鐵道線路の漸次延長を加ふるに因り該地方より商品仕入の爲め出京するもの多く從て諸問屋小賣商共頗る繁忙に至るに由るべしと雖も前年來陸續創設したる諸會社株主中には株金拂込の期に迫まりたるを以て其準備に奔走するもの尠なからず。之が資本を要するもの亦其一因たり。六月は諸商決算の期に會し更に三四厘を進めて貸金歩合は六分三厘割引歩合は六分二厘二毛に騰り、八月迄は敢て變動を見ざりし。抑も日本銀行金利の一高一低は各銀行は勿論一般商人の注目する所なり。故に其金利歩合を引上ぐるや金融俄かに繁忙に赴きしが如き感念を起さしむるあり。且從前公債證書の當籤あるや大抵其償還元金の代りに整理公債を望みたりしに當時當籤の金祿公債三百圓に對しては現金の交付を請ふもの多し。是れ一般現金の需要增加せしと諸會社株金拂込の爲め需要あるとに由るなり。八月下旬に及び横濱生絲貿易の澁滯したるが爲めに生絲抵當貸を需むるもの俄かに增加したるを以て其取引に關係ある銀行は金融頗る繁忙を告げたるより貸金歩合を引上從前の六分三厘を六分六厘となせり。九月に入り絲荷愈增加するに隨ひ東京の金融一層緊急を告げ各銀行共短期の貸付を除くの外大抵貸出を謝絶するが爲めに貸金歩合更に二厘を增加し六分八厘となれり。十月下旬より十一月に渉り金融漸次緩弛に赴き殊に公債證書利子及び金祿公債一千萬圓の償還元金等市中に散布したると生絲の售銷益熾なるが爲め銀行其他の資本家に多少餘裕を生ぜしが之が爲めに金利を動かすに至らず依然六分八厘にて歲を終れり。

亞に大阪支店の利息を按ずるに東京に比すれば常に高點に居れりしが三月に至り八分四厘二毛に進みたり。蓋し此間商情は概して靜穩なりしも金融に至ては前年來の逼迫を承け三月に入り殊に甚だし。是れ當時米穀の輸入多きと新設會社の株金拂込頻繁なるが爲めなり。而して四月以降は金融稍其宜を得たるものなり。故に貸金歩合は六分九厘五毛に降りしが八月に入り金融頓に逼迫を來たし三厘七毛を上げて七分三厘二毛となり九月に入り再び三厘七毛を進めて七分六厘九毛となり十二月は最も逼迫を極め遂に八分五毛の高點に達せり。要するに大阪の金融は三回の變動を爲せるを知るべし。乃ち當年中日本銀行利息歩合の高低は左の如し。

月次	東京本店 定期貸利息 高	東京本店 定期貸利息 低	東京本店 當所割引歩合 高	東京本店 當所割引歩合 低	大阪支店 定期貸利息 高	大阪支店 定期貸利息 低	大阪支店 當所割引歩合 高	大阪支店 當所割引歩合 低
一月	〇・六〇割	〇・六〇割	〇・五八四割	〇・五八四割	〇・七六九割	〇・六二二割	〇・七六九割	〇・七二二割
二月	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・五八四	〇・五八四	〇・八四二	〇・七六九	〇・八四二	〇・七六九
三月	〇・六〇〇	〇・五八〇	〇・五八四	〇・五四八	〇・八四二	〇・七六九	〇・八四二	〇・七六九
四月	〇・五八〇	〇・五八〇	〇・五四八	〇・五四八	〇・七六九	〇・六九五	〇・六九五	〇・六九五
五月	〇・六〇〇	〇・五八〇	〇・五八四	〇・五四八	〇・六九五	〇・六二二	〇・六九五	〇・六九五
六月	〇・六三〇	〇・六〇〇	〇・六二二	〇・五八四	〇・六九五	〇・六二二	〇・七三二	〇・六九五
七月	〇・六三〇	〇・六三〇	〇・六二二	〇・六二二	〇・六九五	〇・六九五	〇・七三二	〇・六九五
八月	〇・六六〇	〇・六三〇	〇・六五九	〇・六二二	〇・七三二	〇・六九五	〇・八四二	〇・七六九
九月	〇・六八〇	〇・六六〇	〇・六七七	〇・六五九	〇・七六九	〇・七三二	〇・八四二	〇・七六九
十月	〇・六八〇	〇・六六〇	〇・六七七	〇・六七七	〇・七六九	〇・七三二	〇・八四二	〇・七六九
十一月	〇・六八〇	〇・六六〇	〇・六七七	〇・六七七	〇・七六九	〇・七三二	〇・八四二	〇・七六九
十二月	〇・六八〇	〇・六六〇	〇・六七七	〇・六五九	〇・八〇五	〇・七六九	〇・八四二	〇・八四二

以上陳ぶる所を以て當年中全國金融の大勢を推知すべし。今更に東京銀行集會所に於て調査したる各銀行貸金歩合と、大阪同集會所の割引歩合を以て前年と對照して其高低を觀るに、東京諸銀行の毎月平均貸金歩合は前年に對すれば六月を除くの外孰れも四毛乃至一分の高點に居り、大阪の割引歩合も亦毎月高點を示さざるなし。以て當年の金融は稍變況を現はしたるものにして前年に比すれば資本の運動幾分か繁劇を加へたるものなり。乃ち東京大阪の金利歩合は左の如し。

東京諸銀行抵當貸利息高低表

月次	百圓以上千圓迄				千圓以上一萬圓迄				一萬圓以上			
	高	低	二十一年平均	二十年平均	高	低	二十一年平均	二十年平均	高	低	二十一年平均	二十年平均
一月	一錢一厘	一錢	一錢一厘	一錢一厘四毛	一錢一厘	一錢	一錢一厘	一錢一厘三毛	一錢一厘	一錢	一錢一厘	一錢一厘三毛
二月	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・一〇〇	一・一〇三	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・一〇〇	一・一〇三	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・一〇〇	一・一〇三
三月	一・〇八〇	一・〇〇〇	一・〇四〇	一・〇四〇	一・〇八〇	一・〇〇〇	一・〇四〇	一・〇四〇	一・〇八〇	一・〇〇〇	一・〇四〇	一・〇四〇
四月	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・〇五〇	一・〇五〇	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・〇五〇	一・〇五〇	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・〇五〇	一・〇五〇
五月	一・一〇〇	一・〇二〇	一・〇六〇	一・〇六〇	一・一〇〇	一・〇二〇	一・〇六〇	一・〇六〇	一・一〇〇	一・〇二〇	一・〇六〇	一・〇六〇
六月	一・一〇〇	一・〇二〇	一・〇六〇	一・〇六〇	一・一〇〇	一・〇二〇	一・〇六〇	一・〇六〇	一・一〇〇	一・〇二〇	一・〇六〇	一・〇六〇
七月	一・一〇〇	一・〇二〇	一・〇六〇	一・〇六〇	一・一〇〇	一・〇二〇	一・〇六〇	一・〇六〇	一・一〇〇	一・〇二〇	一・〇六〇	一・〇六〇
八月	一・一〇〇	一・〇二〇	一・〇六〇	一・〇六〇	一・一〇〇	一・〇二〇	一・〇六〇	一・〇六〇	一・一〇〇	一・〇二〇	一・〇六〇	一・〇六〇
九月	一・一〇〇	一・〇二〇	一・〇六〇	一・〇六〇	一・一〇〇	一・〇二〇	一・〇六〇	一・〇六〇	一・一〇〇	一・〇二〇	一・〇六〇	一・〇六〇
十月	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・〇五〇	一・〇五〇	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・〇五〇	一・〇五〇	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・〇五〇	一・〇五〇
十一月	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・〇五〇	一・〇五〇	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・〇五〇	一・〇五〇	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・〇五〇	一・〇五〇
十二月	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・〇五〇	一・〇五〇	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・〇五〇	一・〇五〇	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・〇五〇	一・〇五〇

大阪同盟銀行集會所割引歩合高低表

月次	二十年		十九年	
	最高	最低	平均	平均
一月	錢厘 四三	錢厘 二九	錢厘 三六	錢厘 一四
二月	三〇	二七	二八	一〇
三月	二六	二一	二三	一〇
四月	二一	一七	一九	一〇
五月	二〇	一七	一八	一〇
六月	二〇	一八	一九	一二
七月	二一	一九	一九	一二
八月	三〇	一九	二四	一二
九月	二八	一七	二二	九
十月	二九	二五	二七	一三
十一月	二五	一四	一九	一一
十二月	四〇	二六	二三	一五

斯の如く、東京大阪の金利は前年に比して幾分か高點を占むるものは、前年來株券の氣焰益熾なるに由り資本は漸く變じて企業資本に固著せんとす。於是商業上流動資本の缺乏を感ずるに至りしなり。夫れ然り、金利の高に比すれば商業は前年に對して著しき振起の狀あるを見ざりし。今更に各國立銀行所在地方の金利を調査して全國金利の平均高低を見るに、二月より五月までは平均最高一割五分五厘に据はりて變動なかりしが、六月に至り三厘を進めて一割五分八厘となり、七月以來再び下降し、九月までは一割五分三厘に沈み極めて靜穩を示し、十月已後月を逐ふて上昇し、十二月に至り一割六分八厘の極點に達したり。然れども之を前年に比すれば、一月二月及び十

二月を除くの外、毎月低點を示さざるなし。割引歩合も亦稍同一の線路を邇ふて高低を示せり。是全國一般の金融は前年に比すれば却て緩弛を示し、唯だ十月以後頗る繁劇を加へたるものなり。乃ち全國金利の高低は左表の如し。今本表を以て前記の東京及び大阪の金利歩合に對照すれば非常の高點に居るものは元來金利歩合は都會に低くして地方に高きを我邦の常態とす。殊に當年中、宮崎縣は二割四分新潟縣は二割二分を示し、其他二割の高利を示す地方尠なからず。是れ全國を通じて其平均高を算すれば此高點を示す所以なり。

全國貸金歩合毎月平均高低表

月次	二十一年 平均最高	二十一年 平均最低	二十一年 平均最高	二十一年 平均最低	二十年 平均最高	二十年 平均最低
一月	一・五九	○・七一	一・六二	○・六九	一・五四	○・七二
二月	一・六〇	○・七二	一・五八	○・七〇	一・五三	○・七三
三月	一・五五	○・七〇	一・五七	○・六八	一・五三	○・七三
四月	一・五五	○・七〇	一・五五	○・六七	一・五七	○・七五
五月	一・五五	○・七一	一・五七	○・六六	一・六〇	○・七五
六月	一・五八	○・七一	一・六〇	○・六七	一・六八	○・七八
七月						
八月						
九月						
十月						
十一月						
十二月						

月次	二十一年 最高	二十一年 最低	二十年 最高	二十年 最低	十九年 最高	十九年 最低
一月	四三八 銭厘毛	二一二 銭厘毛	四四二 銭厘毛	二一三 銭厘毛	四三五 銭厘毛	二一四 銭厘毛
二月	四二五	二一二	四三六	二一五	四四〇	二一六
三月	四二四	二〇二	四三一	二〇五	四四二	二二五
四月	四三七	二〇六	四三一	二〇四	四四二	二二五
五月	四三七	二〇六	四三一	二〇四	四四二	二二五
六月	四三七	二〇六	四三一	二〇四	四四二	二二五
七月	四三七	二〇六	四三一	二〇四	四四二	二二五
八月	四三七	二〇六	四三一	二〇四	四四二	二二五
九月	四三七	二〇六	四三一	二〇四	四四二	二二五
十月	四三七	二〇六	四三一	二〇四	四四二	二二五
十一月	四三七	二〇六	四三一	二〇四	四四二	二二五
十二月	四三七	二〇六	四三一	二〇四	四四二	二二五

明治二十二年

二十二年金融の景況を按ずるに、上半季は前年を承け概して緩局に在り、特に海軍整理及び鐵道補充費公債の募集ありて、僅に資本運動の活路を開きたるが如し。然れども鐵道其他新設會社株金拂込の期に接し、聊か繁忙の狀ありしと雖も、金祿公債其他諸公債二千餘萬圓の償還ありて大に金融を疏解せしが故に、遂に逼迫を訴ふるに至らず。要するに、上半季の金融は公債の作用により、下半季は商機俄に動き金融頓に一變して漸く繁忙に赴むき、加ふるに各地方水害風災荐りに臻て米價を翔踊し、隨て一般の物價に影響し資本の需要前年に倍加すと雖も前年來資本は新設企業會社の爲めに吸收せられて、固定資本に變じ、復た之に應ずべき流動資本の乏しきに會し、頗る逼迫の狀を現はせり。此際日本銀行は固定資本の弊を一洗せんとし、專ら貸金の整理を務め、謄貸付は固く約束を守て其取立を嚴肅にし、新貸付は信用の厚薄と抵當の良否に據りて斟酌經營する所ありしに由り、從前日本銀行を恃み、無限の財源と思ひ緩漫手段に慣るる所の銀行者は之が爲めに狼狽するもの少なからず、一時は殆んど恐慌の兆を現はせしも、幸に生絲其他の輸出盛況を呈し、尋で公債利子の拂渡しありて大に市場を融解し、遂に甚しき逼迫の聲を聞かず。以て歳尾を經過せり。

今、又全國金利の標準たる日本銀行東京本店の利息高低を視るに、一月中は貸金利息年六分六厘割引日歩は年六分五厘七毛に居りしが、一般の金融は商況の不振に伴はれ、益緩弛に赴むくが故に、日本銀行は頻りに利息を引下げ二月は貸金利息年六分四厘より六分二厘に割引歩合は六分三厘八毛より六分二厘に降り、四月まで更に變動なかりし。是を以て二月中鐵道補充費公債二百萬圓の募集に對し、其應募額五百四十四萬餘圓に達し、三月中は第二回整理公債第四回海軍公債合せて九百萬圓の募集に對し、其應募額一千四百二十萬圓餘に達し頗る好結果を得たるも亦以て金融緩弛の一證と爲すべきなり。四月下旬より新茶上市の期に接し、夏物仕入等の爲め多少資本運動の

月次	十九年 最高	十九年 最低	十八年 最高	十八年 最低	十七年 最高	十七年 最低
一月	四四二 銭厘毛	二一三 銭厘毛	四四七 銭厘毛	二一四 銭厘毛	四五六 銭厘毛	二一九 銭厘毛
二月	四四二	二一三	四四七	二一四	四五六	二一九
三月	四四二	二一三	四四七	二一四	四五六	二一九
四月	四四二	二一三	四四七	二一四	四五六	二一九
五月	四四二	二一三	四四七	二一四	四五六	二一九
六月	四四二	二一三	四四七	二一四	四五六	二一九
七月	四四二	二一三	四四七	二一四	四五六	二一九
八月	四四二	二一三	四四七	二一四	四五六	二一九
九月	四四二	二一三	四四七	二一四	四五六	二一九
十月	四四二	二一三	四四七	二一四	四五六	二一九
十一月	四四二	二一三	四四七	二一四	四五六	二一九
十二月	四四二	二一三	四四七	二一四	四五六	二一九

崩しありて金融少しく繁忙の兆あり。日本銀行は其機を察し、五月に至り貸金利息を年六分四厘に割引歩合を年六分三厘八毛に引上げたり。蓋し此際各銀行の内製絲地方に取引を有するものは、其季節に接近して之が準備に怠らざるより、金融俄に逼迫の萠を示せしと雖も、時恰も海軍及び金祿公債等の利子拂渡の期に遭遇し、市場に散布する金額尠からず、稍々融解の狀を呈せり。然れども日本銀行は生絲輸出の季に及べば、金融繁忙を告げ、横濱貿易の情況に由りては一時に巨萬の資金を要し、之が爲め金融俄かに壅塞を來すの例少なからず。且當年は前年來資本の多分は新設企業會社の爲めに吸收せられて、大に流動資本の缺乏を感ずるの狀あれば前途金融上に意外の變動を起すも亦圖るべからざるを豫見し、利息を年六分六厘に割引歩合を六分五厘七毛に上騰し、之が準備を爲し、以て市場の緩急に應ずるの策を取り、大に將來を虞れり。七月に入り、連日の雨天冷氣を氣構へ、米價常に騰貴に赴むくと、生絲の市況頗る好氣配なるとに由りて諸物價も自から之に伴隨して活動の機ありと雖も、一般の商情に於て未だ著しき變動なかりし故に、日本銀行の利息は依然として前月の割合を持せり。然るに八月に入り金融益繁劇を加へ、其下旬は殆んど恐慌の兆を現はし、各銀行は前途の景況を危み手許の準備を謀るに汲々たれば、普通貸付の如きは抵當品の良否利息の高低に拘はらず、大概謝絶するの有樣とはなれり。是を以て公債證書を賣却して一時取引を辨ずるもの少なからず。爲めに公債の市價は頗然として額面を崩すに至る。而して株券は近時漸く其氣勢を挫て下落の一方に傾き、株券抵當の融通は頓に杜絶せり。今其原因を尋ぬるに、各地方の水害、風災交々作毛を害して、米價俄かに激昂し、諸物價亦之に伴ふて騰貴し、商情之が爲めに激動するの際、恰かも生絲の輸出益盛にして巨額の資本を要すると同時に、鐵道其他新設會社の株金拂込に接近したるに由るべしと雖、此際日本銀行は固定資本の弊を矯めんと欲して、貸金の取立を嚴にし、專ら貸金整理の方針を取りしは、亦幾分か一時一部局の逼迫を促がせしものの如し。夫れ然り、日本銀行は警戒する所ありて頻りに其利息を引上げたり。即ち八月は貸付利息を年六分八厘に、割引歩合を年六分七厘五毛に、九月に入り、遂に貸金利息を年七分に、割引歩合を六分九厘三毛に進めたり。爾後、日本銀行貸金の整理略ぼ結了し、生絲の貿易益活潑なると、十一月は金祿及び海軍公債等の利子拂渡しあるとに由りて、一時巨萬の金額市場に流出し、市情稍平穩に歸したり。歲尾は例に依り諸商決算の期に迫まり、一般送舊迎新の準備に忙はしく、金融は概して繁忙の域にあり、故に利息は當年を終るまで依然として九月以來の高點を保てり。

大阪支店の利息は東京本店に比すれば幾分の高點を占むるは例年の常觀なり。即ち當年の利息を對照すれば大阪は毎月少なくも五厘三毛多きは一分八厘三毛の差を示せり。然れども當年の金融は東京と全く其事情を異にし、一月より四月までは貸付利息の最低は七分三厘、最高は八分三毛に居り著しき變動なし。金融は次第に緩弛に流れて遂に五月に至り俄然六分九厘三毛に墮ちしが、六月は諸商決算の期と新設會社株金拂込等の爲め忽ち七分三厘に復し、以て七月を經過し、八月に至り更に三分六厘を進めて、七分六厘六毛に昇りしは米價暴貴の爲めなり。然れども之を上半季に比較すれば猶ほ三厘七毛の低位を示せり。故に金融は一時頗る繁忙を示すことありと雖も、未だ逼迫を告ぐるに至らざりしなり。此際より東京の金融は非常の逼迫を告ぐるものは固より米價の暴貴と生絲輸出の盛況と一時に湊合したる結果なるべしと、蓋し亦特殊の事情之に伴ふて其氣勢を幇けたるものなり。乃ち當年中、東京大阪の利息高低は左表の如し。

月次	東京本店				大阪支店			
	定期貸利息		當所割引歩合		定期貸利息		當所割引歩合	
	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低
一月	六、六〇	六、六〇	六、五七	六、五七	八、〇三	八、〇三	八、三九	八、三九
二月	六、四〇	六、二〇	六、三八	六、〇二	八、〇三	七、三〇	八、三九	七、六六
三月	六、二〇	六、二〇	六、〇二	六、〇二	八、〇三	七、三〇	八、三九	七、六六
四月	六、二〇	六、二〇	六、〇二	六、〇二	八、〇三	七、三〇	八、三九	七、六六
五月	六、四〇	六、四〇	六、三八	六、〇二	六、九三	六、九三	七、三〇	七、三〇
六月	六、六〇	六、六〇	六、五七	六、三八	七、三〇	六、九三	七、六六	七、六六
七月	六、六〇	六、六〇	六、五七	六、五七	七、三〇	七、三〇	七、六六	七、六六
八月	六、八〇	六、八〇	六、七五	六、五七	七、六六	七、〇三	八、〇三	七、六六

月次	貸金利息（年利）		割引日歩（百圓ニ付）		預金利息（年利）	
	最高	最低	最高	最低	最高	最低
一月	一錢一厘七毛	九厘〇毛	二錢八厘七毛	二錢九厘八毛	五厘五毛八糸	三厘一毛六糸
二月	一、三九二	〇、八七七	三、七七	二、八七	〇、五五九	〇、三一一
三月	一、三四六	〇、八四八	三、六八	二、七八	〇、五五三	〇、三〇六
四月	一、五五六	〇、八六八	三、七六	二、六三	〇、五四五	〇、二九八
五月	一、三五二	〇、八六四	三、七九	二、七七	〇、五四六	〇、三四八
六月	一、三七一	〇、八七六	三、八六	二、七六	〇、五五九	〇、三一一
七月	一、三六七	〇、八七七	三、七五	二、八三	〇、五五九	〇、三〇一
八月	一、三七九	〇、八八九	三、八一	二、八九	〇、五五九	〇、三〇六
九月	一、四一一	〇、九一七	三、九八	二、九九	〇、五六八	〇、三一三
十月	一、四五五	〇、九三八	四、〇七	三、〇一	〇、五五八	〇、三〇六
十一月	一、四八〇	〇、九六七	四、一五	三、〇七	〇、五六二	〇、三〇九
十二月	一、五〇〇	〇、九六一	四、二五	三、一一	〇、五六八	〇、三一一

夫れ中央銀行の利息は全國金融の大勢に應ずるものにして局部の小浮沈に關するものにあらず。故に全國を通觀すれば、各地各自の商情ありて凹凸等しからず。之を要するに、金融機關の發達する都會の地にありては、金利常に低く、其具備せざる僻隅の地にありては、金利常に高きは經濟の通則なり。宜なる哉三府及び神奈川の如き商業地の利息は全國中の最低位に居り、他の諸縣は高點に居るを見るなり。而して其最も高點を示すものは貸金利息に於て、岩手縣は一、二月に於ける三割を示し三月は二割五分爾後次第に下降すと雖も、尚ほ二割を降らず。其他最高二割を示すものは青森・福岡・兵庫・宮崎・千葉・茨城の諸縣とす。然れども三府の利息は最高一割八厘乃至一割六分六厘の間を進退せり。割引日歩は大分縣に於ける八錢岩手縣に於ける七錢を最高とす。然れども三府の日歩は最高二錢二厘乃至四錢五厘の間を浮沈せり。預り金利息も之に準じて岩手縣は一割二分の高點を示し、山形・島根・宮崎の三縣は孰れも最高一割を示せり。而して三府の利息は高きも八分に超えず最低は僅に七厘に居る。以て都鄙金融の大勢を知るべし。今、全國金利の平均高低を視るに、其狀恰かも凹字形を成す。之を前記の日本銀行利息高低表に反照すれば、其浮沈稍同一の線路を趁ふものの如し。

全國利息相庭平均高低表

明治二十三年

夫れ金融の閑劇は商業の浮沈より起り、商業の浮沈は經濟の原則たる需要供給の如何にあり。熱々當年の金融を按ずるに頗る異例を示せり。卽ち三四月の交商業最も沈靜なるに際し、金融は宜しく閑局に在るべきに反て逼迫を告げて殆ど恐慌の兆を現はし、五月以降製茶養蠶の初期より生絲輸出の盛期に接し加ふるに米價の暴騰を以てし、金融漸く煩劇に赴むくべきに、反て緩裕の狀を示せり。斯の如く當年の金融事情は大要左の四大因に歸すべし。

第一　興業熱の反動より受けたる株券の下落は非常に信用の程度を減縮せしめたること

第二　前年の劣作より起りたる米價の暴騰は頓に資本の需要を增加せしめたること

第三　米國の銀貨安より起りたる外國爲換相場の變動は我貿易を麻痺せしめたること

第四　前三項に對する政府の作用と日本銀行の臨機策は卽效を奏したること

當年の金融事情は大要右の四因に歸すべし。然れども前三項は特發性の主因たりと雖も第四項は前三項に對

する政略より出でたる附加の因にして寧ろ副因たるべし。請ふ左に其概況を分敍すべし。

第一因たる株券の下落は畢竟事業と資本の不權衡より生じたる結果なるべしと雖も要するに經濟の理は凡そ一物品に向て需要の盛んに起るときは、競爭上より其價格を激昂して殆んど思擬すべからざるものあり。當業者は其間に於て往々意外の奇利を博するを以て、遂に投機心を釀成し退て實着を守るの時機に後るるより寧ろ險着を試むるの或は僥倖を得るに若かざるの念を感起せしめ、變に乘じ機に投じて輸贏を一擲に爭はんとするもの自から社會の風潮を爲し、其最も信用を重んじ着實を主とする銀行者にして、猶ほ或は其風潮に浸染せらるるものなきにあらず。是を以て資本家は往々投機熱に誘惑せられ、自家の分限を顧みず、其資力に比し不相當なる多數の株券を有して負擔の義務を果す能はず。終に信用を破り、金融を阻碍するに至るは已むを得ざるの理勢なり。是を以て前年末より諸會社株券の價格彌々墜ちて取引彌々減じ、株式市場は漸く荒涼の光景を呈し、尋で東京・大阪を首として金融逼迫の聲漸く囂しく、延て各地に波及せり。三、四月の交、遂に其極に達し、信用の區域益々澁縮して金利益々昂騰し、殆んど恐慌の兆を現はせり。是を以て大藏大臣は日本銀行總裁と大阪に會して東京・大阪の銀行者を招集して其意見を諮詢せられたり。是より先き東京同盟銀行は九州同盟銀行と協議して將に大に籌畫する所あらんとせしに、適々四月九日在大阪大藏大臣の電報に接して同盟銀行總代を赴阪せしむることとなれり。當時東京同盟銀行の意見は、今日金融の逼迫を救濟せんと欲せば、目下の現象に對し一時姑息の手段を施さず、宜しく其根本に著目して大に救濟の方法を求めざるべからず。其手段たる日本銀行に於て我同盟銀行に對する取引上の信任を厚ふし、其取引を增進し、且其取引上の制限は日本銀行に於て之を定め、而して同盟銀行は各自日本銀行に對する取引の限額に應じて擔保品を納置し、其取引金額を以て實際の運用に十分力を致さしめ、餘裕あるときは之を日本銀行へ預金と爲し、其出納は當座貸借の手續に據り、小切手を使用して受拂を爲し、且其擔保品の種類は目下九州山陽以下諸鐵道株券を充用すべきものとして、日本銀行へ請求すべきこととなすにあり。然るに大阪同盟銀行は此の救濟法を考案するに當り、各國立銀行・諸鐵道會社等日本銀行に於て確實と認むるものは其株券を抵當として貸出の區域を擴むる緊然らざれば同盟銀行の連帶責任を以て五百萬圓を低利に貸與せらるる歟の二條を要望せり。五月十七日東京同盟銀行總代は大阪同盟銀行と與に會同協議する所あり、遂に東京同盟銀行の議に決し、其擔保品は日本鐵道會社以下十會社の株券と定め、其要求書を日本銀行總裁に呈し、斯に大阪會議の局を結びたり。日本銀行總裁は此要求に對して臨機濟急の策を盡し、遂に手形割引の方法を擴張するに決し、日本鐵道・日本郵船・海上保險・九州鐵道・山陽鐵道等の諸會社合せて十五種の株券を手形の擔保品として融通の便を開きたり。

玆に日本銀行が臨機策を實施するの已むを得ざるの事情に迫られたる所以を詳悉せんと欲すれば、左に揭ぐる株式相場表を以て足れりとす。左表に據れば、日本銀行株券は當年一月中の平均價格二百六十九圓五十五錢を最高とす。爾後月を逐て下降し、六月に至り二百四十六圓六十二錢に降る。七月以後少しく氣配を復せしも、十月以降再び下向し、十一月は二百四十三圓二十錢に墜つ。是を當年の最低價となす。高低の間恰かも二十六圓三十五錢の差を示す。正金銀行株券も亦稍々同一の進路を趁ひ、最高は一月に於ける二百四十四圓六十錢より、最低は十二月に於ける百九十三圓三十五錢に降る、其差五十一圓二十五錢とす。日本銀行に比すれば下落の度稍々急にして、且つ強きものは、同銀行は外國爲換賣買上意外の損失を蒙むり、爲めに割賦金を減少すべしとの傳說ありて、大に其氣配を落したるに職由せずんばあらず。更に前年に對照して其價格を視るに、日本銀行株券は三月に於て三十八圓六十八錢、即ち一割三分强、正金銀行株券は八月に於て六十五圓、即ち二割三分强の下落を示せり。豈に驚くべき減差にあらずや。要するに兩銀行の如きは金融場裡の圭臬にして、其營業の鞏固なる信用の厚大なる諸會社の比にあらず。而して其株券の下落此の如し、彼の新設工業會社株券の下落亦推して而して知るべきのみ。

月次	日本銀行株		正金銀行株		第一國立銀行株		第三國立銀行株	
	二十二年	二十三年	二十二年	二十三年	二十二年	二十三年	二十二年	二十三年
一月	円 二九九・四〇	円 二六九・五五	円 二七〇・四七	円 二三三・八五	円 二四四・六〇	円 二〇七・二〇	円 一四二・〇九	円 一二九・九五
二月	二九七・六〇	二六四・八〇	二七八・九二	二三五・〇〇	二三四・八四	二〇二・三八	一四〇・七八	一二四・六八
三月	二八二・五三	二五三・八五	二七四・六〇	二二九・三七	二三五・〇四	二〇一・二七	一四二・二七	一二三・一〇

	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
円	二八一・〇六	二七六・二四	二七二・四一	二七一・四三	二六四・八一	二六六・〇〇	二五六・一四	二六七・六六	二六九・五〇
円	二五〇・二五	二四九・八〇	二四六・六三	二四八・五一	二五〇・一八	二五一・六五	二四八・五六	二四三・二〇	二四三・四二
円	二七〇・六八	二七一・二三	二六八・四七	二六六・八五	二七五・六八	二六一・一六	二五〇・〇五	二四七・七六	
円	二二七・六八	二二六・九〇	二二〇・八七	二一〇・〇三	二〇四・一三	二〇〇・〇〇	一九三・八四	一九三・三五	
円	二二七・五〇	二二八・九〇	二二八・八八	二二三・三〇	二二八・九三	二二二・四一	二一一・二七	二一一・〇〇	
円	一九七・〇〇	一九六・〇三	一九四・〇〇	一九三・三〇	一八五・四三	—	—	—	
円	一四一・九七	一四一・二八	一四二・一三	一四二・四六	一四七・七二	一四三・二九	一四三・六〇	一四二・二八	一四二・五〇
円	一三二・五〇	一三二・三三	一三五・三三	一二七・三六	一二五・〇〇	一二五・〇〇	一二五・八〇	一二五・〇〇	一二四・五〇

夫れ株券の下落は建瓴の水の如く、一瀉地に墜つるの勢あるに拘はらず多數の新設會社は株金未だ滿額に達せず將來拂込を要する金額亦頗る巨額なりとす。即ち當年五月の調査に據れば東京株式取引所に於て從前定期賣買の認許を得たる各國立銀行及び諸會社資本金額は一億三千六百六十二萬六千百圓にして此内既に拂込みたる高は九千九百八十一萬六千六百四十圓未拂高三千六百八十萬九千六百四十圓なりと云ふ。其他二十一年以降新設會社の株金を募集しつつあるものを統會すれば其申込高實に一億三千七百餘萬圓内拂込高四千萬圓未拂高一億圓とす。豈に驚くべき巨額ならずや。而して此等の株主は當初興業熱に誘はれて知らず識らず分外の株券を引受けたるもの尠からず。然るに今や株券は下落の一方に傾むきて株金拂込の期は次第に切迫し遂に負擔の重きに苦しみて其義務を果す能はざるの事情に迫まりたり。此間銀行の營業如何を察するに一般の風潮既に若斯なれば銀行者獨り競爭の外に立つ能はず。是を以て各銀行の株券に對して投入したる資本は少額にあらず。之が爲めに各銀行は往々意外の贏利を博したるは疑を容れずと雖も其結果遂に資本を一方に固定せしむるの不幸を見るに至れり。蓋し銀行事業も亦自から分業法に據らざるべからず。地所株券の如き動産不動産に對して活動の機を與へ、融通の便を開くは蓋し興業銀行若くは農業銀行の主業とする所なり。現今我邦の銀行は商業銀行の組織なり。營業の性質より之を論ずれば此等の業に從事する時は往々資本を固著せしむるの弊あるが故に最も嫌忌する所なり。故に米國の國立銀行條例は不動産に對して貸金を爲すことを禁ぜり。然れども財政の機關未だ具備ぜざる我邦に於ては此等の業に從事するは不得已に出たりと雖も各銀行が會社の性質如何に拘はらず世の風潮に乘じ株式土地に多額の資本を固定せしめしは實に浩歎に堪へざるなり。

抑も瓶の罄くるは維れ綆の恥各銀行の困迫は日本銀行亦之を傍觀することを得ず。日本銀行は之が醫治の方を講ずるに當り先づ其病根たる株券に向て對症藥を調劑するに決し遂に前記の臨機策を實施するに至れり。今此臨機策は金融上果して如何なる效驗を奏したるか之を察するに當年中日本銀行の擔保品付手形の割引高を調査するに東京本店は手形九百八十七枚金額一千四十一萬三千九百二十一圓大阪支店は手形九百五枚金額五百四十八萬三千二百八十五圓共計手形千八百九十二枚金額千五百八十九萬七千二百六圓の巨額に達す。宜なり此策を實施するや各銀行は恰かも旱後の雨に遇ふが如く死資を起し生氣を回して稍々愁眉を開らくを得久しく乾燥したる金融社會亦皆其餘澤を蒙むらざるなし。是れ當年の金融事情は前に梗塞を告げて後に融解せし所以にして所謂逆風を順受したるものに非ず耶。

第二因たる米價の暴騰は興業熱の反動に比すれば最も怖るべき顯象を現はせり。何となれば興業熱の反動より受けたる金融の困迫は專ら中等以上の社會殊に銀行社會に在りと雖も米價の暴騰は社會中最も下級の生計をなす細民をして凄愴悲慘の境に淪ましむるものなり。夫れ細民は社會の根底にして國家の富源實に此に出づ。豈に寒心せざるを得んや。今當年中每月の正米相場を調査するに左表の如き高低を示せり。乃ち前半季の每月平均相場は七圓八十四錢四厘より十圓八十九錢八厘に進む。後半季は氣配一轉して逆退を示し其每月平均相場は十圓四十九錢七厘より七圓十三錢三厘に降る。故に前季は六箇月間に三圓五錢四厘を進め後季は六箇月間に三圓三十六錢四厘を墜せり。（東京深川廻米問屋報告に據る）

正米相場每月高低表　（中米相場）

附錄　明治大正各年金融概況

月次	最高	最低	全月平均	月次	最高	最低	全月平均
一月	円 八・〇一九	円 七・六五二	円 七・八四四	七月	二・二六一	九・八三	一〇・四九七
二月	八・四二三	七・九七	八・二六五	八月	二・〇一三	九・四〇一	一〇・四三九
三月	九・〇六六	八・三五四	八・三五三	九月	一〇・〇三〇	九・一〇七	九・三一〇
四月	九・二七二	八・七一八	九・一八	十月	九・一〇七	七・四二四	八・八五
五月	九・三六九	九・一四九	九・三八	十一月	七・八一三	六・九四四	七・四〇八
六月	一二・三三四	九・七八	一〇・八九	十二月	七・二九九	六・九七八	七・二三三

此高低を致す所以の理由を概敍せんに、其主因は多年輸出米の多額なると、前年の劣作とに由り、各地共古米の貯藏殆んど皆無なりとの說は漸く其事實となり、且降雪少なく春來寒暖不定にして氣候頗る不順雪に麥作に害あるのみならず、當年夏季の氣候も大に憂慮すべき所ありしを以て、遂に一月中八圓一錢九厘の最高價を呈するに至れり。二月は十一日の大雪以來氣候稍々本順に復し、又一方には金融の逼迫に苦しめらるる事情ありて、下旬には大に下落を示したりと雖も、平均相場は一月に比すれば一層高點に進みたり。三月に入り遂に九圓臺に昇り、四月に接し氣候頗る不順にして、降雨多く各地水害の報相接し、麥作は七八分の減毛なるべしとの豫見ありて、初旬は人氣沸騰して殆んど底止する所を知らざるが如き情況を呈したる際、彼の外國米代用事件の爲め頓に氣勢を挫折せられ、其中旬には俄然下落して遂に八圓七十一錢八厘の最低價を見るに至れり。然れども元來當年は供給の匱しき年柄なるに、氣候も常に順適ならざれば、下旬には又漸く高價に傾くの商勢なり、其平均相場は前月に比して更に高位に進みたり。五月にありては各地の麥作も豫想の如く凶歉ならざるべし。加之、外國米の需用漸次增加するの影響にて、其價格も敢て昇騰せず。最低價九圓十四錢九厘を示せしも、定期市場は當月の發會より外國米を受渡米に代用することを實施し、且政府は中央備荒儲蓄金を運用して盛んに外國米を購入して陸續之を拂下らるる籌畫ありしかば、米商は前途を慮り、一時外國米の買付を見合せ居たるの際、彼の官廳拂下米に關する官文書僞造事件あり、爲めに定期市場は一時非常の激動を惹起したるも、幸に正米市場には影響なかりしのみならず、全く詐欺の手段暴露せし以後は却て反動の傾むきを呈し、加ふるに麥作は一般に豫想外の劣作を告げたれば、農家をして益々警戒貯蓄の念を抱かしめ、各生產地は自然他國への輸出を控ゆるの狀況あり、遂に東京の在米は著しく減少せしかば、月末は商勢頓に一變し、商估は擧て買進みし故、遂に九圓五十六錢九厘の最高價を呈するに至れり。六月は各地方の在米益々減じて、動もすれば供給に缺乏を告げんとするに際し、麥作は極めて劣作なりしとて益々警戒の念を强め遂に十一圓五十三錢四厘の最高價を呈するに至れり。

此際、政府に於て備荒儲蓄金を運用して購入せられたる外國米續々輸入ありしを以て、東京淺草及大阪兵庫の官廩に於て拂下げを擧行せられしより、襄に痛く缺乏を感じたるも、今や漸く增加の傾むきを示し、人氣稍々安靜に歸せしと雖も、相場は容易に氣勢を挫かず、下旬は亂民佐渡に蜂起し、一時北越地方の輸出米を防遏し、爲めに東京の在米著しく減少せしが、此間氣候本順に復し、暑氣俄に加はり、七月より、外國米を定期受渡米に用ゐることになりたるを以て、氣勢を挫きたるものの如く、前月の商勢に比すれば反對の景況にして、漸次低落の傾を示し、八月は著しき變動なく、始終小高下なりしが、月末に至り一、二の地方水害の報ありて稍々上騰の氣勢を示せり。然れども全國擧て豐穰の報あり、從て下落の傾むき强く、九月に至りては全く豐穰の實況を顯はしたりしも、所謂豐年に賣なしの氣勢を示して、東京の廻米裕ならざれば自然多數の買進みありしため、頗る上騰の氣勢を含みたり。然るに十月より十一月に入り各地の新米市場に上り、自然賣急ぎの情あり、爲めに相場の氣勢を挫き、東京の輸入米も日を逐て增加し此月の定期受渡米は一萬八千餘石の多額なりしに、盡く新米のみを以て受渡を結了せしは、前年の劣作を承け、各地古米缺乏の結果に因由するものにして、斯の如く十一月期の受渡に新米のみを用ゐたるは實に異例なりと云ふ。而して此半季間の最高は七月に於て十一圓二十六錢一厘、最低は十二月に於て六圓九十七錢八厘に墜つ、高低の間四圓二十八錢三厘の差を現はせり。

第三主因たる外國爲換相場の變動は、既に詳述したれば復た玆に多言を要せずと雖も、蓋し銀價の變動甚しく、其價位常に昂起して止まざるときは、我銀貨國の貿易は輸入に利にして輸出に不利なるは世人の熟知するが如し。

故に我貿易の景況を觀るに、輸出品の首位を占むる生絲は其販路を阻遏せられ横濱に滯積したる生絲の次年に持越したるもの三萬梱に達せしは恰かも一千餘萬圓の資本を流通外に擲て全く活動の機を失はしめたるに異ならざれば產絲地方に取引を有する京濱間各銀行の資本は動もすれば供給に缺乏を告げんとし就中貿易關頭に立て海外取引の衝に當る橫濱正金銀行は遂に莫大の損害を蒙むるに至れり。此際日本銀行の助力微かりせば金融社會に如何なる慘狀を惹起すも測るべからざりき。幸に陽春を霜雪の裡に迎ふるを得たるは偏に兌換銀行券條例改正の效果と謂はざるべからず。

以上陳ぶるが如く、米價は前年來漸次昂起し、當年に入り益々其勢を長ぜり。卽ち前年三月の平均相場は四圓臺なりしも、當年は九圓臺に上れり。夫れ米價の騰貴既に如斯なるに由り、日常の需用品は勿論其品種の何たるを問はず皆米價に伴ふて氣配を進めざるはなし。是米穀は國民の主食にして其一貫一賤は自から物價を支配するの力を有すればなり。爲めに當年は米穀に向て巨額の資本を要せざるを得ず。且株式の市況は前述の如く、二十一年以降新設會社の株金募集額は莫大の資本を吸收せり。而して此等の資本は率ね各會社に於て工場の建築其他機械若くは鐵軌等の固定資本に變形して、海外に流出したるもの少しとせず。是を以て株券の價格は五六種を除くの外、悉く拂込額以內に沈淪して容易に起色なし。此等の諸因に由り、金融益々頻繁を極めて竟に一大壅塞を釀成せり。是を以て日本銀行は制限外に兌換券を增發して一時の急に應じ、尋で手形の割引を擴張して僅に恐慌を救ふを得たり。而して政府は其機に應じて數次に金祿公債證書の抽籤償還を爲して新資本を市場に注入し、一方は備荒儲蓄金を運用して、盛んに外國米を輸入して陸續拂下を爲し、以て米價を鎭壓せられたり。此等の作用に由り、七月以後は市況一變して金融稍々緩局に入りたり。九月に至り外國爲換相場騰貴の爲め、生絲の輸出を阻遏せられ、其下旬は生絲二萬餘梱を滯積し、其金額は無慮一千萬圓に達したれば、京濱間取引の關係ある銀行は金融逼迫を告ぐべきに各銀行は却て餘裕ある如く、曾て繁忙の狀を見ざりしは、蓋し米價の騰貴又は水害等の爲めに農家は一般に購賣力を減少したるが爲め諸商業不活潑にして資金の需要尠なきと、金祿公債百五十萬圓の抽籤償還ありしも亦與つて其因を爲すが如し。然れども一大主因は實に政府が兌換銀行券條例を改正して保證準備發行額を擴張せられたるに由り、日本銀行は務めて生絲資本を供給して力を各銀行に假したるに由らずんばあらず。由是觀之、下半季の金融は上半季と反對の景況を示し甚しき繁忙を告げざるのみならず、常に緩局を持するものは卽ち第四因たる日本銀行の臨機策と政府の作用が實效を奏したるの結果なるべし。

更に全國金利の景況を按ずるに、平均最高は二月に在りて貸金利息の平均最高は十月に至りて一割五分一厘二毛割引日歩は四錢四厘二毛を示し、爾後次第に下向して貸金利息の平均最高は十月に至りて一割四分三厘六毛割引日歩の平均最高は十一月に至りて四錢一厘三毛に墜つ。其間些の高低ありと雖も小波瀾に過ぎず、金融の大局は著しき變化なく、徐々下落の一方に傾向したるを證すべし。然れども今試みに之を前年に對照すれば、每月幾分の高點を示さざるなし。然らば則ち當年の金融は果然繁忙の裏に經過したるものにして、動もすれば慘狀を現出せんとせしも、幸に政府の注意周到なると、日本銀行の作用能く機宜に應じて激變を生ぜしめざりき。是を以て十月以後は前年に對すれば却て逆比例を示し、貸金利息の平均最高は一厘九毛より四厘一毛割引日歩平均最高は三毛乃至九毛の下落を見る。

明治二十四年

此に動けば此に反動あり、經濟の事情は最も不規則なる波動を爲して暫らくも靜止せず。然れども其波動たる自から天法あり。人力を以て之を制すべからず。回顧すれば前年は銀貨問題米國紐育に突起して直に英國倫敦を衝き、其餘勢の及ぶ所、疆域闊大一時我海口に襲來するや、米價の暴騰之が助勢を爲して釀天の怒濤を起し、商業を攪亂し信用を破壞し、一時人心を慌惑せしめたりしが、是畢竟人爲を以て天法を破りたるものにして、自然の結果にあらざれば其餘勢久しからずして熄むべしとは前報に於て豫言せし所なるが果せる哉本年は其反動を來し、秋穫豐穰を告げて農に餘粟あり、外國貿易盛況を呈して商に餘資あり、一般經濟の現象は恰かも雷後の晴に遇ふが如く大に人意を快するものあり。然れども內地の商情は平穩の極却て冷淡の光景を呈して再び不景氣の舊態に復し金融之に伴ふて著しき變化なく、概して緩慢に流る。故に金利は前年に比較すれば幾層の低位を示せり。夫れ斯の如く商業は平穩に經過すと雖も、時に小波瀾の其間に起伏するあり。而して其原動力は公債株券にあるが如し。

夫れ公債株券の金融上に於て主動たるは則ち商業の不振なるに是れ由れり。勿論九月中二回の暴風に因て北陸關西地方は損害を被れり。此等を口實として定期米相場に非常の變動を起し、又十月二十八日岐阜愛知地方非常の震災ありて慘毒を流し商業上に波動を起したるは偶發の特因なりと雖も、一時或は一局部に止まりて未だ商業世界の大勢を動すに至らず、請ふ本年の金融事情を左に略陳せん。

歲首一二月の交は前年の餘勢を受け、外國爲替相場未だ靜定せざるに拘らず橫濱生絲の販路漸く開け、其賣込金の流込ありたれば、京濱間の金融は幾分か緩慢に赴くべきに却て二月初旬より稍々引締の景況を現はせり。是れ日本鐵道、山陽鐵道、日本運輸、日本織物の諸會社株金拂込等の爲め、資本の需要增加せしと、此等の株券は株金拂込の爲め市場の景況に關係し、取引不振の商勢、殊に保護會社に對する問題帝國議會に現はれんとするの聲傳りて、大に諸株券の氣配に影響を及ぼしたるものの如く、爾來漸々下落の一方に傾きたり。此際日本銀行は貨幣整理上の都合を以て兌換券の回收を務めたるが故に、擔保品を以て融通を請求するも輒く承諾せざるより、一般に前途の金融を苦慮するものありしなり。然れども未だ普通貸借上の金利に影響を及ぼすに至らず。東京同盟銀行の平均利息步合は九分九厘五毛より一割二厘三毛八の間を上下せり、三月に入り金融少しく緩局に入りたるが如しと雖も地方の納租未だ完了せず。且日本銀行に於て俄然貸付及割引等の利子を改正し、從前の步合より二厘方を引上たるより一般の金融に影響を及ぼせり。然れども同銀行が此作用ある所以のものは從前同行の利息步合は一般の利息相場と甚しき懸隔あるが故に少なからざる流弊あることを發見せしより、今其步合を一般の金利と近邇せしめ漸次其流弊を矯めんが爲めのみ、決して將來金融の急迫を豫想せしにあらず。畢竟金融社會を整理するの方針に出でたること判然せしより、人氣隨て落付たり。已にして地方の納租完了を告げたるが故に其下旬は銀行に於ては多少緩慢に苦しむの狀あり。東京同盟銀行の利息平均步合は前月に比して二厘方を落せり。四月は層一層より緩局に進入せり、其原因は一にして足らずと雖も、今其重なる近因を擧ぐれば橫濱生絲の輸出益活潑にして其賣上金の收入多かりしと、一方は官衙諸會社等專ら節約の方針を採り、人々退守の策を講じて只管戒愼を加へ、大に購買力を減じ加之、七分利金祿公債元金の前後二回に四百三十八萬圓の償還あるが如き是なり。故に銀行の貸付

利息は前月に比して一分方を引下げたり。金融事情既に斯の如くなれば、公債證書は漸次騰貴の傾向あり、就中整理公債の如きは初旬九十九圓二十錢內外に進みたるが故に、政府は同月十六日整理公債條例第六條第二項に據り同公債二百萬圓を九十九圓三十九錢の價格を以て發行せられしが、其下旬は同公債の市價百一圓七八十錢の高點を現はせり。之に反して諸株式は概して下落に傾けり。然るに五月に入り株券の商情頓に一變し、氣配大に振起し殊に鐵道株の如きは頗る好景氣を添へ、九州鐵道株は最低價より五圓方を上進せり。是官設鐵道と私設鐵道との聯合の說あり。或は私設鐵道買收說の流布すると山陽、九州兩鐵道は漸次線路の延長を加ふるに從ひ利益を增加し、年六分以上の利益を得ること難からずと爲し、一層氣配引立て活潑の景況を顯はししも畢竟五月に入り金融は緩更に緩を加へて、日本銀行利息步合は前月に比して凡そ二厘方を引下げ、東京同盟銀行貸付金の平均利息步合は更に三厘四毛、大阪同盟銀行の利息步合は四厘方を引下げたる事情なりしかば、資本家は遊資を擁して運轉に苦しむの折柄、各鐵道株の格安なるに著目して其買入に著手したるに職由せずんばあらず。爾來公債は株券の氣勢に壓せられ、一時額面以上に騰りたる市價は遂に額面を崩して九十九圓六十錢乃至八十錢の間を昇降し、以て六、七月を經過せり。抑も從前の經驗に徵するに、公債騰れば株券は必ず降り、株券騰れば公債は必ず降る。兩者の氣勢互に消長を相成せり。之を要するに、金融市場の原動力は公債株券に在るが如し。玆に最も人目を惹きたるは私立久次米銀行の休業に踵で東京米商會所事件の破裂あり、其餘動二三の國立銀行に波及し、大に市情をして惘々たらしめたることと是なり。此際東京第一國立銀行、三井銀行等に關し浮說流言百出して人心を慌惑せしめたるより、其衝に當る關係銀行は頻りに預金の取付に遇ひ、他の銀行も多少の影響を蒙り、一時は殆んど恐慌に至らんとするの觀を呈せしも、猶ほ一擧石を海面に投ずるが如く、波紋の及ぶ所狹隘なる區域に止まり、一般の潮勢に變動を起すに至らず。金融は依然として緩慢に流がれ、金利は日一日より低點に降れり。夫れ然り、公債株券は資本運動の燒點となり、八月に入り整理公債の市價は遂に百一圓十錢迄に回復せり。此機に乘じ、政府は第三回整理公債五百萬圓の募集を公示せられたるに由り、忽ち四、五十錢方下落せしも、募集の結果頗る好況を呈せしは亦以て金融緩慢の一證と爲すべし。九月は二、三地方を除くの外概して秋穫は前年に劣らざる豐穰を告げ、一般の人氣前途に望を囑し

商情稍振起の色あり。隨て各銀行の金融の多少供給を增加せし狀況ありしも其下旬は七分利金祿公債未償還額六百六十六萬三千百十圓を悉皆償還せられ尋で十月東京市公債條例の發布あり同公債一千萬圓の內二百萬圓を募集し、十一月は中山道鐵道公債三百萬圓の償還あり。斯の如く公債市場の活潑なりしは幾分か金融を助勢したるが如く商情更に振起せず。諸株式一時政府に於て買收の議內定したるの聲傳にて氣配を强めたるも遂に公債の氣勢に壓せられて漸次冷淡の光景を呈せり。然るに十二月は私設鐵道買收法案の議會に上るを氣構へ市場再び活氣を生じ各鐵道株を首として諸株式一時大に買進みて市價を飛騰せしめしが高價の株式は却て賣品多く漸次不振に傾きたり。而して一般の市情は歲尾の例として少しく繁忙に赴き各銀行の金融も大に資本の供給を增加せりと雖も小口の需要のみ多くして大口の取引は僅少の狀況なり。故に小口の貸付金利息は上進せるに拘らず大口の貸金は低利を以て需要者を待つの狀あり。故に千圓以上の貸金利息は却て前月に比して低廉を示せり。

以上敍ぶる所に據りて本年の經濟事情を按ずるに之を外にして農家は秋穫の豐穰に賴りて頓に購買力を增すと雖も商家は專ら持重を務めて漫りに僥倖を求めず故に市場活潑の觀なし。但前年來競爭の餘弊を承けて株式市場の未だ整理に至らざると公債の募集償還頻繁なりしは資本の流域に小波瀾を起すを見るのみ。之を要するに商況の不振に拘はらず國の富は多少增進の實あるや疑なし。

左に第一及第二表を以て日本銀行の利息步合を前年と對照して其高低比較を示せり。蓋し日本銀行の利息步合は全國金利の標準となるべきものにして其高低は以て金融の繁閑を卜すべしと雖も同銀行たる競爭外に立て各銀行を統率するものにして小波瀾の爲めに小動搖を爲さず。且三月以來利息を改正して一般の金利に近邇せしめたりと雖も尙ほ市場の相場に比して懸隔あるが故に之を以て直に一般の相場と視るべからず。因て更に第三第四表を以て京阪同盟銀行の利息步合を揭ぐ。蓋し京阪は東西商業の兩中心を占め物貨取引の燒點たるが故なり。更に第五第六第七表を以て全國銀行所在地方の每月平均相場を揭ぐ。該表に據れば全國の貸金利息の平均最高は一月に於て一割四分八厘九毛を示し平均最低は十月に於て八分九厘四毛を示せり。割引日步平均最高は一月に在て四錢一厘一毛を示し平均最低は七月に在て二錢七厘八毛を示せり。又前年と對照すれば每月多少の低減を示さざるなし。今每月の平均最高最低を更に一箇年に平均して前年と對照すれば左の如し。

年次	貸金利息（年利）			割引利息（日步）		
	最高		最低	最高		最低
二十四年	一錢一厘四二		○錢○厘九一八	二錢一厘八八		三錢○厘九三
二十三年	一錢一厘四六八		○錢○厘九五三	三錢○厘三五		四錢一厘九

故に貸金利息は前年に比較して三厘五毛乃至四厘七毛を減じ割引步合は一厘七毛乃至二厘六毛を遜せり。此に由て之を觀れば本年の金融事情は常步を履つつ平坦の途を經過したると謂ふべし。前年に比すれば險夷相反するの狀を現はせり。夫れ全國金融の大勢は斯の如しと雖も更に第八表以下の表面を仔細に觀察すれば各地方自から一隅の商情ありて金融の事情繁閑同じからざるは區を以て之を別つが如し。金利の最も高き地方は千葉・嚴手・青森・高知・福岡・大分・佐賀・宮崎等の諸縣とす。該地方の貸金利息は往々二割の高點を保てり割引日步は五錢乃至六錢を示すもの鮮なからずと雖も大分・宮崎に於ては七錢以上に達することとあり是を全國中の最高點となすべし。要するに地方の金利は都會に比すれば幾分か高點に居るものは蓋し一隅に僻在して運輸の便未だ開けざるが故に物貨の聚散滑かならずして商業上の競爭未だ盛んならざるが故に資本の運動自から鈍きに由らずんばあらず。其詳細は左の諸表を通覽して之を了悉すべし。

（一）日本銀行東京本店利息步合高低表

月次	定期貸			當座貸			當所割引			擔保品付割引		
	當年	前年	比較差	當年	前年	比較差	當年	前年	比較差	當年	前年	比較差
一月 最高	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
同 最低	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
二月 高	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
同 低	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
三月 高	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
同 低	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
四月 高	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
同 低	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
五月 高	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
同 低	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
六月 高	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
同 低	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
七月 高	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
同 低	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
八月 高	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
同 低	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
九月 高	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
同 低	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
十月 高	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
同 低	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
十一月 高	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
同 低	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
十二月 高	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		
同 低	一錢一厘	一錢一厘		二錢一〇	一錢一厘		一錢一厘	一錢一厘		一錢一厘		

(二)　日本銀行大阪支店利息歩合高低表

月次		定期貸			當座貸			當所割引			擔保品付割引		
		當年	前年	比較差	當年	前年	比較差	當年	前年	比較差	當年	前年	比較差
一月	最高	錢二・一〇	錢二・一〇	錢〇・一〇	錢二・一〇	錢二・一〇	錢〇・一〇	錢二・一〇	錢二・一〇	錢〇・一〇	錢二・一〇	錢二・一〇	錢〇・一〇
	同	一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五	
二月	最低	二・〇〇	二・一〇	〇・一〇 低	二・一〇	二・一〇	〇・一〇 低	二・一〇	二・一〇	〇・一〇 低	二・一〇	二・一〇	〇・一〇 低
	同	一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五	
三月	最高	二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇	
	同	一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五	
四月	同	二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇	
	同	一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五	
五月	同	二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇	
	同	一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五	
六月	同	二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇	
	同	一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五	
七月	同	二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇	
	同	一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五	
八月	同	二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇	
	同	一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五	
九月	同	二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇	
	同	一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五	
十月	同	二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇	
	同	一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五	
十一月	同	二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇	
	同	一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五	
十二月	同	二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇		二・一〇	二・一〇	
	同	一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五		一・七五	一・七五	

(三)　京阪銀行集會所同盟銀行利息歩合高低比較表　(抵當貸年利)

月次		東京同盟銀行歩合					大阪同盟銀行歩合				
		百圓以上千圓	一千圓以上一萬圓	一萬圓以上	總平均		百圓以上千圓	一千圓以上一萬圓	一萬圓以上	總平均	
一月	當年	一・七五	一・七五	一・七五	一・七五		一・七五	一・七五	一・七五	一・七五	
	前年	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五		一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	
二月	同	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高
	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同
三月	同	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高
	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同
四月	同	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高
	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同
五月	同	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高
	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同
六月	同	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高
	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同
七月	同	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高
	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同
八月	同	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高
	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同
九月	同	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高
	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同
十月	同	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高
	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同
十一月	同	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高
	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同
十二月	同	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高	一・七〇	一・七〇	一・七〇	一・七〇	高
	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同	一・六五	一・六五	一・六五	一・六五	同

(五) 全國貸金利息相場高低表（年利）

月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	明治十二年
平均	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇
最高	一五・〇〇	一四・八九	一四・八九	一四・八九	一四・八九	一四・八九	一四・八九	一四・八九	一四・八九	一四・八九	一四・八九	一四・八九	一四・八九	一四・八九
最低	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇
比較差	一・〇〇	〇・八九	〇・八九	〇・八九	〇・八九	〇・八九	〇・八九	〇・八九	〇・八九	〇・八九	〇・八九	〇・八九	〇・八九	〇・八九

(六) 全國預金利息相場高低表（年利）

月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	明治十二年
平均	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇
最高	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇	一四・三〇
最低	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇
比較差	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇

(四) 京阪同盟銀行割引歩合高低比較表（百圓に付日歩）

月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	明治十二年
東京同盟銀行歩合 平均	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇
最高	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇
最低	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇
比較差	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇
大阪同盟銀行歩合 平均	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇
最高	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇
最低	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇	二・三〇
比較差	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇

(三) 金・銀・米・十二銘柄同盟米價平均表

月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	明治十二年
同盟	三・三〇	三・三〇	三・三〇	三・三〇	三・三〇	三・三〇	三・三〇	三・三〇	三・三〇	三・三〇	三・三〇	三・三〇	三・三〇	三・三〇
金	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇
銀	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇
米	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇
十二銘柄	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇

七五八

（七）全國割引日歩高低表　（百圓に付）

月次	平均最高	比較	平均最低	比較
	二十四年	二十三年	二十四年	二十三年
一月	○・四一一 銭	低 ○・四三三 銭	○・三〇二 銭	低 ○・三一四 銭
二月	○・四〇八 同	同 ○・四四二 同	○・三〇三 同	同 ○・三二一 同
三月	○・四〇五 同	同 ○・四四二 同	○・二九九 同	同 ○・三一五 同
四月	○・三九六 同	同 ○・四二二 同	○・二八六 同	同 ○・三〇五 同
五月	○・三九〇 同	同 ○・四一五 同	○・二八八 同	同 ○・三〇四 同
六月	○・三九五 同	同 ○・四一四 同	○・二八八 同	同 ○・三〇三 同
七月	○・三八〇 同	同 ○・四一一 同	○・二七八 同	同 ○・二九六 同
八月	○・三八二 同	同 ○・四一四 同	○・二八〇 同	同 ○・二九五 同
九月	○・三八二 同	同 ○・四一八 同	○・二八一 同	同 ○・三〇一 同
十月	○・三八六 同	同 ○・四一三 同	○・二八一 同	同 ○・二九八 同
十一月	○・三九〇 同	同 ○・四一二 同	○・二八四 同	同 ○・三〇二 同
十二月	○・四〇〇 同	同 ○・四一六 同	○・二八九 同	同 ○・三〇七 同

明治二十五年

二十五年の金融は最も平穏に經過せり。蓋し本年は金融の原動力たる銀塊相場の變動甚だ少なく萬國貨幣會議の動靜如何により時に小浮沈ありと雖も所謂氣配なるものにして實形に現はれたるものにあらず。然れども下落の大勢は遂に挽回すべからず、一月中倫敦の參著爲替相庭は三志一片八分の一なりしが、十二月中は二志九片八分の三に降れり。爲替相場の下落斯の如くなれば、我外國貿易は出に順にして入に逆なり。是を以て輸出は輸入に超過して巨額の正貨を吸收せり。即ち本年末に於ける日本銀行の正貨有高は八千二百八十萬圓餘に達し前年に比すれば實に一千七百六十五萬圓餘の增額を致せり。蓋し正貨增加すれば從て保證準備發行の兌換券は勢銀行に還入せざるを得ず。即ち日本銀行營業上金員出入の數を觀るに收入は九億五千百八萬圓餘、支拂は九億三千七百萬圓餘にして、一千四百八萬圓餘の收入超過となり、前年の出納高に比すれば收納に二千二百十六萬圓餘、支拂に三千三百八十七萬圓餘を減じ、又年中平均殘高を前年に比較すれば預金は二百四十七萬圓餘を增し貸出金は八百四十五萬圓餘を減ぜり。此の如き景況なりしを以て其利益を減少するは勢免れざる所なり。中央銀行既に斯の如し、一般の銀行事業は孰れも資本の給需權衡を失ひ、一時は預り金の多きに苦しむの狀あり。然れども銀價の下落は我輸出貿易を奬勵し、茶、生絲の賣込近年無比の盛況を呈し、紡績事業の如き大に發達せり。即ち昨二十四年の製造高四千五百三十萬斤なりしに、二十五年は六千四百四十七萬斤に達せり。又農家は秋穫の豐穰を告ぐるに拘はらず、價格は低廉ならざるを以て幾分か其購買力を增進せしや復た疑を容れず。此等の事情により七月

以後は資本の需要漸く起り市情聊か起色ありたりと雖も随て貸出せば随て回收し其速轉快速未だ以て金利を動すに至らず金融は依然として緩局を脫する能はず。請ふ東京大阪兩同盟銀行の報告を集計して金融の一班を示さん。

東京同盟銀行營業の概況

月末	預金	前月比較増減	貸付及貸越	前月比較増減	割引高	前月比較増減
十二月末	三六、六八七、七三四円	増 一、三二七、七七〇	五四、五四八、六八六円	増 五、〇四二、九三七	七四、〇一二、二四五円	増 九六八、六五一
十一月末	三五、三六〇、〇〇四	減 一、三四三、七七〇	五〇、五〇五、七四九	減 一、六四三、九六三	六九、〇四三、五九四	減 一、三四三、七七〇
十月末	三五、七〇三、七七四	減 一、三四三、七七〇	五二、一四九、七一二	減 一、六四三、九六三	七〇、四一七、三六四	減 一、三四三、七七〇
九月末	三六、〇四七、五四四	減 一、三四三、七七〇	五三、七九三、六七五	減 一、六四三、九六三	七一、七六一、一三四	減 一、三四三、七七〇
八月末	三六、一九一、三一四	減 一、三四三、七七〇	五五、四三七、六三八	減 一、六四三、九六三	七三、一〇五、一〇四	減 一、三四三、七七〇
七月末	三六、五三五、〇八四	増 一、三四三、七七〇	五七、〇八一、六〇一	増 一、六四三、九六三	七四、四四八、八七四	増 一、三四三、七七〇
六月末	三五、一九二、三一四	減 一、三四三、七七〇	五五、四三七、六三八	減 一、六四三、九六三	七三、一〇五、一〇四	減 一、三四三、七七〇
五月末	三五、五三五、〇八四	増 一、三四三、七七〇	五七、〇八一、六〇一	増 一、六四三、九六三	七四、四四八、八七四	増 一、三四三、七七〇
四月末	三六、〇四七、五四四	減 一、三四三、七七〇	五三、七九三、六七五	減 一、六四三、九六三	七一、七六一、一三四	減 一、三四三、七七〇
三月末	三六、一九一、三一四	減 一、三四三、七七〇	五五、四三七、六三八	減 一、六四三、九六三	七三、一〇五、一〇四	減 一、三四三、七七〇
二月末	三五、五三五、〇八四	増 一、三四三、七七〇	五七、〇八一、六〇一	増 一、六四三、九六三	七四、四四八、八七四	増 一、三四三、七七〇
一月末	三五、三六〇、〇〇四	減 一、三四三、七七〇	五四、五四八、六八六	減 一、六四三、九六三	七四、〇一二、二四五	減 九六八、六五一

大阪同盟銀行營業の概況

月末	預金	前月比較増減	貸付及貸越	前月比較増減	割引高	前月比較増減
一月末	五五、〇二一、三四七円	円	五三、〇三一、三四七円	円	四、九三一、六三円	円
二月末	五八、〇三七、〇〇四	増 三、〇一五、六五七	五四、五四八、六八六	増 一、五一七、三三九	四、九三一、六三	減 一、三四三、七七〇
三月末	五七、〇八一、六〇一	減 九五六、四〇三	五二、一四九、七一二	減 二、三九八、九七四	四、四四八、八七四	減 四八二、七八九
四月末	五三、七九三、六七五	減 三、二八七、九二六	五〇、五〇五、七四九	減 一、六四三、九六三	四、一七六、一三四	減 二七二、七四〇
五月末	五五、四三七、六三八	増 一、六四三、九六三	五二、一四九、七一二	増 一、六四三、九六三	四、四四八、八七四	増 二七二、七四〇
六月末	五三、七九三、六七五	減 一、六四三、九六三	五〇、五〇五、七四九	減 一、六四三、九六三	四、一七六、一三四	減 二七二、七四〇
七月末	五五、四三七、六三八	増 一、六四三、九六三	五二、一四九、七一二	増 一、六四三、九六三	四、四四八、八七四	増 二七二、七四〇
八月末	五三、七九三、六七五	減 一、六四三、九六三	五〇、五〇五、七四九	減 一、六四三、九六三	四、一七六、一三四	減 二七二、七四〇
九月末	五五、四三七、六三八	増 一、六四三、九六三	五二、一四九、七一二	増 一、六四三、九六三	四、四四八、八七四	増 二七二、七四〇
十月末	五四、〇二一、三四七	減 一、四一六、二九一	五〇、九二一、三四七	減 一、二二八、四〇三	四、一七六、一三四	減 二七二、七四〇
十一月末	五四、〇二一、三四七	減 一、四一六、二九一	五〇、九二一、三四七	減 一、二二八、四〇三	四、一七六、一三四	減 二七二、七四〇
十二月末	五四、〇二一、三四七	減 一、四一六、二九一	五〇、九二一、三四七	減 一、二二八、四〇三	四、一七六、一三四	減 二七二、七四〇

取引所の出來高を調査して其一班を證せん。

受渡の爲め資本の需要多く此等の資本は擔保品付手形となりて割引せらるるに由るなり。

事業の整理振興と共に利益の多き見込あるもの俄に氣配を昂起し其取引の頻繁なりしより取引所の出來高に於て二百萬乃至三百萬圓の增加を示せしに由れり。

此增加を致す所以は蓋し商況沈靜金融緩弛の反映にして一月と十二月とを對照すれば東京大阪孰れも割引高に於て二百萬乃至三百萬圓の減却するものは三井銀行に於て大に改革を行ひ從前の土地株券等に係る滯貸金を一時に整理處分せしに由れり。

右の表に依れば預金は大に膨脹して貸付金は之に反して收縮の形勢を示せり。

唯東京同盟銀行の七月に於て貸

附錄

明治大正各年金融概況

月末	種類	株数
一月	七	五八、〇三七
二月	二三	九四、三五〇

月			
三月	一六	七九、二六六	
四月	一六	六六、〇三一	
五月	一六	六六、六九三	
六月	一七	七六、四五四	
七月	一六	一三四、三七三	
八月	一三	五一、一四〇	
九月	一二	五一、八七六	
十月	一七	五四、七一八	
十一月	二四	一三七、二四二	
十二月	二四	一五九、一九七	

本表に據り株式市場の景況を通觀するに、一月の出來高は五萬八千餘株なりしが、二月は俄然九萬四千餘株に進めり。是れ一は鐵道買收案の前途をトし關西九州各鐵道株漸く活氣を現はし、相場次第に上進し、一は客年來金融緩慢にして資本家の資本多くは其庫中に堆積するの傾向ある折柄紡績綿絲の好氣配に伴ひ紡績株券の需要を喚起したる景氣に誘はれ、一時沈淪したる諸株券も稍回復の兆を呈し、多少其賣買を見るに由る。之が爲め諸株券の相場少しく昂進の氣勢を示したるより市場の賣聲漸く多かりしかば其反動は遂に低價に趨き商況沈着に歸せる折柄、四月中整理公債六百萬圓の募集を氣構へ、株券の市況は遂に氣鋒を挫けり。是れ三月より四月に渉り出來高の減少に趨きたる所以なり。六月に至り鐵道敷設法の發布ありしに由り、株券の相場は遽に激昂して近來稀なる高價を現はし、久しく沈淪に陷りたる諸株再び氣勢挽回して頗る活潑の狀を示し、七月に於ては遂に十三萬四千餘株の出來高を見るに至る。此の好況を來せしものは既に鐵道布設法を發布せられ將來各地鐵道線聯接の多望なるのみならず、山陽關西九州各鐵道會社等は鐵道線を延長する等の計畫ありて將來の收益增進すべしとの傳說あり、又金融市場は常に緩慢に流れ隨て金利も大に下落を來たすを以て資本家は頻りに確實なる株券購買の念を惹起し、遊資を擧げて之を注入せんとし、遽に株式の氣配を喚起したるものの如し。尋で生絲輸出の期に接し製絲家の融通繁忙を來し、金融稍引締の狀ありて株式市場も少しく沈靜に趨きたりしが、政府公債借換の事業大に進歩し元金の償還頻繁なりし。於是從前人心は公債の一方に傾注し擧げて之を買競ひたる反動漸く起り、今や公債を賣却し確實なる株券に引換んとするもの漸く現はれんとするに際し、一旦困難に陷りたる諸會社の事業は近來漸く其緒に就て利益配當割合の如きも大に其額を增したるものあり、旁以て一般の人氣を惹起したるものの如し。是を以て十一月は十三萬七千餘株、十二月は十五萬九千餘株の取引を見るに至れり。

之を要するに本年は米麥は平年以上の作を得て而も其價格は近年無比の高點に昂り紡績業は前年來引續好況を維持し、猶ほ益增錘を企圖するもの少なからず。然れども商業上著しく金融に影響すべきの變況を呈せざりしに由り、金融は緩更に緩を加へたり。是を以て四月中整理公債募集の結果は、六百萬圓に對して七百十七萬千五百圓に上り、價格以上の申込は二百七十三萬七千四百圓に上る。八、九月の交橫濱生絲の取引漸く活潑に趨き、其價格遂に九百弗以上に達せし勢なりしと、又農家は豐穰を告げて購買力を生じ物價の需要漸次增加し銀價下落の影響を以て物價も隨て騰貴の有樣を呈せしを以て、金融稍引締りの狀況を現はし、銀行の預金は大に減少を示せしも此際政府は公債證書一千萬圓許を償還せられたるに依り、金融は再び緩和せられたり。金融の事情斯の如く、金利は益下落して底止する所を知らず。是を以て日本銀行の金利は二十四年七月二十一日改正以後變動なかりしが、本年十月二十二日を以て利息步合を引下げ二十四日より實施することとなれり。卽ち貸付利息擔保品付手形の割引は日步一錢七厘五毛を一錢六厘五毛に、商業手形當所割引步合一錢七厘を一錢六厘に、同他所割引步合一錢八厘五毛を一錢七厘五毛に改正したり。又二十四年九月二十九日改正以來据置たる各鐵道株擔保價格は十一月二十二日に改正し、更に大阪商船株を擔保品に加へ、多きは二十圓少きは一圓乃至五圓の價格を進めたり。是亦幾分株券價格の昂騰を誘導せしが如し。尋で同月二十五日、日本銀行は一會社或は一人の預り金高を十萬圓に制限し、十萬圓以上は總て無利息となせり。是を以て各銀行も亦競ふて預金の利息を引下ぐるに至れり。十二月は東京市公債三百萬圓の募集ありたれば、民間の餘裕資本は幾分か之に吸收せられたるも、此金額は再び東京十數の銀行へ預金となり、反て商業資本の流通を幇助したると、日本銀行が預金に制限を設けたるとに依り、資本給濡の平準を失ひ、各銀行共資本の運用に苦しむに至り、曾て歲尾の常觀を呈せざりし。

此金融平穩の間、突然警報を傳ふるものあり、恰かも晴天の霹靂の如し。一時人心をして愕然たらしめたり、是れ

他なし東京第三十三國立銀行の鎖店を告ぐると同時に在横濱新東洋銀行の支拂停止是れなり。抑も第三十三國立銀行は數年來營業困難に陷り百方維持の經畫中遂に此極に到りしものにして之が爲め經濟界に影響を及ぼさざりしが橫濱居留地十一番館の新東洋銀行支店は本年六月九日午後に至り突然支拂を停止し又同時に神戸支店に於ても同樣支拂を停止せり。元來同銀行は東洋銀行と稱して其支店は二番館に在りしが明治十七年の交一旦破產を告げ其後組織を一新し社號に新の字を冠して再興し倫敦に本店を置き橫濱神戸上海香港等に支店を設けて以て歐洲東洋間の爲換事業に專ら從事し居りしに銀價下落の影響より非常の損失を蒙むり今回遂に支拂停止の不幸に陷りしなり。此支店支拂停止の報京濱間に傳播するや關係者の驚愕せしも亦宜ならずや然れども該支店の不始末は內外商共夙に之を耳にせしより同行より振出したる切手は直に之を取付け又預け金あるものは大抵引出す等成丈取引を避くるの風ありしが爲め其損耗を蒙むるもの甚々少なかりしは大幸と謂ふべし。加旃正金銀行の外國爲換事業は之が爲め增進に傾き一層信用を加ふるに至りしは蓋し彼の不幸は轉じて我の幸となりしものなり。

明治二十六年

二十六年中我國の經濟事情は著しき變動なし。隨て一般の金融は靜穩の顯象を示せり。抑も近年作毛の豐穰と、客年生絲貿易の盛況は地方の購買力を增加せしこと尠なからず。外國輸入品の增加したるが如きは蓋し之に職由せずんばあらず。且國內通貨の益膨脹するに至れば早晚物價の騰貴を來すべきは當然の理にして方今我國の通貨は漸く增加し外國貿易の結果として一月より四月まで僅々四箇月間に於て五百五十二萬圓餘の金員を吸收し日本銀行の正貨準備八千萬圓を超過するの盛況を呈せり。而して之を一般の物價に徵するに稍上進の兆あるを見ると雖も信用取引は近年著しき進步を爲せり。乃ち東京大阪兩交換所の手形交換高は本年は前年より四千八百餘萬圓を增進し且運輸上の事業は益發達して船舶は日を逐て增加し貨物聚散の點に就ては著しく利便を增したるに相違なし。然れども我商業社會は多年退守に傾きたるを以て偶商況進動の機に會するも其進動は隱然として徐々に來り外面未だ顯然たるに至らず。然るに此際一方には公債の償還あり銀貨の流入あり加ふるに

富豪の資本次第に市場に注出せしが故に資本の供給は益其需要に超過し金融の緩慢利息の低落は之を客年に比して一層を加へたり。斯の如き顯象は商業上否運と稱すべきものにあらずと雖も資本の給需其權衡を得ずして一般に其運轉に苦しむの景況なれば銀行の營業上固より之が影響を免れずして收益爲に減少する所あり然れども幸に上半期は銀貨及び爲換相場の動搖甚しからざりしが六月下旬印度政府が銀貨自由鑄造の停止を宣告するや龍動銀塊相場は未曾有の激變を起し尋で米國購銀條例の廢止關稅改正の問題相踵で起り加ふるに同國市場の恐慌を以てす。我輸出貿易は俄に其進運を挫折せらるゝを以て下半季の金融は其局面を一變して漸次變忙を加へたり。其然る所以のものは從來繼續せる金利の低落は自然に事業の企圖擴張を奬勵して之に要する資金鮮からず且生絲は前陳米國の恐慌に會し滯荷多きが爲め資金の澁滯せるもの尠なからず。故に內にしては資金の需要增加せんとするに際し外にしては前年來吸收したる正貨も當季に於て反て海外に流出せり。乃ち五月より年末に至るまで金銀の流出高六百六十二萬圓を超へたり。此等の事情湊合して遂に金融の逼迫を見るに至りしなり。

我經濟事情を概言すれば前陳の如し。今玆に銀行營業上に就て仔細に觀察を下すべし。蓋し日本銀行本年中の金利步合は總て四回の變動を示せり。卽ち、

二十六年三月二十三日改正　貸付利子步合　日步　一錢五厘
　同　五月三十一日改正　同　手形割引步合　同　一錢四厘
　同　九月二日改正　同　同　一錢三厘
　同　十一月二十一日改正　同　同　一錢五厘
　同　同　同　一錢五厘
　同　同　同　一錢七厘
　同　同　同　一錢七厘

附錄　明治大正各年金融概況

右の如く、金利歩合は三月に一厘を減じ、以て九月に至り、俄然逆上して二厘を進め、十一月に於て再び二厘を進めたるものにして、高低の間四厘の差を示せり。

更に二十六年中、兌換銀行券流通の景況を按ずるに、一箇年間毎週の發行高累計は二億五千五百二十九萬二千八百一圓にして、二月十八日に終る週間の發行高千百五十三萬六千六百三十七圓を最多額とし、十月二十一日に終る週間の發行高百十萬三千九百二十三圓を最少額とす。又毎週還收高の累計は二億二千九百五十五萬二千七百十圓にして、五月十三日に終る週間の還收高千二百六十七萬七千百二十三圓を最多額とし、七月八日に終る週間の還收高百三十二萬四千八十六圓を最少額とす。故に同年中發行高の還收高に超過すること二千五百七十四萬二千一圓に上る。要するに、六月初旬迄は四月二十九日に終る一週を除くの外、發行高と還收高は稍竝行線を保ち動もすれば還收高の發行高に超過するを見る。六月中旬以後は金融漸く進路を變じ、發行高は常に還收高の上位を占めつつ其歩を進め、八月二十六日に終る週間は三百七十餘萬圓の距離を示し、爾後週を逐て累進の狀あり。十二月二十三日に終る週間は還收高僅に二百七十四萬圓餘にして、發行高は六百十五萬七千餘圓にして、其差三百四十一萬餘圓を示す。以て兌換券流通の景況は前後其狀勢の相反するを知るべし。故に上半年の每週發行高の累計は一億二千七百四十九萬六百九十七圓に上ると雖も、還收高は一億三千百七十五萬八十六圓に昇る、差引還收高の多きこと四百二十五萬九千三百八十九圓とす。下半年は之に反して每週發行高の累計は一億二千六百十萬四千三百四十八圓にして、上半年に比して少しく劣ると雖も、還收高は僅に九千七百八十萬二千六百九十四圓に過ず。發行高に對すれば二千八百三十萬千六百五十四圓を遜せり。然らば下半年に於て發行高の漸次膨脹を告げたるは還收の甚だ遲鈍なりしに由る。之を換言すれば資本の回轉圓滑ならざりしに職由せずんばあらず。而して十二月三十一日に於ける現發行高を視るに、其總額一億四千八百六十六萬三千百二十八圓にして、正貨準備發行高は六千二百七十三萬四千六百十二圓とす。故に前年に對すれば正貨準備は四百七十七萬二百五十一圓、保證準備は一千八百四萬九千五百十四圓の巨額を增加せり。今、兌換銀行券條例第二條に據り保證準備發行制限高を調査するに、實に左の如き景況を示せり。

銀行紙幣に對する制限高		二七、〇〇〇、〇〇〇圓
合同消却(明治二十二年以降)		四、八四八、五四四
鎭店紙幣引揚(同　上)		七二、六〇一
發行し得ざる高		二二、〇七八、八五五
總制限高		八五、〇〇〇、〇〇〇圓
發行し得ざる高		二二、〇七八、八五五
發行し得べき高		六二、九二一、一四五
現發行高		六二、七三四、六一二
差引餘裕高		一八、六五三、三三

故に兌換銀行券發行高は殆ど其制限高に達し、僅に十八萬六千餘圓を剩すに過ず、以て當時金融逼迫の狀を想見すべきなり。

更に兌換銀行券交換の景況を察するに、銀貨受入高の累計は四千十一萬七百十三圓、銀貨支出高の累計は四千二百五十六萬六千四百六十二圓に昇る、差引銀貨支出超過高二百四十五萬五千七百四十九圓とす。今每週交換の景況を通觀するに、銀貨受入高は一月七日に終る週間の二十三萬六千七百六十八圓を最少額とし、十二月三十日に終る週間の百六十一萬五千四百五十一圓を最多額とす。銀貨支出高は一月七日に終る週間の三十一萬八千六十八圓を最少額とし、十二月九日に終る週間の百五十九萬六千百二十七圓を最多額とす。蓋し交換の景況は收支共に下半期に於て盛況を示すを常とす。是銀貨の給需は專ら外國貿易に關するが故なり。乃ち上半期の銀貨交換受入高累計は千五百四十萬九千五百五十五圓にして、交換支出高は千四百五十萬千七百九十六圓とす。故に受入高は九十萬七千七百五十九圓の超過を見る。下半期は之に反して銀貨交換受入高の累計は二千四百七十萬千百五十八圓にして、交換支出高は二千八百六萬四千六百六十六圓とす。故に支出高は三百三十六萬三千五百八圓の超

過を見る。抑も斯の如く銀貨支出の超過を致す所以のものは米國市場恐慌の影響を受け、我生絲輸出を阻滯せしめたるに由らずんばあらず。

兌換銀行券の景況は前陳の如し。更に日本銀行の營業の景況如何を察するに、東京本店の當座預金は一月の殘高四百五萬千五百八十二圓なりしが次第に增加して五月の殘高は五百四十七萬百九圓に昇り、一月に比して百四十一萬八千五百二十七圓を增進す。然るに六月は二百餘萬圓を減じ、七月は再び二百餘萬圓を減じ、爾後次第に退歩して九月に至り八十一萬千七百八十六圓の最低額に降れり。十月以後聊か增進を示すと雖も、十二月に至りて僅に百八十七萬八千八百二十八圓を殘存せり。大阪支店の同預金も亦同一の線路を取り、減少の度殊に甚しきを示せり。之に反して貸出勘定は全く逆比例を示せり。卽ち本店の定期貸は一月の殘高二百四十七萬六千六百二十五圓なりしが、月を逐て減少し、五月に於て八十四萬六千三百九十一圓の最低額を示し、一月に比し百六十三萬二百三十四圓を減ぜり。六月以後は次第に增進し、少なきは十餘萬圓、多きは百餘萬圓を增進し、十二月に於て四百七十一萬八千七百二圓の最多額に達す。當座貸殘高は一月より五月迄一進一退二百萬圓を出入せしが、六月に至り六百萬圓に昇り、七月は三百萬圓を減じ、爾後常に減少に傾きたり。然れども每月の新規貸出高を視るに、一月は三百萬圓臺より二月は頓に七百萬圓に進みしが、三月以後漸次減少に傾き、五月に至り最少額三百萬圓に降り、六月以降逆進して七百萬圓を超え、爾後四百萬圓乃至六百萬圓を昇降し、十二月に至りては最高額九百萬圓を超過せり。之を五月の最少額に比すれば、殆んど六百餘萬圓の增加とす。然れども手形割引高は一月に於て二百八十餘萬圓を示し、三月に至り三百三十四萬餘圓に進み、四月より六月迄徐々減少し、七月已後俄に增進に傾き、十二月に至て終に八百四十四萬三百六十圓の最多額に達す。五月の最少額に比すれば實に六百三十一萬千五百八十七圓の增差を示す。玆に最も注意すべきは擔保品付手形の割引に係れり。大阪支店の貸出勘定を視るに、本店と畫一の進路を取り、定期當座共最低額は五月に在り、最高額は十二月に在り乃ち定期貸の殘高は高低の差二百四十萬圓を示し、當座貸の新規貸出高は殆ど五十萬圓の差を示す。割引の景況は一、二月の間は三百萬圓より四百萬圓に進みしが、三月より五月まで漸次收縮して最低額七十六萬圓臺に降り、六月以後俄然進路を變じて百萬圓を超過し、爾後三四百萬圓の間を出入して常に增進の姿勢を持し、十二月に至て六百六十九萬圓餘の最大額に達す。之を五月の最少額に比すれば殆ど六百萬圓の增差を示せり。而して此割引中、擔保品付手形は常に十分の六、七を占む。更に前年と對照すれば預金は稍減少し、貸金は孰れも增大を示さざるなし。殊に擔保品付手形の割引は增加の度頗る大なるものあり。乃ち本支店の十二月殘高は各二百萬圓餘の增差を告げたり。

中央銀行營業の景況前陳の如し。更に東京、大阪同盟銀行の營業如何を觀察するに、東京同盟銀行の預金合計は七月に於て最大額を示し、三千八百十餘萬圓に昇り、十月以降減少に傾き、十二月に於て三千五百五十餘萬圓に降る。貸金は三月に於て最少額四千九百四十餘萬圓を示せしが、漸次增進に傾き、八月已後は大なる速度を以て膨脹し、遂に十二月に至り五千六百九十七萬餘圓の最多額に達す。之を三月の最少額に比すれば七百五十萬圓許の增進とす。割引の景況は六月を以て分界線と爲し、增減の差著大なるを見る。卽ち八月の最大額を以て五月の最少額に比すれば、五百六十五萬餘圓の差を顯せり。預金及び貸付の景況既に斯の如し。是を以て、金銀有高は一月より五月まで漸次級を逐て增進して其最大額千七百二十八萬圓に昇りしが、六月以後は反比例を以て進み、最少額は八月を以て千三百餘萬圓を示し、十二月末日に於ける殘高千三百六十九萬餘圓にして、之を五月の最大額に比すれば三百五十八萬餘圓の減額とす。大阪同盟銀行の預金合計は七月まで累進して七百七十六萬餘圓の最大額を示す。爾後漸く減少に傾くと雖も、尙ほ九百萬圓臺を維持せしが、十一月已後は遂に八百萬圓臺に降れり。貸付金は增減に著しき變化なく、唯だ增進の一方に偏向せり。乃ち十二月の最大額七百九十三萬餘圓を以て一月の最少額に比すれば二百八十九萬圓の增進とす。割引も亦稍同一の景況を示すと雖も、六、七月の交最も急劇の增進を示せしが、八月以來少しく挫折して四百萬乃至五百萬圓を減じ、以て十二月に至り更に減じて千二百九十七萬圓に降る。然れども金銀有高は二月に於て最少額百五十九萬餘圓を示し、爾後每月秩序を逐て增進し、十二月に於て最大額二百六十四萬餘圓に昇る。二月に比すれば百餘萬圓の增加とす。以上東京、大阪同盟銀行の諸勘定を前年に對照すれば諸勘定孰れも驚くべき進歩の狀を呈せり。然れども東京、大阪銀行の營業上に於ける金融事情は少しく異なる

所あり。蓋し東京銀行の重なる營業は貸付金に在り。而して現金有高は常に預金の多寡に隨伴して消長を相爲すの狀あり。大阪銀行の營業は主として割引に在り。故に金融の閑劇は割引の多寡に伴へり故に金銀有高は預金に關するより寧ろ割引高に因て增減を示せるが如し。之を要するに兩商業地共に金融の最も閑なるは五月より九月の間に在り、最も劇なるは十月以後に在り。而して閑劇孰れも大阪は東京に比して感觸の强かりしを證すべし。今金利の高低を視るに左の顯象を示せり。乃ち五箇年間金融の大勢は緩更に緩を加へ、金利の下落は滔々として止まる所を知らず、本年に至て其極に達せしが、其反動は七月以降漸次上進に傾きたり。是銀貨の下落は物價騰貴の兆を現はすに際し、新法の施行、鐵道紡績其他事業の勃興等相湊合して資本の需要を增加したるの結果なるべし。然れども之を前年に對比すれば、金利の步合尙ほ負に低位に居るを見る。然らば則ち本年の金融は商業社會の或る一部に於ては、一時逼迫を感ずるに拘はらず、全國を通觀すれば概して靜穩に經過したるものと謂ふべし。

然れば則ち日本銀行及び東京、大阪の同盟銀行が下半期に於て前陳の如く感じたる繁劇の象は、豈に全國一般に共存する事情の反照と爲すに足らんや。蓋し上半期の金融緩慢は全國一般に共通する事情にして、下半期の繁劇は東京、大阪の特徵と謂はざるべからず。其主たる原因は種々あるべしと雖も株式賣買の受渡株金拂込の如き之が主動たるが如し。其然る所以は、今各銀行の營業報告を調査すれば實に駭くべき統計を發見すべし。乃ち各銀行が資本を株式に注入するの巨額なるは實に左の如し。

株式に注入する資本

日本銀行の手形擔保品	八、五一一、九九九	円
正金銀行の貸金抵當	四四、九八五、三	
國立銀行の貸金抵當	三三、七一八、七一三	
私立銀行の貸金抵當	一四、一七七、七六四	
合　計	五六、八六六、三二四	

右の外私立銀行は其實價五百四十二萬五千四百六十圓の株券を所有し、抵當品の流込みとなりたる株券四百八十八萬六千二百七圓、合計一千三十萬千六百六十七圓あり、之を前記の貸金抵當に合算するときは、其資本を株式に注入する高實に二千四百四十七萬九千四百三十一圓に達す。豈に駭くべき巨額ならずや。故に各銀行の株式に注入する資本は無慮六千七百十六萬七千九百九十一圓に上る而して此高は關西殊に大阪の銀行其多分を占む。是を以て株式相場の浮沈動搖は直接に銀行の金融上に影響を及ぼすや大なり。乃ち本年中株式の市況を視るに二月中は上院に於て昆布輸出稅廢止案を通過したる影響は忽ち昆布會社株券の騰貴を現はしたりしも、一方は鐵道比較線路法案の延期せられたるが爲、甲武鐵道株は頓に下落し、之に隨伴して諸株式も概して下落に傾きたり。然れども是れ一時の顯象に過ぎず。金融の潮勢は次第に緩慢に流れ、尋で巨額の公債償還額は悉皆現金を交付せらるるに會し、一千餘萬圓の現金は直接又は間接に各銀行に吸收せられたる姿なれば益緩慢の度を强めて容易に流動すべき狀なきを以て、各銀行は勿論他の資本家は資本の運用に苦しみ鐵道株券を買進むの狀態なるを以て、金利は益低落し、確實なる株券は頗る騰貴の色を現はし、株式市場は頗る熱閙なりき。是を以て其實價より訂算すれば、年利僅に三分內外に過ざりし株券に對して大に人氣を加へて非常の商勢なりし七月中、銀行の金融は株式賣買受渡の爲め資本の需要を增加し頗る繁忙を告げたり。於是八月中取引所は株式激騰の結果遂に恐慌を來さんことを慮り、炭礦鐵道株外五株の增證據金を徵收せしより俄に人氣崩れとなり、玆に商機を一轉せしめ、株券の暴落を來し、株式市場に一大恐慌を惹起せしめたり。延て九月に入り、橫濱生絲貿易は澁滯し、又新會社株金拂込等の爲め金融繁劇に赴くの兆あるが故に、日本銀行は同月二日に於て日步二厘方を引上げたり。此時に際し、橫濱生絲在荷二萬梱屑物三萬梱に達し、將來輸出の如何に關し金融一層逼迫の傾向を示したり。是を以て、十月以降株券の急配頓に崩れ、漸次下落の一方に傾きたれども、十一月下旬に至りては輸出の途漸く開けしが爲め豫想せしが如き金融繁劇を見るに至らざりき。隨て株式も稍氣配を復活したり。（其顯象は下に揭ぐる株式相場表を參看すべし）是れ東京、大阪の銀行が資本の大部を株式に注入するもの多き爲に、市場の小變動に會し、其閑劇を感ずる事急にして、且切なるものあり。加之、正金銀行、國立銀行、私立銀行は不動產抵當貸金二千六百餘萬圓の巨額に上る。此等は資本

を固定せしめて活動の機を失するものなり。是を以て將來金融の激變に會し、或は非常の恐慌を蒙むるの虞なきを保せず。

明治二十七年

二十七年の經濟界は國家空前の大事件ありしに似ず、綽々として餘裕あるを示せり。蓋し多年緩慢なりし金融は前年下半期以降、俄然反動の狀を呈し越て本年に入て益、其繁忙を逞ふし、會社所在に隆起して資金は之が爲めに吸收され一方には農家購買力の增加に伴ふて海外に流出し變じて原料機械雜品と爲て歸來するもの少なからず。上半期に於ける輸入超過は主として之が爲なり。然るに六月に及び朝鮮東學黨の反亂以來、人心疑惧して諸業萎縮し、隨て資本の運轉頓に沮喪し、加之、在留清人の歸國するに際し銀貨を取付るもの亦少しと爲さず。是に於て乎日本銀行は率先して其金利を騰貴し、各銀行亦之に倣ひ、以て豫め前途を警戒したり。七月に及びて事端は一朝成歡に破裂して再び豐島に衝突し、遂に八月一日宣戰の大詔降て征清の師を興さるるや、國家が軍費として支出するもの日に益、多からんとす。於是乎、同月政府は軍事公債條例に依り、其第一回として金三千萬圓を募集せり。越て十一月法律第二十五號に依り、更に五千萬圓を募集せり。此の如く前後二回の軍事公債募集額八千萬圓に對し、九月以降十二月に至る迄其拂込に要する市場の資金無慮千四百萬圓は續々國庫に流入せり。先是鐵道船舶は早く軍用に徵せられて貨物の運搬は一時停滯し、就中北海道最も其影響を受け、剩へ物價は日々騰貴して公債株券は益、下落したり。是時に當て軍事公債の募集頗る好結果を得たる所以のものは偏に國民報公心の致す所なるべし。而て外國貿易は生絲の輸出好況を占めたるものありと雖も、輸入は月に增加し、遂に金銀輸出の超過を見るが如き一として金融繁忙の因由たらざるは無し。故に正貨は轉た減少して、年末に及ては遂に制限外兌換券を發行するに至れり。本年の金融市場が斯くの如く多事なりしに拘らず、幸にして能く其紛亂を免れたる所以のものは、蓋し外には王師の連戰連勝するあり、內には世人を警戒して放資を苟もせず、一旦著手したる事業の如きも暫く之れを中止するに至らしめ、一方には軍費として使用されたる通貨の多くは內地の市場に散するあり、而て信用取引の發達と共に金融機關は其中間に居りて臨機の處置に出で、以て之を整理調和したるの功に因らずんばあらず。

我經濟事情を概言すれば前陳の如し。今玆に銀行營業上に觀察を下さんに、蓋し日本銀行本年中の金利步合は總て四回の變動を示せり。卽ち

二十七年二月　七　日　迄　一錢八厘　貸付利子步合
同　年二月　八日改正　同　一錢八厘　手形割引步合
同　年六月十九日改正　同　一錢九厘
同　年七月二十五日改正　同　一錢
同　同　二錢
同　同　二錢一厘
同　同　二錢二厘

右の如く金利步合は二月に一厘を增し、六月に至り更に一厘を增し、再び七月に至り貸付は二厘を割引は一厘を進めたり。高低の間貸付は四厘、割引は三厘の差を示せり。

更に二十七年中兌換銀行券の景況を按ずるに、一箇年間每週の發行高累計は二億七千九十七萬六千二百九十圓にして、十二月十五日に終る週間の發行高千六百十九萬二千三百二十八圓を最多額とし、一月六日に終る四十八萬千七百五十圓を最小額とす。又每週還收高の累計は二億四千六十七萬六千二十七圓にして、三月十日に終る週間の八百八十三萬七百四十八圓を最多額とし、一月六日に終る週間の百三十三萬七千七百八十七圓を最少額とす。故に同年中發行高の還收高に超過すること三千三十萬二百六十三圓に上る。更に仔細に之を觀察するときは四月二十一日に終る週間に於ては還收高發行高に超過せること二百六十八萬三千四百八十七圓にして、五月十二日に終る週間も亦殆ど同額の超過を示せり。然るに六月三十日に終る週間に至ては發行高俄に還收高に超過すること四百六十萬二千八十二圓に及べり、是より九月二十九日に終る週間及十一月十日に終る週間の外は、概して發行高還收高に超過し、就中十二月十五日に終る週間に於ては其超過すること八百七十六萬四千九百十三圓の多き

を看る。十二月一日、十月二十日に終る週間の如きも亦同じく半額强の超過を現はせり。要するに兌換券流通の景況は、六月中旬を分界として前後其狀勢の相反するを知る可し。故に上半季の每週發行高の累計は一億二千九百十四萬七千八百八十四圓にして還收高の累計一億二千七百八十八萬八千九百九十圓に對して僅に百二十五萬八千八百九十四圓を超過するに過ぎずと雖も下半季に於ける發行高の累計は一億四千百八十二萬八千四百六圓にして、其還收高の累計一億千二百七十八萬七千三十七圓に對すれば實に二千九百四萬千三百六十九圓の超過を看る。蓋し還收高の上半季に劇にして下半季に劇ならず。之に反して發行高の轉比例を示せる趨勢あるは之を前年に徵するも亦然りと雖も、特に本年は六月以降清韓事件の爲更に資本の運轉に異狀を呈したるに因や知る可し。更に十二月三十一日に於ける現況を視るに其發行高は一億四千九百八十一萬三千七百圓にして內正貨準備發行高は六千八百九萬五千四百九圓とす。故に右の內四百十九萬七千五百四十九圓は兌換銀行券條例第二條第三項に據り制限外に發行したる高に係るものなり。之を前年に比較すれば正貨準備は四百二十一萬二百二十五圓を減じ保證準備は五百三十六萬七百九十七圓を增加せり。

更に兌換銀行券交換の景況を察するに、一箇年間每週銀貨受入高の累計は五千六百五十七萬六千六百四十四圓銀貨支出高の累計は八千六百三萬九千四百五十三圓に上る差引銀貨の支出超過は二千六百四十六萬千八百九圓とす。更に每週交換の景況を通觀するに銀貨受入高は一月六日に終る週間の二十八萬四千八百五十一圓を最少額とし、九月一日に終る週間の二百二十三萬四百二圓を最多額とす、銀貨支出高は一月六日に終る週間の五十二萬二千八百十一圓を最少額とし、十一月十七日に終る週間の四百十六萬七千六百二十六圓を最多額とす。而て上半期の銀貨交換受入高累計は二千三百六萬六千三百三十四圓にして、支出高は三千百六萬千八百六十二圓とす。故に支出高は七百九十九萬五千五百二十八圓を超過せり。下半期は受入高累計三千三百五十一萬三百十圓にして、支出高は五千四百九十七萬七千五百九十一圓とす。故に支出高の超過すること亦二千百四十六萬七千二百八十一圓の多きを看る。

日本銀行營業の景況　(一)東京本店　日本銀行營業の景況は其預金勘定を見るに、東京本店の當座預金は一月の殘高二百三十三萬八千百五十七圓にして、二月は百三十一萬圓餘を增加して三百六十四萬八千八百四十圓の最高額に達したりと雖も、三月以來次第に減少して五月に至り僅に百十二萬五千八百五十四圓の最低額を存せり。六月より再び增加して九月の殘高は二百七十七萬三千二百七十五圓に昇れり。十月は五十萬圓餘を減じたりと雖も、十一月は更に七十五萬圓餘を增加して二百九十八萬六千百二十一圓に昇りしが、十二月は又大に減じて百三十六萬二千九百三十二圓に降れり。大阪支店も亦稍々同一の趨勢を示し、其最も高きは十一月の三十一萬七千六百五十六圓にして、其最も低きは四月の千二百五十圓と爲す。

貸出勘定を視るに、本店の定期貸は一月の殘高五百三十二萬二千八十八圓なりしが、月を逐て減少し、五月に於て二百二十萬二千五百五十八圓の最低額を示し、一月に比し三百十一萬九千五百三十圓を減ぜり。六月に至りて二百萬圓餘、七月は更に百十八萬圓餘を增加したりと雖も、八月以降月を逐て減少し、十一月は四百一萬四千七百十四圓を存せしが、十二月は又俄に增加して六百三十八萬二千三百六十四圓の最多額を示せり。當座貸殘高は二月に於て五十四萬千二十五圓の最低額を示せしが、三月以降增加の傾向を持し、六月に至て三百三十四萬九千二百六十二圓を存し、七月以來稍々減少に傾きたりと雖も、九月は復た增加して二百十七萬八千百六十五圓を示し、十一月は更に三百七十五萬八千九百三十一圓に達し、十二月は遂に五百七十一萬二千二百六十四圓の最高額を示せり。之を二月の最低額に比すれば實に五百十七萬千二百三十九圓の超過とす。

手形割引高は一月に於て八百二十四萬七百二十五圓なりしが、二月以降次第に減じ、五月に至て最低額四百九十八萬六千七百四十六圓を示し、六月に入て俄に回復の狀を示し、七月は遂に最高額八百二十萬四千九百八十三圓に達し、八月以降多きは五十餘萬圓、少きは六萬餘圓の減少を示しつつ十一月に至りしが、十二月は更に增加して七百八十七萬四千二百四十七圓に昇れり。然れども手形割引の三分一以上は擔保品付手形に係れり。今之を上下半期に區別して觀察するときは、其景況下半期は上半期に如かず、而て前年と對して自から反對の趨勢を示せり。

(二)　大阪支店　大阪支店の貸出勘定を視るに、亦本店と稍々同一の進路を趁ひ、定期貸の殘高は五月に於て最低額百二十三萬三千五百五十圓を示し、十二月に於て最高額三百八十萬四千六十圓を示し、高低の間二百五十七萬五

百十圓の差を看る。當座貸殘高は二月に於ける十三萬八千百六十圓を以て最低額とし、十一月に於ける三十七萬四千二百二十三圓を以て最高額とす。卽ち高低の差二十三萬六千六十三圓を示す。割引は一月に於ける七百五十五萬八千六十六圓を最高額とし、遂月減少し來て五月は遂に四百四十六萬百七十五圓の最低額に下れり。之を一月の最高額に比すれば其差三百五萬七千八百九十一圓を示せり。六月以降再び增加の形勢に復し、十二月は遂に六百七十四萬千四百二十九圓に上れり。而て割引高の過半は擔保品付手形に係れり、其下半期に及で稍々衰退したるは亦本店と同じきを看る。

之を要するに、本支店共預金貸金の減少するは概して五月及九月にして、增加するは概して年首年末及六、七兩月に在りとす。割引も亦減少するは五月にして增加するは年首及年末とす。今之を上下半期に區別して概觀するときは、割引の外は總て下半期に於て膨脹せるを知る。更に之を前年と對照するに定期預金の外は多少の增加を示せり。就中支店に於ける擔保品付手形の割引高は最も其增加の著しきものとす。

同盟銀行營業の景況　(一)東京同盟銀行　中央銀行營業の景況前陳の如し。更に東京大阪同盟銀行の營業如何を觀察するに、東京同盟銀行の預金合計は一月に於て最少額三千六百十四萬七千七百六十四圓を示し、二月以降少しく增加したりと雖も、五月に至て再び三千百十五萬六百二圓に降り、六月以降は更に增加に傾き就中十一月は四千百八十二萬千九百二圓の最高額を示せり。之を一月の最少額に比すれば五百六十七萬圓餘の增加なりとす。貸金は一月に於て五千五百五十三萬千九百十五圓を示せし以來、月を逐て減少し、五月は遂に五千四百十五萬四千九圓の最低額に降りしが、六月よりは更に反動の勢を呈して增加の傾きとなり、十二月に及では遂に六千百十六萬六千八百五十二圓の最高額を示せり。之を五月の最低額に比すれば殆ど七百萬圓餘の增加を看る。割引の景況も亦六月を以て分界線とし、增減の差著大なるを看る。卽ち六月の最高額を以て四月の最少額に對すれば二百四十七萬圓餘の差を現はせり。預金及貸付の景況既に斯くの如し。今金銀有高を視るに、最高額は一月に於ける千二百六十萬八千六百八十圓、最少額は四月に於ける五百八十七萬千十圓とす。故に高低の差六百七十萬圓餘を示す。而て概して上半期より下半期に於て有高の裕々たるを看る。之を要するに預金及貸付共總て下半期に於て繁劇を加へたるや知るべし。又之を前年と對照するに皆進步の傾向を示さざるはなし。

(二)大阪同盟銀行　大阪同盟銀行の預金合計は上半期に牧蹙して下半期に伸暢せり。故に其最低額は二月に於ける八百一萬九千五百九十圓にして、其最高額は九月に於ける八百八十九萬二千四百五十五圓とす。高低の間八十七萬圓餘の差を示せり。之に反して貸付割引は共に下半期の上半期に及ばざるを看る。卽ち貸付は一月より六月迄は次第に增進して八百萬圓臺を昇りたるに拘らず、七月以降は減少に傾き、每月七百萬圓臺に止まる。割引も亦然り、一月に於ける千二百九十二萬五千百二十四圓より五月に至て千三百六十一萬三千五百三十圓の最高額に達せしが、六月以降は徐々減少して、遂に十二月に於て最低額千九十三萬七千三百三圓を現はせり。之を五月の最高額と對すれば二百六十七萬圓餘の差を示せり。之を要するに、金融の情況は七月を以て昇降の分界線を畫せり。是以て金銀有高は一月に於て最高額二百四十八萬六千百三十三圓を示せしに拘らず、遂月減少して六月は最低額二百二十九萬三千九百五十圓となれり。然るに七月以降は更に增加の傾きに變じ、十二月は遂に二百四十六萬九千四百三十圓に達せり。更に之を前年に對照するに、預金は減少したりと雖も貸付は增加せり。割引も亦減少したりと雖も、其減少は主として下半期に屬し、金銀有高亦增加したりと雖も、其增加は主として上半期に在り。故に今兩商業地に於ける金利の高低を視るに、比年滔々として逆進し殊に七月以後は截然として騰貴の度の著しきを看るなり。

金融の繁閑に伴ひ最も銳敏の感動を受くるものを公債及株券の價格とす。今本年中の景況を通觀するに、上下半期各其事情を異にするものあり、卽ち整理公債の一月の價格は百九圓餘なりしに、五月は百十一圓餘の最高價格を示し、六月以來暴落して百五圓餘に降り、遂に十二月に至り額面を崩して九十六圓餘の最低價格を示せり。之を五月の最高價格に比すれば十五圓許の差とす。日本銀行株も亦一月より七月迄三百五圓乃至三百二十九圓の間を昇降したりしが、八月以來は激退して二百八九十圓臺に降り、以て十二月に至れり。其他の株券も概して其方向を同ふし殆ど懸河の勢を以て下降せり。故に之を前年に對照するに當て、上半期は概して前年に超絶したるを看るもの、是れ本年に入り金融益、持直したるに拘らず、尙ほ是等株券に注入されたる資本の少なからざるを證す可し。

下半期に至ては形勢一變之を前年に對照するに其價格大に低落せり。蓋し朝鮮事件以來、金融市場最繁最忙を加へたるのみならず、續て軍事公債の募集あり、遂に株券價格の下落を看る、固より其所なり。今各銀行が株式に注入したる資本の年末に於ける景況は左の如し。

	円
日本銀行の手形擔保品	八、一〇五、三五二
正金銀行の貸金抵當	二七五、九五三
國立銀行の貸金抵當	三六、二七六、六六七
私立銀行の貸金抵當	一三、八五五、〇〇六
合計	五八、五一二、九七八

之を前年に比すれば、百六十四萬六千六百五十四圓を增加したりと雖も、其增加したるは獨り國立銀行にして餘は皆減少せり。

明治二十八年

二十八年の經濟界は著しき變動の痕跡を看る。卽ち年首に於ては巨額の軍事公債拂込を要し、租稅の納期亦相接して至り金員の需要頗る多かりしも軍事費として支拂ひたる通貨世上に散布して之が需用を充すに足るあると、前年より引續き商勢沮喪し諸般の企業は殆んど中止の姿にて著しき資金の需用を要せざりしとにより、三月迄は金融は緩慢の傾向を以て經過せり。四月に於ては前途商況の回復を見込み漸く活氣を生ぜんとするに當り、俄に一頓挫を來し、銀行者は一に持重を旨とし、前途の形勢を望觀するの狀を呈せり。然れども漸く生絲製茶の生產時期に際し、資金の供給を濟り重要物產の造出を沮碍するが如きは國家經濟上策の得たるものにあらず、故に日本銀行は七月に至り利子歩合を引下げ、多少緩和の策を執りしと同時に、市場の景況回復し來り、外國貿易は七月以後生絲賣行の好況に伴ひ著しき輸出超過を示し、諸會社の新設增資は殆んど驚くべきの巨額に達し、東京同盟銀行貸出平均殘高は前年より七分餘を增し、東京交換所手形交換高は前年に比して五割六分を增したる等實に未曾有の盛況にして、其影響延て通貨流通上に現はれ、年首紙幣流通高は一億六千五百萬圓餘なりしも、年末には二億百萬圓餘の高額に及び、就中兌換券制限外發行高は五千五百萬圓餘を存するに至れり。斯る諸事伸張の時期に際し能く通貨の需要に應じ事業の發達を扶掖し、金融市場の紛亂を免れしめたるは金融機關の抑揚調和其宜しきを得たるに因らずんばあらず。

我經濟事情を概言すれば前陳の如し。今玆に銀行營業上に觀察を下さんに、蓋し日本銀行本年中の金利歩合は總て一回の變動を示すに過ぎず。卽ち

二十八年七月十一日迄	貸付利子歩合	日歩　二錢三厘
同　年七月十二日改正	同　手形割引歩合	同　二錢一厘
同	同	同　二錢二厘
同	同	同　一錢九厘

右の如く金利歩合は貸付に於て七月に至り一厘を減少し割引に於て二厘の減少を示せり。

更に二十八年中兌換銀行券の景況を案ずるに、一箇年間毎週の發行高累計は四十億七千八百七十二萬九千八百六十九圓にして、十二月二十八日に終る週間の發行高一億七千六百六十八萬千八百三十一圓を最多額とし、一月四日に終る週間の發行高百十八萬九千三十九圓を最少額とす。又每週還收高の累計は一億六千二百二十四萬九千二百八十四圓にして、四月二十日に終る週間の還收高七百八十三萬二千六百九十九圓を最多額とし、九月二十八日に終る週間の還收高六十二萬九千六百九十三圓を最少額とす。故に同年中發行高の還收高に超過すること三十九億千六百四十八萬五百八十五圓に上る。更に仔細に之を觀察するときは、二月九日に終る週間に於ては還收高の發行高に超過せること二百八十三萬千五百二十圓、六月十五日に終る週間も亦四百六萬千八十圓の超過を示せり。然るに之に反して六月二十九日に終る週間に於ては、發行高の還收高に超過せること千四萬八千四百二十四圓の超過を現せり。是より九月十四日に終る週間及十一月九日に終る週間は概ね還收高發行高に超過せしも、十一月三十日に終る週間は發行高還收高に超過し就中十二月二十八日に終る週間の如きは千十八萬四千六百四十圓の超過を現せり。要するに兌換券の流通の景況は六月中旬を分界として考ふるに、始め金融緩慢にして後金融